書畫骨董叢書

第三卷

書畫骨董叢書刊行會編輯所著

現代の繪畫及彫刻

凡例

一、本書は『書畫骨董叢書』の第三卷として、現代日本の繪畫及び彫刻に關する一般的の解説を試みたものである。

一、本書は現代人の專門的常識を涵養すべく、極めて平易明快に、併も細大漏さず講述するを目的としてある。故に苟くも本書を通讀すれば、現に我が邦に行はれる日本畫、西洋畫及び彫刻の全般に通曉するを得るであらう。

一、本書は必ずしも批評的態度に立つて、現代美術の文化的意義、藝術的効果、歷史的關係等を論究しようとはしない。これ本書の頁數に限りあると、玆には左までの必要なしと思つたからである。

一、本書は現代に活動せる諸名家について各方面より語り、以てその人物・略傳・作品・評價等にわたりて、一々明確なる講述をしてある。

一、加ふるに代表作品を出來得る限り多數に寫眞版として掲載し、以て本文と相俟つて讀者を益せんことを企てゝある。

一、本書には各家の肖像・逸話の類は一切これを省いたが、是等は悉く後卷『逸話珍談集、附鑑賞鑑

定談』に載せてある。又系圖・系統表・年號等は、一括して別册『年表・圖解及索引』に割いてあるから、參照せられたい。

一、本書の本文中、日本畫に關する部と、西洋畫及び彫刻に關する部とは、筆者を異にするから、文體・事實等に若干の牴觸あるを免かれまい。又本文の執筆は大正九年の夏であるから、その年の秋季各展覽會及びその前後の美術界の移動については言及してないことを斷つて置く。

大正九年十二月

編輯者識

口繪目次

玻璃版

口繪目次

寫眞版

口絵目次

口繪目次

本文目次

第六編　現代作家の生活と繪畫鑑賞

目次終

葛僊移居

富岡鐵齋

あれ夕立に

竹内栖鳳

遠寺晩鐘

寺崎廣業

弱法師　　下村觀山

山路

横山大観

二日月　川合玉堂

鎌足捧靴

小堀鞆音

鐵砲百合

黑田清輝

賺蘭亭圖　中村不折

讀書

岡田三郎助

反響　　和田英作

不動（レリーフ）

新海竹太郎

鹽原の奥（一）　山元春擧

鹽原の奥（二）　山元春擧

若竹圖

菊池芳文

近江八景　今村紫虹

月下水禽圖（一）　今尾景年

月下水禽圖（二）　今尾景年

かりくらの内

木島櫻谷

寒林幽居

小室翠雲

蓮池　　菊池契月

寒山拾得の内　　　　橋本關雪

夏三題の内

結城素明

黑髮　　鏑木清方

室君　松岡映丘

夏山浴雨　松林桂月

舞仕度　上村松園

豫讓　平福百穗

大湖の跡　　都路華香

夕月　　池上秀畝

八席四景　田中頼璋

夢殿　　　　安田靫彦

阿彌陀堂

小林古徑

湯女　　土田麥僊

公園の一隅　　藤島武二

雑魚場　満谷國四郎

かきつばた　　中澤弘光

瓦燒　　南薰造

薪　太田喜二郎

夏の光　中川八郎

南風　和田三造

水郷　　小杉未醒

神來　米原雲海

闇　朝倉文夫

現代の繪畫及彫刻

書畫骨董叢書刊行會著

第一編　現代の日本畫壇

一、日本畫界と團體別

帝國美術院の會員

現代の日本畫壇！　それを一言に盡すのはなかなか厄介だ。文展、院展、國畫創作協會と、かう團體別も出來れば、東京派、京都派といふ地方別、土佐、南畫、四條、浮世繪等の流派別にも出來る。だが、ここでは面倒を省いて、いきなり團體別で行かう。そして最先きに舊文部省美術展覧會を新たに編み直した帝國美術院の事から說き出さう。

帝國美術院の名稱は、舊文展の官制を改革して、大正八年九月六日發表されたのだ。內容は大體舊

文展の繼續と見ればよいので、ただ變つたのは帝國美術院といふ立派な名稱が出來、丁度歐洲に於けるローヤル、アカデミーや。サロン式に國家がこの團體を公設し、堂々國立の權威を有することである。そして、美術界に多年功勳あり、實蹟あり、斯界の元老と認められる人が帝國美術院會員なる尊稱を享受するの光榮に浴するので、學者が帝國學士院會員として最高の名譽を受けるのにひとしく、實に勅任待遇を忝うするのである。

この會員は定員十五名としてあるが、さし當つては十三人だけ任命された。その內、日本畫の方からは七名だけ選ばれたので、東京の川合玉堂、小堀鞆音、松本楓湖、京都の竹內栖鳳、山元春擧、富岡鐵齋、今尾景年の諸氏である。別に日本美術院の橫山大觀、下村觀山二氏がこの選に入つたのだが、二氏は、現に擁立しつゝある民設美衡院の爲めや、種々の事情から斷然この任命を郤けたのである。

帝國美術院審査員　帝國美術院會員は、前述べた如く堂々たる元老美術家だが、併しこの人達は直接同院の展覽會に審査員とはならない。帝展の審査員は、これらの會員が寄り集つて半數を選び殘り半數は文部大臣が直接選任するといふ事になつて居る。謂はゞ、會員は親で、審査員ば子である。或は前者は豫備役で後者が現役と言へよう。現役の審査員たるものは、帝展に對して責任も權利も一層大きいわけであるまいか。

而して、この審査員には、第一回の昨年は、日本畫で九名擧げられた。その顔觸れは、東京方で小室翠雲、結城素明、鏑木淸方、松林桂月、松岡映丘の五氏、京都方で菊池契月、西山翠嶂、橋本關雪、川村曼舟の四氏である。卽ち、舊文部省展覽會の審査員中、玉堂、鞆音、栖鳳、春擧四氏は元老として會員に祭り上げられ、翠雲、契月の二氏が現役として居殘り、今泉雄作、荒木十畝の兩氏だけが全く非役となつたわけで、これを見ても帝國美術院は大體文展の連續と見ることが出來よう。それから帝國美術院では、第一回審査員任命と同時に推薦の人々を發表した。推薦とは舊文展にもあつた通り帝展に出品自由で、鑑査も審査もなく大威張りで通れる人達のことを云ふのである。

帝國美術院及舊文展推薦

文展の推薦は、第十回卽ち大正五年までは名目のみ存して其實がなかつたのであるが、この年始めて京都の菊池契月氏と、同じく閨秀作家の上村松園女史とが推薦された。翌年は誰も推薦されず、七年にまた橋本關雪、結城素明、鏑木淸方、都路華香の四氏が推薦された。これ丈けが舊文展に於ける推薦者の全部なのである。而して、この中、松園、華香二氏を除き、他は全部帝展の審査員に擧げられてゐる。以て舊文展に於ける推薦の價値も推知されよう。

ところが、帝展の審査員は舊文展のそれとは殆んど顏觸れも一變して、著しく少壯の士、新進の人を以て充てらるゝに至つた。そこで、その均衡上、過去の文展に功績多かつた作家を今までのまゝに

もし兼ねるので、帝國美術院では、元老となつた會員諸氏が先づ主立つた人々十名を選んで推薦といふことにした。その顏觸れは、吉川靈華、池上秀畝、小村大雲、山內多門、平福百穗、池田輝方、田中賴璋、土田麥僊、川北霞峰、田近竹邨の十氏である。この十氏は云ふまでもなく、美術界に錚々の聞えある人々だが、必ずしも舊文展に於ける功勞者のみでないのが一奇とされる。

日本美術院同人　帝國美術院といふ新らしい名稱の出來た爲めに、日本美術院は、今までの通り名であつた美術院といふのみではわからなくなつてしまつた。どうしても、それに日本の二字を冠して帝國のそれと區別しくてはならなくなつた。さて、日本美術院に於ける日本畫部は如何なる人人によつて如何に組織されてゐるか。こゝには、先づ第一に、同院の元老で、領袖である橫山大觀、下村觀山の二氏の名を思ひ出さねばならない。

大觀、觀山は、帝展の方でも會員に推擧して斷られたくらゐ現日本の美術界には功勳ある人々だ。この二氏の下に同院には、幹部と目さるゝ作家が皆同人といふことなつてゐる。二氏の他、木村武山、安田靫彥、前田靑邨、小林古徑、大智勝觀、富田溪仙、荒井寛方、中村岳陵、筆谷等觀、山村耕花、長野草風、橋本靜水、小川芋錢、北野恒富、川端龍子、速水御舟の以上現在十八氏である。この他に再興の美術院としては今村紫紅の同人たりしことを忘れ難いのだが、氏は大正五年に病歿した。

日本美術院の同人は、丁度帝國美術院の審査員のやうなもので、院展に於ける出品の鑑査審査は皆この同人が決定するので、同人自身は無論自由に出品が出來るのだ。併し、近年は數の多い丈けに玉石混淆の觀あり、兩巨頭の他には靫彥、靑邨、古徑氏等までが眞の同人らしく他から見られ、他はそれ以下と見られてゐる。

國畫創作協會々員　帝展、院展の次ぎは最も重要な日本畫の團體として獨立してゐるのは、京都の國畫創作協會であらう。これは大正七年一月、京都に於ける少壯新銳の作家が文展の施設に慊らずして新に組織したる新團體で、いづれも新らしい頭腦を有つてゐる人達だ。その會員は、最初土田麥僊、小野竹橋、村上華岳、榊原紫峯、野長瀨晩花の五氏であつたが、第一回の展覽會に入選して好評のあつた入江波光も今年は新たに會員に選ばれたので都合六人になつたわけである。

この會での重鎭は、土田麥僊である。氏は未だ三十三歲の壯年であるが、竹内栖鳳の門に入り、明治四十四年京都繪畫專門學校を卒業して以來、早くから文展に異色ある作品を出して、屢々優賞に擬せられたものである。なほ、この會には鑑査顧問といふものがあり、竹内栖鳳、中井宗太郎の二氏がその仕事に當つて居る。栖鳳は、本會々員等の師であり、指導者であつた關係から推擧されたので、中井は繪畫專門學校の敎授で、技術家ではない。

爾餘の日本畫團體　以上擧げた重要な團體を外にしては、日本畫壇に特別有力な團體もない。ただ日本美術協會は、多年の歷史と、傳統的勢力とを持して現畫壇の一方に相變らず割據してゐる。その中で主なる顏觸れを擧げると、日本畫作家では、佐久間鐵園、松林挂月、津端道彥、高取稚成、畑仙齡、廣瀨東畝、八木岡春山氏等で、別に下條桂谷翁がある。この中、挂月は殊に振つてゐたが今年からは帝展審査員になつたから協會のため十分の活動も出來まい。總じて、協會の盛時は過ぎて、守舊の人のみ殘存するやうな傾向がある。

つい最近まで美術研究會といふ團體があり、帝展第一回に特選首席となつた飛田周山や、推薦の山内多門、池田輝方、その他有力な作家が集つてゐたが、この程それを脫して新たに如水會なるものを起した。如水會の會員は、前記三名の外、島田墨仙、野田九浦、町田曲江、水上泰生、勝田蕉琴、服部春陽、石井林響の七人である。

別に、藝術社あり、行樹社あり、橋本邦助、蔦谷龍岬、矢澤弦月、廣島晃甫、小林源太郞、織田觀潮などの諸家多くこれに屬して居たが、今はいづれも解散してしまつた。

美術學校出身者の間には、以前は東台畫會と云ふがあり、結城素明を初め、平田松堂、西村靑歸等もこれに屬してゐたが、近くは池畔俱樂部と改まつて更生し、これは主に結城、松岡などいふ現敎授

連の下に養成された作家によつて組織されてゐる。主なる顏觸れは、矢澤弦月、小泉勝爾、吉田秋光、川崎小虎、蔦谷龍岬、濱谷白雨等である。それに最近晨光會といふのが結ばれ、これまた主に池畔倶樂部の人達で、前記諸氏の大部分と、太田義一、篠田柏邦等が居る。

國民美術協會は、初めの精神は兎に角、今では洋畫家本位になつて居り、鏑木清方、本方秀麟、島田翠仙、島崎柳塢などの名を見るが日本畫部の內容は頓と振はない。

殘餘の日本畫家團體としては、末松子爵を會頭とする舊派系の日本畫會、小池素康を主腦として名目の殘存せる硏精會、舊派系の中年作家から成る明治畫會、細川男を會頭とする日本南宗畫會、柳原伯を會頭とする南畫會、紀淑雄の率ふる國香會、近時更に振はぬ巽畫會、故廣業門下一部有志を中心とする獨立繪畫會、大和繪の人々から成れる國風會等あるが、いづれも實質的には餘り重きを置かれてゐない。別に廣業門下の天籟畫會、玉堂門下の下萠會、淸方門下の鄕土會、十畝門下の讀畫會、鞆音門下の革丙會、秀畝門下の傳神畫會等各社中の展覽會あり、京都には、春擧門下に早苗會、栖鳳門下に竹枝會がある。

二、大家の位地と人物

正系の代表的大家

現代の日本畫を觀るものは、直ぐそこに東京派と京都派といふことを思ひ出すだらう。幕末から明治へかけて、實際東京と京都との畫派の分れは著しく眼に立つに至つた。それより以前から兩派の對立はあつたのだが、明治の中頃から最近の文展頃に至つてまた實に激しく對抗し合つた觀がある。

併し、極く最近の傾向では、さうした地方別的觀念は漸くなくならうとしてゐる。實は文展に情弊があると云はるゝやうになつたのも、一つは地方的差別の觀念があまりに露骨になつたからだと云つても好いくらゐだ。そこで、今度の帝展では、新らしい審査員達が力めてさういふ地方的感情を一掃して事に當らうとして居る跡が明かに窺はれる。

で、東京、京都といふやうな地方的感情を外にし、また帝展とか院展とか國展とか、乃至狩野とか土佐とか南畫とか四條派とかいふ流派關係をも超脫して、先づ今の日本畫壇で最も代表的な、元勳的な人々ば誰であらうかを考へて見よう。

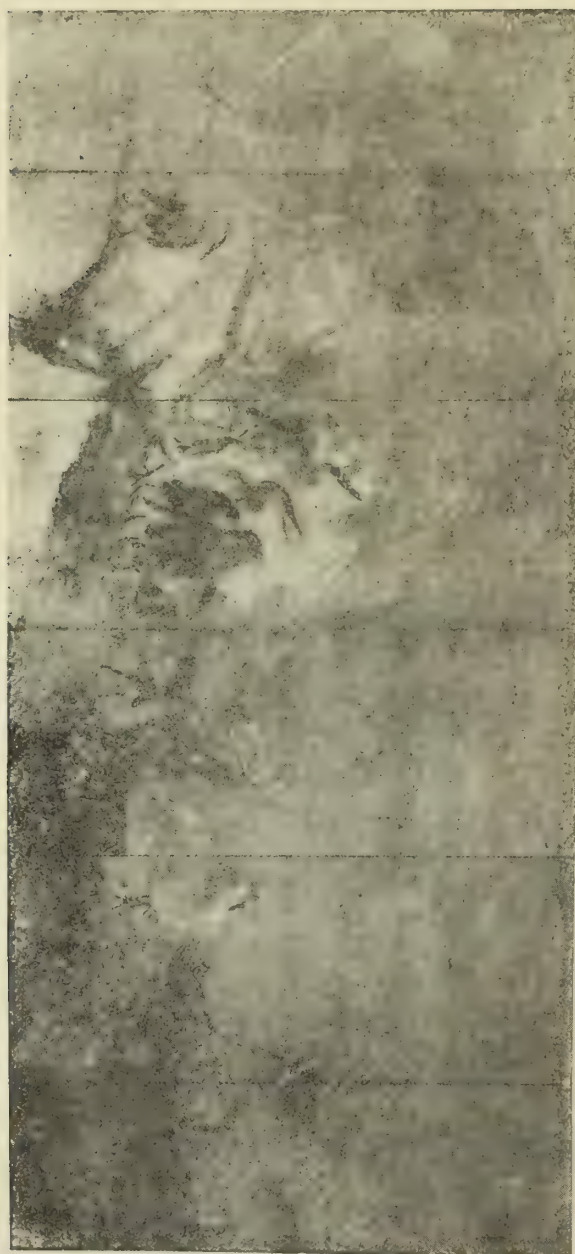
この問題は、擧げる人數によつて種々なるだらうが、假りに最も壓搾して三人擧げるとしたら、私

は竹内栖鳳、横山大観、川合玉堂といふところだと思ふ。寺崎廣業が生きて居たらこれも入れたいが、惜しい哉、長逝したから、今では先づこの三人だらう。そして、この次ぎに擧ぐ可き人としては、下村觀山、富岡鐵齋、今尾景年、山元春擧、小堀鞆音、松本楓湖等の諸大家がある。如上の諸家を元勳中の元勳とすると、現に旺んに活動して居る中年階級からも安田靫彦、鏑木清方、小室翠雲、菊池契月、結城素明、橋本關雪、松岡映丘、荒木十畝、西山翠嶂、吉川靈華、平福百穗、土田麥僊、榊原紫峰、松林桂月、小林古徑、前田青邨、木島櫻谷、川村曼舟、山內多門、飛田周山、等の大家か擧げられる。

現代三大家の位置

竹內栖鳳、横山大觀、川合玉堂の三人は、明治大正の日本畫壇に永く特筆さるべき作家だ。年輩、閲歴の上からそれぞれ長所短所はあつても、平均して見ると、左までの懸隔なきほど共通なところが多い。東京とか京都とか、帝展派とか院展派とか、さういふ區劃を藝術の上に立てるのは宜しくない。またさういふ時代の既に過ぎ去りつゝあることは前にも述べた通りだ。その間にあつて、この三人は、丁度前の古い時代と、今の新らしい時代との楔子に立つてるやうでもある。それ故、この三人は、いづれもさうした差別的觀念を厭ひながら、自然に三人三樣の地位に立つて、三樣の立場から現代の日本畫壇を支配するやうに見える。

飼はれたる猿　　竹内栖鳳

竹内栖鳳氏　第一に、竹内栖鳳だ。栖鳳は言ふまでもなく、京都の頭領であり、多年その友たる都路華香や、死んだ菊池芳文、谷口香嶠などと共に、幸野楳嶺の流を汲んで、先づ四條派畫法を修め、後東西の畫風を綜合して今日新らしき京都畫界を開拓したので、一面に於ては其家塾や、京都繪畫專門學校の敎壇にてしきりに後進を養ひ、他面文展開設以來審査員として貢獻するところ頗る多かつた。今、現に帝室技藝員、帝國美術院會員となれるも素より當然だ。

雨雲圖　竹内栖鳳

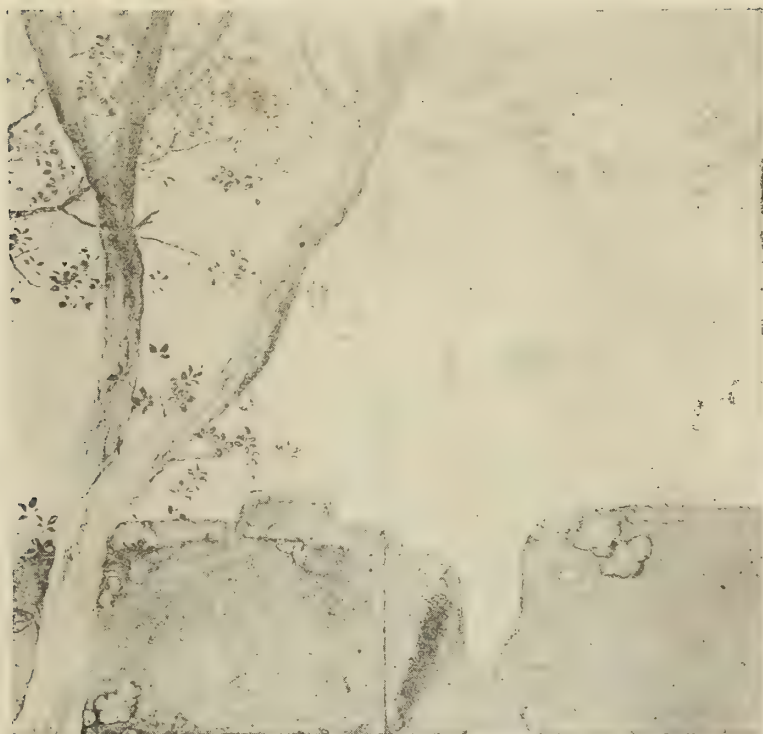
横山大觀氏

横山大觀は、何うしても民間の作家である。東京美術學校第一回の卒業生で

流燈圖　横山大觀

美術界の先覺者岡村天心によつて、思想の薫育を受け、またその心友として天才菱田春草と交つた。美術學校の教授にもなり、文展審員にもなつたが、渠は急進的意見で、他の審査員と相容れず、文展を逐はれるに至り、親友下村觀山と共に日本美術院を復興して今日に至つた。同院の最初は岡倉の精神に育まれたが、再興の同院は實に大觀と觀山との力に依るもので、大觀殊に最も功績がある。

黒き猫　菱田春草

小春の夕（一）　川合玉堂

【川合玉堂氏】三人のうちて最も年少なのは、川合玉堂である。渠は、少壯京都に出てて初めは栖鳳などの後輩として幸野楳嶺に師事したものだ、が、後東京に移つて橋本雅邦に就いた。これが渠の出世の緒て、爾來渠の英才は、日本繪畫協會や美術院の展覽會ごとに大に認められ、明治三十年「二日月」を出した頃は錚々たる盛名を馳するに至つた。玆に於て、渠は文展第一回より審査員に擧げられ、近頃は寺崎廣業と併稱されてゐたが、先輩廣業の歿後は、玉堂の位地益々高まり、優に栖鳳、

小春の夕（二）　川合玉堂

る。渠は、先年來東京美術學校教授ともなり、今や帝國美術院會員、帝室技藝員として、東京畫派では小堀鞆音と共に最高地位にある。

六元老の功績　栖鳳等三大家に比すると、やゝ側役者たるの觀はあれど、やはり當代の元勳として日本畫壇に棟梁の貫祿を把握するものとして、下村觀山、富岡鐵齋、今尾景年、小堀鞆音、松本楓湖、山元春擧のごときは、特筆の價値がある、

下村觀山氏　觀山は、その經歷大觀と相似たもので、始め狩

辻說法　下村觀山

野芳崖に學び、後橋本雅邦に就き更に東京美術學校を卒業した。岡倉天心に指導されて深く日本畫の行くべき道を究め、一時美術學校に教鞭を執つたこともあり、歐洲に留學したこともある。文展には第七回まで審査員であつたが、大觀のやめられた時これに殉して新たに日本美術院の復興に協力した。再興美術院の一半の功この人にあると共に、渠はまた技巧の大家として當代に匹儔する者なき才能を有つて居る。

富岡鐵齋氏

富岡鐵齋は、既に八十歲を越した眞の老大家だ。始めは、維新の志士であり、明治となつてからも諸方に神官などをなして居た人で、もとからの畫家ではない。が、三十歲の頃から彩管に親しみ、大に畫論畫傳等を研究して、東洋藝

術の上に一家の見を立て、慨然として新らしき南宗畫家たることに力めた。渠の企圖は見事に成功して、何物にも囚はれぬ、鐵齋一流の南畫が生れ、その畫風は却つて歐洲近代の藝術に共鳴すとまで稱されてゐる。從つて、鐵齋の名は益々高まり、今や帝室技藝員たるのみならず、帝國美術院會員として、日本畫壇の正系に尊崇されて居る。

今尾景年氏

今尾景年もまた既に頽齡の大家である。渠はもと、鈴木百年に師事して出藍の譽あり、後これに自家の流風を出して一種の景年式作風を創始し、京都畫壇の一方を掌握するに至つた。文展にも第一回から六回まで審査員となり、また木島櫻谷以下優秀な作家を養成した。嚮に帝室技藝員であつたが、帝國美術院成るや、またその會員に擧げられた。

山元春擧氏

山元春擧に至つては、さきに擧げた栖鳳等の三大家中に列べても毫も遜色ない人である。ただ、その將來に及ぼす功績が幾分三大家に劣るかと思ふが、從來の經歷はむしろ、大觀玉堂等の上にある。少にして森寛齋に學び、一時海外に遊んで泰西の藝術にも接觸した。夙くから京都繪畫專門學校や京都美術工藝學校敎授に任じ、文展第一回以來最後まで審査員として功獻する所多大であつた。加之、家塾を早苗會と名づけて、ここに門下を養成し、川村曼舟、小村大雲以下の諸家を出した功績も著しく、まさしく京都畫壇に栖鳳氏と覇を爭へる觀がある。現に帝室技藝員、帝國

雄圖　小堀鞆音

美術院會員たることも栖鳳と同格なのである。

小堀鞆音氏

小堀鞆音も、日本畫壇有數の元勳たること今更云ふまでもない。渠は、始め

川崎小虎に古土佐を學び、夙くから穎才を現して岡倉天心などにも認められた。一時、美術學校敎授となり、一旦止して日本美術院に入つたが、再び同校敎授となつて今日に及んだのである。文展に終

役小角渡唐圖　松本楓湖

始一貫審査員となり、後帝國美術院會員に推され、帝室技藝員であることなど、斯界の元勳たる看板は十二分に具へて居る。

松本楓湖氏　松本楓湖は、天保生れで既に頽齡、今は健康を損じて居るが、それでも元勳たる事は爭はれない。佐竹永海、沖一峨などにも學んだといふが、最も多く菊池容齋の畫風を繼承したのである。明治初期から畫名を知られ、久しく大家扱ひをされて來たのだが、文展初まるや第四回まで審査員に擧げられ、帝國美術院成るに及んでまたその會員に推された。蓋し、老大家中第一の幸運者だが、渠の門下からは、故今村紫紅、故高橋廣湖や、今の速水御舟その他の特異な大家を出したので功績は多いわけだ。

三、中堅の諸家（上）

意氣旺盛な中老二十人　まだ元勳とまで行かぬが、現に旺んに活動して居る中老階級の大家としては、鏑木清方、安田靫彦、小室翠雲、菊池契月、結城素明、吉川靈華、橋本關雪、松岡映丘、荒木十畝、西山翠嶂、松林桂月、小林古徑、前田青邨、土田麥僊、榊原紫峰、木島櫻谷、川村曼舟、山内多門、飛田周山の諸家を擧げて置いた。これらの人々のうち、或るものは、帝國美術院の審査員であり、

或るものは、日本美術院の同人であり、或るものは、國畫創作協會の會員であり、またその他のものは舊文展の審査員や、帝展の推薦者などである。

私が、特にこれ等の人々を一括して擧げたのは、その經歴から云つても、人格から云つても、技倆から云つても、若し帝展の審査員などを理想的に擧げるとしたら、先づこの邊の人々であらうと云ふことを豫想しての事なのだ。もつともこの二十人中、九人までは現審査員なのだが、出來ることなら他の十一人も審査員に推してよからうと思ふのである。そして、これがずらりと集め得られたら、それこそ現日本畫壇の精英悉く合同することとなるであらう。もつとも、この二十人の中には、當初から藝術上の立場を全く異にして居る人もあり、恐らく同時に審査員にでもなつたら議論の果てのつかぬこともあらうが、そこまで論爭が紛糾して行つて初めて多種多様な藝術が一堂に見られやうと云ふものだ。

各系統の網羅

蓋し、この二十人は、團體から考へて見ても、帝展を初め、舊文展、日本美術院、國畫創作協會、爾餘の卓越せる作家等を悉く網羅したわけになるので、これほどの壯觀はまたとあるまい。即ち、帝展系の人としては、新たにこの審査員となつた、淸方、素明、關雪、映丘、翠嶂、桂月、曼舟の七人、舊文展系の人としては、その舊審査員十畝、櫻谷二人の外文展以來引續き審

査員たる翠雲、契月の二人あり、美術院系としては、靫彦、古徑、青邨の三人、國展系としては、麥僊、紫峰の二人、別に作家として堂々たる實力を有する靈華、百穗、多門、周山の四人があるわけなのだ。ここでは、帝展系、文展系、院展國展系、爾餘と四分しての地位人物を說かう。

帝展系の七人

一體、帝國美術院が第一回の審査員を選んだ方法は、たしかに可なり當を得て居る。それは何よりも人材本位、人物主義だつたからだと思ふ。新らしく審査員となつた清方以下七人は全くいづれも人物のしつかりした、公平な理想をもつてる人が多いやうだ。

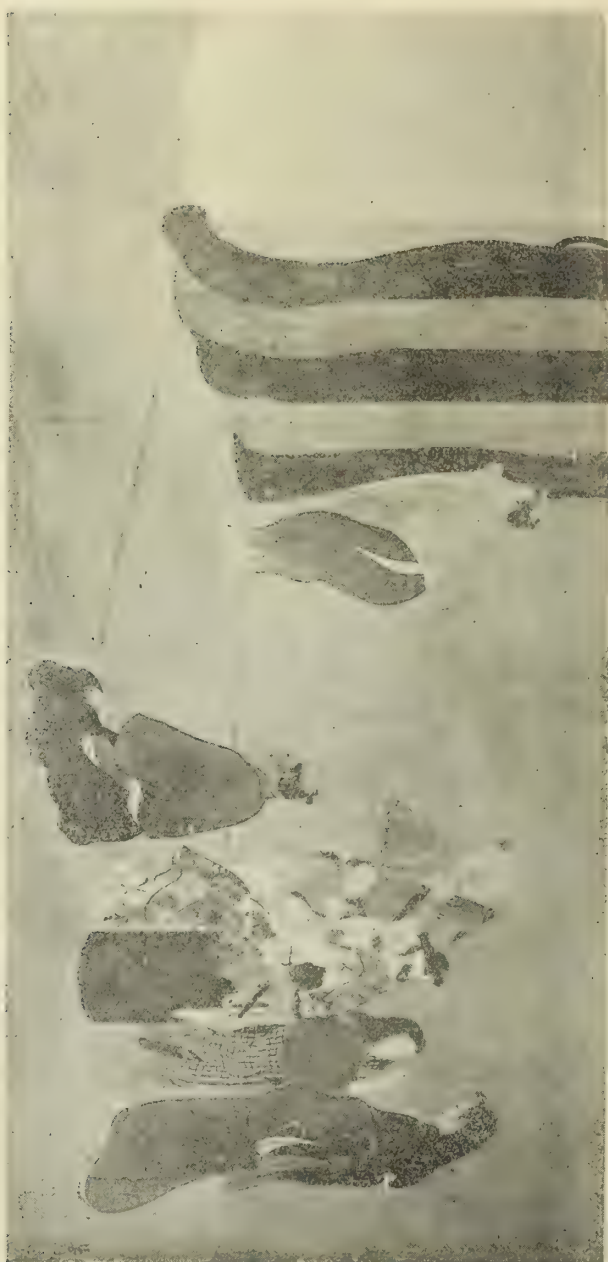
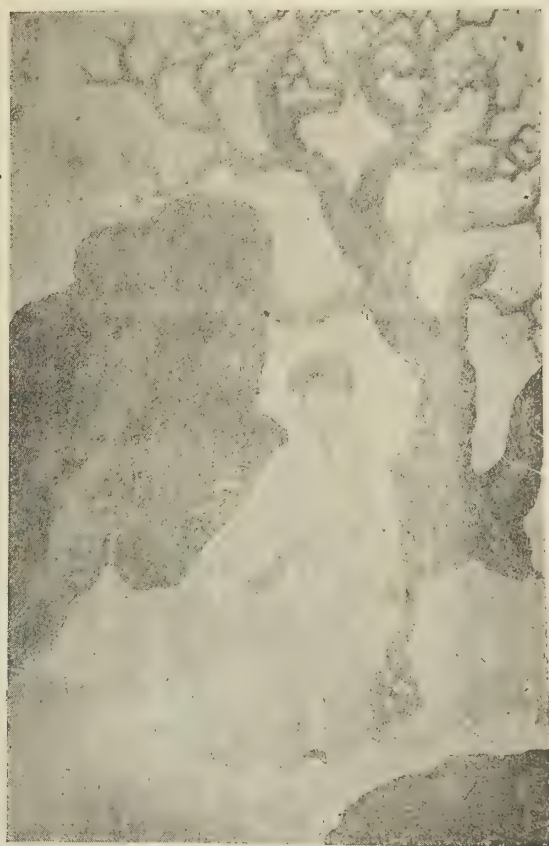
鏑木清方氏

第一に鏑木清方である。渠は。もともと水野年方の門に遊んで浮世繪の研究をなした人であるが、その素質はむしろ貴族的なけなげさをもつて居て、決して卑俗の世界に墮しなかつた。第四回の文展に「女歌舞伎」を出して三等賞を得、第九回の「晴れゆく村雨」は場中第一の傑作として世に喧傳された。後、結城素明、吉川靈華、平福百穗、松岡映丘等と金鈴社を組織してその一員となり毎回秀作を出して畫壇に於ける地歩を固くしたが、元來渠は技巧の才にも、鑑識の明にも長けた智慧の人なので、帝展審査員としても最も公平な、醇眞な態度を持してると稱される。

結城素明氏

結城素明の名は、その傳はること甚だ久しい。渠は、始め川端玉章の門に入り、後東京美術學校に入つて明治三十年に卒業し、更に同校西洋畫部に在學したことがある。三十二

女歌舞伎(一)　鏑木清方

女歌舞伎（二）　鏑木清方

歌神　結城素明

倪雲林　　橋本關雪

年頃、福井江亭、平福百穗等と無聲會を起して、當時の畫壇に一新生面を開いた文展には第一回ら出品し、「甲ふたる馬」や「相思樹下把金絲圖」などの傑作がある。十有餘年間美術學校に敎鞭を執り、後進を誘導し現に池畔倶樂部の有望な少壯作家の如き多くは渠を師と仰いで居る。

橋本關雪氏

橋本關雪は、元來竹内栖鳳に學んだ人であるが、今ではむしろ南畫家でもあるやうに世間から看做されて居る。それ程、渠は、師風にもかぶれず、一切の藝術的因襲を打破して、殆んど孤立的に今日の地歩を獲得した人である。それ丈偏狹な人物のやうにも見られるが作家の示す

實力は常に、拔群のものあり、文展出品中でも、「寒山拾得」「倪雲林」「木蓮」などいづれも一世の賞讃を博したものである。そして題材を採ること自由で、あらゆる方面に才能を示す。今や、初めて帝展審査員となつたが、氏の見識はさすがに一頭地を挺んでゐるとか。

松岡映丘氏

松岡映丘は、清方、素明と同じく金鈴社組だ。渠は、名家の出で、最初雅邦に學んだ事もあり、山名貫義の門にも入つたが、正式の敎育は明治三十二年美術學校に入つて受け、主として寺崎廣業から技能を授けられた。文展では、第十一回の「室ぎみ」が特選首席となつたので一躍その名聲を高くしたのだが、その前から美術學校に敎鞭を執り、篤學の人、智慧の人として推重されて居たのである。金鈴社でも、他の諸先輩と伍して更に劣らず、今や美術學校敎授として、又帝展審査員として最も前途を矚望され、美校の若き學生等には、鞆音、素明以上の人氣がある。

西山翠嶂氏

西山翠嶂は、竹內栖鳳の聟さんである、併し、これは決して渠を碌々たる駙馬と同一視すべき理由にならないので、むしろ渠は栖鳳に師事して、正しく、眞面に今日の地歩を占めたものである。元來、京都の人で淸潤なる風格を有する人、その作品また生ッ粹の京都情緒を具へてゐる。文展に出品した「靑田」や、「採桑」「落梅」等には、渠獨得の趣致があつた。帝展審査員としても、決して栖鳳や、栖鳳一門の人々に偏頗する人であるまい。

御堂關白（三幅ノ內中）　松岡映丘

短夜の一　西山翠嶂

松林桂月氏　渠は、帝展第一回に突如審査員となつたの。初め野口幽谷に師事し、日本美術協會に育つて、文展にも出品し、優賞を獲たが、近來文展反抗の氣勢を揚げ、殊に同じ南畫畑の小室翠雲と拮抗して居た。從つて文展に於ける位地は、田中賴璋や池上秀畝に遙か凌駕されて居た。それ故、渠が一躍審査員たらうとは何人も豫期しなかつた。

川村曼舟氏　最後に、川村曼舟だが、渠は、人も知る如く山元春擧の第一の高弟である。春擧の京都畫壇に於ける地位は、嚮きにも說いた如く、棲鳳と拮抗しておさ〳〵劣らぬものがある。その關係から、棲鳳門下の翠嶂、關雪が出てゐる以上、春擧門から曼舟の拔かれたのは何人も合點の行くところだらう。だが、關雪は勿論、翠嶂も技倆、識見共にその任にあるので、曼舟も文展運はよく、三等賞二等賞數回特選三回もの閱歷があるから、その點に箇の足りぬことはない。荒木十畝、木島櫻谷の四人は、第二回帝國美術院展覽會には、共に審査委員としてその名を列ねてゐる。

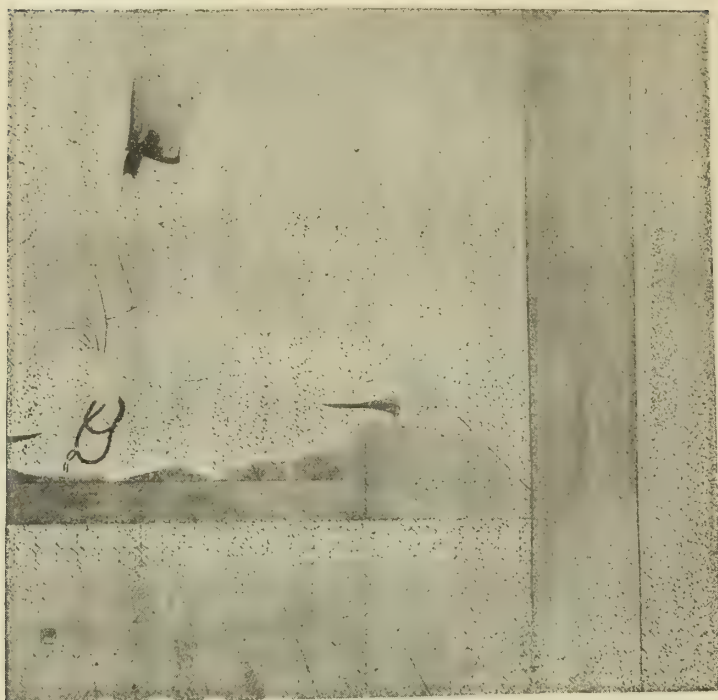
小室翠雲氏　先づ小室翠雲から擧げて行かう。渠は、初め明治初期の南宗大家田崎草雲に師事して、夙に穎才の稱あり、後年日本美術協會系の作家として最も有望視されたのである。渠、性磊落、奔放不羈の勢ひあり、共平常の生活の豪快なる、其作品の健筆縱横なる、また世に定評あるところだ。從つて、同流の松林桂月が孤峭峻嚴の風あるとは全く相反した性格だが、翠雲の方が時流に合

山海圖(一)　小室翠雲

供燈（一）　菊池桂月

することが多きか、常に先輩としてまた要路の地位を占める上から桂月を壓して居た。そして、桂月が日本南宗畫會に重きを成せば、翠雲は南畫會の頭領として相對峙して來た。今や桂月も擡頭して同格の審査員となつたが、翠雲の健筆は未だ衰へずして、過去の「寒林幽居」と云ひ、最近の「春庭」「秋圃」と云ひ優に桂月の及ばざる長所を發揮すと稱される。

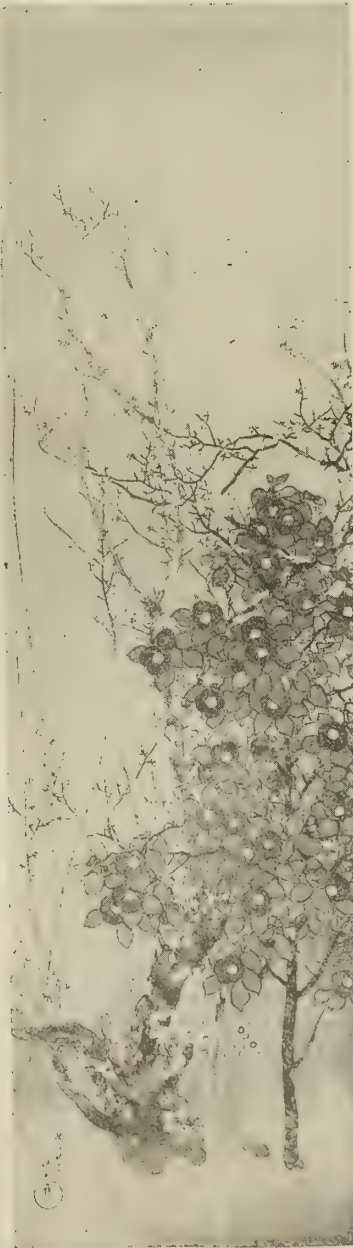
菊池契月氏

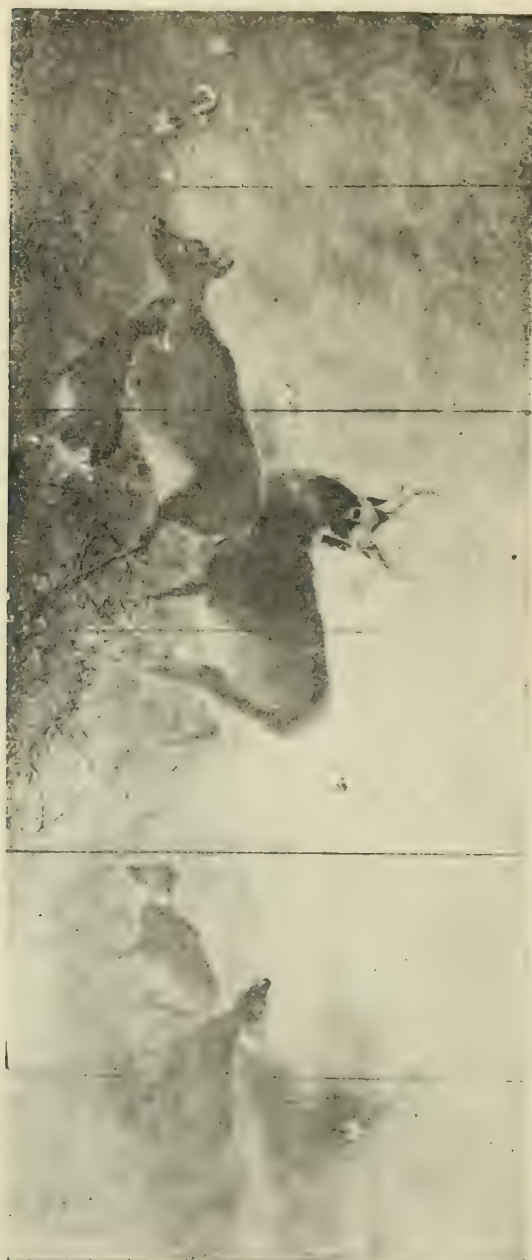
菊池契月は、文展には最後の第十一回に審査員となつたのみで、而かも文展切つての小壯氣鋭な人物との世評があつた。渠もまた京都派近來の大家菊池芳文の駙馬だが、決して

供　燈（二）　菊　池　契　月

それが爲めに名を成したのではなく、信濃の山中から飛び出して京都に修業し初めて以來めき〳〵實力を發揮し、夙くから天才の稱があつたのだ。中にも、文展出品の「供燈」「茄子」「鐵漿蜻蛉」などは、文展の誇とまで喧傳されたので、其眞價が知られよう。渠はまた人格圓滿、識見の高きこと、京都畫壇でも稀に見るところと云はれる。現に京都繪畫專門學校の敎授として、はたまた岳父の殘した家塾の主腦として少壯作家の養成にも力めて居る。

荒木十畝氏　現審査員たる荒木十畝は、文展時代には餘り好評のある

人でなかつた。渠を罵るものは、十畝は頭が古いと云ひ、頑固で物の分りが鈍いと排して居た。けれども、この非難は、十畝が、明治花鳥畫壇隨一の大家たる荒木寛畝の養嗣として極めて平凡順調な經歴を有つて居り、從つてその作風にも餘り他奇なく、概して守舊的な考を固守したが故に起つたものらしい。現に、昨年久しく勤め來つた女子高等師範學校教授の地位を去り、また審査員に任命されず

歳寒三友　荒木十畝

して始めて自由な立場から帝展に出品した「黄昏」は、甚だ渾然たる出來榮えで、その技倆のたしかに非凡なものあるを立證した。渠はまた、女高師教授として、及び岳父以來の家塾たる讀畫會主腦として多くの男女を薫育し、指導最も熱心と稱される。第二回の帝展に際して再び審査員となつた。

しぐれ圖　木島櫻谷

木島櫻谷氏

木島櫻谷至が、今尾景年の門から出でて文展に連年大作を出して居た頃の勢ひはすばらしく、第七回に審査員となつても、殆んど尚早論など起らなかつた。それほど、渠の往年の作「かりくら」「寒月」「驛路の春」等の出來榮えは優秀で。その後「うまや」「凉意」等も惡作ではないが、兎角振はない。最近再び審査員になつたから、活動するだらう。

院展系の二人

日本美術院の安田靭彦、小林古徑、前田青邨、それに國畫創作協會の土田麥僊、榊原紫峰とかう五人は、何と云つても今の日本畫壇で特殊な實力を具ふる人々だ。まだこの他には美術院には、川端龍子、速水御舟、その他有爲の作家少からず、國展にも村上華岳、小野竹橋等擧ぐべき人あるが、特にこの三人と二人とを代表的と推して差支なからう。

安田靭彦氏

安田靭彦は、明治十七年の生れだからまだ少壯の作家だが、その閱歷、その識見は正しく老大家を凌ぐものがある。二十二三の頃、その天才は早くも岡倉天心の見拔くところとなり、常陸五浦の美術院研究所で特殊の指導を受け、また天心や、雅邦の助力で久しく奈良に勉學するの便宜を與へられた。文展開かるゝや、先づ「豐太閤」、次で「夢殿」を出して觀客を驚嘆せしめた。美術院復興さるゝや、その第一回に、「御産の禱」を出して、また〳〵世人を驚嘆せしめた。その技倆の優越なことは、その思想の深遠なると相俟つて、たしかに、新時代の作家たる特質を十二分たらしめ

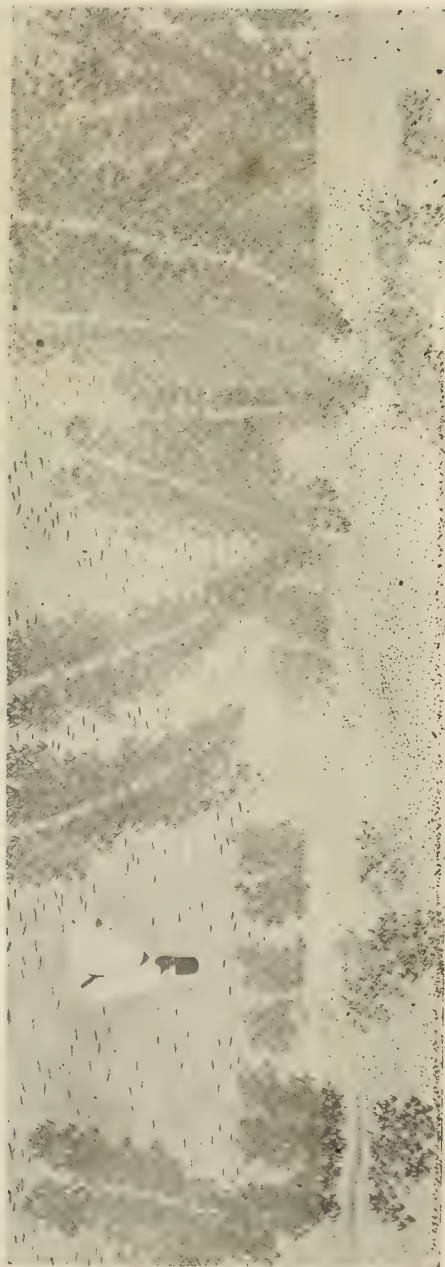
るが、この人惜むらくは病身で、不斷の努力を許されて居ない。

小林古徑氏

小林古徑は、初め梶田半古の門に學び、漸く鋭才のただならぬを示すに至つた人二十四五にして、安田靫彥、故今村紫紅等の起せる紅兒會に加入したのがその初まりである。文

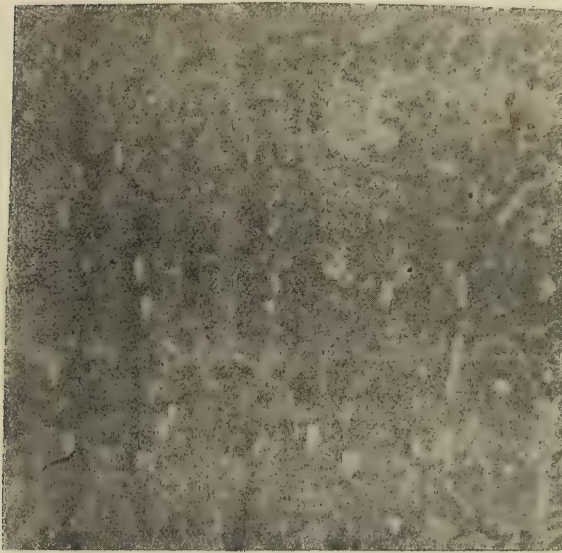
項羽　安田靭彥

竹取物語の一　小林古徑

展第六回に出品した「極樂の井」も秀作だつたが、再興美術院の第一回に「異端」を出したが名聲普遍第一作といふ可く、次いで「阿彌陀堂」「いでゆ」「麥」と最近に至つて益々其の天才的手腕を發揮してゐる。靫彥の英才を以てしても、近年は兎かく沈滯の風あるため、菱田春草、今村紫紅の二天才亡き後の院展は纔かに古徑あつて生氣潑剌たる觀を添へてゐる。紫紅の遺した赤曜會といふ院の若手連も多く渠に親炙して新彩を發揮してゐるもの、近來の才物速水御舟の如きも古徑には心から兄事して居

京八題ノ内　前田青邨

るとか。渠の美術院に於ける地位は、今や大觀、觀山と軒輊なき程高きに置かれる。

前田青邨氏

前田青邨も、ほぼ古徑と同地位にある人だ。渠もまた始め梶田半古に師事し

後紅兒會々員となり、自然の順序で再興美術院の同人となつたものである。文展に出品した「竹取」や「御輿振」も相當問題になつたが、院展出品の「竹取物語」「京都名所八題」ことに著名である。それ等の秀作を出した時は、渠の才何れ丈け伸びるかと期待されたが、最近にては、やゝ歩調亂れて、同輩古徑に後れし觀がある。昨年の作「燕山の巻」が努力の割りに榮えなかつたのは惜しいが、併し渠は用意周到なところもあり、技倆は他に挺んずるものあるから、決してこのまゝで停滯しないだらう。

春禽趁晴（一）　土田麥僊

土田麥僊氏

若し夫れ、國畫創作協會の土田麥僊に至つては、明治二十年生れの若い作家だが、まさしく天才肌の稀れに見る作家だ。渠年十八にして佐渡の孤島を出でて、京都に鈴木松年の門を叩いたが、居ること半歳、竹内栖鳳の門に移つて安んじて勉學し、また京都繪畫專門學校をも卒業した。在學中から穎才を示すこと屢々、文

春禽趁晴（二）　土田麥僊

展出品にても、「髮」「島の女」「海女」「散華」何れとして問題になつて居らぬ作はない。取り分け、第九回の「大原女」は、新時代の製作品として識者間に第一の好評あり、爾來渠の地位は牢として拔き難くなつた。而かも次いで出品した「三人の舞妓」「春禽趁晴圖」の文展に虐待せられしは寧ろ奇怪と云ふべく、渠また慨然としてこれに見限りをつけ、大正七年一月小野竹橋、柳原紫峰、村上華岳、野長瀨晩花の四人と共に國畫創作協會を起し、第一回に「湯女」第二回に「三人の舞妓」を出して今や名聲東西を壓するの觀がある。帝國美術院が、今更の如くこの人を推薦に祭り立てたは、むしろ笑止の沙汰だ。

榊原紫峰氏

榊原紫峰は、麥僊と共に國展の重鎭で年齡また彼と同じい。京都美術工藝學校及び同繪畫專門學校に學んだ人て、文展へも殆んど每回出品して優賞を得たことが多いが、殊に第

十一回の「梅雨晴れ」は、その氣分をよく現はし盡し、特選にならなかつた事が一層世の注目を惹いた程である。國展第一回に「青梅」第二回に「赤松」を出して、更にその地歩の堅實なことを立證してゐる。性格の穩健にして、「神經質なことも近代の花鳥畫家として第一の新人たるを思はせる所以か知れない。

實力の中老作家四人

帝展系、文展系、院展系、國展係等の諸家に對して、私は實力を有する大家として吉川靈華、平福百穗、山内多門、飛田周山の四人を擧げた。この中。靈華、百穗は、淸方、素明、映丘の三人と共に金鈴社同人であり、多門、周山二人は、舊研精會、今の如水會同人として、野田九浦、水上泰生等と結んでゐる人々だ。けれども、この人々は、必ずしも金鈴社同人、または如水會同人たらずとも立派に獨り立ちの出來る、實力主義の人物たること云ふまでもない。

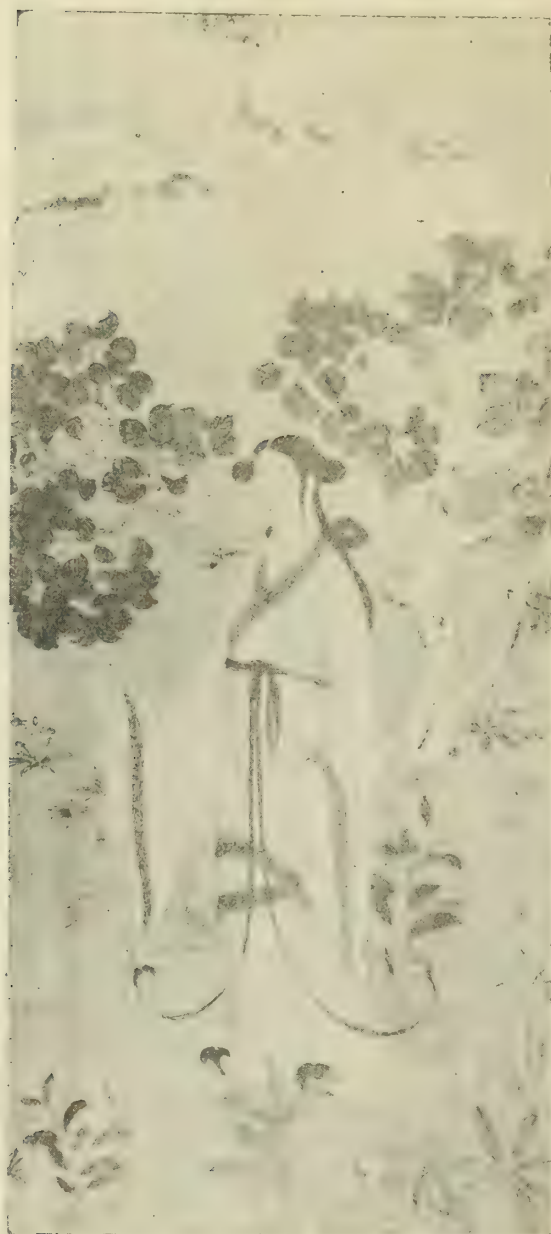
吉川靈華氏

就中、吉川靈華は當代日本畫中、第一流の識見を具ふる人だ。渠は、もと儒者の家に生れ、幼より國學、漢文の素養は十二分に具へてゐた。初め、大和繪を好んで狩野良信に就いたが、別に洋畫も研究し、後松原佐久に指導を受けた。主として冷泉爲恭などは私淑したこともあるが、漸く繪畫の本源に溯るに至つて、藤原、奈良、飛鳥と飛んで行き、唐、印度にまでその研究の範圍を廣め、東西兩洋の藝術を根源的に結びつけて考へて居る人である。從つて、その畫風も一言に云

ふと雄渾荘重の趣きがあり、一線一劃苟くもしない流義の人だ。文展などには頓着なく、たゞ一回「菩提達磨」をひよッくり出して褒状を得たのが、今日では奇蹟のやうに思はれる。金鈴社同人として、その中でも最も重視される人だ。

藐姑射之處子圖　吉川靈華

朝　露（一）　平福百穗

平福百穗氏

平福百穗は、明治初期日本畫の大家たりし穗庵の子である。幼にして父に別れ、初めは川端玉章に師事したが、三十二年東京美術學校を卒業するや、結城素明等と无聲會を起して自然派の旗幟を飜した。また渠は文才もあり、新聞雜誌社に入つたこと多く、現に國民新聞社に籍がある。資性眞摯なれども、根岸派の歌人伊藤左千夫に師事した關係などもあつてか、一種の俳徊趣味を有し、その作品にも文學的乃至俳句的趣味が饒い。最近殊に奇才を示し「豫譲」は文展の特選首席となり、「牛」また好評であつたが、その本領は夙く旣に第

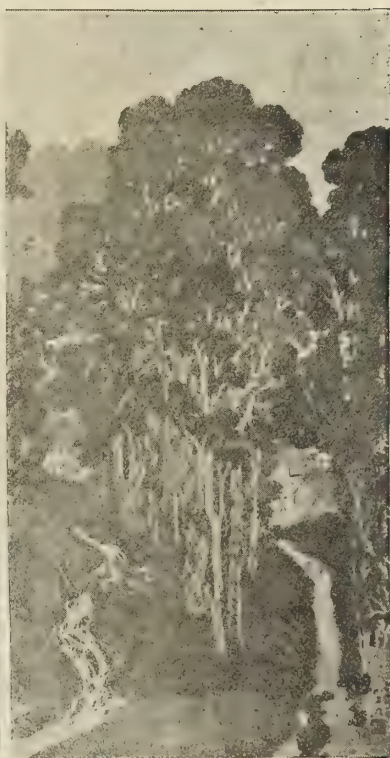
朝　露（二）　平　福　百　穗

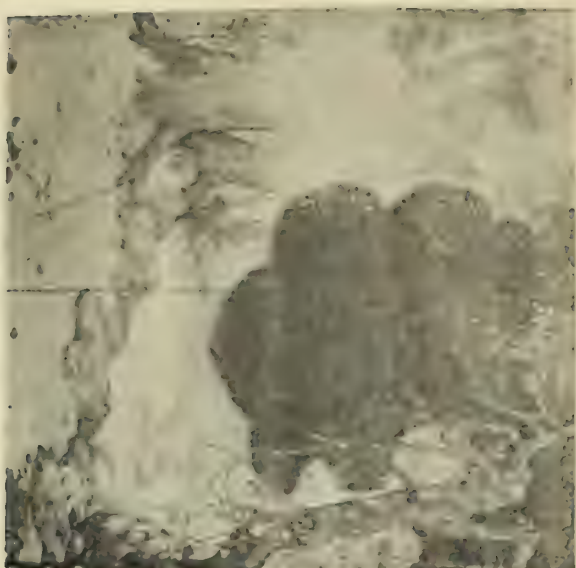
八回「七面鳥」に十分觀取されたのである。帝展の推薦となつたのも實力の致すところだが、渠自身はこの事を厭つてるさうだ。

山内多門氏

山内多門は、川合玉堂の第一の高弟で、曾ては橋本雅邦に學んだこともある。二十歳過ぐる頃から名聲を擧げ、文展劈頭の「驟雨」も三等賞を得た。爾來「郡上十二景」の如き青年作家中拔群の出來榮えとして天才視せらるゝに至り、つひに帝展に推薦となれるのみならず、「天龍四季」を描いて益々その地步をたしかにした。今や、玉堂の後をうけて審査員に任命せられたのだ。

初冬

山内多門

その技能といひ、その閲歴と云ひ、その識見と云ひ、何處から見ても申分のない人物だ。誤つて古典趣味に墮してしまはなければ、前途も大にある人と目されるが、精進努力すればよいだらう。

飛田周山氏　飛田周山は、帝展第一回で、「神泉」が特選首席となつたため、その名聲津々浦々に傳はるに至つた。だが、渠は、既に「幽居の秋」で十二分にその才能を示して居るので、識者は當時から周山の名を深く印銘して居た。渠は初め、久保田米僊の門

に入り、後京都に行つて、竹内栖鳳に師事したこともあるが、三十二年以降は岡倉天心の日本美術院に入つて研究した。卽ち、美術院系の人だが、今の再興のそれには初めから關係せず、文展で地步をつくつたのだ。而かも、今は、帝展への出品畫家中貫祿最も多く、また多門や、その他の同志十名と如水會を結んで隱然其の牛耳を把つてる關係上、推薦となり、審査員となる機も遠くあるまい。

傍系の大家は誰々

正系とか、傍系とかいふことは、勿論比較的のことだが、さきに正系の大家を擧げたにつけて、今度の人々は傍系の大家と云つて置かう。この方の元勳としては、下條桂谷、高島北海、佐久間鐵園、山本梅莊、森琴石等を最とすべく、姬島竹外、跡見花蹊等これに準ずるであらう。續ぐ中老としては、池上秀畝、田中賴璋、上村松園、木村武山、都路華香、田近竹邨、山田介堂、池田輝方、川北霞峰、荒井寬方、池田桂仙、水田竹圃、富田溪仙、小林大雲、小川芋錢、北野恒富、尾竹竹坡、尾竹國觀、野田九浦、町田曲江等今なほ優に活動圈内に在る人もあれば、村田丹陵、津端道彥、高取稚成、佐竹永陵、山田敬中、尾形月耕、大橋翠石、島崎柳塢、福井江亭、畑仙齡、狩野探令等漸く活動圈外に逸した人々もあつて數の上ではなか〳〵多い。

これ等の人々は、今現に活動中で、將來なほ一層發達すべき傾向を有するものもあるが、槪觀したところでは、多く過去に功績があつて、其畫風もまた旣に古典的臭味を帶びんとして居るかに見える

のだ。これは、一つには年齢の關係もあることと思ふが、その閱歷その學識、その周圍等の關係が殊に著しき保守的空氣又は退嬰的色彩に包まれてゐる結果だと見ねばなるまい。ただ、この中の幾人かは、さうした境遇の中にもかゝはらず、敢然として新らしき世界に更生するであらうと思はれる。そして、この勇あるものは、勿論前に擧げた正系の大家と伍して劣らないであらう。先づ桂谷以下の元勳七人から述べて見よう。

四、中堅の諸家（中）

下條桂谷氏

古典的な元勳とみて、桂谷、北海、鐵園、梅莊、琴石の五人を擧げたが、このうち筆頭たる下條桂谷は、初めからの畫家でなく、むしろそれは餘技だ。渠は、天保十四年の生れで御一新後は海軍に志し、主計官となつて大佐相當官にまで陞つた。やがて退官と共に勅選議員に選ばれたが、元來美術に嗜み深きところから少より研究せる南畫を描いて世に示し、大に江湖の稱讚するところとなつた。爾來帝室博物館の評議員となり、また特に日本美術協會の幹事長としてその實權を握るに至り、同會の有力な作家の尊敬を受けて居る。渠のごときは、確かに文人畫家として異數の大家と云ふべきだ。

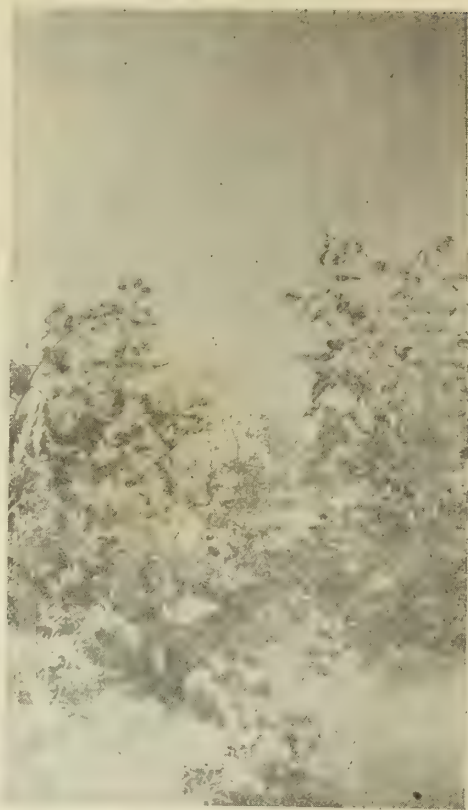
高島北海氏

高島北海は、幼より父に畫を學んだ人だといふが、渠もまた初めの間は專門の畫家でなく農商務省の山林技師として佛國に留學までして來た人であるが、今より二十年ばかり前から全然畫家たることに專心して、大に技能の發達を見、明治四十年には小室翠雲、荒木十畝等と結んで、文展對抗の正派同志會を結び、第二回から文展審査員となつて第十一回にまで及んだ。其の製作は、山水植物いづれも南畫風の趣致を帶びたものではあるが、あまりに解說的乃至寫實的との非難もあつた。蓋し渠は作者たるよりも寧ろ藝術の科學的鑑賞家であるに近いものか知れぬ。

富士裾野の花

佐久間鐵園氏

佐久間鐵園は、仙臺藩の人で、代代仙臺侯の畫員を勤めた家柄に生れたといふ丈け畫家として珍らしき氣骨をもつた人

高島北海

だ。その立場は、北海などと相似たもので、四十年の正派同志會結合の際は、北海や、十畝、翠雲、故山岡米華などと共に極力文展反抗につとめたものである。そして第四回から七回まで文展審査員となり、その間に出品した「四季山水」その他諸作は、一種の風格を具へたものとの評があつた。併し、既に現代の圏外にあるであらう。日本美術協會には今なほ勢力がある。

山本梅莊氏

山本梅莊は、尾張の產で、現に名古屋附近に住し、中京南畫界の牛耳を把つて居る。貫名海屋、三谷雪庵に就て南畫を修め、山水花鳥を能くする。其健筆は明治の中頃から末期にかけて各所の展覧會を賑はしたもので、文展第一回にも「秋景山水」を出品し好評があつた。やがて

四季山水の内　佐久間鐵園

第六回から第十回までは文展審査員となつて世に時めいた事もある。

森琴石氏

森琴石は、別に鐵橋道人の號があり、有馬の産である。初め鼎金城に學び、後忍項寺壽平に就て共に南宗畫を學び、大阪の南畫壇に重きを成すに至つた。その製作多く、各種展

覽會を賑はしたのみでなく、第七回には文展審査員となり、關西南宗畫界の重鎭と目さるゝ關係にあつた。

その他の人々

以上の五人を、今や過去の人たらんとする日本畫傍系の元勳と見る時、姫島竹外、跡見花蹊のごときはこれに準ずるものと見られよう。竹外は、九州筑前の產、石丸春井、村田東圃に學び、多年南宗畫家として大阪に住し、其作品世に持囃さるゝと共に、門下に秀才を養ふこと

秋景山水　山本梅莊

を忘れなかつた。水田竹圃、赤松雲嶺のごときは、實に竹外の門から生れ出たのである。跡見花蹊は故野口小蘋と共に閨秀畫家の大家として世に聞えた人だが、元來女流敎育家で、有名な女學校を起し、今日あらしめた女丈夫だ。併し、繪畫の才も著しく、石垣東山、植野蘿山、目根對山等に學んで深くその蘊奥を極めた。從つて上流婦人等に美術敎育を施したこと多く、作品また非凡なものがある。

正系傍系の岐路に立つ作家　活動圏内に踏止つて更にその聲價を高めるか傍系から傍系へと踏み入つて漸く時代に背き去るか、この岐路に立てるものとして、私はさきに、池上秀畝、田中賴璋、以下二十人を擧げた。この中、右の二人や、上村松園、都路華香、田近竹邨、池田輝方、川北霞峰、小村大雲の八人は、文展または帝展に於てその最高表彰たる推薦の光榮にあづかれる人であり、木村武山、荒井寛方、富田溪仙、小川芋錢、北野恒富の五人は美術院同人であり　山田介堂、池田桂仙、水田竹圃、尾竹竹坡、同國觀、野田九浦、町田曲江等はいづれも、中等大家として、夙くより既に錚々の名を成し、現在はあまり振はぬ顏觸れだ。

私が、特に、この二十人をこゝへ引張り出したのは、渠等を決して輕んじたわけでもなければ、時代遅れと觀たのではない。むしろ、この二十人こそ最も現代に於て問題となるべき人々で、新らしくなるか、古くなるか、進むか退くかといふ大事な々々々瀨戶際にある興味深甚の作家だと思ふのであ

る。而かも、これ等の人達は、今云つた通り、或は帝展審査員同格の推薦であつたり、美術院最高の地位たる同人であつたり、然らずとも社會的に美術家として最高に近き地位を贏ち得た人々のみなだ。この人々は、決して今のまゝで、香しからぬ末路を遂ぐべきではない。私は、先づ慨然諸氏の奮起すべき秋だと思ふ。

池上秀畝氏

先づ推薦組の八人から擧げて行くことにしよう。いの一番の池上秀畝は、人も知るごとく、故荒木寛畝の高弟だ。寛畝の後には十畝あるが、秀畝もまた才能、技倆をさく〳〵これに劣らぬものあり、讀畫會中最も重きを成して居る。日本美術協會系の驍將たること多年、文展でも終始一貫非常の氣勢を擧げてゐる。わけて第九回の「秋晴」は二等賞となり、續いて「夕月」「峻嶺雨後」「四季花鳥」と引續き特選といふ成績拔群さだ。ただ、最近の「雪の驛路」など餘り外形美に囚はれたのは惜しいが、門下の指導に就てもよく力める大家らしき大家である。この人のごときは、今後の覺悟だにしつかりして居れば決してこのまゝ老い朽ちてしまひはすまい。

田中賴璋氏

田中賴璋も、常に秀畝や、松林桂月、小室翠雲、荒木十畝等と雁行する人でこれらの人々にはいづれがいづれと軒輊がつけられない。賴璋は五人のうち、少し年長で、初め森寛齋、川端玉章に師事し、日本美術協會系の作家としては堂々たる力倆を有する人だ。若し東京に出る

上苑賞秋
上村松園

と今數年早く、それ丈け玉章門下も夙く入つて居たなら今時分は一段の聲價を博して居たてあらう。文展へ出品して毎回重賞に與かり「蓋瞖」「四季の山」「山月四趣」等は殊に、代表作と稱される。

上村松園女史

上村松園は、ひとり京都に於ける閨秀第一の作家であるのみならず、現代日本書壇にて閨秀作家中隨一に推さるべき人である。跡見花蹊や、野口小蕙は可なり著名だが、到底ッキ役者で、本流に進む人でない、松園と拮抗し得るはわづかに池田蕉園のみであつたが、惜しい哉夭折した。松園は京都の產、初め、鈴木松年、幸野楳嶺に學び後竹內栖鳳に就いた。明治三十三年二十歲ばかりの乙女ざかりに「花ざかり」を出したのが名聲の始まりで、文展には毎回秀作を示し、中に「螢」「舞したく」「花かたみ」は一世の讚美するところとなり、第十回に幾多有爲の殿原を出拔いて名譽この上なき推薦とはなつたのである。その後も「月蝕の宵」「焰」等の近作もある。

都路華香氏

都路華香は、その閱歷から考へると極めて出世運のわるい、不幸な人である。渠は、栖鳳や、故芳文や、香嶠等と共に幸野楳嶺に師事して四人は殆んど同格であつたのだ。勿論、川合玉堂のごときは、四人から見れば若干後輩である。然るに、栖鳳でも、芳文でも、香嶠でも、玉堂でも、疾くの昔に審査員となり、或は帝室技藝員となつてるのに、華香ひとり遙かに取り殘された。而かも、渠はなかなか技巧に巧みな人で、その點では他にひけを取らないのに、文展運など極く

秋山曉靄　田近竹邨

わるいから自然かうしたハメにに落ち込んだのだらう。幸ひにして、第十二回に推薦されたが、其作風は散々な惡評であつた。今度の「白鷺城」やゝよきも、新人と相交つて中原の鹿を逐はしむる底のも

のではない。

田近竹邨氏

田近竹邨は、近世南畫界の名家田能村直入に學び、深く南宗の骨法に參じた人である。京都南畫壇の重鎭で、文展に出品した「寒林暮靄」や、「細雨空濛」等夙にその畫名を高くせしめたものである。近來餘りその作品を公開しないが、渠の才能、藝術は、帝國美術院をして將に推薦の擧に出でしめたのであらう。以て渠の現在の位地を知る可しだ。

池田輝方氏

池田輝方は、清方などゝ共に始め水野年方に浮世繪を學んだが、年方歿後は亡妻蕉園女史と共に川合玉堂の門に入つて其薫陶を受けた。夙くより才能の見る可きものあつたが、殊に文展第八回の「兩國」以後畫名しきりにあがり、夫人と共に、常に斯界の王者たる觀があつた。惜しい哉、共に砥礪し來つた蕉園夫人が先年夭折したので、渠は俄かに孤獨の人となり、藝術に對する努力また多少荒んだ感がある。けれど、最終文展の「淺草寺」のごときホロリとさせるものがあつた。輝方は、今日が最も自重すべき時、帝展の推薦に滿足してしまつたら大變だ。

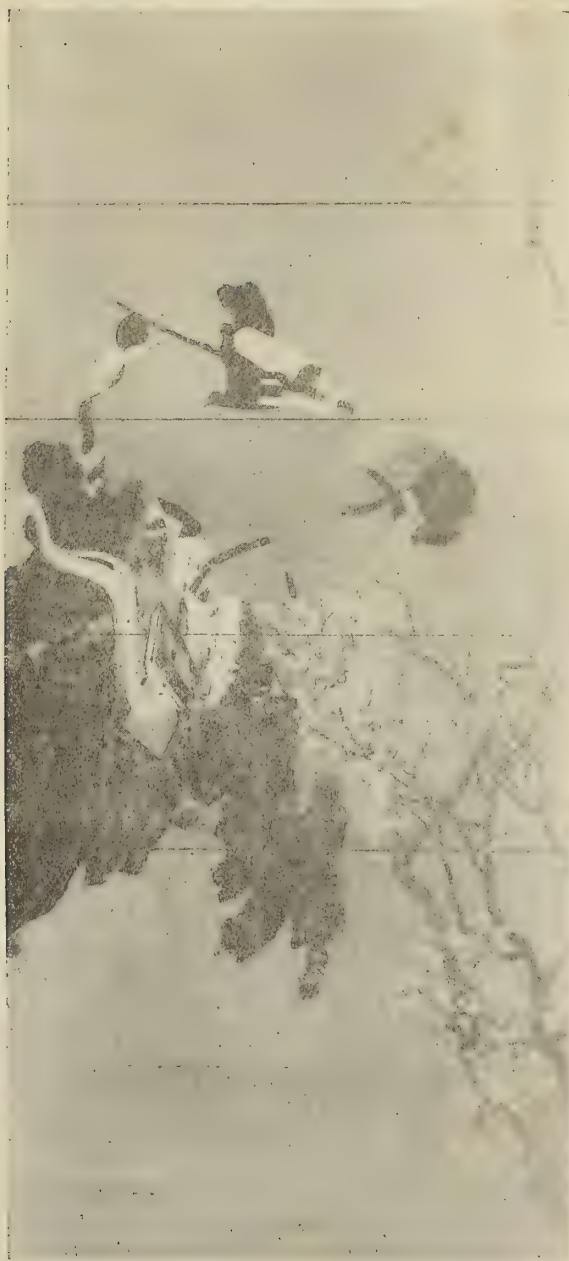
川北霞峰氏

川北霞峰は、京都の人、幸野楳嶺及び菊池芳文に學んだ。文展へは、殆んど毎回出品して賞を受けたこと多く、最近では「海邊八題」「吉野の變」がよかつた。技巧にもすぐれた人であるが、併しいつ描く作品も餘りに千篇一律だといふ非難がある。推薦尙早の說あるもその爲めであらう。

燈籠流し　池田輝方

川北霞峯

竹徑春淺の内

寒　翁　　小村大雲

小村大雲氏

小林大雲は森川曾文、都路華香等に師事したこともあり、後、山元春擧に就いて今日の發達を見るに至つたのである。夙くから天才の稱あつた人だが、文展に出品した「畫舫」などを最とし、その以後餘り振はぬ。作風は要するに形式に囚はれてるものと云つてよからう。

問題の院展五同人

美術院の五人として擧げた木村武山、荒井寛方、富田溪仙、小川芋錢、北野

法然上人　木村武山

車爭ひの内　荒井寛方

恒富の五人は、院展に於ける最も中庸を得た、比較的穩健な作風を代表する人達だ。

木村武山氏

木村武山は、明治二十九年東京美術學校の卒業生で、後、岡倉天心に從つて横山大觀、下村觀山、菱田春草等と共に常陸土浦に移つたが、大正元年東京に歸り、日本美術院の再興さるゝや同人として大觀、觀山に次ぐ位地を占めて居る。過去の作品として、「阿房劫火」や、「孔雀王」「彌陀三尊」などが優れたものであり、花鳥及び佛畫に堪能な作家として推されるが。

荒井寬方氏

荒井寬方は、清方、輝方等と共に初めは水野年方の門に入つて浮世繪を學んだ人である。が、三十二年安田靫彥、故今村紫紅等と紅兒會を起してから畫風大に一新し、進境著しきものがあつた。文展にても屢々入賞したことあるが、再興美術院起るやこれに投じ、同人となり、「乳糜供養」などに獨特の才能を示した。後、印度に渡り、今度の「雪山の濕婆」なともその土産らしい。

小川芋錢氏

小川芋錢は、今でこそ美術院日本畫部の同人として、立派に日本畫家扱ひをされるが、元來は洋畫家で、初め本多錦吉郎の彰技堂に入り、また加地爲也に就て洋畫を學び、久しい間油畫や、俳畫、漫畫を描いて世に知られてゐたのだ。日本畫家となつたはむしろ近年のことで、再興美術院第四回に「澤國五景」を出したのが新らしき評判となり、「陶土之丘」や、「樹下石人語」も特殊の味ひあるものだが、概して低徊趣味的作風なので、これを以て本道を行く藝術とは見られない。

富田溪仙氏

富田溪仙は、美術院の京都探題と云はれてるほどで、同地に於ける院唯一の同人だ。溪は、もと都路華香に學び、その一種異つた皮肉な味ひを體得せしもの、文展にも二三度出品して好成績を收め、再興美術院には毎回力作を出してゐる。「宇治川の卷」「風神雷神」等は殊に優れ最近の「嵯峨八景」また力作であつたが、惜むらくは、鐵齋の影響を受けたり、兎かく不純の分子が多い。

北野恒富氏

北野恒富は、溪仙の京都に於けるが如く、大阪に於ける唯一の美術院同人だ。溪は、大阪に於て隨一の美人畫家であり、同時にまた同地方の美術界に最も功績ある人、曾て文展に出品した「日照雨」「暖か」の、世に好評ありしは人の知るところ、院展第一回の「願の糸」も佳作であつたが、如何いふものか最近の作は一向に振はず、今や同人として鼎の輕重を問はれて居る。

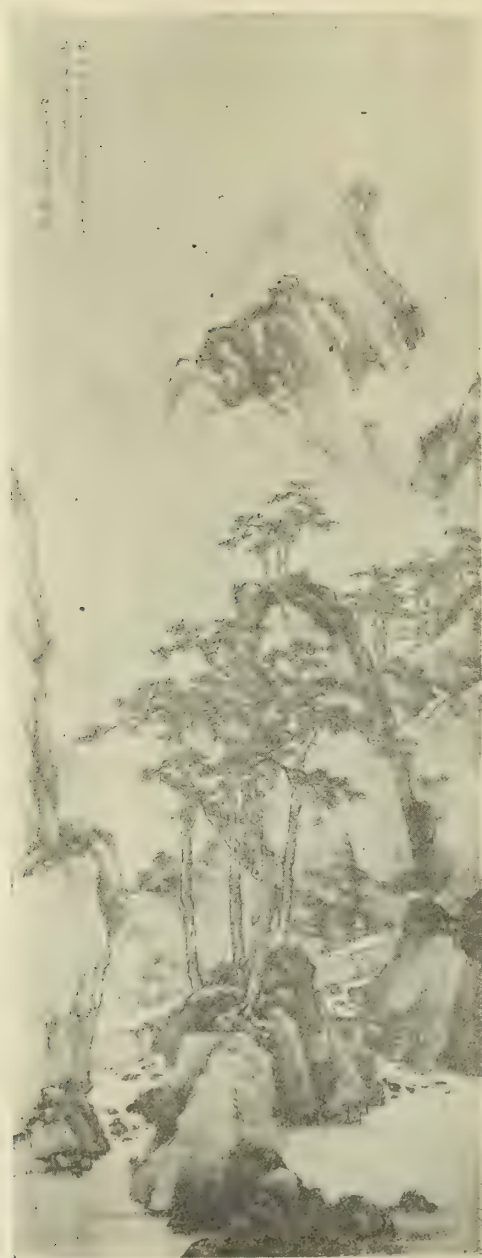
五、中堅の諸家（下）

推薦同人に匹敵せる人々

帝國美術院の推薦でもなく、日本美術院の同人でもなく、しかもこれと匹敵するほどの閱歷、名望をもつて前途不明な作家、山田介堂、池田桂仙、水田竹圃、尾竹竹坡、同國觀、野田九浦、町田曲江等あることさきに述べた通りだ。この人たちは、概して將來に進むべき人であらうか、退くべき人であらうか。

山田介堂氏

山田介堂は、田近竹邨と同じく初め南畫の骨法を田能村直入に學び、研讃努力、大にその方面に造詣するところあつた。文展には、五回から八回ぐらゐまでしか出品せぬが、「蒿竿烟雨」「積翠塔影」「清溪漁隱」等みな佳作であつた、近來筆致益々潤澤を加へつゝあるやうだが、内容の向上は果して認められやうか。

松林高士　池田桂仙

繪踏　尾竹國觀

池田桂仙氏　池田桂仙は伊勢の人、父雲樵に南畫を學び、後ち京都府立畫學校を卒業し、文展には第一回から絶えず出品して居る。

水田竹圃氏　水田竹圃は、大阪の南畫家で、現南畫壇全體の上より見るも錚々たる作家だ。而かも、渠年齒なほ少壯意氣常に他畫派の人々を壓する概がある。文展には、數回出品したが、過去のものでは、「太華山實景」や、「早春」が評判である。

尾竹竹坡氏　尾竹竹坡は、現代の日本畫家中最も浮沈の甚だしかつた人である。渠が文展に「おとづれ」を出し、

「水」を出し、「棟木」を出した頃の人氣といふものは、まことに斯界の驚異とも思はれる程に最も渠の名が喧傳されたのである。然るに、それは束の間で、二年經ち、三年經つに從つて名聲は漸く地に落ち、「豪華」以後、「ゆたかなる國土」等に至つて下火となれる人氣は、去年の「健雷神」などに及んで全く忘れ去らるるに至つたのである。勿論、竹坡の技能の荒んだ結果ででもあらうが、併し渠の意氣はなほ旺んであり、過去の功績なかなか沒し難きにさりとては餘りの健忘性だとも思はれぬでない。竹坡は、元來人物を小堀鞆音に、山水を川端玉章に、花鳥を

梶田半古に學んだ人で根柢決して淺しとは云はれぬ。

尾竹國觀氏

尾竹國觀は、竹坡の弟だ。高橋太華、小堀鞆音に師事し、十五歳の時富山博覽會で褒狀を得たのが始まり、天才畫家として世に知られ、文展に「油斷」を出すに至つて一世稀覯の名手と稱された。併し、この人もまた束の間の勢ひで、それから「人眞似」「勝鬨」「血路」あたりまでは相當の人氣があつたが、最近ではまたグッと勢ひを失つて、老いたるの感が多くある。年輩は、まだやつと四十歳で、有爲の材なのだが、惜しい哉識見が乏しい。

野田九浦氏

野田九浦の名も、日本畫壇に傳はること久しい。渠は近世畫壇の傑材寺崎廣業門下第一の秀才にして、夙に畫名を擧げ、文展第一回には「辻說法」を出して、一躍二等賞を授けられたほどの鬼才である。惜むらくは、渠久しく新聞社の聘する所となりて大阪に赴き、同地に滯留すること久しきに過ぎたので、自然その地の弊風を感染し、近頃の製作には卑俗の嫌ひあるものが多い。二三年前「妙見詣」を文展に出品じて特選に擧げられても、世評は餘り芳しくなかつた。渠は、今や生れ故鄕の東京根岸に歸住し、山内多門、飛田周山等の親友と如水會を結んで活躍を期して居るが、希くは大に自ら發奮するところあつて欲しい。

町田曲江氏

町田曲江も、九浦とおなじく廣業門の秀才である。少時、菊池契月と共に、

悲報に接したる佛徒の慨き　町田曲江

京都に出たのが繪畫修業の始まりで、廣業門に移つてからも、常に新鋭の氣を負ひ、研究にも眞面目で大に前途の望を矚されたものだ。「悲報に接したる佛徒の慨き」や「三大門」などはその代表的秀作として文展に新傾向を與へたほどである。だが、如何したものか、近年は意氣振はず、文展成績などもその聲望に似合はず芳しくない。大に砥勵し直すところなくては叶ふまい。

時勢の圏外に立つ諸家

昔は可なりに畫名も擧げ、社會的地位も相當にある人で、その割合ひに中心圏へ出た事なく、將來もそこに出さうのない人々がある。これらは技倆も、識見も大にありながら、何處か時勢に合はぬところがあるのだらう。或は既に、その人の時代が過ぎたのであらう。さういふ群の中に、村田丹陵、尾形月耕、山田敬中、津端道彦、佐竹永陵、大橋翠石、島崎柳塢、

福井江亭、高取稚成、畑仙齡、狩野探令等の人々を數へて置かう。なほ、この他にも幾多の同型の人ある可く、殊に京都大阪に同様の人あらうと思ふが、しばらく前記の人々を以て代表的に見て置かう。

村田丹陵氏

右のうち、村田丹陵のごときは、まだ五十歳ぐらゐであるが全盛期はむしろ二十年ほども前にあつたと言へやう。渠は、始め吉澤利喜、川邊御楯に師事したので、明治の中葉ごろ内外の博覽會にいつも優賞を授けられ、日本青年繪畫協會の創立に參劃もした。この當時の渠の聲望は、義兄たる寺崎廣業などを壓した程で、今日までその通りであつたら正しく元勳中の元勳であつたらう。

尾形月耕氏

尾形月耕は、安政六年江戸に生れたばり／＼の江戸ッ子だけに、作風も江戸式である。卽ち浮世繪の作者として、明治の初期から中葉まで渠の名はあまねく世人の知るところであつた。博覽會や、展覽會にも優賞を得たこと數十回に及ぶといふ。殊に、浮世繪の肉筆を展覽會に出品して他流派のものと同じく鑑賞せしめるようにしたのは、渠や、故水野年方、富岡永洗などの力によるものだ。

山田敬中氏

山田敬中は、明治元年の生れ、初め川端玉章に學び、その高弟となつた。日本美術協會、その他内外博覽會等にて優賞を受けたこと數十回、文展にも殆んど毎回出品してその健

氣な努力を壯とされて居る。渠もまた、丹陵や、廣業と共に一時天下に霸を稱せんとしたことあるが

大宮人　村田丹陵

廣業ひとり所志を完うした形となり、敬中は割りに振はずして老境に入つて居る。

津端道彦氏

津端道彦も、敬中と同年だ。渠は、福島柳圃、山名貫義、片山貫道等に師事

して、主に土佐派を學んだ。渠の名も明治三十年代から著しく擧り、四十年ごろは絶頂に達してゐた。文展へも屢々出品し、「勿來關」を始めとし、第六回の「火牛」は實に二等賞の榮冠を授けられたのである。なかなかしッかりした技倆を有つ人だが、憾むらくは今一段の内省的努力が足りない。

佐竹永陵氏

佐竹永陵は、明治五年東京に生れた。初め佐竹永湖に學んでその畫才を知ら

れ、望まれて永湖の養子となつた。二十七年以來諸博覽會展覽會等に出品して受賞すること數十回、日本美術協會、日本畫會、南宗畫會等の審査員又は幹事となり、名望のある人だ。併し時勢は、渠の穩健な作風に頓着なく進んだ傾向がある。

大橋翠石氏　大橋翠石は慶應元年美濃國に生れた。南宗畫の名流渡邊小華に學び、動物畫を得意とし、特に虎を描けば匹敵無しと稱される。その畫名夙に高く、內外の博覽會、共進會等に優賞を受けたこと多いが、遂に中央畫壇の人物ではない。

島崎柳塢氏　島崎柳塢は、明治元年東京に生れた。松本楓湖や、川端玉章に學び、夙くより英才の譽あり、三十二年には同門の友福井江亭や、結城素明、平福百穗などと無聲會を起し、又日本美術協會、日本畫會等の委員ともなり、玉章門出身の先輩である。文展に出品した「西鶴のおなつ」「おないどし」を始め、一種の浮世繪風に才筆捨てがたきものあれど、畫壇の本流に合體しないのは惜しい。

福井江亭氏　福井江亭は、慶應元年江戶に生れた。川端玉章に學んで、その高弟であり、明治三十二年には、柳塢、素明等と無聲會を起し、一勢力を成した。また久しく東京美術學校教授として、その名を高め、內外の博覽會に出品受賞したこと尠くない。最近は支那に漫遊したりして來た

が。時代との交渉は漸く薄れかけて居る。

高取稚成氏　高取稚成は、土佐派の人、日本美術協會の委員として同會の系統に聲望あり文展へも出品數回、「藤房卿の草子」「四家文體」等三等賞を授けられたこともある。人物も溫厚誠實、識見また乏しからぬ人だが、新代の意氣を把持する人とは思はれぬ。

畑仙齡氏　畑仙齡は、慶應元年京都に生れた。鈴木百年に就て學修した人、今尾景年と同學の友だ。後、上京して日本美術協會、日本畫會等の役員となり、その製作は各方面にて珍重せられ、展覽會等で屢々重賞を受けた。

狩野探令氏　狩野探令は、安政四年羽前に生れた。狩野探美に學び、諸所の展覽會に受賞すること三十餘回。日本美術協會委員、日本畫會幹事である。始めの姓は荒木であつたが、後許されて師家狩野の姓を冐すに至つた。以てその手腕力量を察すべきだ。

新進の作家と舊來の作家　以上に列擧したやうな人々を、現日本畫壇で、大家とでも稱すべき人とし、爾餘の人々は新進か、然らざれば舊來の作家である。その主なる顏觸れを拾つて見ると、伊東紅雲、伊藤嚮浦、伊藤小坡、一之瀨孤螢、磯田長秋、入江波光、井口華舟、今中素友、石井林響、石崎光瑤、服部春陽、八田高容、秦金石、濱谷白雨、橋本永邦、橋本靜水、速水御舟、西村五雲、西村青

歸、西澤笛畝、星野空外、戸室臨泉、徳田隣齋、大智勝觀、大坪正義、小茂田青樹、尾形月山、岡田雪窓、織田觀潮、小野竹橋、渡邊來渚、加藤英舟、河合英忠、川端龍子、川崎小虎、堅山南風、勝田蕉琴、鴨下晁湖、吉田秋光、田畑秋濤、高倉觀崖、玉舍春輝、玉村方久斗、田南岳璋、田村豪湖、中倉玉翠、長野草風、蔦谷龍岬、南保秋淵、村岡應東、村上鳳湖、村上華岳、上田萬秋、植中直齋、內海吉堂、栗原玉葉、矢野橋村、山田耕雲、山村耕花、中村岳陵、中村大三郎、牛田鷄村、野長瀨晩花、山下竹齋、山下馬山、山元春汀、保間素堂、矢澤弦月、松村梅叟、槇戸觀海、益田玉城、案本一洋、福田浩湖、筆谷等觀、小泉勝爾、小山榮達、五島耕畝、赤松雲嶺、阿部春峰、佐野一星、佐々木尙文、菊池華秋、三井萬里、三浦廣洋、水上泰生、芝景川、庄田鶴友、島田墨仙、島內松南、廣瀨東畝、廣島晃甫、平井楳仙、平田松堂、疋田芳沼、森村宜稻、菅楯彦、猪飼嘯谷、石山太柏、井澤蘇水、本方秀麟、岡田蘇水、大島佳山、狄生天泉、眞道黎明等がある。

これらの顔觸れは、勿論みなごつた混ぜであり、東京の人もあれば、京都、大阪、名古屋その他の地方の人もあり、帝展派、舊文展派、院展、國畫創作協會、自由畫壇無所屬等いろいろに分れてゐる。そして、これらの人々が先づ第一流の大家に次ぐの作家なのだ。

古い感じ、新らしい感じ

前記の人々の中でも、比較的に古い感じのする人と、比較的に新らしい

感じのする人とがある。古い感じの勝つた人をザッと擧げて見るなら、伊藤響浦、伊藤小坡、一之瀨孤螢、井口華舟、八田高容、秦金石、西村五雲、星野空外、戸室臨泉、徳田隣齋、大坪正義、尾形月山、岡田雪窓、渡邊來渚、加藤英舟、河合英忠、田畑秋濤、高倉觀崖、玉舍春輝、田南岳璋、田村豪湖、中倉玉翠、南保秋淵、村岡應東、村上鳳湖、上田萬秋、植中直齋、內海吉堂、山田耕雲、仏間素堂、松村梅叟、槇戸覩海、益田玉城、小山榮達、五島耕畝、赤松雲嶺、阿部春峰、佐野一星、三浦風洋、芝景川、庄田鶴友、島田墨仙、島內松南、廣瀨東畝、疋田芳沼、森村宜稻、猪飼嘯谷、岡田蘇水などほぼこれに當るであらう。

これに對し、比較的新らしい感じの勝つた人としては、磯田長秋、石崎光瑤、石井林響、速水御舟、小茂田青樹、小野竹橋、川端龍子、玉村方久斗、長野草風、蔦谷龍岬、村上華岳、吉田秋光、中村岳陵、中村大三郎、野長瀨晚花、山下馬山、矢澤弦月、佐々木尚文、廣島晃甫、石山太柏、井澤蘇水、眞道黎明などの面々を擧ぐべきであらう。そして、長秋以下これらの人物は、大抵三十歳前後活氣横溢の連中である。

かういふ風に一大別して見ると、古い感じを起させる側の人々は、その前途が既に漸く行きづまれる觀あり、人物も漸く老境に入らんとしてゐるやうに見える。一方新らしい感じの側の人々は、年輩

も大抵三十歳前後で、中には二十歳そこ〳〵の人もあり、それでゐて前途に光明のかゞやいてるやうな觀のある人たちだ。いでやこの若く望み多き人々について一寸評を試みよう。

若き、前途多き面々

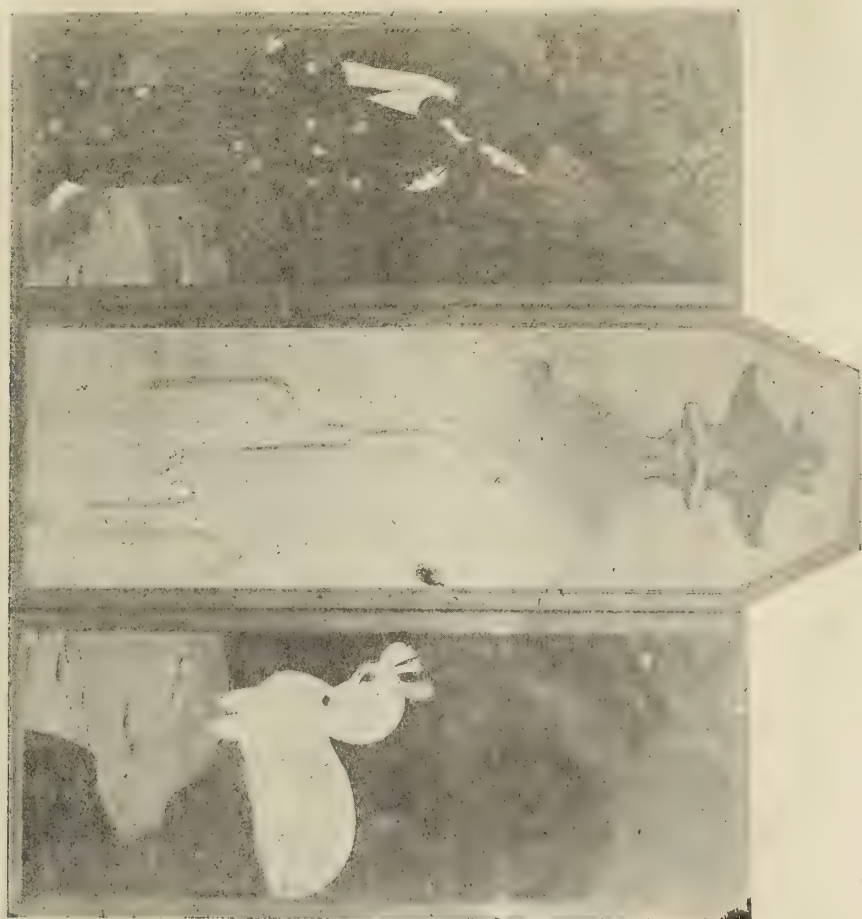
前記の若き、有望な人々のうち、御舟、龍子、方久斗、草風、岳陵の五人は日本美術院の同人で、青樹と黎明とは、その院友である。また波光、竹橋、華岳、晩花の四人は國畫創作協會の會員、馬山はその出品者である。そして殘りの長秋、光瑤、林響、龍岬、秋光、大三郎、弦月、尙文、晃甫、太柏、蘇水などの面々が帝國美術院の新進作家なのだ。

このうちにても、特に有望と目されるのは、御舟、龍子、竹橋、華岳、光瑤、龍岬、弦月、晃甫、蘇水などであらうか。

速水御舟氏

速水御舟は、榮一と云ひ、明治二十七年の生れ、始め松本楓湖に就き、大正四年故今村紫紅等と赤曜會を起し、これに出品するや美術院の製作と相俟つて特技を知られた。就中、「洛外六題洛北修學院村」等渠の代表作と見る可く、爾來渠の才能はます〳〵立優つて見える。

川端龍子氏

川端龍子は、明治十八年生れだから三十を越して幾年かになる。併し、渠は最初は白馬會や、太平洋畫會仕込みの洋畫家で、この五六年來急に日本畫に向つたので、院展出品の「靈泉由來」「神戰の卷」「土」等がその代表作として知られる。洋畫家の尖銳（せんえい）な感覺を日本繪具で描く。

靈泉山水　　川端龍子

聖者の死　村上華岳

小野竹橋氏　小野竹橋は二十二年の生れ十六歳の時京都に出で栖鳳の門生となり、後、京都繪畫專門學校をも卒業した。「島二作」を初め、國畫創作協會出品の「夏の五箇山」「風景」等の代表的製作がある。

村上華岳氏　村上華岳は、竹橋と同年に大阪で生れた。初め京都美術工藝に入學し、次いで繪畫專門學校に入りこれを卒業した。曾て文展に出品せる「阿彌陀」は、今なほ名聲籍甚し、國展の「聖者の死」（未完成）「日高川」また異色あるものだ。

石崎光瑤氏　石崎光瑤は、竹內栖鳳門下の逸材で西山翠峰あたりに次ぐ人である。文展の最終に「熱國妍春」を出して、特選の榮位を占めたのが始まりで、「燦雨」はます／＼その特色を發揮したも

のと言へよう。

蔦谷龍岬氏　蔦谷龍岬は、四十三年東京美術學校を卒業し、また故寺崎廣業に師事した。文展の最終に「御堂の朝」を出して特選となり、帝展出品の「山蔭の夕」も惡い作ではない。ただ、思ひ切つて自らの習套を脱却することが必要であらう。

矢澤弦月氏　矢澤弦月は、龍岬と同時に美術學校を出、また廣業に師事したのも同じ事である。これまでも極めて有望な新進作家と認められて居たが帝展の「朝陽」が特選となつたので、渠の名は更に一層喧傳さるゝに至つた。

廣島晃甫氏　廣島晃甫の名は、從來殆んど世に知られなかつたが、帝展に突如「青衣の女」「秋の野の宮」の二點を出品し、而かも「青衣の女」は特選にまで擧げられたので一躍その名を知らるるに至つた。併し、渠は、四十四年かに美術學校を卒業し、夙くから天才的機鋒のあること、その友人間に知られて居たのである。

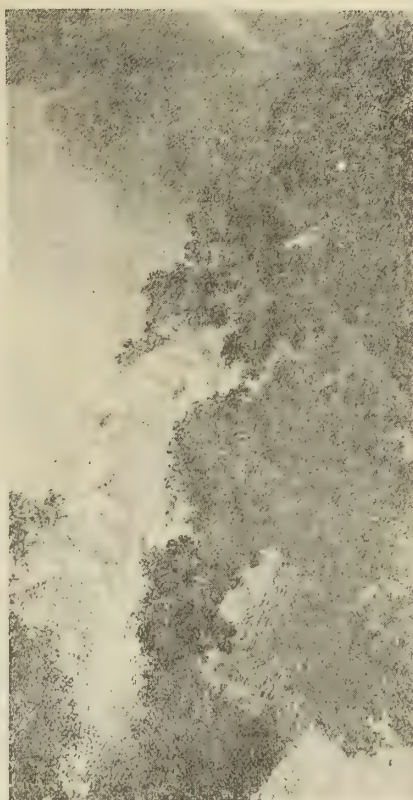
井澤蘇水氏　井澤蘇水に至つては、川合玉堂門下の逸材として、山内多門や池田輝方等と並稱される程であり、その畫才極めて豐かな人である。これまであまり社會的に好遇されなかつたが帝展出品の「大和路の宗祇」によつて俄然その名聲を馳するに至つた。

第二編　日本畫壇の諸團體

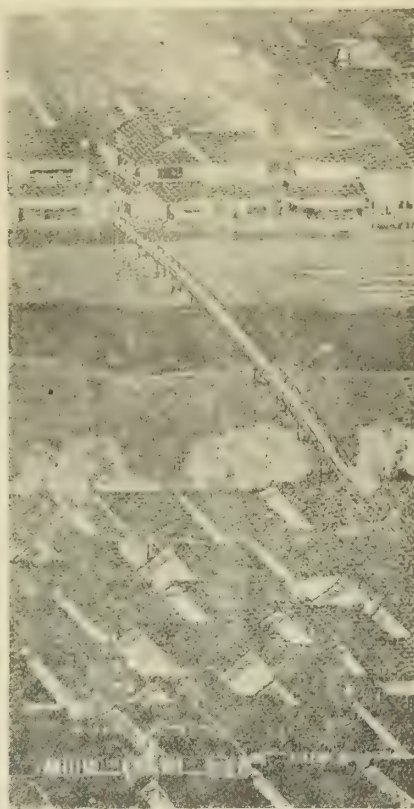
一、代表的の四大團體

〔畫壇の團體的分野〕現代の日本畫壇が、種々な團體によりて分立し、多くの大家や、將來有望な作家が大抵それらのいづれかに所屬してゐることは、既に說いた如くである。その主なる團體と云へば國家の藝術奬勵機關たる帝國美術院は勿論、日本美術院、國畫創作協會、日本美術協會などである。その他にも、金鈴社とか、如水會とか、池畔倶樂部とか、早苗會とか、種々なる團體の存することは既に記した通りだが、而かもこれを大觀して見ると、殆んど大部分が前記の四大團體中に含まれることゝなる。美術學校や、各大家の塾中なども、それを中心にして展覽會をやつたにしたところで、終には、いつか右の大きな結社中に落ち合ふこととなるのだ。それ故、現存の代表的團體としては、以上の四つの大展覽會を擧げ、これを論評すれば、現日本畫壇の大勢は一見明白になるわけなのである。

〔四大團體の由來〕もつとも、この四大團體と云つても、もとをただせば皆その流れを一にするのが當然であるが、永い間の歷史が終に斯ういふ潮流を作成せしめたので、この四團體丈けは確かに

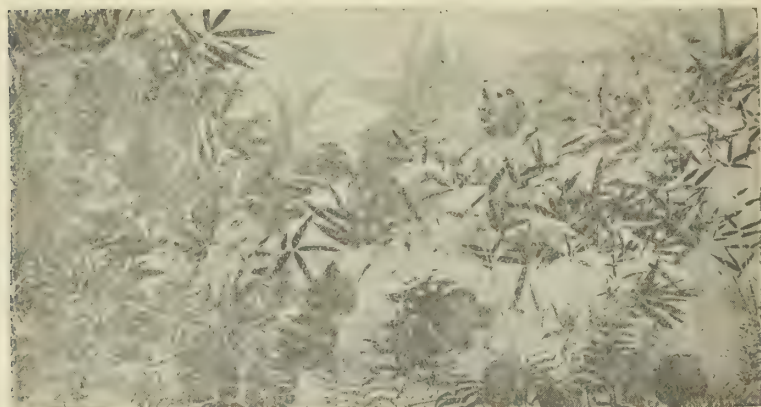
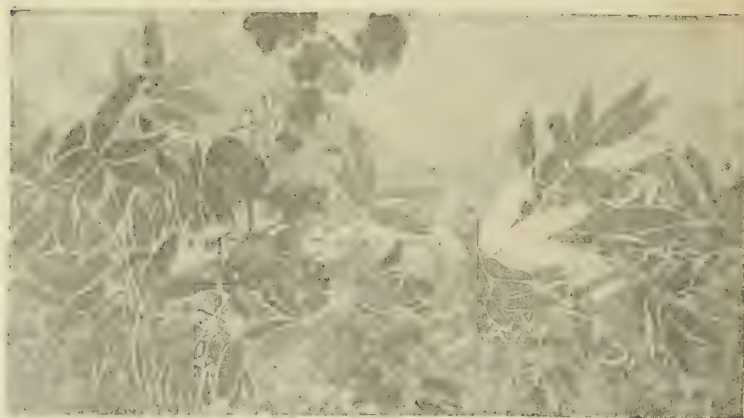
現日本畫壇を代表するものと云ふべく、これらの團體に所屬せぬものでも、何等かの關係が、この四つのいづれかにあると云つてよろしからう。況して、帝國美術院は、國立のものであるから、これには何人も關係を有し得るわけであり、最も完全な代表的團體（團體と云ふも可笑いが）と言へよう。それから、日本美術院は、民營のもので、最初改革派の頭領岡倉覺三に依つて作られたものであり、今では横山大觀等の中心となれる團體だが、日本畫新派の代表的機關と稱され、國畫創作協會は、京都の若手で同じく革新派たる土田麥僊等一派に依つて成る丈けこれまた新派の代表的團體だ。ただ一つ、舊派の牙城を以て、純粹日本畫奬勵といふことを信條にしてゐるのは、日本美術協會である。これは、歷史も古く、社會的勢力もなかなかあるのだが、惜しい哉。今では時流に後れてゐる。併し、兎に角、この四つの機關があつて、年々それぞれの展覧會を開いて

夏三題の一 平井楳仙

ゐるのは、たしかに日本畫壇の代表的偉觀である。

帝國美術院　四大團體のうちでも、殊に、國家的で、代表的なのは先きの文部省美術展覽會、今の帝國美術院であること云ふまでもない。そもそも、文展が始めて創立されたのは、明治四十年で、時の文部大臣は牧野伸顯であり、肝煎りは岡倉覺三、九鬼隆一、正木直彦などであるといふ。爾來、官設展覽會なる名の下に、毎年一回展覽會を開催して、丁度大正七年が十二年目に當つた。十三回目の大正八年に至つて、政府當局も、各方面からの改革意見に促され、新たに帝國美術院といふものを作つて、これを文展の繼續とせしむるに至つたのだが、而かもその歷史や、系統に變りなく、ただ名稱の變化したのと。內容に進步があつたのみと言へよう。

夏三題の二　平井楳仙

日本美術院

帝國美術院が、官設のものであり、國家的代表機關であるのに對して、美術界にもつとも清新な氣を送る民設の代表的機關は、云ふまでもなく日本美術院だ。そもそも、日本美術院は、明治三十一年故岡倉覺三等によつて創設されたものであり、創立當時から素晴らしい、意氣込みであつた。併し四五年間展覽會を開いたり（日本繪畫協會の名でやつたもの）研究機關を設けたりしてゐる中に、形勢の變化があり、明治三十九年には常陸土浦に研究所の移轉となるやらした。その中、岡倉が歿したりしたので第一次の日本美術院は大正二年一先づ解散した。今の美術院は、大正三年、横山大觀、下村觀山等が中心となつて、第一次美術院を再興したものである。爾來、展覽會の名も繪畫協會のそれでするのではなく、堂々と日本美術院展覽會と呼號するに至つた。もとより、この美術院復興は大觀が多年審査員たりし文部省展覽會から逐はるるに至つたのが直接の一動機となつたのだから堪らない、院展は、宛ら文展に對して敵國となれる觀あり、常に彼と拮抗するの態度を示すこととなつた。茲に於て、文展の官僚的なるに對し、院展はますます民主的傾向を露骨にし、彼が寬容網羅主義を執るに對し、これは嚴重な精選主義を執つて出品作品の鑑判をなすといふ風である。そして、文展第九回から第十二回まで、院展の復興第一回から第四回までは、かういふ風に兩者相反目して來たのであるが、最近文展が院展と改まつては、歴史的に反對があつても、内容が大分近づいて來たのと評である。而

秋の色　平田松堂

かも、その歴史と地位とは依然合同し難き立場にあるであらう。

國畫創作協會　國畫創作協會は、四大團體の一に加へるには、餘りに歴史も貧弱であり、内容も微少である。併しながら、帝國美術院、日本美術院乃至日本美術協會の以外に、確實に存在して小さいながらに、それ等と何の關係なく、新機運に適した同人一同と共に青年作家の作品を引き

擧げて行かうとする努力は認めてやらねばならぬ。而かも、その歴史を語れば、大正七年一月、文展の施設に慊焉たる京都青年作家の一團、土田麥僊以下五名が中心となつてこれを創設し、同年十一月第一回、八年十一月第二回と二度展覽會を東西兩都に開いたと云ふ迄なのである。從つて、社會的地位もまだ十分に認められぬが、將來は、必ずしも輕侮しがたきものあるべく、猶且日本畫壇の一角に、一波瀾を捲起すやも知れない。

日本美術協會　若し夫れ日本美術協會に至つては、その歴史もつとも古く、明治十二年三月伯爵佐野常民等有志によつて創設された龍池會の後身なのである。そして、美術に趣味を有する上流社會一般の同情するところとなつて、大にその基礎を確實にし、年々必ず展覽會を開いて斯界に貢獻するところあつた。その主なる經營指導者としては、佐野伯の外、故土方久元伯、今の金子堅太郎、下條桂谷などいふ人々があり、總裁としては皇族殿下を奉戴してゐる。今日では、第一部(繪畫、書)の外に、第二部(彫塑)第三部(建築、室內裝飾)等の各部あるが、いづれも概して保守的、漸進的な藝術を奬勵する風あり、日本畫のごとき殊にその弊に陷つてゐる。日本畫の展覽會は、毎年春期に行はれるが、近ごろでは、青年有望の作家の出品殆んど跡を絕ち、老大家連の餘喘をつなぐ場所のごとく思はれてゐる。これ四團體中、もつとも古き歷史と傳統とをもちながら、到底他に拮抗し得ざる所以

であつて、實質に於ては、弱小な國畫創作協會にも及ばぬであらう。

二、文展帝展の產める人物と作品

第一、二回文展　ひるがへつて現存の團體が、過去に於て產出した人物なり作品なりを見れば、その歷史が具體的に分ることゝもなり、現在及將來に於けるその位地もほぼ明かになるであらう。先づ第一に、帝展(即ち從來の文展)を見るに、文展では明治四十年の第一回には、代表的作品として木島櫻谷の「しぐれ」、野田九浦の「辻說法」、菱田春草の「賢首菩薩」、安田靫彥の「豐公」等を見、下村觀山の「木の間の秋」、川合玉堂の「片時雨」、竹內栖鳳の「雨霽」も注目すべき作品であつた。第二回には、大觀、觀山初め美術院系の作家が國畫玉成會に立て籠つて出品しなかつたので、それが原因ともなり、菊池契月の「名士弔喪」竹內栖鳳の「飼はれたる猿と兎」などを見るべきものに數ふる外ない。

第三、四回文展　第三回は、四十二年に玉成會の作家をも網羅し、賑やかなことであつた。寺崎廣業の「谿四題」は中にも文展史上不朽の名を止めしものと云ふべく、風景描寫上に日本畫の新樣式を開いた。栖鳳の「あれ夕立に」橫山大觀の「流燈」山元春擧の「鹽原」も佳作であつた。更に、菱田春草の「落葉」は一般出品中隨一の名作たるは云ふまでもなく、自然の眞趣を描き出して餘蘊なきもので

物詣で　池田蕉園

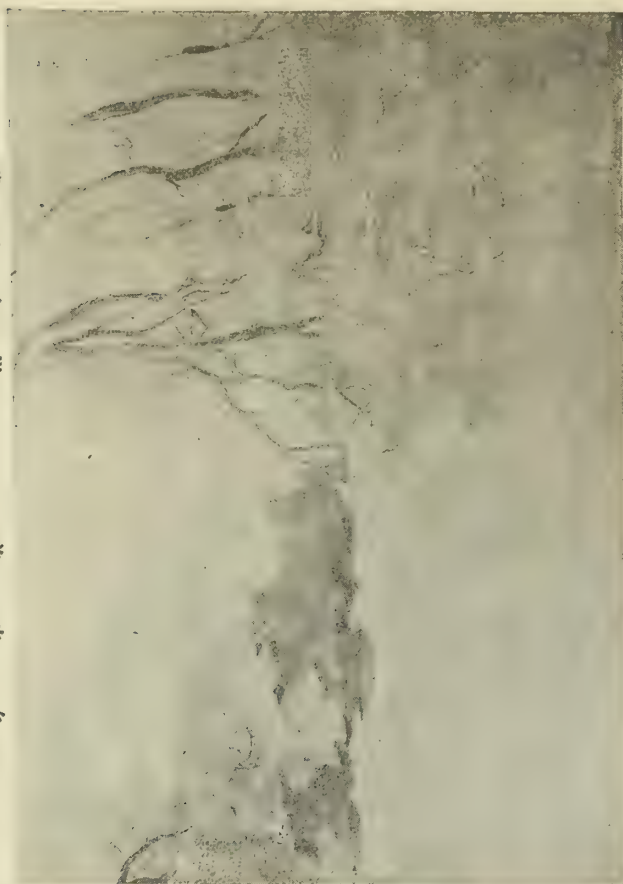
あつた。尾竹國觀の「油斷」菊池芳文の「織月」榊原蕉園（後の池田）等も注目すべき作品でかつた。

第四回もまたかなりに賑つた。觀山の「魔障圖」、廣業の「夏の一日」大觀の「楚水の卷」、春擧の「寂

家」玉堂の「炊烟」春草の「黒き猫」等は審査員出品中の秀作であり、「夏の一日」及び「黒き猫」ことに著名だ。一般出品中では、尾竹竹坡の「棟木」「おとづれ」、鏑木清方の「女歌舞伎」、木島櫻谷の「かりくら」菊池契月の「供燈」池田蕉園の「秋のしらべ、冬のまどゐ」小室翠雲の「山海圖」を擧ぐべきであらう。

夕立　筆　川合玉堂

第五回文展

第五回は、割合に振はず、大觀の「山路」は中にもつとも注目すべき作と云はれ、新味溢れたものであつた。玉堂の「細雨」もまた傑れた出來榮えで、清楚渾厚の趣きを豊かに表現した。川端玉

章の「雨後山水」は渠が老來の力作であつた。新進作家中では、尾竹竹坡「秋草」「梧桐」「水」の三點を出し、「水」もつともすぐれたものであつた。山内多門の「日光山の四季」、結城素明の「囀」、鏑木清方の「驛路の女」なども兎にかく見るべきものであつた。更に新らしき顔觸れでは、今村紫紅、前田青邨、平井楳仙、橋本關雪、北野恒富等あり、紫紅の「護花鈴」青邨の「竹取」楳仙の「赤土山」、恒富の「日照雨」など世に著はれた。

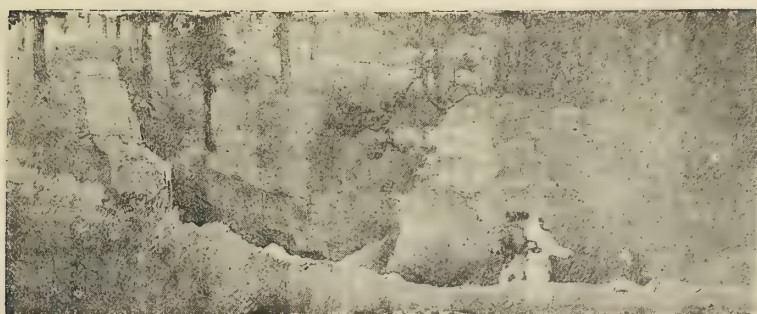
第六回文展

第六回（大正元年）に至つて、日本畫は、新派と舊派との葛藤漸く露骨になり來れる結果、一科二科の二つに區分せられた。即ち、一科は舊來の日本畫を代表するもので、二科は新らしき時代傾向を示す邦畫である。一科に屬する作品中注目すべきものとしては、佐久間鐵園の「茂松清泉圖」高島北海の「積翠」山岡米華の「水墨夏景山水」及び、小坂芝田の「秋爽」、津端道彦の「火牛」、池上秀畝の「梢の秋」、田中頼璋の「水郁の春」松林桂月の「寒汀」、小室翠雲の「四時佳興」等がある。いづれも併し、何等新味の掬すべきものゝなかつたのは、止むを得ないところであらう。一方二科の方では、大觀、廣業の二大家が揃ひも揃つて「瀟湘八景」を出し、廣業は古畫の傳統の上よりこの大作を完成し、大觀は新らしき八景を恣に描き盡した。その他、春擧の「嵐峽」、玉堂の「潮」等も見るべきものであつたが、今村紫紅の「近江八景圖」は中にも壓卷の觀があつた。新らしき日本畫の行方

がこゝに暗示されたのは記憶すべき事だ。安田靫彦の「夢殿」が、傑作として推稱すべく、技巧また細

溪山遊猿圖

山元春擧

大原御幸　下村觀山

緻巧麗なものであつた。菊池契月の「茄子」もそれらに次ぎ、前田青邨の「御輿振」は、「竹取」よりも一歩を進めた力作、山内多門の「郡上十二景」結城素明の「甲ふたる馬」西山翠嶂の「青田」小林古徑の「極樂の井」都路華香の「豐兆」、土田麥僊の「島の女」、平井楳仙の「浦づたひ」、池田蕉園の「ひともし頃」なども記憶さるべきものであらう。

第七回文展 第七回も、二科に分れたまゝで開かれ、一科側では小室翠雲の「寒林幽居」がひとり嶄然頭角を挺んでゝ筆墨の妙を示し田中頼璋の「木曾山」、田近竹邨の「乍晴乍雨」などこれに次ぐものであつた。佐竹永陵の「青山綠水」や、松林桂月の「松林仙閣」や、高取稚成の「南淵魚水」は個性の認むべきものが最も乏しきを遺憾に思はしめた。二科の方は、前年に引續き活氣橫溢で、大觀の「松並木」も可なりの作、廣業の「千紫萬紅」も一趣向あり、栖鳳の「繪になる最初」は大に世俗の賞揚するところであつた。玉堂の「夕月夜」「雜木山」二點は、渠の特色を語れるもの、木島櫻谷の「驛路の春」は、殊に秀れたものであつた。穩健な作風

は、櫻谷等に代表されたと見てもよからう。別に、菊池契月の「鐵漿蜻蛉」は、大にすぐれた特色を示し、橋本關雪の「遲日」も注目されたものである。結城素明の「相思樹下把金絲圖」や、鏑木清方の「潮干狩」や、堅山南風の「霜月頃」や、牛田鷄村の「町三趣」なども望み多きものと見られた。

第八回文展

第八回に至ると、横山大觀が俄然審査員中より除かれたので、それが直接の一動機となつて、美術院一派の反抗となり、文展の三分一の勢力はその方に持つて行かれた。そこで再び文展の制度改正され、一科二科の區別は眞先きに取り除かれた。そして、川合玉堂の「晚渡」「駒嶽」「夕立前」は大にすぐれ、廣業の「高山淸秋」また大觀去りし跡の寂寞を補つた。その他、菊池契月の「ゆふべ」、西山翠嶂の「採桑」、木島櫻谷の「ゆふべ」、上村松園の「舞したく」、鏑木淸方の「隅田川舟遊」池田輝方の「兩國」、橋本關雪の「南國」、土田麥僊の「散華」、平福百穗の「七面鳥」など、或はすぐれた作であり、或は注目すべき作品であつた。

第九回文展

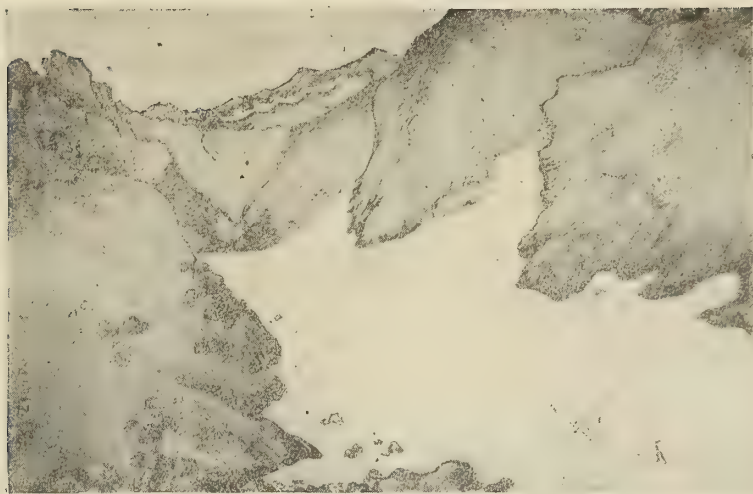
第九回には、文展と院展との對抗が益々鮮やかになつた。院展には、觀山の「弱法師」を筆頭とし、大觀の「漁樵問答」古徑の「阿彌陀堂」など代表的傑作あれば、文展にもまたこれと匹敵するものなかる可らずである。寺崎廣業の「信濃の山路」は、渴染法による廣業式大作で、その研究的態度に極めて優れたものがあつた。「夜聽歌者」また捨てがたいものであつた。而して一般出品

谿四題　寺崎廣業

中に土田麥僊の「大原女」ありしは、古徑の「阿彌陀堂」が、院展にありて新日本畫の代表的傑作でありしと好箇の對照であつた。その手法の大膽にして、寫生の小智より脱却したところ正しく獨歩の行き

方である。鏑木清方の「晴れゆく村雨」も、春信あたりにヒントを得たものらしいが、清楚の情致掬すべきものあり、渠としても第一の秀作であつた。その他町田曲江の「三大門」は、氣分をあらはすことに可なり成功し、平井楳仙の「夏」、北野恒富の「暖か」、池田輝方の「木挽町の今昔」、上村松園の「花がたみ」、橋本關雪の「獵」「峽江の六月」、木島櫻谷の「うまや」、菊池契月の「浦島」、田中賴璋の「四季の山」小室翠雲の「駒嶽秋粧」、平福百穗の「朝露」、川村曼舟の「連峰映雪」など注目すべきであらう。

第十回文展

第十回となつては、文展も既に峠を越して下り坂に向へるの觀がある。第一に注目すべきは川合玉堂の「行く春」であつたが、これは淡い感興をよく如實に描いたものである。山元春擧の「山二題」は、「谷むなし」やゝ優れ、小室翠雲の「天空海濶」大作と云ふに過ぎず、むしろ寺崎廣業の「清麗」に如かない。「清麗」も、併し技巧が主となれるものであつた。審査員外では、菊池契月の「花野」を推すべく、淡麗溫雅なもの。木島櫻谷の「港頭の夕」もかなりよかつた。が、特に力作としては、橋本關雪の「寒山拾得」あり、技と想と相俟つて稀れに見るの傑作であつた。「錬丹」も、一特長ある作であつた。その他、小野竹橋の「島二題」は、優れし出來榮えであり、洋畫の趣致を巧みに渾和した。桐谷洗鱗の「佛地憧憬の旅」、小山榮達の「北國ざむらひ」、池上秀畝の「夕月」、田中賴璋の「山月四趣」、池田蕉園の「去年の今日」、同輝方の「夕立」、上村松園の「月蝕の宵」、土田麥僊の「三人の舞妓」、

白馬山八題　　寺崎廣業

平福百穗の「田澤湖傳說」なども記憶さるべき價値をそれぞれ有つて居た。併し、特に力說すべきは、松岡映丘の「室ぎみ」の傑出せる出來榮えなことで、これは文展出品の製作を通じて、珍らしくも自由で、生趣ある力作であつた。情趣の最も暢びやかに出た作品はこれであらう。

第十一回文展　第十一回にて、審査員作中では廣業の「白馬山八題」が、その研究的態度を益々深くせしものあるを認むべく、栖鳳の「日稼ぎ」もまた努力の作、丹精の作、前者と等しき感を起させる。玉堂の「小春の夕」は、詩的な輕い味ひを示し、荒木十畝の「四季花鳥」は品のよいものであつた。一般出品では、鏑木淸方の「黑髮」がもつとも透徹せる技倆と思想の洗練されたあとを示し、平福百穗の「豫讓」に至つては特に、及び易からぬ莊重な手腕を發揮した。松岡映丘の「道成寺」は、渠と

しては平凡なるべく、田中頼璋の「挂瀑四致」、川村曼舟の「日本三景」、結城素明の「八千ぐさ」、池上秀畝の「峻嶺雨後」、池田桂仙の「武陵桃源」、飛田周山の「幽居の秋」、橋本關雪の「倪雲林」、土田麥僊の「春禽趁晴圖」、榊原紫峰の「梅雨霽れ」、山内多門の「薩南六題」などは、それぞれ見るべき價値を十分に具へたものと言へやう。

第十二回文展　第十二回は、文展の最終となつてしまつた。こゝまで來ると一般出品など漸く墮氣滿々の觀がないでもない。審査員中第一の出來榮えは、川合玉堂の「暮るゝ山家」といふことに異存あるまじく、寺崎廣業が最終の作「杜甫」を出されたのはむしろ慘ましい。栖鳳の「河口」は、あまりに即興的氣分が勝ち過ぎてゐた。新審査員菊池契月の「夕至」は、むしろ平凡な現代人を扱つたところに妙味がある。審査員外で、橋本關雪の「木蘭」はもつとも雅潤な作品といふ可く、傑出したものである。鏑木清方の「ためさるゝ日」はいよ〳〵高韻の趣致を帶びて、渾然たるものあり、上村松園の「焰」もよく作意を物語つたものだ。一般出品での秀作としては、松岡映丘の「山科のやど」を筆頭に、石崎光瑤の「熱國妍春」、蔦谷龍岬の「御堂の朝」も惡からず、しかし特に西山翠嶂の「落梅」を推稱せねばなるまい。これは、京都の近時の作風をよく物語つたもの、別に池上秀畝の「四季花鳥」は、桃山風の華麗なものであつた。山内多門の「雨三趣」、矢澤弦月の「西行」、田中頼璋の「八嶽四景」、平福百穗の

「牛」等も面白い作品であつたが、たゞ土田麥僊、榊原紫峯等去つて京都畫壇少しく寂寞の觀がないでもない。

第一回帝展　大正八年俄かに文展官制改革されて、創設以來十二回に及んだ文部省美術展覽會は廢止となり、新たに帝國美術院展覽會が開催された。併し大體は文展の繼續で、審査員の顏觸れが新らしくなつたのと、出品者に割合年少の人を見る事多くなつたのとが變化であらう。また慶ぶ可き事には、帝展には確かに文展に見られぬ精神的な、近代的な作風のものが擡頭して來たことである。さて、第一回の作品中審査員出品として推されるのは橋本關雪の「郭巨」が第一であらう。これは必ずしも大作ではないが、郭巨の妻が子を抱いて愁然たる姿態のごとき正しく日本畫の主觀的表現の妙をつくしたものだ。菊池契月の「庭の池」、結城素明の「朝霽」

朝　陽

矢澤弦月

「薄暮」はこれに次ぎ、松岡映丘の「目しひ」、小室翠雲の「春庭」「秋圃」も別趣の存するを否まれぬ。文展の舊審査員である荒木十畝が氣分本位の「黄昏」に纏まれる感じを表白したのはむしろ異數だ。その他、推薦の人々では、山内多門の「天龍四季」が克明な描寫で、可なりに現代の情趣にも適せるものあるを異とすべく、都路華香の「白鷺城」、池上秀畝の「雪の驛路」は早く既に老大家たる面目を示すのみだ。最も喜ぶ可きは、一般出品に新鋭の氣を吐けるもの丶多いことで、飛田周山の「神泉」、題名の示すごとき一種の神祕さをあらはし、矢澤弦月の「朝陽」また可なりに趣致を發揮した。石崎光瑤の「燦雨」は、ちと色彩や光線に拘束された傾きがないでもないが、やはり纏りのある佳作で、井澤蘇水の「大和路の宗祇」が大に力量を發揮しつゝ品格の缺けたのよりは一枚上かも知れぬ。最も注目すべき作品としては、無名から一躍特選となつた廣島晃甫の「青衣の女」

あり、情趣もとゝのひ、纖細な筆致に近代人らしい感覺が窺はれた。宇田荻村の「夜の一カ」、堂本印象の「深草」、福田平八郎の「雪」、本田紫夜の「春雨」、石井林響の「劉阮天台」、佐々木尙文の「春怨」、吉田秋光の「小督」、石山太柏の「上井原附近」等にもそれぞれ特徴の見るべきものがあつた。而かもこれ等の人々がいづれも新らしい感じの人々、または全く新たな作家であることは注目すべきだ。

文帝展の作品

以上のごとくにして、文展第一回から十二回まで、及び帝展一回の成績に徵して見ると、その間に起伏たゞならぬものあつたのは勿論だが、今帝國美術院成るに及んで前途はますます光明的なるを知るであらう。そこで、ザッと兩展覽會に活動した主なる顏觸れを拾つて見ると故菱田春草の「落葉」「黑き猫」、故寺崎廣業の「溪谿四題」、横山大觀の「山路」、故今村紫紅の「近江八景圖」、安田靫彥の「夢殿」、菊池契月の「供燈」「茄子」、鏑木淸方の「晴れ行く村雨」、橋本關雪の「寒山拾得」「木蘭」、松岡映丘の「室ぎみ」、平福百穗の「豫讓」、土田麥僊の「大原女」などを最とし、竹內栖鳳、川合玉堂、木島櫻谷、下村觀山、山元春擧等審査員級の功業最も多き人々であらねばならぬ。其他、比較的新人として未來に望を矚さるゝもの、西山翠嶂、山內多門、飛田周山、矢澤弦月、石崎光瑤、蔦谷龍岬、廣島晃甫等なほ幾多の人々を數ふることが出來るであらう。文展(帝展)の效果また大なりと云ふべきだ。

三、日本美術院の產める作家作品

前期美術院

日本美術院の最初の展覽會卽ち日本繪畫協會展覽會に於ては、岡倉天心が中心となつて、橋本雅邦を始め、松本楓湖、尾形月耕、寺崎廣業、西鄕孤月、橫山大觀、小堀鞆音、菱田春草、山田敬中、下村觀山の面々が大に活動し、明治三十一年の展覽會には、大觀の「屈原」、觀山の「闍維」、廣業の「後赤壁」などが出品され、翌年は觀山の「日蓮聖人」、廣業の「秋園」、竹內栖鳳の「十二ヶ月」、梶田半古の「闘雞」などが出、廣業の「月光燈影」、春草の「王昭君」、川合玉堂の「夕ばえ」などいふ名作も前期美術院を彩つたものである。倂し、前期美術院は、明治三十九年頃から殆んど勢威を失ひ、他面、新たに文展が起つたので、大正三年の再興美術院以後が現代に直接の關係を有つわけである。それ故、そこでは、主として再興美術院のことを說くことにしよう。

第一回院展

日本美術院の再興は、橫山大觀が文展審査員たる地位を排斥されたことによつて俄かにその勢ひを生じ、大觀と觀山と相合して終に文展に對抗するの團結を得たわけなのである。斯くて、大正三年十月十五日再興第一回の展覽會を開いたが、この會に出陳された安田靫彥の「御產の禱」は、稀有の傑作として、ひとり院展の誇りであるのみならず、文展側にもその比を見ぬ有

遊刄有餘地　横山大觀

様であつた。この一作のみでも院展の價値は十分と見られた程なのに、大觀は行き懸り上最も碎心して努力の作「游刄有餘地」を出し、觀山また「白狐」に及び易からぬ技巧の冴えを示した。別に、小林古

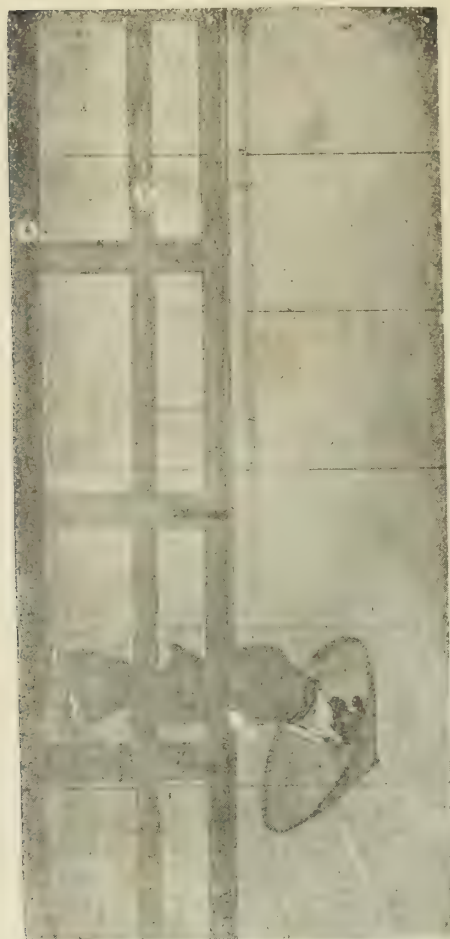
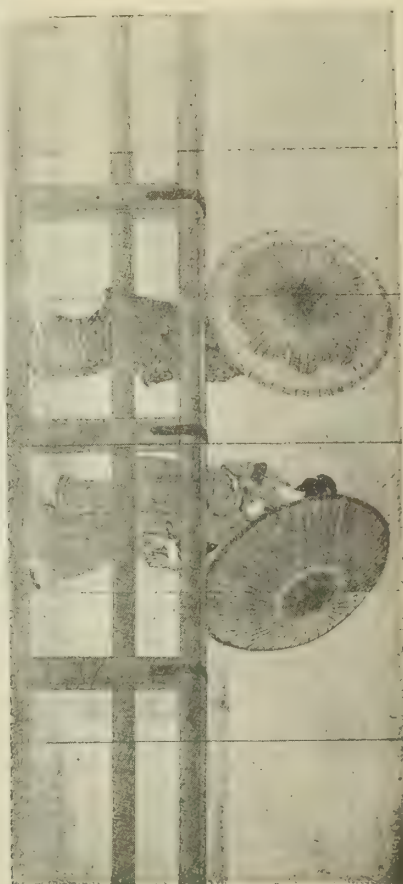
熱國の巻一　今村紫紅

熱國の巻二　今村紫紅

徑の「異端」は、これによつて古徑の名をあまねく天下に知らしめた程であり、今村紫紅の「熱國の巻」、前田青邨の「竹取物語」も共にすぐれたものとして、大に世の期待を滿足せしめた。

第二回院展 次いて、四年の第二回には、相變らず緊張した出來榮えを示し、就中下村觀山の「弱法師」が壓巻たるの觀あつた。これは、材を謠曲の弱法師に採れるもので、古淡の味ひあり、澁く、落著ける畫品のうちに技巧の妙味掬めども盡きずとの世評を得た。蓋し、觀山一代の傑作であらう。別に、小林古徑の「阿彌陀堂」も極めて內面的な描き方で、深く情景の眞に迫れる慨あり、今村紫紅の「入る日」「出る月」は清新の表現、眞摯の描法、前人の試みざる力作であつた。前田青邨の「朝鮮の巻」、富田溪仙の「宇治川の巻」、及び横山大觀の「竹雨」も、特色いちゞるしかつた。

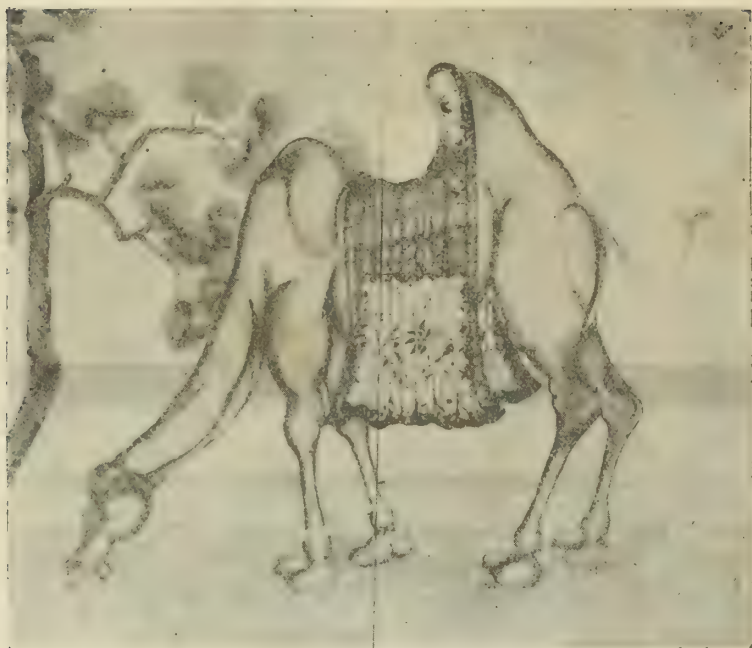
第三回院展 第三回は、文展と同じ竹の臺の會場で開かれたが、依然緊張した出來榮えを示し、中にも安田靫彥の「項羽」は世評の集注せる觀あつた。實際、「項羽」は、切實な適材をもつとも沈痛悲壯な態度で表現せるものと云ふべく、深く現代の人心に投じたと言つてよい。大觀の「作右衞門の家」も、凡庸なる情景をたくむ事なく表現したもので、その眞摯な作風に觀者を動かした。前田青邨の「京名所八題」は、極めて詩的に、また聰明に、京畿の自然を描きつくした佳作といふべく、觀山の「春雨」は、これに對して大に都の氣分を發揮した、艶麗なものであつた。この他、山村耕花、川端龍子、

春雨 下村觀山

願の糸　北野恒富

長野草風等もそれぞれ注目すべき作品を出品した。

第四回院展

大正六年の第四回に至つて、院展の名はます／＼高く、その作品は殊に世の

駱駝　一　山村耕花

注目するところとなつた。この年、問題となつた作品は、院としては新らしい方面のもの多く、中にも川端龍子の「神戰の卷」と速水御舟の「洛北六題」とが主なるものであつた。前者は、西洋畫から全く一轉化した新日本畫の趣きを語れるものとして興深く後者は、何ものにも拘束されぬ、自由な對境の描寫によく成功したものであつた。而して、大觀は「雲來去」「秋色」「達磨」の三點を出品したが、その中「雲來去」もつとも優れ、初秋の雲の匆卒として去來する一種凄烈な情景がよくこれに現はれて居た。古徑の「竹取物語」は、よく古土佐の長所を取り入れたもので、描法や、著彩にも可なりに

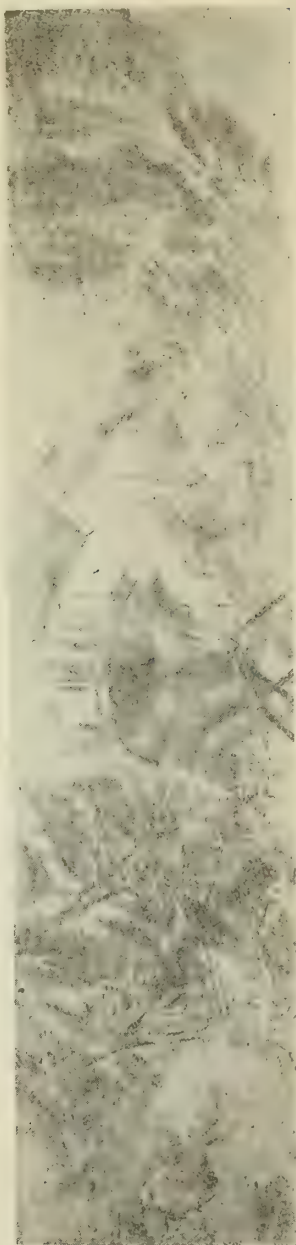
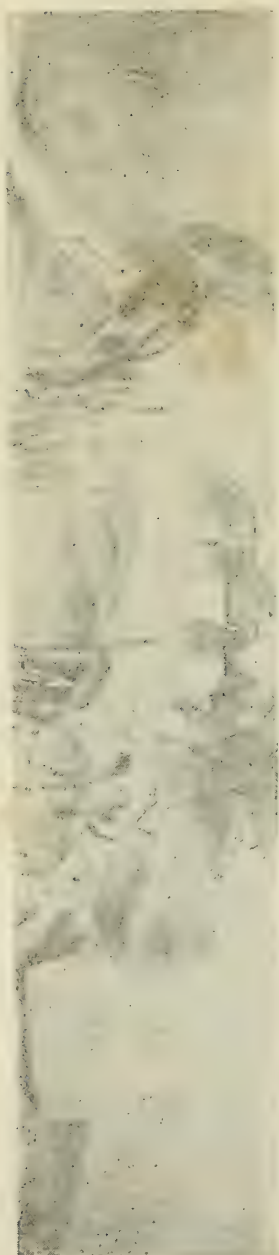
駱駝二　山村耕花

落著いた、ゆかしいところがあつた。前田青邨の「切支丹と佛徒」は、努力の割合に效果が薄かつた。同人の小川芋錢の「澤國五景」や、富田溪仙の「風神雷神」、木村武山の「法然上人」、牛田鷄村の「鎌倉の一日」等注目すべきであつた。

第五回院展

第五回の院展では小林古徑の「いでゆ」と、川端龍子の「慈悲光禮讃」と、速水御舟の「洛北修學院村」と、この三點はもつとも好評であつた。「いでゆ」は、とり分け優秀なもので、纎細な情緒と快適な氣分とがよく表現されたところ古徑としても稀有の傑作であらう。「洛北修學院村」は、自然の風物に身を打ち込んだ

濟外六題の中（一）遠水印舟

濟外六題の中（二）遠水印舟

大月氏行　中村岳陵

ものでなければ能はぬ精細深刻な描寫が群を抜いて居る。「慈悲光禮讃」は、自然の草樹が如何にすくやかに、また如何に快く朝夕の呼吸づかひをしてるかを描いた、鋭さの見える佳作だ。更に新人としては、玉村方久斗出で、その作「雨月物語」は才藻煥發、情趣また豐かなるものありとして批評壇の中心問題となつた。安田靫彦の「御夢」は、古典的の味に渠の才筆を見るには足りたが、その深き思索の人たることを示すには十分なるものと云へないであらう。前

田青邨の「維盛最後の巻」もまた努力の割合ひに精彩がなかつた。御大將の大觀は「千の與四郎」で、相變らず奮勵の跡を示し、觀山の「掃除」「豐太閤」二作また惡作ではないが、何となくこれら老大家の時代過ぎたる觀あり、却つて荒井寛方の「佛誕」に幾分の長所あるを見た。長野草風の「雨乞」、中村岳陵の

雨月物語の内　武藏野　　玉村方久斗

「西のひかり」、小茂田青樹の「菜園」などは、爾餘の作品中稍注目すべきものであつた。

第六回院展

大正八年、第六回を開くにあたり、院展は益々自重するところあるを聞いたが、開會の結果は、例年以上といふわけに行かなかつた。例によつて人氣の中心となれる小林古徑は、「麥」を出して氣を吐いた、この作は餘ほど内面的機運を示したものと云ふべく計劃にソツのないのが何よりだ。川端龍子の「土」も氣持のよいほど徹底した描寫である。これには鋭い作者の自然觀察

がよく現はれた。安田靫彦、速水御舟二家の出品せざりしことは大に寂しく、その他に特に秀れた作を見ない。前田青邨の「燕山の巻」は、描寫が單純に過ぎ、中村岳陵の「潮鳴り」は微弱な感じし、長野草風の「宵間」もよくない。大人氣のあつた玉村方久斗が、「平家物語」に小さく納まつたのはむしろ哀れむ可く、わづかに眞道黎明の「春日山」に一特色を見た。大觀の「羅浮仙」「喜撰山」「八仙花」「山窓無月」の四點中、取るべきは「喜撰山」と「八仙花」であらう。觀山の「東坡先生」は、その技倆の益々冴えたるを見せ、院の重鎭たる貫祿を思はせる。木村武山の「彌陀來迎」もやはり同じ感じであるが、荒井寛方の「雪山の濕婆」もはやく老大家まじりした觀がある。

こんな譯で、再興美術院の産んだ重なる作家としては、大觀、觀山、武山等の巨頭以外に、安田靫彦、前田青邨の二中老、故人となつた今村紫紅、それに新らしき天才小林古徑を數ふべきだ。更に新進としては速水御舟、川端龍子のあるあり、玉村方久斗、眞道黎明、小茂田青樹等は未知數の新進、前途に望を囑すべきである。

四、國展及び美術協會の諸家

第一回國展 國畫創作協會は、創立以來日淺く、その勢力また甚だ微弱であるから、その

展覧會の社會に及ぼせる影響も文展や、院展の比ではない。併し、兎に角、動機が眞面目で會員は徹頭徹尾、この會の持續に力めようとするところにその强味がある。大正七年の第一回に於て、會員土田麥僊、榊原紫峰、小野竹橋、村上華岳、野長瀬晩花の五人の制作が、殆んど全力を盡したものらしいことは第一に愉快とすべきである。麥僊の「湯女（ゆな）」は、中でも殊に光つた作品で、研究のとゞいた、內容もあり、技巧も進んだものであつた。渠は、この作を以て文展に臨んでも優に他を壓する事が出

四季山水の內　麥田萃草

來たであらうに、一意國展につくすこととなつたは痛快だ。紫峰の「青梅」も、シッカリした描きぶりて、色調のごときも可なりに渾和されたあとを見た。竹橋の「波切村」は、日本畫家として、珍らしい新風景畫を描きしもの、華岳の「聖者の死」が、思ひ切つて宗教畫の本質的表現に出でんとしたのと好一對だ。晩花の「初夏の流れ」はその氣分丈けが出てゐた。一般出品中では、入江波光の「降魔」がもつとも傑出し、金田和郎の「水蜜桃」、岡本神草の「紅」も特殊的に見られた。

第二回國展

第二回の出來榮えは、第一回に劣るとは云はぬが、しかしどれ丈けの進步を見たかは疑問だ。榊原紫峰の「赤松」は、前年の「青梅」よりもたしかに一步を進めたもので、その計劃が更に大きい。けれども、實質の上では「青梅」の方が一層人に迫るものあつたらうと思ふ。麥僊の「三人の舞妓」に就ても、その昔文展に出した同題のものに比べて幾何の內質的發達ありやは疑問である。ただ、その精進の態度には敬服するに躊躇しない。竹橋は漸く自分自らの型に墮ちんとし、「夏の五箇山」のごときこれを語つて居る。併し「風景」と題する作には別途の趣きが稍々見られる。華岳の「日高川」は、少さい、卑俗な題材のものだが、出來榮えは眞摯で可なりに突込んだものだ。晩花の「やすみ時」は、前年の「初夏の流れ」よりもずッと深く突き進まうとした。また新會員の入江波光は「臨海の村」を出したが、これは餘り進んだものとも云へぬであらう。その他に、岡村宇太郎の「牡丹」の忠實

な描寫や、山口草平の「靜寂」、酒井三良の「雪に埋もれつゝ正月は行く」、山下馬山の「椿」などがあつてそれぞれ新らしきものとしての氣を吐いた。兎に角、この一派では、完全な物になつてる人に、土田麥僊、榊原紫峰があり、小野竹橋はその惡い癖を脱却する要があらうし、村上華岳は、むしろ少し先きへ行つて效を成す人であらう。その他の會員、出品者に就ては、まだ未知數といふの外はない。

【美術協會】日本美術協會のことは、國畫創作協會と並べて云ふのも氣の毒だが、近時全く老衰せる觀ありて、毫も生氣のない點から、兎かく世に忘れられ勝ちなのだから致し方ない。その歷史の古くして、社會的に勢力のあることは既にも述べた通りであり、殊にこの會は純日本畫の獎勵保護といふことに主力を置いて居るのだが、近時甚だ振はずなつた。過去に於ては、川端玉章、荒木寬畝、望月金鳳、益頭峻南、佐久間鐵園、高島北海、山岡米華等の諸大家皆この會に據つたものであり、専門家でないが一代の名手と云はれる下條桂谷もまた生粋の協會系作家なのである。なほ中堅として數ふべき作家には、小室翠雲、荒木十畝、田中頼璋、池上秀畝、松林桂月等帝展に於て錚々の名を馳せたるものもあれば、故小坂芝田、津端道彦、佐竹永陵、島崎柳塢、小林呉嶠、狩野探令、佐藤華岳、畑仙齡、高取稚成、八木岡春山、廣瀨東畝などいふ面々もあり、またこれらの人々の同門や、同輩、後進等の作家頗る數多いのである。そして、いづれもこれらの人々は協會を母校とまで思ひ込

んで居り、翠雲、十畝等が一時楯を突いた外には、皆穩健な態度で協會の展覽會に出品してゐるのだ。それにも拘はらず、今の協會展覽會は、全く時代に後れてしまひ、最近では、松林桂月が少しく振ひ津端道彦等がこれに應ぜし以外特記すべきものもない。況して、新進に有爲の材なく、大瀧雨山、福田浩湖、小田島大鵬等の少壯南畫家ややその名を知られてるが、これとてむしろ文展を通じて世に出たやうなものである。協會は、大に革新すべき時期に達して居るのだ。

五、小團體の作品と作家

金鈴社の諸家　以上で主なる日本畫團體の展覽會の作品と作家に就ての紹介をしたわけだが、この外に、小さな團體の展覽會で、社會的または歷央的に記憶さるべきものがあるであらうか。私は殆んどその存在しないことを云ひたい。國民美術協會など組織は大きいが、日本畫部として特に注目されるものもなかつた。金鈴社は、大にすぐれた作を集めたとは云へ、これまた今までのところでは、試作展覽會の風ありて、何人も代表的傑作を出して居ない。ただ、松岡映丘の「枕草紙」や、平福百穗の「橋姬」「日本武尊」や、吉川靈華の「寶相獅子」、鏑木淸方の「現代美人風俗」、結城素明の草花屛風などが相當に興味を惹いたぐらゐであらう。

續出の諸團體（上）　池畔倶樂部や、晨光會なども、それぞれ意味のある會だとは思ふが。その展覽會はやはり試作の程度を越えない。そして、或は兩會とも古い美術學校出身の先輩等に操られて政略的な意味で存在するのでないかとも思はれる。もとの研精會はなかなか活躍したが、これとて山内多門、飛田周山、水上泰生、野田九浦、勝田蕉琴等有力作家の聯合出品を見たといふ以外、特にこの會でなければ見られぬ傑作が出たといふわけでもない。藝術社は、比較的純粋な會らしく、蔦谷龍岬、矢澤弦月、町田曲江、井澤蘇水その他新進の作家多く活氣あつたが、增原咲二郎等の活躍したのみで大きなこともなく終つた。それに似た會で、行樹社があり、二度ばかり展覽會をやつて、小泉勝爾、小林源太郎、水島爾保布等稍々振つたが、やはり間もなく無意義に解散してしまつた。往年の巽畫會は、尾竹竹坡等兄弟のほか、鴨下晁湖等も努力したものであつたが、これまた終りを完うせず、赤曜會は美術院の別働隊として今村紫紅に率ゐられ一時大に爲すありと見えたが、紫紅歿後、速水御舟、小茂田青樹、牛田雞村等新進の作家を殘したまま潰えてしまつた。

續出の諸團體（下）　その他には、獨立畫會とか、明治畫會、日本畫會等の古色を帶びた骨董的團體や、日本南宗畫會、南畫會等南畫家の政略的結合團體あるくらゐなもの、いづれもあまり振はぬのみか、頭數に依つてわづかにその名目を守つてゐるに過ぎぬ觀がある。新日本畫協會や、大阪美術會

や、大阪茶話會、大正會などは殆んど展覽會も開いたか開かぬかの有名無實と云ふべき程度のものだ。

ただ、各大家の社中の會は年々益々振つてるの觀がある。東京では、もとの廣業社中の天籟畫會、十畝社中の讀畫會、玉堂社中の下萠會、鞆音社中の革丙會、清方社中の鄕土會などが主なるもので、京都では、栖鳳社中の竹杖會、春擧社中の早苗會乃至契月社中の會などがその主なるものであらう。併し、これらの各社中で開いた展覽會に幾何、あとに殘してもよいものがあるかは疑問で、先づ無いと見てよい。

斯やうな次第であるから、金鈴社のやうな第一義的使命を持つたものや、新たに生れた如水會、京都の自由畫壇等二三のものは如何成り行くか知れぬが、今までの小團體展覽會といふものは一向畫壇の中心には重きをなさなかつたのである。で、最近の展覽會と云つては、何と云つても、帝展院展を第一とし、國畫創作協會や、ずッと離れた意味で日本美術協會などが注目の必要あつたに過ぎない。

六、將來の日本畫壇と團體

日本畫の趨勢　帝國美術院、日本美術院、國畫創作協會、日本美術協會、その他何と云ひ、彼と云ひ、日本畫壇に數多の團體あることは、既に述べた如くだが、その中、前記の四つがその最も主

要なものとして、この四團體の將來は如何なるであらうか。併せて各團體の將來は如何なるであらうか。この事を研究して見れば、大抵將來の日本畫の趨勢も判明しようと云ふわけである。

帝展の功過

帝國美術院は、まだ第一回を開いたばかりであるが、これは十二回も連續した文部省展覽會の後繼でもあり、直接政府の關與するところだから、無論益々發達するにちがひない。殊に、改革後は、古い、所謂老大家を勅任待遇の會員に祭り上げ、同じく中老大家を推薦といふことに擔ぎ上げてしまつて、實際活動力の旺んな人々が審査員といふ中心の勢力を成してるのだから、その前途は益々有望になつたわけだ。そして、現審査員中でも、松岡映丘とか、鏑木清方とか、菊池契月とか、西山翠嶂とかいふ人々はもつとも若々しき思想を抱いてゐること故、必ずや將來益々新異の作風を鼓吹し、帝展をして時代に後れしめぬやう努力するであらう。ただ、他方には、小室翠雲、松林桂月、川村曼舟等舊文展型の錚々たる人あり、之に對して次回に如何なる審査員の選任あるかが問題である。若しも、舊型の人多ければそれだけ帝展の色彩は舊きに泥むべく、新時代の人多ければそれだけ帝展の色彩は新らしくなることであらう。そして、當局が、ここまで非常の改革をした以上、恐らく今日よりも古い型に入れようとする氣遣ひは先づあるまいから、たとへ監督の地位にある會員等の異議が多少あつたにしても帝展は、これより益々新らしき色彩を帶びて進んで行くことであらう。

さうなれば、今までの文展型の作家で、比較的古い頭腦を有つ人などは不平に堪へなくなつて、何處かに脫出するだらう。或は、また當然鑑別などに除外されるだらう。その人たちの逃れ場所は、先づ日本美術協會などが第一であらう。

美術協會の將來　日本美術協會は、さうした意味で、帝展の方針が新らしくなるに從ひ、內容が改革されるに從つて、却つて從來の國粹保存の看板を新らしくし、勢力を增大するに至るであらう。帝展の方針次第では、現に、その方が審査員又は元審查員、推薦等となつて羽振りのよい小室翠雲、松林桂月、荒木十畝、池上秀畝、田中賴璋等も斷乎として帝展を去り、生れ故鄉たる協會に復るかも知れぬ。今でも、渠等と協會とは關係の斷たれた譯ではないが、一方に帝展あるが爲めにその關係は極めて微弱なのだ。然るに、この人達が、專心協會の事につとめ、現在の有力者下條桂谷、佐久間鐵園、津端道彥等舊派系の大衆と結合して、大にその勢力を振ふなら、正に天下を三分してその一を保つことが出來よう。思ふに、前記の諸家のために圖り、協會のために計ると、斯うした將來は必ずありさうに思はれるのだ。幸ひにして、美術協會は、今や新たに大規模の新築工事を起し、遠からずしてその會場に輪奐の美を誇らんとしてゐる。ただ、必要なるはその外觀內容の擴大と共に、宜しくその本質を充實せしむることである。今のままでは、協會系の作家は、ひとへに粉本の模寫や、舊型の

襲をのみこれ事とし、何等か創意を出して、眞實に自家の表現慾を完うせしめんとする意志が缺けてゐる。形式は古くもあれ、新らしくもあれ、大に意義ある創作をするといふことが肝要だ。既に、老大家と納まつて自ら得々として居る輩は是非なきにもせよ、若く、前途ある人々がその流に殉ずる理由いはれは決してない。協會は、今その意義ある革新をなしてこそ初めて天下三分の目的をも達し得べく、然らざれば如何な大家が入つて來ようとも協會はやはり舊態をそのまゝで、終にその生氣を失ふに至るであらう。

在野の二團體

日本美術協會とは反對に、帝國美術院が新味を充實せしめ、意義あり、內容ある作品の奬勵に鋭意努力する時、その餘波を蒙つて打擊を免がれぬのは、日本美術院及び國畫創作協會などであらう。本來、日本美術院は文展が久しく舊思想の牙城であり、情弊の府であるといふことに對して、それとは反對に專ら新思想、新傾向を標榜し、また一切の情實を捨てゝ純粹に藝術本位で行くといふのがその根本主張であつた。然るに、從來の歷史は兎に角、今帝展が文展時代の看板を塗り替へて、今度は新思想、新傾向を歡迎し、殊に情實を斥くること弊履の如くであるといふに至つて、聊かその方針に契合し過ぎる嫌ひがあるまいか。斯くては、今まで美術院が一手專賣のごとくに呼稱して居た新傾向主義も帝展と相競ふ形となつて、美術院は民營だけに組織の整つた帝展に對して

は大分退け目を感ぜぬわけに行くまい。

日本美術院の使命

而かも、日本美術院には、岡倉天心以來、連綿として續き來れる一種の精神主義があり、藝術的立場があるのだ。今や、その主義、主張は、大觀や觀山、乃至安田靫彥、小林古徑等によつて受け繼がれて居るわけである。渠等は果してこの神聖なる傳統的精神を如何に表現し、如何に永く持續せしめんとするであらうか。そこにこそ、帝展にも何處にもなき一種の悲壯美が感じられるのである。美術院たるもの、今は、徒らに碌々たる同人の數の增せるを喜ぶがごときことなく、須らくその根本精神にさかのぼつて面目を一新する勇がなくてはならぬ。今日のままで、少しにても妥協苟合することあらば、それは、帝展の存在以上何の意味をも持たぬこととなり、前途暗澹たるに至るであらう。所詮、美術院は、極めて少數の同人と、堅實な率眞な同感者によつてのみその使命を完うし得ることを知るべきだ。

國畫創作協會の努力

國畫創作協會に對しては、ほぼ美術院に就いて云つたことを繰り返して云へると思ふ。併し、この方は美術院ほどの歷史なく、傳統なき丈け、一層强く、烈しくその前途に對する警告が斷言し得るのだ。私は、帝展が眞に自覺して、思ひきり新らしき作品をも收容し、眞摯な、熱情に富んだ作品を尊重するやうになつたらば、國畫創作協會では餘計な手間と苦勞とを賭してまで

一般から出品を受けつける必要はあるまいと思ふ。その方は、つまり帝展や院展に任しておいて差支へないだらう。併し、帝展が果して永く理想的な鑑別をやり續けるか、如何かは先きにも云つたごとく少しく疑問である。さういふ點から、國展では國展で鑑別に對する幾多の牲犧を拂つても一般から同感の士を募るといふことは無意義でないか知れぬ。

だが、結局、國展のやうな四五の同人の集まりで、物々しく一般の出品を募り、鑑別をして入れるといふやうなことは、兎かくに偏頗や、奇矯に流れやすくて餘り歡迎出來ない。土田麥僊始め才子揃ひ、腕利き揃ひのこと故六人の會員は須らく會員丈けで展覽會をするが宜しからうと信ずる。

其他の團體に就て　小さな、眞面目な研究團體としては、やはり金鈴社が一ばんすぐれてゐる。これは、同人各自が自由な發表機關、眞面目な研究團體として、たしかに今の時代の要求にふさはしいものである。この種の計劃は、山内多門、飛田周山等の如水會や、京都で起つた自由畫壇のごときもほぼ似たものであらうが、反帝展といふやうな意味でなく、出來る丈け一致團結して行くべきだと思ふ。

各大家の私塾の研究團體も餘ほど有意義になり來つてゐる。天籟畫塾は師廣業を失つたので止むを得ぬとは云へ、玉堂社中の下萠會、鞆音社中の革丙會、十畝社中の讀畫會、清方社中の郷土會、翠雲

準社中の環堵塾、京都で栖鳳社中の竹杖會、春擧社中の早苗會、乃至契月社中など、皆それぞれ内容を一新し、出品を嚴重に制限して展覽會の實質を引き上げようとしてゐる。この各社中の展覽會の益益旺んになつてることと、小さくとも眞面目な新團體の續々起らんとし、またさう改まらんとする傾向の明かに見えるのは、刻下の注目すべき現象だ。そこに、各展覽會や、團體の將來に於ける運命がトされることともなるのである。

第三編　現代日本畫の根本批評

一、推移し行く畫壇

變り行く形勢

これまで述べ來つた事は、只今の日本畫壇の大勢がどうなつてるかを示したに過ぎない。而かも、現在の事は何も彼もどし〳〵推移して行く。昨日の新聞は、今日の新聞でなく、去年榮えた人が今年衰へるといふやうな例は殆んどざらにある。それが種々な世相や、事業の上に反映する事の多いのは勿論であるが、同時にこの事が藝苑や、文壇にも斷えず繰り返されて居る。文壇て、一時の人氣を脊負つて立つ人は實に眼覺しきばかりであるが、而かもその推移の早いのにも驚かされる。紅葉、露伴といつた時代が過ぎて、藤村花袋起り、獨歩、漱石逝いて荷風、潤一郎名聲を擧ぐるかと思へば、いつの間にか新思潮や、新進早稲田派の人々の時代となつてゐる。それも二年と安定した地位を保つ人は少く、次ぎから次ぎへ走馬燈のやうに移ろひ行く。これは文壇の例であるが、日本畫壇の上にも、やはりさうした變化の歴史は間斷なく繰り返されてるのである。現に、筆者が、この稿を起してより約四五ヶ月、大正八年の暮の頃と、今九年の新秋の頃とでは畫壇の形勢に早く既

に一轉化を感ぜしめる。

大家と新進　併し大體からいふと、既にしつかりした基礎を築いた大家や、定評ある一二流の作家達は、そこに動かす事の出來ぬ力を持つて居るので、その變化動搖は、まさか文壇の走馬燈のやうに急激ではない。これ何故かといふに、繪畫の方では、一方思想を根本とする事勿論であるが、他面技術技能といふ事が基になつてゐるからだと思ふ。技能が基となつてゐる爲めに、駈け出しの作者や、技巧の習練の足りない作家は、如何しても直ぐに一躍して大家となる事は出來ないのだ。逆にいふと、思想と技巧と兼ねすぐれた作家は、たとへ氣流の激變に會ふとも、すぐその地位を失ふ事はないのである。これらの意味から、先きに擧げた栖鳳、大觀、玉堂、觀山等を初め、一二流どこの錚々たる連中に俄かに聲價を落したものはないが、而かも一方では、若手新進から續々出世して行くものがあり、大家の中でも殊に名を高くするものは少くない。新進として、去年の院展に入選した近藤浩一路といふ洋畫出の持てゝる事や、元文展審査員の荒木十畝が帝展の「黄昏」以來、社中の會の「殘照」にて一段名を擧げた事、如水會の初展覽會に久しく雌伏して居た島田墨仙が、「樹下美人」といふ力作で大に世に認められた事、石井林響が同展覽會で愈々氣を吐いた事、若手の石山太柏が舊臘個人展覽會を開いて俄然識者の興感を唆つた事など、數へるといくらもその例がある。丈け、それ丈け畫壇の

現狀は刻々に推移して行くものと見るが至當で、大體に於ては異らぬとしても、始終眼に見えぬ轉化發展があると思はなければならぬ。この考へがないと、今日の畫壇を觀て居るものが、明日の狀態に對しては、頓とわけのわからぬやうな事にならぬものでもない。

畫壇の知識　そこで、如何すれば、かうした時代の推移を察する事が出來るか、形勢の變化、局面の展進を覺る事が出來るかといふに、それには勿論現代の美術に對して根本的理解がなくてはならぬといふ事になる。藝術に對する根本的理解があり、洞察があれば、自然それによつて現代の美術を鑑賞し、現存の作家がどう進み、どう動くかといふ事も常に觀察し得るわけである。殊にこの頃は、帝展、院展、國展などの外に、大小の展覽會が殆んどひつきりなし各所に開催されるから、このバロメーターさへ有つて居れば、すべての具合が分明になるであらう。因つて、筆者はここで些と餘計な事が知れぬが、大體今日の美術品鑑賞について大勢を察知し得る丈けの說明を附けておかう。

二、眞の意義ある繪畫

現畫壇の要求　廣い意味での藝術に對する解釋、批判はとてもこんな所で簡單に說明出來るものでないが、現代の日本畫と區切つて、ほぼその藝術論を考究して見よう。今日の日本畫は、どう

しても未だ過渡期にある。所謂第一義の藝術として、生活よりも實在よりも、勿論物質などよりもずつと高義な、最も價値あるものとして身を打ち込むには、あまりに醒めてゐる。從つて生活を第一義とし、思想生活、物質生活の兩方面から、何等か吾々の心に歡喜を與へ、慰安を感ぜしめ、進んで活動力を覺えしめようとするのが、先づ現畫壇の要求の最も高いところであるまいか。

無自覺の作家

ところが、ずつと過去の我國の藝術家には、さうした純撲な、生眞面目な、乃至超凡的な作家がいくらもあつたやうであるけれど、現在に於ては、甚だ眞摯な意氣ある作家に缺けて居る。さうして、大抵の作家は、妥協的で、安易的で、何處までも自分の主義主張を立て通して行かうとするほどの熱意がない。藝術家として自己の仕事に最高無上の敬意を拂つて行くのは、自然の事なのだが、この類の自覺をもつてる人はもつとも少い。いや、自覺してる人は、あるのかも知れぬが、その意味を立て貫いて行く人は殆んどないのだ。そして嫌々ではあらうが、何時の間にか世間と妥協し、それぞれに生活の安易を求める。そのありさまの輕浮な事は、ほんとに齒痒いばかりである。

將來の發展

何處までも強く、堅實に、理想を楯として藝術の分野を切り拓いて行くのが、藝術家たるものゝ生活意義であるのに、それがその通り行はれぬとすれば、そこに眞の藝術は成り立たぬわけである。この意味から、今日の日本畫家を見ると、先づ大半は眞の意義ある藝術を製作して

るものとは見られない。眞の意義ある藝術は如何でもハツキリとした個性を有ち、よかれ惡しかれ創作として完きものでなければならぬのに、實際はなか〳〵さうでないのだ。この事を深く考へて見ると、現代の日本畫壇には、上來擧げた如く、大家中乃至第一流第二流の人々雲の如くありといへども、決してそれを讃嘆する事は出來ぬのである。むしろ、そのうちの大部分の人には、甚だ頼み甲斐のない、つまらぬものだといふ感がするのである。これは、今の日本畫を鑑賞し、將來の發展を期待するものに取つて深く考へて見ねばならぬ事だと思ふ。

三、東西古今に研究の必要

作品の特色を知れ

藝術の眞義に思ひ至つた作家ならば、それは云ふ迄もなく、向上の意思に斷えず燃え立つて居なくてはならない。その爲めには、對世間的なことや、對社會的なことに齷齪するよりも、直接いろ〳〵な藝術的衝動に刺戟され、興奮するところが多いであらう。

さうして、この爲めに、理解ある作家は、何うしても不斷に思索をしたり、讀書し、研學するところがなくてはならぬ。すなはち、智的にいろ〳〵な判斷力、理解力を有たなくてはならぬので、それと同時に作家は一通り古今の名畫名作に親炙する用意がなくてはならない。何となれば美術史上に於

ける著名な、代表的作品といふものは、或は形態、或は描線、或は着彩等に、極めて微妙な長所得點を具へて居るのであるが、そのデリケートな特色を知るためには、何うしても複製品や寫眞では間に合はず、勢ひ實際の原品に接する必要があるからだ。これは專門の人々の誰もがよく知悉して居るところである。

西洋藝術の理解

眞に藝術に忠、作品に熱あるものなら、斯うして力めて藝術的に價値ある作品に眼をつけなくてはならぬのだが、これが亦た一寸難事である。といふのは、さうした作品の多くは、或は奈良、或は京都等日本に於ても往昔文明の爛熟したところに存するか、或は華族富豪等の邸宅に奥深く祕められてるので、それも國寶になつて居たり、門外不出の家寶になつて居たりして、なかなか一般の人の眼にはつかぬのである。强ひて、これを見學しようと思へば、餘程の努力と熱誠とを以て、時間や金を惜まず費はなくてはならぬ。以上は、日本畫に於ける往古の名品鑑賞に就いてであるが、今日の作家たるものは、日本畫家であつても、單に日本畫の古名品を研究すればそれでよいと云ふのではない。當然の順序として、古名品を見るばかりでなく、現代のものの最も進步したるを探究思索しなくてはならぬ。そして、この結果は必然的に泰西の藝術——就中最新の傾向を代表する西洋の藝術を研究しなくてはならない。

東西古今に亘れ　斯う考へて來ると、本當に現代に立つて最も意義ある藝術の運動に參し、すぐれた作品を世に發表しようとすることはなかなか冗談や、徒事では出來ぬのである。それこそ一所懸命になつて、所謂古今東西の藝術を參酌研究しなくては到底堂に入れぬのだ。而かも、單にこれ等を實際見ると云ふ丈では何にもならぬので、見たものの一つ一つに就いて心から體得するところがなくてはならぬのである。これは、口でこそ何でもないやうだが、その當人になつて見れば、餘程の刻苦精勵がなくてはならないのだ。

加之、南畫家、文人畫家を始め、專門家にとつては、何うしても支那の名品名作にも接しなくはならぬので、近くは明清から、溯つて、元宋唐と各時代々々の東洋藝術にも十分な理解と知識とがなくてはならぬ。一方、あの六ケ敷い佛教美術に就いても、これを可成く精細に熟知しなくては、正しき後進としての道は踏めぬ道理である。

搗てゝ加へて、各地方々々に於ける地勢とか地理的關係とかも知らねばならず、風俗や、習慣、乃至草木禽獸その他一般の常識的知解は十分に心得て居なければならぬのだから、理想的な藝術を製作せんとする者の複雜な困難推して察すべきである。斯うした用意のある作家が、現代に果して何人あるかといふに、それは極めて寥々たるものである。恐らく、かくまで不退轉の勇を具へたものは、藝

術家中の藝術家、作家中の作家だが、その人に至つては、最も乏しと云はねばならぬ。

四、熱誠忠實なる作家の態度

深く知ること　その人に至つては寥々、恐らく五指を屈する事も困難なほどであらうが、知解東西古今に行き亘つて、兎も角、卓越した自家の見をも有するものが、現畫壇にいくらかは居る。少くも、さうした理想に近い見解を具へた人が、いくらかは居る。而してその人としては、比較的に日本美術院の少壯作家などが擧げられるのである。東西古今とは云へまいが、安田靫彦の如きは、確に相當な點まであらゆる事を了解も出來れば、批評も出來るのである。その良寛研究のごときも、靜かに考へて見れば、彼が深く藝術の祕奧に達せんことを心懸けてゐる一證であらう。かういふ行き方なれば、必ずしも、東西西洋に知解がなくとも差支へない。

靫彦の他、小林古徑などは、餘ほど理解が豊かなやうである。殊に、これは、身を以て知解するところの藝術的信念を體現しようとして力めてゐる。靫彦、古徑のごときは、特殊としても、川端龍子とか、近ごろのめき〳〵賣出して居る洋畫家で日本畫風な制作に秀づる森田恒友なども、可なり知解の豊かな方であらうと思ふ。

理解ある人々　院展以外では、何と云つても金鈴社の吉川靈華などよほど根本的に藝術を見、これを體得して居る方だ。この人は、主として推古、天平等の古代藝術に基礎觀念を置き、更に溯つて、支那、印度、ペルシア等にまで及んで東洋藝術の源流を探究して居る。深く物を觀ることに於て徹底的態度を有つてゐる人に違ひない。平福百穗も、學者的態度ではないが、極めて藝術的な立場からいろいろな感興と熱意とを有つた人た。或は萬葉集の研究に沒頭したり、或は、良寛の生活に憧憬したり、或は支那朝鮮の漫遊に神を休めたりするあたり、この人も大分鮮やかな色彩を有つて居る。

京都の竹内栖鳳が、深い學識はないにしても、或は歐洲に遊び、或は支那に赴き、呉春、蘆雪等先達の畫風は勿論、お門違ひの雪舟を學び、南宗畫の研究をし、土佐狩野の筆意筆法にまで思を潛めたその態度は、たしかに該博精到と謂はねばならぬ。これに似て居るのは、美術院の統領横山大觀だといふべく、大觀はさすがにあらゆる物に對して其雅號の如くして居る。支那、歐洲にも遊べば、各流各派の特色をも研究し、特に文學方面に於ける知識を博大にせんがために淺からぬ修養をなしたと傳へられる。勿論、これには岡倉天心のやうな絶好の指導者があつたからであらうが、兎に角、その天分に加ふるに、かうした努力修養を以てして居ることは事實だ。渠を先達にして、先きに述べた靫彥、古徑等の存するのも偶然ではない。

最近物故した寺崎廣業は、栖鳳、大觀と比べては、幾分東洋趣味が濃くて、特に支那の藝術に中心興味を繋いで居たやうであるが、しかもこの人また凡庸の見解を有するのみではなかつた。何等か深みのある藝術を創らんとしたのは勿論、そのために種々の研鑽を志し、筆鋒をいやが上に鋭く、強くするの便宜を求めたことは事實である。その晩年また起たざるに及ぶまで、朝鮮金剛山に遊ぶの志を起して意氣頓みに揚がつてゐたのも、思へば悲壯な心事であつた。廣業に比べれば、態度穩健に過ぎるやうだが、川合玉堂もまた力めて該博な知解を求めて倦まぬ風がある。渠が、その社中たる下萠會の年少作家と伍して、謙讓抑利よく交情を厚くしてゐるもの、一はその性格に依るべしと雖も、また同時に研究的態度を共にする若々しさが伴つてるからとも云へよう。

京都派の努力

京都には、栖鳳の外、その門下の橋本關雪、土田麥僊それぞれ行き道を異にするが、博く知解を東西古今に求めんとする氣概に於ては互ひに相下らぬものがある。麥僊を中心とする國畫創作協會の人々は、總じてこの態度が熱誠的に見える。別に、菊池契月のやうな人も、深くはないか知れぬが、凡庸趣味の人ではなささうに見える。これ等の人々、勿論ひとしなみに云ふ事も出來ねば、必ずしも、識古今に通じ、學東西に亘るとも云へぬのであるが、併し、兎に角一風異つた落著きのある作家である事は疑ひないであらう。何等か藝術上の理解に於て一歩を進めて居る人々で

ある。ここまでに、理解に歩を進めるといふことは、容易いやうではあるが、尋常作家では一寸出來にくい。可なりに苦勞も要るし、それ丈け藝術といふものに奉仕するの意志がなくてはやれない。尤も上揭の人々のみが藝術に奉仕する意志あるのでなく、この中でも栖鳳の如きは、甚だしく市氣あり匠氣あり、自分の製作品の價格釣上げまでするといふので、その方の事は論外だが、兎も角藝術に對してはいづれも餘ほど熱心な、忠實なものだと云つてよからう。これは、必ずしも、現代に限つたことではないが、特に現代の如く複雜多岐な文化の時代にあたつては、この種の見解理智なきものは、大をなすに足らぬので、これ等の人々は可なり素質の程を認められると共に、今後幾何までその研究態度を持續し、進展し得るかが問題なのである。

五、物質慾に趨る作家

物質本位の畫家　一方には、兎に角藝術家的良心を有し、奮勵努力して其研究を續け、見聞を深大にしようと心がくるものあるもあるが、他面にはさうした積極的な意志は殆んどないものもある。前者が、甚だ寥々たるは勿論だが、比較的少壯氣鋭な人々には、積極的意志あるものを認めるに對し、後者は、物質黃金萬能時代たる現代にはその數最も多い。取りわけ、中年以上の作家で、旣に可なり

の名聲を擧げた人にかうした消極的な人が多いのである。

何故消極的になるかと云へば、これは極めて簡單、曰く物質本位に墮し、職業的に製作をこれ事とするからである。藝術家だとて、人間たる以上、衣食住の問題を全く考へずに行けるものではない。これ等の事を思ふにつけて自然物質的に流れ、阿睹物に牽引せられるのもまた止むなき事ではある。併し乍ら、藝術家は何處までも藝術家だ、その本分を忘れたり、本末を顚倒したりすることがあつてはならない。ところが、今の日本畫家の中には、隨分この本末を顚倒して、ひとへに物質的に流れ、何も彼も打算的に、計數的にのみ考へる人が尠くない。殊に悲しむべきは、氣分なり、精神なりを基として、藝術的良心の命ずるまゝにすべき製作をば、たゞ〳〵物利物慾によつてそれをなす事である。すなはち、その當然の結果として、どんな場合にでも金にさへなる事なら製作もしよう、揮毫もしようといふ氣になり、金にならなかつたり、なつてもその額が少かつたりすると、逃げるといふやうな事がだんだん露骨になつて來たのだ。

營利的傾向　勿論、これはひとり作家を咎むるばかりではいけない。一方には、書畫屋、骨董屋といふものが益々營利的になり、萬事に拔け目なくなつて來たのもその理由であらう、また廣く云つて社會一般にさういふ傾向が募つて來たのでもあらう。が、それにしても、眞の藝術家は、成

る丈け生活の簡素を圖り、志を内部に向けることを期して、努めて商賣人風情にかつがれぬやうするのが當然ではあるまいか。これこそは、何時の世にもほんとの藝術家氣質といはるべきものである。この藝術家氣質だに强からば、その人は決して極端に墮落する筈はない。物質的な事は、或る場合にいぢめられるにしても、何處かで自己といふものを眞實に生かしてるにちがひない。少くとも、切り拔けられる丈けは切り拔けて自己を正しく活かして居るだらう。

誘惑と墮落

これに反し、物質主上主義に墮したら最後、その作家の内生活は、まことにみじめである。渠は、あらゆる場合に金錢本位だ、財產本位だ。何でも彼でも、この一本調子で世の中を丸めて行かうとかかる。そこに作家としての熱もなくなれば、藝術家としての自信もなくなるのは當然である。而かも、この種の作家が現代には、もつとも多いのだ。今その名前を明記するのは氣の毒故しばらく避けるが、日本美術協會の先輩諸大家を始め諸作家、帝展系の作家の大半、院展系の作家一半など、まさにこの部類に入り、若しくは入らんとしてゐるものだと云ふも過言であるまい。そして、中には堂々たる大家でありながら、全く財物の奴隷となり、富豪、成金、或は得意多き商賣人に對しては、全く頭のあがらぬ連中も少くない。旣に、相當の地位に上り、財產もあれば、名譽もあるものが、この上何を焦つてさうするのかと思はれるのだが、そこは所謂眼のない人間となりすせる

ので誠に情けなき次第と謂はざるを得ぬ。

輪轉機畫家

大家にして、さうした物質欲に捲き込まれた連中は、勢ひ濫作をやる、駄作をする。心にもなき製術を頼まれるまゝに、責められるまゝに、早々と片づけて行く。口善惡ない京童が、これを稱して輪轉機畫家と云つたが、まことにその通り、印刷職工が片ッ端から新聞を刷り上げて行くやうに、十枚二十枚瞬く間に描き上げると云ふやうなのは少くない。斯うなると藝術の難有みもなければ、作品の價値もなきは勿論、作者は市井の職工と選ぶところないわけである。如何に善意に考へても、技巧の優れるを取る以外、精神的に何等の意義もなきものと見る外あるまい。幸ひにして、世上多數の鑑賞家は、この内狀を知悉せぬが爲め、腕が好いとか、色彩がどうとか、描線がどうとか云つて、これ等の作品を賞賛したりするが、一度びこの實狀がわかつたら大に興醒することであらう。

大家名家が、物質慾に捲き込まれて行く弊の甚だしきは勿論だが、若い、少壯氣鋭の人々でも屢々これに惹き込まれて動きの取れない立場に陷る事が往々ある。あまり名も知れぬ人なら其名の人相當に、また有望な人なら若干割りよく、いづれにしても若い者は若い者並みに書畫屋などは巧みにこれを操つて行く。そして物質に豐かでないのを見込んで、或はまとまつた額を用立てたり、日々の生計

を助けたりして、まだ技倆も定まらぬ者に濫作をさせ、早くから金縛りにしてしまふ。これは一見少壯作家を奬勵し補助するかのやうにも思はれやうが、多くの場合は、反對にそれ等新進の士を拘束し眞の研究的立場をなくさせるのである。而かも、年少の人々で、この邊に氣付かぬ作家などは、偶々まとまつた金が入つたり、財物を前にして甘言を並べられたりするのに得々とし、可惜有爲の材と虛榮心の滿足とを交換する例が殆んどザラにあるのだ。近年美術界の隆昌につれ、新畫の暴騰に伴つて、名もなき作家にまでかうした例の多くなつたのは、全く驚嘆の外はない。

六、不徹底な態度の人々

【藝術的良心の痲痺】極端に物質慾に驅られ、藝術的良心などは次第に磨り減らして、全く一個の營利作家、商賣人となり了してしまふものは致し方なし、まだそれ程極端でなくても、藝術慾と物質慾との中間に立つて、岐路に迷つてるものが大分ある。かう云ふ人々の大部は、作家としての意地もあれば、氣概もあり、また廉恥心も持ち合せて居るのである。けれども、一方どうにも物質慾が強い、虛榮心もあれば、生活上の必要もありして、阿睹物に對する慾心が忘れられぬといふ人々である。

この種の作家は、蓋し現代日本畫壇の大部分を占むると云つてよからう。傾向としては、前にも擧

げた如く、協會派の諸家や、帝展院展派の若干分子皆物質本位に傾いてはゐるが、既に相當門戸を張り、地位を獲たものが、全然物質主義に墮して、百畫會式の製作にのみ沒頭してるとは見られない。その中の少數者を除くと、兎にも角にも作家たる體面、藝術家たる外見丈けは裝はうと力めるのである。ところが、この體面をつくり、外見を裝ふといふのが甚だ宜しくない。

内面的、精神的藝術に對する眞の解釋は、何處までも精神的でなければならぬ、内面的でなければならぬ。然るに、これ等は、内面的、精神的の知解を忘れて、外面的、皮相的に藝術家らしき眞似づくらうとしてゐる。そこに大きな矛盾があり、撞著があるのだ。で、この種の人々は、餘程よい素質のものか、積極的向上意志の旺んな人でない限り、兎角く榮えない、危險な立場に居るものと見なくてはならぬ。これも實例を擧げて云ふなら帝展の審査員をしてゐる人、文展の舊審査員であつた、帝國美術院の會員である人、日本美術院の同人である人、協會の人、國展の人、それ等の方面の一流二流の作家をザラに列べることが出來よう。玆に至つて現畫壇の實狀も憐れむべき結果だと云ふ外ない。

併し乍ら、これは單に一美術界のことのみではない。擧世滔々として、物質に流れ、黄金に趨り、而かも表面君子顏をし、聖人面をして何食はぬ様するもの丶多き時とて、日本畫家がその製作に、生

活に表を飾らうとするのもあながち咎むべきではあるまい。ただ、世間の大勢が、このままでは、決して久しく平靜であるまいと思はれる丈け、美術界では若しこのまゝ推移することもあらうが、そこに沈滯救ひがたき結果が現れ來らうと案ぜられるのだ。一層のこと、物質本位に墮し、職工的に身を落した人ならば、そこから俄然醒めることもあらうし、醒めずば自然にその地位を失つて起ち難きに至るであらう。それ丈け解決が早いわけである。然るに、この表面糊塗連中は、なかなか始末がわるく、物質に奔るかと見れば、藝術を忘れず、藝術に忠なるかと見れば、物質にはより深く執著するといふわけ、これでは眞の藝術的意義が容易に純に現れさうにもない。現に、京都に於ける多數の大家新進のごときは、全くこの手合ひであつて、眞摯なのか市氣多いのか、一寸判斷し兼ねる生活をし、製作をしてる人だらけである。日本美術院の頭領や、先覺二三氏を除いた以外の作家も、多くは皆然りである。

かうした事も、現代畫壇を仔細に觀察する上には是非見のがしてはならぬので、結局その作家が如何に藝術に忠であり、純であるかが將來の運命をトするとすれば、いつでも吾々は各作家の製作や、生活態度に熱心な觀察を怠つてはならぬのである。

七、青年作家と批評家

青年作家の覺悟　何にしても、すべての社會狀態が、過度期のそれであり、いろ〳〵な事情が落著いて居らぬ現代にあつては、青年作家の如きは餘ほど覺悟を鞏くしてあらゆる場合、あらゆる境遇にて、藝術に忠なる心掛がけがなくてはならぬ。さすがに、現代の少壯作家中、心あるものはこの點に思ひを致して居ると見えて、堅實に地步をつくりつつあるやうだ。第六回の院展で名聲を擧げた「春日山」の作者眞道黎明のごとき、帝展第一回に特選となつた「青衣の女」の作者廣島晃甫のごとき、はたまた院派の若き同人たる速水御舟のごとき、いづれも新進作家中の異彩であるに拘はらず、世評や、俗間の誘惑に誤られて、墮落するやうな醜態を見せない。御舟が、いやが上に敬虔な態度を持して、京都は洛外に隱栖しつゝ眞實一路を辿つて居るのと、晃甫が恰も、漂泊者のごとく、山陰山陽の果てにさまにひつゝ詩想を養つてるのなどは、まことに當代の好一對で、共に若き作家の意氣の壯なる事を物語つてゐる。

この外、帝展院展等には左まで優遇されぬ者でも、風景作家として特異の才能を有する廣業門下の石山太柏のごとき、玉堂門下にて新進隨一の稱ある佐々木尙文のごとき、同じく子供描きの名手石渡

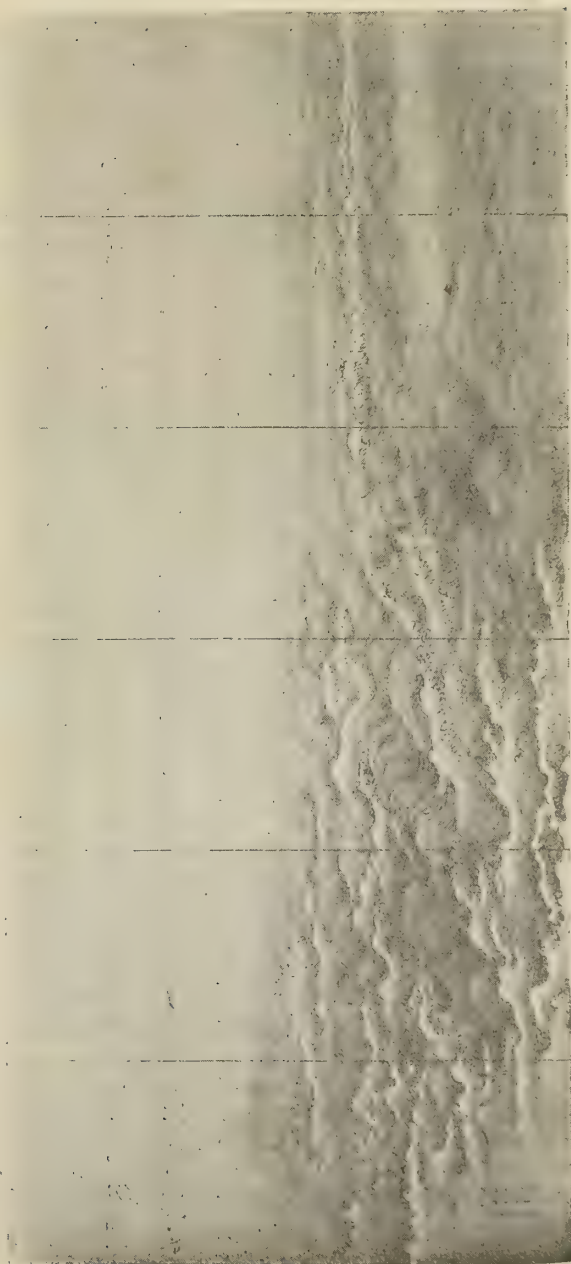
風古のごとき、院展の小茂田青樹、國展の入江波光のごとき、いづれも有望な天才を懷いて、而かも自若として其地位に安んじ、只管將來の發展を期してゐるらしい。美術院の習作展覽會や、下萠會の展覽會などに突如として有爲な青年作家の擡頭するのも全く故なしとは云へぬ。

一方、年少にして早く氣驕り、心亂れて眞の努力を怠り、藝術の本道から外れ行く者を見るに、それ等は如何にも平生の素養が定りない事を示して居る。これ作家として眞の覺醒の足らざるにも因るであらうが、一面には現代の美術界に適當な指導者、批評家のないと云ふ事をも物語つて居る。近時、美術界の興隆につけて、新聞や雜誌に美術批評の掲載さるゝもの甚だ多く、批評家と呼ばるる人の數も可なりに多い。併しながらこれ等多くの批評家中果して何人か高遠な藝術的思想を藏し、理解ある美術觀を有するかは最も疑問だ。忌憚なく云ふと、所謂批評家中の大部分は、藝術に對する理解淺薄にして皮相、ただ單に職業としてこれに携はつて居るといふ人が多いやうだ。偶々、然らざるものあるも多くは社會の缺陷、亦は種々の誘惑によつて、知らず識らず邪道に陷つて居るものが少くない。從つて、多くの場合に、現代の美術批評といふものは、情實的であつたり、偏依的であつたり、兎かくに中正不偏なものに缺けて居る。そのこゝに至れる事情に就ては、種々なる觀察があり得ようけれど、どの道批評界にも餘り人がないと云ふ事に歸する。

批評界不振の理

批評界の振はぬのは、やがて新らしき青年畫派にとつて後援者を失ふ事となり、遺憾至極である。併し、どうもそれが事實であつては批評家にも、現代作家の不振なことについて一半の責めある事を蔽ひがたいであらう。これを思ふにつけても、美術院の先覺者であつた故岡倉天心は偉い人であつた。渠は、全くの批評的立場にあつた人で、當時來朝中の米人フエノロサと共に我國に於ける國粹美術の復活を唱道し、純日本藝術の鼓吹に力めた。後美術學校の校長となり、便宜の地位にも上つたからではあるが、渠のごとく內面的に藝術を理解して、蒙昧なりし當時の畫壇に斷えず炬火を擧げた人は、多くその例を見ぬのである。前に、その例を見ぬのは兎に角、天心歿後、第二第三の天心を見ないのは遺憾といふべしだ。

今日復興の美術院に大觀、觀山、靫彥、古徑、靑邨等の俊才相次ぎ、前にしては、狩野芳崖、橋本雅邦、乃至菱田春草、西鄉孤月、今村紫紅等の夭死せる天才を輩出したのも、全くフエノロサや、天心の指導よろしきを得たからでなければならぬ。それに比べると、今の日本畫壇には、全く特異な批評家、指導者に缺けてゐる。たまたま批評家らしき人あるも、多くは考證的、學究的態度のそれであつて、眞に啓蒙的、指導的な意氣と熱情に富んでゐる人は殆んどない。今の青年作家は、この點からも不便と、不利とを免かれない。

なほ、今日の青年作家に同情せざるを得ないのは、その生活問題との喫緊な關係である。最近に於ける一般社會の生活の高上、物價の暴騰は、ただただ驚嘆の外はないので、この間にあつて生計をつづけて行くために、どの方面の人間でも異常な惡戰苦闘をつづけなくてはならぬ。特に、藝術的な立場で、純粹に、まともに研究し、努力をつづけようとするものが、生活の壓迫を受けることは、勿論一通りでないにちがひない。この爲めに折角の天分を有し、可なりに强い藝術的良心をいだくものでも中途に挫折するものが少くないだらう。これは、今日の場合、むしろ同情に値ひするのであるが、而かも、初めからこの事を豫想して藝術に臨む、殆んど苦痛に向ふと同じ心懸けにならねばならぬのだ。後に至つて俄かに畏縮するのは、正當の事でない。ところが、幸か不幸か、最近社會一般のそれに伴つて、日本畫家の間にも大に成金風が流行した。そして、所謂大家連の間に成金式生活が行はれたのに慨して、若き、新進の作家中にはこの傾向に惡感を催し、眞面目な生活をせんとしてるものが大分あるやうだ。これはまことに結構なことゝ言はねばならぬ、後進の青年作家たる者は、此の意氣を以て、大に邁進、躍進を試みなくてはならぬ。奮闘せよ、奮闘せよ。飽くまでも奮闘を繼續して、藝術界の新時代を創立せよ。

山樂圖(二)　小室翠雲

第四編　現代作家と流派

一、凡そ幾種の流派あるか

古來の分派　一口に、日本畫家と云ひ、日本畫と云つても、その種類がいろいろある。卽ち、流派關係によつてさまざま別れるのであるが、この流派別は簡單なやうで大分複雜してゐるのだ。ずつと昔に溯れば、百濟河成や、巨勢金岡などあり、巨勢派といふやうなものが佛敎美術の源をなし、乃至それからいろいろな藝術の發芽を見たのであるが、その起りからして決して一であつたとは云はれない。換言すると、皆必要に應じ、趣味好尙に從つて生れたので、これを人爲的に限ることはむづかしいのである。

けれども、大體からいふと、日本の美術史上にその流派を印して、今に至るも一流一派と認められるのは、土佐、春日等のやまと繪派、宅磨派、如雪、周文等を始祖とした東山藝術の各派、卽ち雪舟を祖とする雪舟派等を古代のものとし、近世以後はこれが更に鮮やかになつて來た。また、この近世になつてからの流派が、今日でも兎に角どうにか繼承されてる形なのだから、ここではそれを主として

述べることにしよう。

近世の二大派

近世期といへば、繪畫の方では、土佐と狩野の兩派が勢力を爭ひ、殊に狩野派が牛耳を執るに至つてからの事である。土佐の方は、その起原最も古く、堀河天皇の頃の春日基光を祖とするやうに云はれるけれど、その隆能や、隆親や、經隆等相次いで起り、それぞれ名聲を謳はれたにかかはらず、何うも東山時代以後は一向振はずなつた。間に光信の出たのはむしろ中興の名家として異數とすべき程である。そこへ持つて來て、狩野家には、正信が起つて、先づこの派の始祖となり、大に畫名を擧げた。そして、正信の子の元信が父の後を享けて室町將軍家に近侍するに至るや渠の大才は一躍他の各流を壓倒し、當時まで古き家名を誇つた土佐派に取つて代るに至つた。この人こそ世に謂ふ古法眼であつて、これより室町、桃山、江戸各時代を通じて狩野派全盛の機運は開けたのである。殊に元信の子直信、孫永德と代を重ぬるに至つていよいよ狩野の勢威は斯界を席捲するに至つた。永德の後には有名な狩野山樂、海北友松等あり、正當な後裔として江戸の幕初に探幽守信出づるに及んでその地位九鼎大呂よりも重きを成すに至つた。この頃に至つては、雪舟を宗として起つた雲谷、長谷川兩派の如き勿論云ふに足らず、わづかに歴史的優位を占むる土佐派がその名目を持續するに過ぎなくなつたのである。

狩野派の勢威　徳川期に入つて、狩野派の勢威並ぶものなきに至ると、この派がまたいくつかに小分した。併し、それは宗家が一つになつて、代々幕府の繪所預となつてる關係上連綿として續いて來たのである。これに對し、土佐の方は、わづかに京都禁裡の御用に當つてるのみて、あまり名家も出ず、光起が光信以後ただ一人の大家であつた。一方、この派から住吉內記が出て、住吉派を稱ふるに至つたが、內容に於ては彼此多くの差を見ず、共に狩野派の敵ではなかつた。

浮世繪派の出現　岩佐又兵衞は、光信の末裔と云つてる丈けあつて土佐の出ではあらうが、注目すべきはその畫風が、在來のそれと異り、浮世繪とも稱さるるものになつた事である。これ一は、徳川時代に於ける平民藝術の端緒をなしたもので、又兵衞と前後して、彥根屛風の作者やその他の浮世繪名手が續出した。菱川師宣などはこれに次いで浮世繪を眞に開拓したと云ふことが出來よう。後に、春信や、春章や、歌麿や、廣重を出すに至つては浮世繪もまた徳川期に於て黃金時代を現出したと云ふべきである。

文人畫の勃興　狩野派がひとり全盛を恣にして居た徳川初期の享保頃に於て、長崎には、伊孚九および沈南蘋等が渡來して、寫生畫や文人畫を齎らしたのを珍とすべきである。すなはち、沈南蘋は。花鳥動物等の精緻なる寫生に於て最もすぐれた技法を示し、伊孚九また文人畫家の先驅をなし

たものと見ねばならぬ。宜なるかな、これより久しからずして、京都に圓山應擧出でて、沈南蘋に刺戟された寫生派を初め、終に從來の日本畫とは大分生面を異にした圓山派といふ生きた山水花鳥を扱ふ繪畫を作るに至つたのである。また、伊孚九の影響から文人畫の風著しく傳はり、斯界の天才として今も渇仰せらるる池大雅のごとき、まさにこれに動かされてあの藝術を渾成するに至つたのだと傳へられる。

圓山・四條・光琳

されば、徳川の中世以後に至つては、狩野土佐兩派のほかに、浮世繪派、圓山派、文人畫派等それぞれ勢力を進展し、圓山派は後に吳春出づるに及んで四條派を分出し、これが却つて中心となれば、文人畫派も、文晁や、竹田、崋山等の出づるに及んで、南宗派または南北合派を含むこととなり、各流各派の勢力一長一短容易に一に歸さなくなつた。またかうして互に長を採り短を捨てして相進むのが自然の大勢となつたのである。わけても、文人畫派が所謂南宗派と云はるれば、狩野派は恰かも北宗畫に當り、彼はあく迄も民間的の藝術趣味を發揮するに對し、之れは官畫堂堂の金碧樓閣風を描出する傾向が著しくなつた。

かくて、他面には、俵屋宗達や、尾形光琳の出でて、所謂光琳派を開くあり、これまた土佐、狩野乃至浮世繪、文人畫などとは全く別趣な藝術的新生面を開くに至り、美術界はまことに紅紫繚爛、百

花競ひ咲くの姿とはなつたのである。

以上は、主として德川初期からその末期に至る各畫派の趣きであるが幕府の倒潰する前後になると、盛んに西洋の文物が移入さるるに至り、それに伴つて、油畫の流行も次第にわが美術界を動かすに至つた。司馬江漢などは、油畫をわが國に取入れたものゝ先驅で、これより日本畫壇の生面いよいよ混沌として來たかに見える。

現代の諸流派 そこで、日本畫の流派は、大體どれくらゐに分けられるかと云ふと、狩野派を中心とする北宗派、文人畫とも云はるゝ南畫派、圓山四條を合せた四條派、北宗の寫生、南畫の氣韻等を併せ傳へんとする南北合派、浮世繪派、光琳派、並びに西洋畫の長所をも取り入れた近代の自由派等數種に大別されよう。そして、殊に、自由派といふのは、ひとり西洋畫派を取り入れたものばかりでなく、明治大正にかけては、あらゆる流派に自由清新の風行はれ、殆んど截然たる流派別をつけ兼ねる迄に至つたのである。

二、今日の狩野派

狩野派の本末 過ぎ去つたことはこゝで諄々云はぬことにし、すぐ今日の狩野派といふもの

を話題にして見よう。狩野派といふものも、開祖の正信や元信時代、また永徳、探幽ごろまでは、兎も角もその流派として確乎たる考へもあつたらうし、一面流派に超越して大に自分の藝術を作成するといふ氣概もあつたであらう。ところが永い年月を經るに從つて、道樂息子が親の財産をのみ當てにするといふ格で、次第に狩野派の作家には隋氣が生じて來た、ゆるみが出來て來た。

それが、徳川中期頃から末期にかけては愈々甚だしくなり、明治大正の今日に至つては狩野派といふ名目そのものが既に骨董的意義以外になくなつてゐるのである。これを系統的に知る爲めには、坊間に行はれる「日本畫家系統圖解」と云つたやうなものを購つて、仔細に系圖調べをしなくてはわからない。さてやつとこすつとこ系圖調べをして見てからが、狩野家は正信に初まり、元信、宗信、直信、永徳(重信)と代々を經て、飛んで守信(探幽)や、傍系の山樂に至るといふやうなところまでは、どうやら記憶し得るが、それから先きは、探信、探船、尚信、常信、周信、榮川なんどの正系傍系數多けれども一向頭に殘る人もなくて、恐らく、物數寄な暇人でもなければ覺えられないのだらう。また實際、こんな系圖的な知識は、現代美術の鑑賞、或は藝術の本義解釋の上に左まで必要ないのである。

芳崖と雅邦

むしろ、必要なのは、上に掲げた正信、元信以後探幽迄ぐらゐて、あとは狩野派といふものが優れた祖先の名によつて何うやら斯うやら格を守り、型に入つた繪を描いて幕府の

御用繪師となり、民間畫家に對して傲然と構へて來たと記憶すればよいのである。ところが、その唯一の賴みの綱たる家の名も漸く重きを成すに至らず、加之に久しい間の庇護者であつた江戸幕府も倒潰した後は果して如何であるか。もと〳〵隋力と空名とで維ぎ來つた狩野家が、そのまゝ勢威を美術界に逞うすることは出來ない。幕末頃からの狩野派の作家といふものゝ終には有名無實の結果になり了してるものが多い。たま〳〵明治に入つて、狩野の姓を襲つた人で雷名を斯界に轟かした芳崖があるが、この人は決して所謂狩野派の爲めに出世した人ではない。渠は、橋本雅邦と共に、むしろ自由清新な、新時代の作家として成功したものである。

勿論、芳崖も雅邦も、初めは狩野派流たる木挽町の勝川門から出たので、狩野派の血肉を受けたにはちがひない。けれども、渠等の精神は、欝屈消磨せる傳統的な同派の雰圍氣中に甘んじて育つにはあまりに奔放自在であつた。もつと大きな氣概がそこに宿つて居たのである。恰かも好し、この時、明治の美術界に一新紀元を拓くべく炬火を投じた米人フエノロサあり、二人の英才を知つてこれを誘導し刺戟すること屢々、同時に珍らしき熱血批評家と目された岡倉天心と共に、しきりに純日本藝術を鼓吹し、または精神主義を口授して、終に從來の狩野派の作家とは全く道を異ならしめたのである。ひとり狩野派のそれと異ならしめたばかりでなく、舊來の日本畫家とは全く違つた道を行くことを暗

示したのだ。これに對して、芳崖も雅邦ももとより卓越した才智を有して居た人だから、すべての事象をよく辨別して忽ち特殊の地步を占むるに至つたのである。

新代の狩野畫　偶々、芳崖、雅邦が共に狩野派の出身であつたからといふので、二人の成功を狩野派の成功と見ることの誤りなのは云ふまでもない。むしろ、二人は、あれ丈けの天才を抱いて區々たる狩野派の一局所に停滯することを欲せず、自由に奔放に伸びられる丈け伸びたからこそ彼の如き大藝術を成し、後世の人々をして讃仰せしむることになつたのである。その證據には、狩野派に育つたもの、芳崖、雅邦の外多々ありといへども、而も、狩野派の威を笠に著て成功したもの他に一人もないではないか。全く、二人の成功はむしろ自由畫派の人として活躍したからである。それ故、雅邦の門下からは、現存の大家下村觀山、横山大觀、川合玉堂等を輩出したが、これ等の人々は、少しも所謂狩野派の作風にかぶれて居ない。のみか、一層自由な作風を發揮して、大觀、觀山は終に院展派の頭目となり、玉堂また一種の清新體を開いて斯界に重きを成して居る。

純狩野派の人々　これに對して、純然たる狩野の祖風を紹ぎ、變相らず様に依つて胡盧を描いてゐる人々は、今日一向振つて居ない。その名さへ一般的に知られて居らぬ荒木探令や、平林探溟などいふ人々が、狩野の姓を許されて同派の正系を以て任じてゐるやうだが、共に齒ひする程の事はな

い。後者のごときは特に萎微として居る。

一體、狩野派の特色とも見らるべきものは、所謂北宗派の系統を引いて、筆致重厚、色調絢爛、兎かくに宮畫式であり、金碧繚爛調である。それ故、始祖の元信や、永德、乃至山樂、探幽等の大作家の手に成つて、而かも室町時代とか、桃山、江戶時代とかに方り、豪放雄大の周圍に相對するのであれば、如何にもその境地にふさはしく見られるが、時代が既にさうした豪放不羈な頃と異なり、人間の生活が一層眞摯に、感覺的になつて來たこの頃の時世には、どうしてもピッタリ適合しないのである。今日の場合にあつては、恐らく如何なる名手が出ても、永德が織田氏の安土城に描いたり、山樂が豐臣氏の桃山城に描いたり、乃至探幽が江戶城內外の襖繪その他に描いたりしたやうな大作品を眼のあたり實現することは出來ぬであらう。何となれば、その流派の格調は既に破られてゐるからである。強ひてこの破られた格調を合して、依然たる大狩野の面目を示さうとすれば、それは却つて時代錯誤の事として、世の嘲笑を買ふ外ないであらう。況して、今日の上流家庭や、中流の家の裝飾品として、頹廢した狩野の古法がどれ丈けの價値を止め得るかは大なる疑問だ。さうだ、今日の狩野派は古への狩野派としての權威の一切をなくなしてゐるのである。これだけのことは前以て知らなくてはならない。

三、現今の土佐派卽倭繪

土佐派と云ふと、これには、所謂土佐派の外、金岡を宗とする最古の巨勢派、宅磨爲成系統の宅磨派、並びに慶恩を祖と稱される住吉派などあること前に云つた。併し、これ等はあまり判然たる區分がないので、比較的近頃まで土佐と住吉兩派丈けが分れて云はれたが、それとて境界關係は怪しいものである。先づ大體に於ては、土佐派がこれを代表して居り、土佐派と云へば、同時にやまと繪を指すものと見てよからう。明治に入つてからの作家では、故川崎千虎や、川邊御楯および今の小堀鞆音などは、純土佐派の系統に屬し、故守住貫魚や、山名貫義などが住吉派に屬するのだが、いづれもまことによく似たもので、大差がない。

土佐の三派

ところで、土佐派は、春日基光に始まり、隆能、隆親、經隆といふ風に、狩野派同様世襲的な發達をなしたものであるが、これまた次第に系圖專門家の事でなければわからぬやうになる。春日から土佐を稱するやうになつたのは、經隆が土佐權守に任ぜられてからだが、この頃には春日光長あつて大にこの派の氣を吐いたものである。けれども、その以後久しく振はず、中興の光信出で、また江戸幕府時代に光起出でたが、共に狂瀾を既倒に回すべくもなく、世は狩野派の跳梁

幕末の土佐派

にまかせたのである。幕府の頃、田中訥言、宇喜多一蕙、岡田爲恭の三名家が出でて古土佐の復興に力めたのは、特に注意すべきだ。併しこれとて未だ大勢を左右するまでには至らなかつたのであつた。

倭繪の意義　ただ、この派の繪の强味とすべきは、別名を倭繪といふほどあつて、要するに、純日本の精神によつて生れ、日本趣味によつて培はれ養はれて來たといふことである。この事は他の狩野派や、雲谷派などが、唐宋元あたりのさまざまな藝術に影響せられ、文人畫派や、四條圓山の先驅となる傳來寫生畫派の、要するに舶載藝術の模倣から成り立つたものなのに對して、非常な特長である。純粹な日本趣味の繪畫としては、或はこの派のもの丶外何もないとまで云ふことが出來るのだ。されば土佐派は室町期や、江戸幕府の狩野全盛時代にあたつても、京都にあつて禁裡の繪所預りとなり、なほその餘喘を保つには足りた。

それもその筈、倭繪は、すべて日本の武者風俗や、寺院神社の緣起、戰爭の繪卷など、すべてわが國特有の世相を描くことに於て唯一無二の畫風を有つてゐるからだ。勿論、他の流派に於ても一通りの山水花鳥や、人物を描くことの出來ぬわけはないが、あの精緻な武者繪を描いたり、神社佛閣の緣起を描いたり、奈良、飛鳥あたりの自然のたたずまひを描いたり、平安朝、鎌倉期あたりの宮廷や、上流の家庭のさまを描いたりするのは、全く倭繪の獨得の領域だつたのだから、これは容易に他派の

冐し難い畫境であつたと云へよう。ただに上代に於てさうであつたのみでなく、江戸時代から、明治大正の今日に及んでも今述べたやうなさまざまな世相に對しては、土佐派卽ち倭繪の作家に委ぬる外はないのである。極く最近に及んで、風俗世態を描くには、却つて西洋畫の作家や、四條派、浮世繪派の作家の方がよいといふ事になつたが、それも世相が全くそれらに適合するやうに移り變つて來てからの事である。斯う考へると、倭繪の方は、なかなか特殊な藝術であつて、これに從ふものは、どうしても深く有職故實にも通ぜねばならぬわけである。その代り、現在のわが日本歷史の存する限り歌舞伎劇のつづく限り倭繪の筆法は永く廢滅することもなからうと思はれる。

明治の倭繪

ただ、在來のまゝで倭繪の發達する事は、他の世態に伴つて當然困難になり、今では、この畫派にも、外形はそのまゝ採りながら、內容を全く新たにせんとする傾向が勝ちを占めてゐる。所謂、新土佐派と云つた風な傾向の勢ひを來た所以で、そして、これに對して舊來の土佐派は、ややもすると歷史畫と呼ばれて、やはり一種の骨董視されんとしてゐる、明治になつて、川崎千虎や、川邊御楯や、菊池容齋などの出たのは、むしろ骨董的な土佐派の形骸を墨守せるものと見る可く、現在でも、小堀鞆音や、津端道彥や、松本楓湖や、村田丹陵等の人々は、いづれも倭繪の外形をのみ守つて、內面的に時代と共に新たならんとしてゐる跡は見られぬ。併し、安田靫彥とか、松岡映

丘とかいふ新人達の製作には、漸く在來土佐派の舊型に甘んずることなく、現代人の氣分をそこに描き出して行かうとする風が鮮やかに見えてゐる。靫彦は純土佐の人でなく、映丘は必ずしも内容ある製作のみ示してるわけでないが、兎も角、多少にても從來の倭繪にはなき新意想を盛らうとしてゐるところにその意氣の掬すべきものがある。斯くて、それ以下の新進の人々には、漸く舊套を擺脫して土佐派の描線、著彩を活用し、これに現代精神を發現しようとして居るもの多いが、一體に纎細優美な純日本精神を基礎として成立つた畫派であるから、これが活用は、却つて今の世に適應するところとなるやうだ。現に、映丘の「室ぎみ」などは、その代表作として日本畫壇に一新生面を拓いたかに見えるではないか。これは必ずしも、渠によつてのみ成功したものと云ふべきであるまい。

現在、この派に屬する作家としては、上記諸家の外、美術協會系の高取稚成、大坪正義その他諸氏、學校系の鞆音、映丘に續く、吉田秋光、矢澤弦月その他がある。

四、新代の浮世繪

浮世繪とは何ぞ　浮世繪か、岩佐又兵衞等によつて發端し、菱川師宣、宮川長春、鈴木春信等を經ていよいよ發達し、爛熟したことは既に、述べた通りだが、これは、土佐派の貴族的な風俗畫な

るに對し、中流以下、むしろ下層民衆の風俗畫なる點に於て、廣く、一般の興趣を集めたものである。而して、師宣を初め、春信、春章等の名家出づるに及び、線がきの妙と色調の美と相俟つて、大に世に宣傳された。而して、その普く世にもてはやされたのと、畫風の艶美なるとの關係から、肉筆の外版畫の創始となり、後には浮世繪と云へば版畫を主とするに至つた。

浮世繪は、江戸時代に殊に隆昌を極めた畫派である。當時幕府のお抱へ繪師としては狩野派あり、京都には土佐派あり、之に如ふるに文人畫派の勃興、圓山四條の寫生派流行等各派の勢ひ旺んなりしに、浮世繪はその間にあつて民衆畫派を代表し、江戸を中心として動かし能はざる地歩を作るに至つたのはむしろ異數とすべきである。これ、さきに擧げた諸名家やその後も續出した諸作家の技倆の優秀なるものがあつたからであらうが、一面から考へると、藝術といふものが決して型にはまり、様に入つてそれから拔けられぬものでないことを暗示したのでなければならぬ。

浮世繪の長所短所

何となれば、浮世繪派の描くところは、平常吾々の觸目するところのものをそつくりそのまゝ官能に訴へ、感覺を通して描破するもので、そこに、形式的な拘束もなければ、特殊な技法の約束もないものだからである。これこそ最も自由な、奔放な行き方であつたと云ふことが出來よう。勿論、春信や、春章やまた歌麿や、北齋のやうなすぐれた天才があとから後からと出て來

るにしたがつて、次第にそれに模倣するものゝ出て來たのは事實であり、それが增長するに伴れて本來の特色を失ふ嫌ひはあつたが、それでも他の畫派から比べると餘ほど自由なものであつた。

ただ、この派にあつて寒心すべき事は、その題材とするところのものが、專ら低級な一般の世態であつたから、ややもすると風俗を描くに、挑發的な淫猥、鄙俗のことを主とし、好奇的な官能の刺戟を專らとする風の行はれた事である。その結果としては、藝術としての作品の內容よりも、むしろ題材の選擇、人物の姿態美等にのみ心を惹かれ、ほんとの藝術的感興を逸し去るものが少くなかつた。春信のやうな天才は、自分の感興をよそにしてまで題材や、肉體美に心を奪はれなかつたか知れぬが後の追隨者、殊に歌麿の模倣者などに至つては、內容的にも外形的にも著しく墮落したものが少くない。斯うなると、浮世繪が、何人にも感じられ易く、興じられ易いことが却つて害になるとでも云はうか。時代相を寫すには、もつとも適當した畫法であるにもかかはらず、兎もすると、もつとも低調な、俗惡なものとして卻けられる理由もまたここにあるのだ。

明治の浮世繪

浮世繪の全盛期は、元祿から文化文政頃のつまり江戸幕府の爛熟期にあつた。幕末になつて世間が何となく騷がしくなつたりすると、この方面の作家がどうも落著かなくなつたものと見える。併し、浮世繪の創始以來引きつづいて多數の作家を出し、名手また少くなかつたことは

たしかに江戸時代の偉觀とすべきである。幕末明治に入つて國芳や、その後の芳年が出、芳年の門下からは、今日この派の頭株となれる鏑木淸方や、池田輝方などが出た。なくなつた閨秀の池田蕉園も芳年門下であつた。

さて、今日の浮世繪畫派は、やはり昔のまゝで進んで居るものもあるが、大體に於ては新代のそれとなるべく苦心努力してゐるあとが見える。新代の浮世繪といふのは、何よりも殊更に卑俗な、淫猥な畫風となることを避けるにある。そして、あるがまゝの世態を描き下して成るべく誇張をせず、作者自身は高所にあつて、冷靜に第三者的立場から種々の人物、風景を描かうとするやり方である。この點から考へると、ここにも浮世繪畫派の拘束から放れようとする努力が窺はれるので、今までのやうに、浮世繪と云へば、讀んで字の如く何等か卑俗な題材を通俗的な意味で取り扱はうとしたのに、今これを排せんとする氣味が見えるのである。

現代の浮世繪畫家　現在この派の代表者と見られる鏑木淸方のごときは、わけても、浮世繪を今までの狹隘な境に置くことを厭つてゐるやうに見え、自ら幾多の工夫を凝らして、或は描線の上に、或は色調の上に新らしき意義を表現せうとしてゐるさまが窺はれる。そして、渠等によつて現代の浮世繪は、よほど品格といふものを認められ。あながちに淫鄙な、俗惡なものでないといふことを感ぜ

しめてゐる、婦人の纎手ではあるが、故人蕉園の努力もよほど認めてやらねばならない、また四條派の畑に育つた人ながら京都の上村松園のごとき、やはり新代の浮世繪を描く人と見るが至當であらう。この人もまた力めて氣禀を示すことに心を遺つてゐるらしい。

清方、輝方、蕉園および松園門下等には幾多の新進浮世繪派作家もあり、年方の遺弟にも上記の外、鰭崎英朋、大野靜方その他あり、美術院の同人北野恒富等も新浮世繪派の人と見られる。

五、現在の圓山四條派

圓山四條派の概觀　浮世繪が、人物殊に美人等を主とする當世畫なるに對して、圓山四條派の繪は、山水や、花鳥や、動物、殊に風景を主とした寫生畫だといふことが出來よう。この派の始祖は、云ふまでもなく、寫生派の大家圓山應擧である、應擧はもと狩野派の作家石田幽汀の門に遊んだ者だが、既に支那の文物などがしきりに渡來した時代のことで、また泰西のそれとも間接ながら交渉があつたりしたので漸く頭が科學的になつたのか沈南蘋などの影響をも受けて專ら寫生を繪畫の本義とするに至つた。寫實と繪畫との差異のあることは勿論なのだが、應擧自身は、或はその判別を超えた程度に寫生を重んじて考へたことであらう。

そこに至ると、松村月溪（吳春）は、蕪村に私淑したといふ丈けあつて、幾分衹徊趣味がある。應擧ほど寫實一點張りで行かうとはせずに、そこに幾分か氣分を取り入れようとした。自然、その間に多少の情趣の差異があるは免れぬ。應擧の創始した圓山派と、吳春のはじめた四條派との間には、かうして幾らかの距りがあるのである。換言すると、應擧のそれは自然を見るに、あまりに固く一本調子であり、吳春のそれはよほど樂々と、自由に觀照せんとした跡が見える。併し、どちらも京都に起つて、年代も極く近く、わけて吳春は、應擧に師事したも同じい關係にあるので、この兩派の畫風は極めて接近して居り、先づ先づ同じ流れと見て不當でなからう。

兩派の長所短所

圓山派からも、四條派からも、應擧、吳春の後幾多の人材が出てゐる。蘆雪、狙仙、源琦等は前者から出て最も特色のあつた人々、景文、豐彥等は四條系の錚々たるものである。そして景文の後から鹽川文麟が出、文麟の後に幸野楳嶺が出、楳嶺門からは現在の大家たる竹內栖鳳や、都路華香、故の菊池芳文。谷口香嶠等幾多の俊才を出してゐる。蘆雪、狙仙、源琦、景文等によつて知られる如く、この派の寫生といふものもまたなか〳〵多方面である。卽ち或るものは花鳥によく、或るものは動物によく、或るものは人物によく、或るものは風景によいといふやうなわけである、この派の長所は、要するに狩野派の如く拮屈傲牙ならず、土佐派の如く歷史的ならず、文人畫の如く氣

韻本位ならずと云つて浮世繪派ほど隨俗的ならず、且つその寫生の範圍も美人畫や人物のそれに限らないで極めて廣汎なところにあると云へよう。

吳春は、さすがにこれ等の特色を最も鮮やかに表現したものであつた。その後の諸家も、それぞれに特色を表現するに遜色なきものであつたが、而も概して或る種の題材に限られるといふ風であつた。幸野楳嶺の如きも、山水花鳥に巧みではあつたが、なほ何となく一種の習癖を脫し難かつたやうである。然るに、近世四條派の大家として今の栖鳳起るに及びその畫風は、まことに各流各派の特色を綜合し、四條派のそれに跼蹐せざることを示した。一言に盡すと、渠の作風は、何物にも囚へられないのである。四條を基とし、寫生を本位として生れて來たものなることは勿論だが、次第にそれから換骨脫胎して、殆んど全く狹小な四條や圓山の世界を超脫し、或は南畫風を加味し、或は雪舟の法を採り入れ、或は浮世繪の長所に學び、進んで西洋畫の描法までも應用してゐる。されば、その筆は、四條派のそれとしては、むしろ輕妙に過ぐるくらゐ、著彩もまた多趣多樣である。これは、たしかに栖鳳自身の長所であると共に、吳春以來の四條派の妙味を更に開放的にしたものだと云へよう。ただ難を云ふと、その筆あまりに輕くして、落著いた氣品に乏しく、古來の筆格を著しく損して居ることだ。

近代的傾向

そこに至ると、栖鳳の近代的傾向著しいのに對して、古格の準繩を保つてゐ

るのは、故芳文などを推すべきである。香嶠、華香には癖があるが、大分超越したところもないでない。芳文の後に、今の菊池契月あつて、可なりに近代風な畫趣を加へ、栖鳳よりは鈍重だが、もつと深い情味を出さうとして力作してゐるのは注目すべきである。

栖鳳の門下には、多士儕々だ。橋本關雪は、むしろ南畫家といふに近く、筆意も韻致を帶びて極めて豪健なところがあり、この方面に於て殊に卓越して居る。土田麥僊は、國畫創作協會の主盟であるといふばかりでなく、人物も智的で、藝術に對する根本的理解が深いから、人物を描いても、花鳥山水を描いても、必ず自然の核心をつかみ、その精髓を現して居る。近ごろ、帝展の審査員となつて栖鳳の後繼者を以て擬されてる西山翠嶂は、まるで師匠そつくりの繪を描くが、それよりも鈍くて、輪郭はいくらか大きい。

京都を中心として　こんな風て、現在の四條圓山派は主に京都の作家を網羅してゐる。系統こそ違へ、栖鳳と並び立つ大達者の山元春擧も圓山派の徹山から出た明治初年の大家森寛齋の薫陶を受けたもので、これは四條派の栖鳳等に比べると寫實に即し過ぎて低徊趣味を缺けども、筆致は堂々、正しく大家の趣きがある。この人にも少し餘裕のある筆意があつたらとは、いつも世人の言ふところだ。春擧の門からは、川村曼舟や、川北霞峰などを出してゐるが、曼舟が中て最も師の風を受けついでゐ

ると言ふべきだ。

東京の諸家 東京側て、この派の系統を受けたのは、故の東京美學術校教授帝室技藝員として時めいた川端玉章である。玉章は、應瑞の門下から出た中島來章の弟子で、一時は雅邦と共に日本畫壇の兩元老と推され、勢威をさ／＼及ぶものなかつた程である。惜しいかな、餘り濫作をしたのと、貨殖の慾に富み過ぎて居たので、眞の力作を製作すること稀れで、歿後の名は遠く雅邦等に及ばぬが、併し圓山派の作家としてはやはり一特色を具へた人である。この人の門下から、今の結城素明や、田中頼璋や、山田敬中や、島崎柳塢や、平福百穂などが出た。中にも、素明は西歐藝術の長所を採り入れて山水花鳥の描寫に一特色を發揮し、百穂は文人畫風な畫趣を加へて最も超脫した筆意の妙を示して居る。二人ともに出藍の譽れあるものと云ふべく、斯くして四條圓山の畫風は、いよ／＼自由に新生面を開かれてるのだ。素明の後には、美術學校出身の幾多の新進が控へてゐるのも注目すべきである。

六、衰微の南宗畫派

南畫の勃興 文人畫派は、享保年間伊孚九が長崎渡來の後、「我國」に徐々發展した。徐々

と云ふよりむしろ急激にと云つた方が當つてるか知れぬ。これは、支那では唐宋の時代から盛んだつたもの、我國にては伊孚九から、祇南海、柳里恭といつたやうな人々を經て、大雅堂、謝蕪村に及んで初めてその根幹を固くしたのだ。文人畫派また南宗畫派とも云はれ、一般にはむしろ後者を以てするが通りのよいことであらう。

大雅堂と蕪村とは、少くとも我國の藝術家としては、稀れに見る超越的な人格者であつた。渠等にあつては、生活は、全く一種の精神的、主觀的なもので、それ以外に何ものもないと云つてよかつたのである。されば、その作るところの藝術も勿論これが反映であつて、精神を閑却し、理想を度外視した皮相的作品は渠等の初めより齒ひしなかつたものである。そこに氣韻が現はれ、雅致が漲つたのは、もとよりその所である。唐宋時代に於ける支那の南宗畫が著しく精神主義に傾いたのは、何人も知るところであるが、我國に於ても大雅や、蕪村によつてこの理想がよく行はれ、繪畫上の精神主義が決して架空なものでないといふことを證據立てられたのである。

南畫の特色

大雅、蕪村によつて確立した文人畫の强みは、それが決して目前皮相の事相に拘泥せず、悠々として天地の趣きを樂み、日月の光りを喜ぶと云つた風な雅致に富んでゐるところにある。これを畫家の方に云はしむるも、所謂職業的な作家とはちがつて靜かに天地自然を樂み、味

はふところにその畫が成り立つのである。それ故、これは、狩野派の宮畫のやうに固くるしくならぬのは勿論、土佐派のそれのやうに細かい有職故實などにからまれる要なく、浮世繪や、四條圓山派のやうに卑俗に墮し寫生に囚はるゝところがない。自由、放膽、不羈、磊落あらゆる意味で精神的に解放されたもの、伸び々々したものがこの派の傑れた作品である筈なのだ。從つて、大雅その人は最も資性の磊落な、名利に頓著なかつた人であると云はれるし、蕪村はまた性情磊落、襟度廣濶な人だつたと云はれる。かうした性格の特長が、同時にその作品の特長ともなつて現はれたことなのである。

二大家に續いて、十時梅崖、皆川淇園、村瀨栲亭、岡田米山人、浦上玉堂等の諸名家も相次いで現れ、これ等の人々また何れも文人畫若しくは南宗畫としての特色を可なりに發揮したことである。米山人は、殊にすぐれた氣韻を具へて居た。が、間もなく天保時代の來るに及んで、この畫派は正に黄金時代に達したのである。

南畫の黄金時代　黄金時代の雄者として最も推重されるのは、云ふまでもなく江戸の谷文晁である。渠は、初め、狩野土佐等の筆法を學んだのであるが、慊らずして宋元明等の古名家に參じ、嚴密に云ふと南宗畫ではなく、南宗北宗の兩派を參酌綜合して一新體を立てたのである。そして、その該博な智能と、巧緻な筆技と、並びに横溢した世才とによつて、當時の人望を一身に集め、苟くも畫

家たらんものは、狩野派浮世繪派以外は、悉く渠の門に馳せざるを得ないほどに著名になつた。實際、それ丈けの實力も具へてゐたのである。有名な田能村竹田も一目を置き、渡邊崋山は客分にもせよ贄を取つた形であり、立原杏所、高久靄崖、岡田閑林、佐竹永海等門下に多士儕々たるものがあつた。しかし、記憶せねばならぬのは、文晁は所謂南北合派の人であつて、徹底的に氣韻や、精神をその作品に表現し得た人格者ではない。

そこへ行くと、九州の田能村竹田は、純然たる南宗畫家若しくは文人畫家と云はるべき人であつた。それ丈け、渠の作品には氣格の高くして、雅致の優れるもの多く、全く元代の南畫家と相伍して下らなかつたので、文人畫派の正系としては、文晁にまさること數等であつた。

竹田に近き人に渡邊崋山があり、この人もまた堂々たる文人畫家であつた。ただに、畫家としてすぐれたのみでなく、忠臣として國士としても尊敬すべき人格者だけあり、その作品に極めて高遠な氣品の掬すべきものがあつた。竹田、崋山の如きは、共にこれ文人畫家として理想的人格者といふべきであらう。

この他、崋山の後には椿山あり、半香あり、椿山の後に渡邊小華あり、野口幽谷あり、別に文晁に師事した田崎草雲あり、いづれも錚々の名を馳せた人々である。竹田の門からは、高橋草坪、帆足杏

雨や、その養嗣となれる田能村直入が出た。この中、直入は草雲や、幽谷と共に、明治初期の南畫大家として、大に活躍したものである。

明治の南畫家

斯くの如く、南宗畫壇は、その起れるや我國にては最も新らしい時代であるに拘はらず、忽ちにして疾風迅雷的にその羽翼を伸ばし、大に美術界の勢力となつた事である。而して、大雅、蕪村といひ、文晁、華山、竹田といひ、一代の大家たる人々は、正しく支那の名家に比しても遜色なき異彩を放つたものである。否、直入、草雲、幽谷、和亭等明治になつてからの大家でもなほ且つ冒し難き一種の氣概を具へて居たのである。

だが、惜むらくは、草雲、幽谷、直入等の歿後、眞の南宗畫家と稱さるゝ人が甚だ少い。いやその人は必ずしも少くないのだが、一世に卓越した人物は稀れなのである。その中に草雲の高弟に小室翠雲あり、幽谷の門中から松林挂月の出たのは異とすべく、亦た京都に文人畫家の大家たる富岡鐵齋や田近竹邨、山田介堂、水田竹圃等の諸家あるは、今の南畫壇に光彩を添へてゐるものと云ふべきだ。翠雲は中でもすぐれた技能を有し、名手としてはなかなか推重す可きだが、文人畫家たるに必要な學識は豐かだと云はれぬ、挂月はこれに反して餘りに識見を誇るに急で筆技は彼に及ばぬと云はれる。

併し、この二家が各々名家の跡を立てゝ南宗畫壇のために氣を吐き、帝展にも揃つて審査員となつて

居るのは心强い事と云ふべしだ。鐵齋は、現代には稀れな奇才を抱く人で、その特異な畫風に憧憬し渠に追隨する作家が尠くない。不思議なことにこの人の作風は、南畫として最も清新な分子を含んで居るのだ。

なほ、文晁が南北合派を試みたと相近い傾向を示したものは、明治畫壇に現はれた荒木寬畝の一門などであらう。渠は寬畝の門より出たので、寬畝の後には嗣子の十畝や、池上秀畝あり、共に合派の一種の行き方にて、花鳥を主として共に傑れてゐる。この一門の數はなか〳〵多く、いづれも本來花鳥を專門とするものである。文晁の正系を受けた佐竹永海の後には、今永陵があり、同門に岡田蘇水福田浩湖等がある。

七、新傾向の畫派

美術院一派　以上述べたところで、狩野派土佐派を初め、畫壇の各流派それぞれに發達の經路や、出發點はちがつて居ても、今日では、何とかして自由な、潑剌な生面を拓かんことに力めて居る事は疑ひないのである。その急先鋒としては、明治畫壇に革新の蜂火を擧げた岡倉天心、美術院一派があつたことを忘れてはならない。而して、この派の最初の作家として世に響いたのは、云ふま

でもなく。芳崖と雅邦とである。

この派の作風は、概していふと、流派に拘泥せず、樣式に依らずして、ただただ最も自由な、清新な作品を內容的に製作せんとしたところにあるのである。されば、これに對して精神主義の日本畫といふやうな名稱も冠せられた位、概して、內容本位なのだ。從來の日本畫といへば、大抵形式的で、樣に依つて胡蘆を描くといふ例になつて居たのを、これは大に趣きを異にして、樣式はどうでもよい外面はどうでもよい、ただ內容をして豐富ならしめるにあると唱へたのである。つまり、何等かの想意や、觀念を表現しようといふ事に重きを置かれたのだ。芳崖や、雅邦の作品が自然在來のそれとは面目を異にするものあつたのは勿論である。そして、これ等の作家は自分自身が新傾向の作品を殘したのみでなく、よく後進を誘導する事に力めた。不幸にして芳崖は、美術學校の開かれる年に夭折したので、あまり後進に接する機會もなかつたが、雅邦は自ら同校に入つて敎鞭を執るの傍ら、自宅に二葉塾を起して大に世の新進を養成した。故人となれる寺崎廣業を始め、橫山大觀、下村觀山、川合玉堂、菱田春草等の諸名家は、いづれも間接に又は直接に皆その薰陶に接したのである。實に新興日本畫は、此の二人があつて初めて開けたと云つてよい。

寺崎廣業一派

中にも、廣業は稀世の大家、渠はもと平福穗庵を先輩として世に出でたが、

もとより獨特の才能を有したから、古今の名品に接して刻苦勵精、終に彼の如き大業を成すに至つたのである。そして渠の描いたところは所謂狩野でもなければ、土佐でもなく、圓山四條に偏してるのでもなければ、南畫北畫のいづれに局してるのでもない。全く自由自在、觸るゝもの悉く採り用ひたといふ風なのだ。それ故、渠の作品は、殆んど渾然として一切の含蓄を示して居たので、その廣汎深遠な作風は、全く時流に超越して居たと云つてよい。從つて、渠に直接師事した野田九浦、町田曲江、水上泰生、蔦谷龍岬等の諸家がそれぞれ行き道を異にする如く、美術學校での渠の門生また愈々新たなる努力を示すこととはなつたのである。畫材に就てそれを見るも、山水花鳥人物土佐風のもの、狩野風のもの、寫生風のもの眞に千差萬別である。

大觀觀山の一派

横山大觀と、下村觀山とは、雅邦によつて美術學校時代全然指導されたものである。而して、大觀は精神主義の作風を主張すること最も急、天心の信認も特に大きかつた事は推想するに難くない。て、渠は夙くから理想的な題材を選んで製作する事に力め、前期美術院時代の「屈原」のごとき、大に世の問題となつたのも、全く從來の類型的作風を打破したからであつた。その再興美術院に頭領たるに及んで一層急激な指導振りを、院の新進作家に感ぜしめて居るやうである。觀山は、これに對して餘ほど穩健であり、木村武山等と共にむしろ著實な、技巧本位な製作を發表して

ゐる。けれども、時には、「弱法師」のやうな內容、外觀共にすぐれた力作を出して世を驚かす事もあり、さすがに、芳崖、雅邦歿後の新畫壇を脊負つてゐる一人だとは肯かれる。而して。大觀が、廣業と同じくあらゆる流派に通曉して、各種の題材を內面的に觀察表現するのに對し、觀山は、同じく得意の才能を傾けてこれは寧ろ形式的に堂々たるものを製作するのは、確かに好箇の對照である。院の同人、靫彥、古徑、靑邨、武山を初め、荒井寛方、山村耕花、大智勝觀、富田溪仙、長野草風、筆谷等觀、中村岳陵その他の面々いづれもこれ等二本尊の進む道を步調を一にせんとしてゐるのは、現畫壇の壯觀である。

川合玉堂の一派

玉堂が、幸野楳嶺門から出て、京都を辭し東京に上ると、そのまゝ雅邦の門に入つたのは、渠が夙く時勢を洞觀するの明あつたことを示すものである。楳嶺門の出身でも、栖鳳の如く偉大な作家になるものもあるが、併し栖鳳のは全く古今に誇るべき稀代の技巧に依るのであつて、あれ丈けの智巧なくては相伍する能はぬのだ。玉堂は、必ずしも栖鳳の輕妙さを有たぬ人、若し漫然京都に止まつて、逡巡決するところなかつたなら、今日の如く東都畫壇一方の霸者として振ふ事は出來なかつたか知れない。殊に、渠の如く溫厚篤實、みだりに新奇の世態に投合することの出來ないものに於てをやだ。それが、決然として雅邦門に馳せ新傾向の日本畫に就いて大に薰陶されるとこ

ろあつたればこそ、元來平凡ならぬ頭で終に新時代の理想を咀嚼し得たのであらう。渠の傑作「二日月」の如きは、全くかうした穩健な立場から、刻苦して生れたものである。そして、渠の後半の藝術は、全く堅實な、趣味に充ちたものとなつた。その門下から、山内多門を初め、平田松堂、長野草風、井澤蘇水等を輩出せしめたのも故なきにあらずだ。

第五編　現代の洋畫及彫刻

一、洋畫及彫刻界の概觀

日本に於ける西洋畫　西洋の畫法が日本へ入り來つてからも既に久しいもので、殊に明治維新後は急速なる發展と進歩とを見て、今日では本場の西洋諸國へ持ち出しても決してひけを取らないだけの優れた作品を造る人も少なくはない。古くは黑田淸輝あたりの畫がサロンに陳んで以來、最近にもパリのサロンやロンドンのアカデミーといふ、世界的の本場に入選陳列されるものが年々一つや二つは必らずある。今は日本で、日本人の西洋畫は、異人の眞似をしてゐるに過ぎない、向ふへ持つて行けば痴童の惡戲位にしか見られないなどゝ、自嘲してゐる時代ではない。國際聯盟や勞働會議には味噌をつけても、流石は美術國、これだけは押しも押されもせぬ出來である。それは確にさうである、が、事實、一般にさう云つて仕舞はれないのは、後進國の淺ましさ、今言つたやうに西洋人にひけを取らないやうな立派な洋畫を描く人はほんの數へるほどで、まだ〳〵なか〳〵、總括しての成績はお恥かしい次第である。西洋人が日本人の洋畫を見ると、皆未完成の物に見えるさうだ。これは日本人にこ

れだけよりも觀照の力がないといふ理由もあらう。元來日本人の性格が、淺く輕く、よく言へば淡白に物を表現する癖があるからでもあらう。何れにしても西洋人の眼には、まだ〳〵足りないやうに思はれるのだ。又同じ日本人でも、西洋に居て、バタや牛肉ばかり食つてゐる間は、なか〳〵見られる畫が出來るが、日本へ歸るとだん〳〵惡くなつて、遂に本の杢阿彌になつて仕舞ふとは、衆口の一致する所である。これも、よいモデルがないとか、グループが惡るいとか、色々の辯解もあらうが、兎に角、日本人はまだ本質的に西洋畫化してゐないといへよう。けれども、それならとて此の儘では濟まされぬ、世界の五大國の一つともなつたものが、繪畫だけに、國粹とか何とか威張つて日本風の畫のみを描いて居つては追つつかない。それはお互に助け合つて、一つ西洋畫の繪畫を發達させたいものである。

日本に於ける彫刻

彫刻についても同じこと。實は近來まで、日本人には彫刻の本當の趣味が解らなかつた。恐らく今でも、所謂彫刻の面白みを十分に理解してゐる人は少なからう。西洋畫だとても、保守的根性の强い、自然を見馴れぬ、又は人體に興味を感じないやうな人には、容易に解らないであらうが、彫刻に至つては尙更さうである。それもその筈、つい近頃まで、彫物といへば莨入の根附か、せいぜい刀の小柄や鍔に見るだけ、或は欄間とかお寺の破風とかに彫つてあるものが、彫刻だ

と思つてゐたのだから、無理はない。けれども、日本にも昔から立派な彫刻があつた。それは主に奈良朝以來の佛像で、桃山時代からは社寺の裝飾にも用ひられて來た。無論近來でも、佛像及び社寺の彫刻、或は置物として金や木で彫刻をやらぬでもないが、一つは彫物師の輕ぜられたのと、また見るべき彫刻をやる人がなかつたのとて、それ等は我々に一向、彫刻といふ一つの藝術的の感興を與へなかつた、けれども今日はさうでない。明治維新間もない頃には、高村光雲翁は、裏長屋で彫物職工をしてゐるのを拾ひ上げて、美學術校の教授にするといふやうな逸話の種もあつたが、今では高村翁も勳何等正何位かの帝室技藝員、立派な藝術家である。況んや引き續いて西洋の技法が入り込んでからは、繪畫に日本、西洋の區別が出來たやうに、彫刻にも從來の木彫と渡來の塑像とが並立し、塑像家がどし／＼銅像の原型を造れば、木彫家もまた近頃は塑像の法を應用して、見るべきものが出來るやうになつた。床置きや銅像とかいふやうなものだけではなくて、美術品として見るべき優秀な作品がある。と言つても、事實これも亦、まだ／＼これからである。西洋にはロダンだの、マイヨールだのメストロウイッチだのと、現代にも一流の彫刻家があれど、無論それ等と太刀打ちの出來さうな人は一人もない。情けない哉だ。しかし我々が大に奮發して、さういふ大藝術家を輩出させなくてはならぬ。

洋畫及彫刻の將來

次に少し言ひたいことは、西洋畫や彫刻は、賣れないといふことである。義

理て買つても始末に困るといふやうなことを言つて、買つて吳れる人が少ないとかは、展覽會などで吾々も屢々耳にする。これは一應尤もな次第で、元來が小說や詩とは違つて、繪畫や彫刻は應用美術としての意義も可なり重いものであつて、その發達の經路でも、現在の有樣でも、應用を離れて繪畫彫刻の存在はないと言つてもよい位である。ところが、日本で繪畫の應用といへば先づ掛物で、然らずんば屛風か襖に張りつけるのである。然るに西洋の油繪では差し當り床にかけることも出來なければ屛風にも一寸困る。襖には尙更出來ない。尤も近頃では、悧好に考へる人も出來て、洋畫を二枚折りに仕立てたり、床にふさはしくしようとしたりしてゐるが、まだ十分に物になつては居ない。今のところ、西洋の畫は日本の座敷に適用し得ないのである、また彫刻は床の上の置物が主である、銅像や佛像といふものは、極めて特殊な用途に屬するもので、何人にも應用は出來ない。そこで、先づ西洋の畫ならばせいぜい額にしてかける。また彫刻なら書齋か應接室の置物といふ外は用途のないのは事實であらう。けれども今は吾々の住宅の有樣も次第に變りつゝある。西洋風の建築がどしどし建つ。殊に近頃は官廳、銀行、會社の大きいビルデング、ホテル、劇場といふやうなものが出來ると、それを裝飾するに日本畫は不適當である。第一、多くは調子が弱い、そして壁畫や額には、西洋風の畫の方がうつりがよい。そこで今後は何うしても、需用供給の點から見て、西洋畫がもつと盛に用ひられ

る運命になる、また個人の家屋でも今後假令日本建築にしても、西洋風に近い間取りを多く見るやうになり、應接室書齋などは何うしても、西洋畫を置かねばうつらなくなる。斯ういふ次第であるから今後は西洋畫が賣れないとか、應用出來ないとか云ふことも無くなるであらう。彫刻も同樣で、これまでとて床置物に彫刻は可なりに用ひられたが、今後はます〳〵應用せらるべきである。何時までも食はず嫌ひをして、西洋畫や彫刻は不向きだといふやうなことを言つてゐたのでは、時勢におくれた舊弊人になつて了ふ、故に先づ自ら進んで、これ等のことを知らなくはならぬ。然らば、現代の西洋畫及び彫刻の有樣は何うかといふに、これはゆる〳〵と次に述べることにする、

二、現代洋畫界の分野

洋畫界と黨派　現在の洋畫界にも、一と頃のやうにはつきりした分野があるだらうか？左樣あるやうにも思へれば、ない樣にも思へる。成る程、白馬會と太平洋畫會とが對立した、十餘年前のやうな鮮明な色彩の區別は見ることが出來ない。けれども、人間には團體的精神といふものもあれば感情上の好き嫌ひ、行きがゝり上の去就、更には自己擁護の爲めの離合集散といつたやうなことて、それぞれ黨派心が働くものであるから、幾らか分野的の色を見られぬでもない。けれどもそれをはつ

きり分けることはなか〳〵困難である。政界の分野などと同じことて、政友會、憲政會、國民黨とはつきり分つてゐるやうではあれど、尾崎行雄氏のやうに政友から憲政へ宿換へしたのもあれば、後藤、仲小路と言つた、憲政を出て無所屬でゐるのもある。況んやその間には灰色も隨分多い。美術界はそれどころではない、太平洋の研究所にゐて、更に美術學校へ入つて黒田氏の配下になるとか、或る團體では太平洋分子と同居し、同時に他の團體では白馬會の人達の仲間入りをしてゐるといふやうな例は頻々としてあるのだから、大將株を除いては、今のところ、諸色雜然（ざつぜん）として入り交るといふべきだ。それも文部省で展覽會を開き始めてからは、これが中心となつて、一方にこれに反對する團體も出來るといふ有様で、以前の二派竝に雜然と分ち得ないことになつた。同じ大平洋系の人でも、文展に止まるのもあれば、美術院へ逃げて行つたのもある、二科會に立て籠つた人もある、千差萬別といふ外はない。だから、白馬會と太平洋畫會とが年毎に睨み合ひをして、門外漢でさへも紫派と脂派（やにはだ）といふ言葉を知らない者はなかつたといふ時代とは、餘程趣を異にしてゐる。

文展派、學校派　殊に分野と言つても、見方に依つて色々になる。近くは文展派（帝展派）と非文（帝）展派と二つに分けるのが最も解り易からう。また美術學校派非美術學校派とも分つことが出來るであらう。勿論、兩方共人爲的にはつきり區分することを得る譯ではない。先づ文展派、今なら帝展派

には、如何なる人々が屬してゐるかは、去年の展覽會を見た人にはおのづから首肯されるであらう。それに對して、非文展派……一口に言へば、文（帝）展に出品せない人々では、これをまた二つに分けて二科會派と院展とにでゝ致すべきであらう。さうすると、一方の帝展は更に舊白馬會派と太平洋畫會派とに分けて見なくてはなるまい。尤もその外に、どちらの展覽會にも出さず、團體にも關係せぬといふ人も、一二ないではないから、これを獨立派とでも言つて置かうか。無論、それが第三黨を造つてゐる譯ではない。

複雜した分野關係　一體斯ういふ風で、

帝展派 ┤ 舊白馬會派
　　　　 ┤ 太平洋畫會派

非帝展派畫 ┤ 院展派
　　　　　　 ┤ 二科會派
　　　　　　 ┤ 獨立派

とでも區分すればされる。しかし美術家の分野といふものが元來、政治家や角力取りのそれ等と同じやうなものではないだから、まことにはつきりさせにくい。帝展のやうに、別に團體でも何でもなく國家の設けたインスチチユーションであつて、來る者は拒まず去る者は追はず主義を標榜してゐると

ところへ、日本畫のやうな流派系統、或は師弟關係といふやうなもので緊密に繋ぎ合つてゐる譯でもないから、極めて漠然としたものである。さうかと思ふと、院展派——即ち日本美術院の洋畫部のやうに、同人が結束してゐるところもあれば、二科會派、即ち二科會のやうに會員組織の團體になつてゐるのもあるのだから、色々だが、要するに帝展に立て籠つて、帝國美術院會員、帝展審査員などになつてゐる連中と、日本美術院同人又は二科會の會員となつてゐる人達は、現在に於いては劃然たる城廓を構へてゐると言はなくてはなるまい。其處へ出品する人達は、帝展は勿論、院展でも二科でも、來る者拒まず主義であるが、しかもそれ〲に色彩とか特色とかいふものがあつて、帝展に向きさうな畫を描く人は帝展へ出品するし、院展向きは院展へ、二科展向きは二科展へと、おのづからお得意樣もきまつて來るわけである。尤も、帝展がアカデミックなのに對して、院と二科とはアンテパンダンといふ色合ひであるから、同時に院と二科とへ出品するといふやうな人もないことはない。——さて、それ等の勢力であるが、先づ頭數で言へば、帝展の、帝國美術院會員、つまり元老が四人と、帝展審査委員が九人で、十一人、これに對して日本美術院の同人は六人、二科會々員は十一人である。しかし出品者及び入選者の數は、帝展の百に對して院展の二十、二科展の二十位な割合になるであらう。故に、世間的に見ると、三派鼎立と言はれぬこともないが、先づ、帝展に對して、院展と二科展

とて、相對抗して行けると見てよい。院と二科との出來た動機からしてが、文展に反抗したのに起るのだから、その位に見て置いて差支あるまい。

帝展の洋畫家

そこで、帝展の洋畫であるが、これは言ふまでもなく文展の洋畫の繼續で、ただ名稱を新にしたのに過ぎない。文展が帝展になつたからとて、內容には何等の變化も見なかつたのである。元來、十四年前に文展が出來た時には、政府で、國家的に、美術界の大同團結を圖らうとしたので、また開設當初にはその實を揚げ得たのであるが、丁度日本畫壇に於いてその後幾多の形勢の變化を見、分裂の結果を呈した如く、西洋畫に於いても最初はうまく行つて、鎬を削り合つた白馬大平洋の融合も先づ先づ出來たものゝ、永久しく滯つて何とやら、次第に停滯氣分になると、內部に分裂を生じたのである。そこで第八回の時に、日本畫に一時試みた如く、文展の內部にも一科と二科とを區分し、一科へは比較的保守主義の審査員を置き、二科は別に新人を以て審査員に任命するやうにと、有志から文部省へ請願書を出したのである。然るに當局はこれを顧みなかつたから、所謂新人——つまり文展洋畫部の空氣に慊焉たる人々は結束して文展を去り、別に二科會といふものを組織したのである。ついで、その二科會的傾向の人々の中から、更に文展へ寢返りを打つものも出來れば、院展へ走るものも出來たといふ始末で、一時はなかなかの動搖であつた。さうした結果、文展には所謂新

人の幾分を奪ひ取られて、少しは淋しくなつたけれども、若い人で文展に止まつて氣を吐いてゐる人も少なくはないので、その後著々として城壘を固め、今では少康を得てゐるのである。

白馬會と二科會の系統

――では、文展――帝展内に於ける白馬會と二科會との關係は何うかといふに、これはまた近來益々微温的になつて、元老或は審査員間に、たゞ惰力的にさうした心持が殘つてゐる位に過ぎない。何しろ白馬會といふものは、今日は既に存在してゐないし、太平洋畫會も、存在こそすれ、昔の勢力はないのである。たゞ、舊白馬會系統の人は、東京美術學校に立て籠つて、太平洋派に對して、官學派とでもいふ樣な形勢を保つてゐる、のみならず、國民美術協會なるものも、もともと此の派の仕事であるから、今でこそ國民美術は餘り盛でないけれども、舊白馬會系が太平洋系を壓倒しつゝあるのは事實である。これは一面に、太平洋その物が分裂したからでもある。舊白馬會も、分裂はしてゐるが、大頭株は美術學校、國民美術、帝展などを通じて比較的結合されてゐるに對し、太平洋では舊人は帝展に立て籠つてゐるに、新人には或は二科へ走り、或は美術院へ行つて、團結といふものが行はれてゐない。その爲めに、益々太平洋系統の色彩は淡れて行くのである。そこへ新しく出て來る人は、多く美術學校の系統に屬してゐて、太平洋系ではない。――ではあるが、然らば、舊白馬會系、美術學校系といふやうなものも、はつきりした分野を見ることが出來るかといふに、さう

でもない様である。殊に今では美術學校を出たといふことが、畫家になる上に左までの權威でないのだから、傾向を異にし、性癖を同じくせざる人達、わけて變人の多い洋畫家達は、思ひ〳〵の方向へ走り去つてゐる。

美術學校出身者　そこで、帝展の中堅をなす青年洋畫家については、白馬會系、太平洋畫會系と分けて考へるより、美術學校出身者と非美術學校系とに分けた方が便宜の様である。所が、さうすると、何しろ益々アカデミックにならうとしてゐる帝展だけに、學校出身者の方が遙に多い。況んや帝展の幹部連が大部分美術學校系統なのだから、勢ひさうならざるを得ない。試に、美術學校初期以來の卒業者の中、名を知られた人達を擧げて、それと帝展——文展との關係を見よう。

明治三十年　△和田英作
明治三十一年　△白瀧幾之助
同　△小林萬吾
同　△北蓮藏
明治三十二年　△赤松麟作
△山本森之助

明治三十三年　△中澤弘光

　　　　　　　△矢崎千代治

明治三十四年　●倉田白羊

明治三十五年　佐藤均

　　　　　　　⟁岡野榮

明治三十六年　⟁小林鐘吉

　　　　　　　△跡見泰

　　　　　　　⟁橋本邦助

明治三十七年　●熊谷守一

　　　　　　　⟁和田三造

　　　　　　　青木繁（歿）

　　　　　　　△兒島虎次郎

　　　　　　　●山下新太郎

明治三十八年　●齋藤豐作

明治三十九年

△辻　永

●森田恒友

●山本　鼎

明治四十年

△寺崎武男

△南　薫造

●正宗得三郎

△松山省三

明治四十一年

△太田喜二郎

⟁齋藤五百枝

明治四十二年

△金山平三

●小林徳三郎

明治四十三年

△田邊　至

△加藤靜兒

田中　良

明治四十四年

山下釣
△新井完
●長谷川昇
△香田勝太
●近藤浩
●九里四郎
△山脇信德
△安宅安五郎
岡本一平
中野營三
△富田溫一郎
△鈴水良治
△大野隆德
●横井禮一

明治四十五年

△小寺謙吉
御厨純一
△神津港人
北島淺一
△佐藏哲三郎
工藤三郎
△清原重一
△片多德郎
◉萬鐵五郎
野元義雄

大正二年

◬五味清吉
△熊岡美彦
△吉村芳松
△牧野虎雄

大正三年　●小●出●楢●重●
大正四年　△大●久●保●作●次●郎●
　　　　　●鍋●井●克●之●
大正五年　△河●井●清●一●
　　　　　△清●水●良●雄●
　　　　　△高●間●惣●七●

美術學校の出身者　上に擧げた、△印あるものは、現に最近帝展に出品した人達で、◬あるものは、嘗て文展に出品し、今は出品せざるか又は中立の態度を取つてゐる人達である。卽ちこれ等は帝(文)展派と目すべき、美術學校系統の人々とせねばならぬ。●印あるは、嘗て文展に出品したと否とに關はらず、現在にては去つて美術院若くは二科會の人となつてゐるが、それは御覽の通り極めて僅少であつて、大部分は先づ帝展側の人と言はねばならない。しかも、會員、審査員には他に黑田、岡田藤島、長原の四氏が、美術學校の敎授であり、以て會員、審査員、推薦、特選、若しくは舊二三等、褒狀を得た人達の大部分は美術學校に關係ありとしてよい。

舊太平洋畫會の人々　しかし、一つの勢力として見る時、帝展——文展内の、非學校派の色彩ある

人々も決して少なくはない、例へば

太平洋畫會

中村不折（會員）
中村彝（推薦）
中川八郎（審査員）
松岡壽（舊審査員）
石川寅治（審査員）
吉田博（舊審査員）
高村眞夫
永地秀太
滿谷國四郎（審査員）
岡精一
渡邊審也
河合新藏
丸山晩霞

鹿子木孟郎（舊審査員）
寺澤孝太郎
齋藤與里（特選）
安田稔
佐々貴義雄
池田永治
吉田ふじを
藤島英輔
三上知治
巖崎精起
磯邊忠一
石井柏亭（二科）
坂本繁二郎（二科）
小杉未醒（美術院）

此の中、後の三氏は別團體へ走つてゐるが、兎に角此の人々も盛んである。

別系に屬する人々

又太平洋以外の系統に屬する人々を拾つて見ると、

石橋和訓（推薦）
都鳥英喜
池田治三郎
石川欽一郎
埴原久和代

等の諸氏がある。以て帝展內の分野の大體を盡したものとして、次は

非帝展派の分野

であるが、先づ二科會では、

大正三年互選されたる鑑査委員

石井柏亭
大野隆德（脫會）
田邊至（同）
津田靑楓

梅原龍三郎(脫會)
九里四郎(同)
柳敬助(同)
山下新太郎
小杉未醒(脫會)
有島生馬
齋藤豐作
坂本繁二郎
岸田劉生(脫會)
湯淺一郎
南薰造(脫會)
安井曾太郎
正宗得三郎
森田恒友(脫會)

大正四年加入

大正五年加入　　熊谷守一

大正八年加入　　藤川勇造

卽ち最初の創立當時には、此の外に藤島武二氏も、此の派の首領の如く目されてゐたものが、文展反抗の旗幟が鮮明となると同時に、此の團體を脫し、八月には文展の審査委員に任ぜられたりしたので十五名の鑑査委員の中、七名のみ止まつた。そして現在合計十一名の會員を有する。これに出品する主な人々の名を擧げると、以上の會員の外、昨年の展覽會には、東郷青兒、鍋井克之、林倭衞、萬鐵五郞、横井禮市、海老名文雄、國枝金三、黑田重太郞、濱田葆光、硲伊之助の十氏を新に會友に推薦してゐる。又樗牛賞を得た小出楢重がある、茨木猪之吉、埴原久和代、恩地孝四郞、龜岡崇、中川一政、九里四郞、兒島喜久雄等の諸氏が出品入選してゐる。

美術院の洋畫家

次に美術院の洋畫部では、同人は

大正三年再興當時　　小杉未醒

大正四年加入　　倉田白羊

　　　　　　　　長谷川昇

大正五年加入　　森田恒友

大正六年加入　　山本鼎
大正八年加入　　足立源一郎

の六氏に過ぎないが、院友として鬼頭甕一郎、小柳正、棚橋秀吉、今關啓司、宮坂千代三、中出三也、保田龍門等の諸氏が院友の名があり、木村莊八、伊藤彌太、小川千甕、片多德郎、萬鐵五郎、椿貞雄山脇信德、小林德三郎、水木伸一、山崎省三等の諸氏が近頃出品してゐる。そして片多、山脇、萬等の諸氏は、他に或は帝展、或は二科へも出品してゐる。尤も片多氏は昨年帝展の推薦になつたから、最早他へは出さぬかも知れない。たゞ、二科會の方では

「本展覽會へは、何人と雖も隨意出品する事を得、但し同時に文部省美術展覽會に出品せんとする者に限り之を拒絶す」

と會の規約に明記してあるけれども、美術院の方にはそんなことはないから、今後も二科と院展、又は帝展と院展へ同時に出品する者はあらう。故に此の點でもはつきりした分野は出來難いのである。

三、洋畫界の諸團體

主なる諸團體　現在世に知られる洋畫界の諸團體は少なくないが、先づ二科會と國民美術協

會と太平洋畫會とであらう。尤も、二科にしろ太平洋にしろ、西洋畫家と共に洋風彫刻をする人々も交つてゐるから、寧ろ美術界の比較的新運動をなす人々の團體と見るべきであらう。殊に國民美術協會は、成立の當初も今日も廣く一般美術家の團體であつて、申譯ながら、現にその會員中にも、また展覽會の出品にも、日本畫、彫刻建築、工藝美術等を見るのであるが、しかも事實上は洋畫家を中心とする團體であるから、これを洋畫家の團體と見てもよからう。そして二科會は新興勢力として帝展の洋畫部及び院展の洋畫部に拮抗してゐるから、これは別に說くことゝする。また太平洋畫會は只今でも研究所があつて、時々展覽會もやるけれど、以前の如き强固な、一勢力としての團體ではなくなつた。尙ほ次々に各團體について語る如く、一人で一つの團體に專屬してゐるといふやうな人は殆どないから、人を以て團體を見ることは出來ない。ただこんな團體と、それを牛耳る人があるといふことを知ればよい。

國民美術協會　さて、國民美術協會は、大正二年十月の創立であつて、初めは當時の東京美術學校教授であつた故岩村透男が、同じく教授で友人なる黑田清輝氏を語らひ、日本美術界各方面の大同團結をなさんとしたのが動機となつた。最初はそれでうまく行きさうに見えたが、主腦部が西洋畫家、殊に白馬會系統の人であるところより、多數の日本畫家と、太平洋畫會系に屬してゐる人達は

これに加盟しなかつたので、丁度今度の國際聯盟が、米國や支那や露西亞を脱した爲めに、龍頭蛇尾に終つたと同じやうに、所期の效果を收めることが出來なかつた。そこで、會頭ははじめ黑田清輝氏て、最近まで建築家の中條精一郎氏であつたが、今年の選擧で再び黑田氏に代つた。長く中條氏になつてゐたのは、黑田氏一派の團體のやうに世間から見られるのを氣にしてであつたらしい。それが今や團體的勢力も餘程減じたし、時勢も變つたので露骨に再び斯うしたのかも知れない。そして會員數は三百名近くもあつて、西洋畫部の石井柏亭、永地秀太、彫塑部の朝倉文夫、小倉右一郎、學藝部の坂井犀水君等が最も力を入れてゐる。そして一年に一回、春期に展覽會を開くが、會員外の出品は受付けないことになつてゐる。又此の展覽會では、時々特別陳列をして見せるので、美術協會展覽會の古美術品特別陳列と相待つて、好參考となつてゐる。大正六年には西洋の影響を受けた日本版畫を數多く陳べたし、今年は明治年間の肖像畫を集めて見せてくれた。

岩村透氏の事業

尙ほ此の展覽會は、故岩村透氏の遺物として見ると、極めて意義ある記念的團體と言はねばならぬ。岩村氏は風變りな我儘者であつた爲めに、惡く言ふ人もあるけれど、人間は決してそんな人てはなくて、寧ろ我が近代繪畫史上に特筆すべき人であつたと思ふ。此の人は、故男爵岩村通俊の長男て、明治三年一月に高知縣て生れた。はじめ慶應義塾に學んだが、更に靑山學院へ

轉じた。ついで歐米に留守するに及んで繪畫に興味を生じ、その方を專修したのである。その後も二回ばかり海外に遊び、三十五年以來東京美術學校に教授として西洋美術史と英語とを講じた。また第一回から第七回まで文展洋畫部の審査員ともなつたのである。大正二年に國民美術協會の創立に斡旋した翌年三度び歐洲に遊び、歸朝後は故あつて學校を辭し、美術雜誌「美術新報」及び「美術週報」等の編輯を指揮し、また時々美術に關する評論を世に發表してゐたが、豫ねての宿痾の昂進した爲めに相州三崎の別邸に靜養し、大正六年八月、四十八歳で死んだ。氏は實に黑田、久米兩氏と共に白馬會の創立者であると共に、西洋美術に關する學殖の豊かなること日本唯一とも稱すべく、現に朝倉文夫氏の書庫に充滿してゐる氏の遺した藏書を見れば、如何に一生を書卷推裡に終へたかを知るであらう。殊に氏は筆舌二つながら達者にして、その美術學校の講義の如きは談論風發、古を語り今に及び、大聲叱呼して聽者を陶醉せしめ、又煙に捲いたものである。たゞ、惜しいことには氏は未完成の學者であつて、纏まつた硏究も殘さず、創作もなさず、又後人に人格的感化を與へることも少なかつたが、しかもその一時隋眠狀態にあつた我が洋畫、及び彫刻界に峻烈なる刺戟を與へて後進を誘掖したことと、白馬會と國民美術協會との產婆役たりしことゝ、及び所謂美術學校問題を惹起したことゝで、長く現代の先覺としてその名を傳へらるべきものであらう。今、その遺族はあるけれども、美術に關す

る仕事はしてゐない。

太平洋畫會

太平洋畫會は白馬會と共に、現代美術家の搖籃として忘る可からざるものである。殊に白馬會は既に解散したのであるに、これのみは、尚ほ餘喘を保つて、下谷區眞島町に形ばかりながら研究所を維持してゐる。この會は、明治三十四年に舊明治美術會系の青年洋畫家が組織したもので、中村不折、滿谷國四郎、石川寅治、吉田博等の諸氏がその中堅であつた。明治四十年頃まではなかなか盛んなもので、三十五年以來、毎年一囘の展覽會を開き、やゝに派の畫を以て天下を兩分してその一を保つてゐた。ただ、近來ます〳〵その勢力が衰へ、前掲の外に、高村眞夫、永地秀太、中川八郎、石井柏亭、岡精一、渡邊審也、河合新藏、丸山晩霞、坂本繁二郎、三上知治、鹿子木孟郎長、尾默、中村彝、藤井浩祐、寺澤孝太郎、藤島英輔、齋藤與里、吉田ふじを、安田稔、高木背水、佐々貴義雄、大橋康郎、磯邊忠一等の諸氏がある。尙ほ此れ等の人々の中で、特に紹介すべき人々は別項に太平洋畫會の人々として語らう。此の會の展覽會は春であつて、國民美術協會、光風會等と共に盛んな一つである。

光風會の創立

光風會といふのは、明治四十五年六月の創立で、もと〳〵特別な主張や抱負があつて創立されたのではなく、會員の作品の自由なる發表機關を作る爲めに、出來たものである。

しかしこれは舊白馬會の後身とも見られ、幹部にその顔觸れが多く、又會員の多くが東京美術學校の卒業者であり、學校の教授の援助があつて、在校者や出身者の出品が多いので、宛然美術學校の別働隊の如き觀がある。第一回の展覽會は創立と同時に上野竹之臺陳列館に開かれ、爾來今日に及んでゐる。會員は、創立當時には中澤弘光、山本森之助、三宅克已、杉浦非水、岡野榮、小林鐘吉、跡見泰の七氏であつたが、大正三年には小林萬吾氏が加はり、大正七年には更に徳永仁臣、太田喜二郎、大德隆德、田邊至、辻永、兒島虎次郎、後藤工志、赤松麟作、赤城泰舒、南薫造、故廣瀨勝平等の諸氏が馳せ乘じたので、團體としては可なりな勢力を有するやうになつた。ただ、一方に文部省の展覽會のある爲めと、此の人々が同時に他の諸團體にも關係してゐる者の多い爲めとで、未だこれといふほどの努力の作は見せてくれないのである。

日本水彩畫會　これも稍重きをなしてゐるが、決して大をなす、盛んな會といふことは出來ない。此の會は大正二年に、石井柏亭、丸山晩霞、白瀧幾之助、石川欽一郎、戸張孤雁、河合新藏、藤島英輔氏等、十三人の發起で出來たもので、目的は日本に於ける水彩畫の發達を期するにあつて、石井氏あたりが英國等の畫を見て來て、水彩畫に特別の面白みのあることゝ、日本畫に近いこととに依つて、日本にもそれをもつと盛にする必要があるからとて思ひついたのである、ところが、甚だ入

り易い爲めに、素人間に歡迎されることになつて、一時は意外の盛況を見たが、今日は稍下火になつた。會長には、のち林博太郎伯を戴いたが、別に定つた幹部のやうなものはない。大正二年六月、第一回の展覽會を上野竹之臺陳列館に開いて、四百八十餘點を見せた。又一昨年は南薰造君が印度旅行で寫生したものを五十點ばかり出陳したし、その前年には寺崎武男氏が伊太利から持つて歸つた作品約百點を陳列したこともある。その前年には日本水彩畫の沿革展覽會を開いて見せた。會員は以上の發起人の外に、赤城泰舒、相田直彥、海老名文雄、後藤工志、磯部忠一、板倉贊、森田恒友、三上知治、望月省三、中澤弘光、中林僊、小川千甕、織田一磨、矢崎千代治、舟木忠三郎、南薰造、高木背水、水野以文、眞野紀太郎、大橋康郞等の諸氏がある。

草土社の試み 尙ほ會員も極めて少なく、殆ど世間的の勢力といふやうなものはないが、新しい仕事をして來た、意義のある團體として、草土社を擧げなくてはならぬ。これは大正四年からあるが、草土社の名を以て展覽會を開いたのは、大正五年四月からである。それから大正六年十二月、赤坂の三會堂で第五回展覽會を開き、約四十點の作品を陳列した。會員の重なる人々に岸田劉生、木村莊八、中川一政、椿貞雄、清宮彬、横堀角次郎、中島正貴等の諸氏があるといふことだけで、その傾向を知られるであらう。實にセザンヌ以後の、後期印象派あたりの、物をつきつめて見る方面に進

んでゐる人達である。岸田、木村の二氏の如きは既にそのために戰士的態度を取つた作品を發表してゐる。但し、最近は此の會の消息を聞かないから、會としては今存在しないかも知れない。何しろ一時は最新の一派と認められたものである。

新光洋畫會　次に壯年進新の作家で、帝展の中堅ともいふべき一體團は、美術學校出身者で出來てゐる新光洋畫會がある。これは大正八年七月の創立で、まだ極めて新しい。何等拘束のない規約の下に、會員間の自由製作を毎年春期に發表するといふ目的で創立したものであつて、會員以外の作品を認容せず、且つ新に入會する場合は會員三分の二以上の承諾を得て入會を許すといふことになつてゐる。最初の會員の顏觸れは、安宅安五郎、巖埼精起、片多德郎、熊岡美彥、金澤重治、小寺健吉、權藤種男、牧野虎雄、松岡正雄、松村巽、三上知治、大久保作次郎、奧瀨英三、大野隆德、清水良雄、鈴木良治、高間惣七、田邊至、柚木久太、吉村芳松等二十名であつて、本年の六月その展覽會を開いた。半數以上は帝展の推薦、特選といつたところで、比較的粒が揃つてゐる。そして二科、院展等に籍を置くものもない。先づこのあたりが穩健なる方面の中心となつて行く人々であらう。

赤甕會、四十年社、朱葉會　これと類似の顏觸れで、赤甕會がある。元來、明治四十五年に、その前年度に東京美術學校の西洋畫科を出た人達が組織した團體であつたが、漸次會員の數を減じ、また他から

入會したものも出來た。展覽會はその年赤坂三會堂で開いて以來殆ど每年やつて來た。これも會員外の出品は認容しないことになつてゐる。會員は、相馬其一、大野隆德、小寺讓吉、鈴木秀雄、鈴木良治の諸氏が最初からで、それに三上知治氏と近藤浩一路氏とが大正七年から、加はつてゐる。これに對比すべきものは、四十年社であつて、これは明治四十年に東京美術學校へ入つた同窓の友の團體である。片多德郞、金澤重治、神津港人、萬鐵五郞、野元義雄、工藤三郞、熊岡美彥、淺井松彥、齋藤素巖、佐藤哲三郞、淸原重一、北島淺一、三國久、御厨純一の諸氏が其の名を列ねてゐる。今年四月初めて第一回の展覽會を開いた。つまり赤甕會の會員と一期違ひの人達である。そして此の二つは、年期を同じくするといふだけで、主張や傾向は思ひ思ひであるから面白い。その他には婦人洋畫會の團體たる朱葉會が、大正七年十月に創設されて、岡田三郞助、安井曾太郞、有島生馬、滿谷國四郞の四氏を鑑査員とし、會員は井上よし子、池原靜子、埴原久和代、小笠原貞壽龜、高文子、吉田ふじを、與謝野晶子、高安やす子、田邊操子、津輕昭子、峯田のぶ子、山本愛子、矢島とし子、松本正子、深松琴子、小寺菊子、有島信子、有馬さとゑ、尙百子、鹽井ふく子、日高文子、森美意子、杉浦翠子等の二十四名で、津田敏子は最近脫會した。何しろ洋畫でも描かうといふ日本の婦人は全部網羅するといふ勢、すばらしいものであるが、尙侯や小笠原伯の夫人が、與謝野女史や小寺、杉浦、有馬等の畫

家の夫人と一緒にやつてゐるといふので、そのアマチュア程度も解るだらう。女子ならば會員外の出品も認容して、大正八年一月と今年一月と展覽會を開いた。

嘗て在つた團體　洋畫家の團體は先づこんなものであらうが、尚ほ拾ひ上げて行けば、大正八年の創立に自然社といふのがあつて、杉浦非水、大野隆德、渡邊審也、岡野榮、赤城泰舒、後藤工志、南薰造、橋本邦助、小林鐘吉等を會員としてゐるが、これは洋畫の會ではなくて、洋畫家の日本畫を發表する機關である。又ナチュール社といふもあつて、岡幸次、川上五郎、大塚金吾、鮫島和久、三村善夫、在原彌一、阪東親次、林源藏、長谷部英一等の同人で、大正七年十二月に展覽會を開いたことがある。今は何うなつてゐるか解らない。それから、洋畫家で裝飾美術に關係ある人達が、他の同好と結んだのに裝飾美術家協會があり、岡田三郎助、長原孝太郎氏等が主なるところである。版畫では洋畫家の團體の日本版畫協會がある。創立は大正七年六月で、山本鼎、寺崎武男、織田一磨、戶張孤雁、竹腰健造の五氏を會員とし、會員外の出品も認容してゐる。大正八年以來展覽會を開いてゐるエッチング、木版、石版等を含み、我邦に於ける最初の版畫團體ともいふべきものである。會員外にはバーナード・リーチ、マンニング、石井鶴三、小泉葵己男、永瀨義郎、恩地孝四郞等の諸氏の作があつた。小泉、永瀨、恩地の三氏はのちに會員に加入した。それから大阪の洋畫家の間に、精藝社と

いふのがあつた、山下繁夫、國枝金三、榊原一廣、濱田褒光、織田明の五氏に依つて組織されてゐたが、現狀については知らない。その外には、少壯洋畫家の小團體で、瞳子社といふのが大正六年十二月の創立て、松岡正雄、大塚金吾、林義明、深松琴子、福田義之助等の八氏に依つて結ばれてゐるし、耀美會といふのが、大正七年三月、三宅克巳、山本森之助、中澤弘光、田邊至、跡見泰、小林鐘吉、小林萬吾、武內鶴之助の諸氏を會員として成立してゐる。また水彩畫家の團體として、大正五年一月に出來た、どくだみ會は、水道端の日本水彩畫硏究所出身者たる寺田孝一、望月省三、水野以文、相田直彥、赤城泰舒、後藤工志、矢代幸雄、榎本滋、舟木忠三郎等十七氏を以て組織されてゐる。東京漫畫會、珊瑚會には、日本畫家と共に洋畫家が入り交つてゐる。前者の長原孝太郞、坂本繁二郞、北澤樂天、在田稠氏等、後者の森田恒友、小杉未醒、鶴田吾郞、池田牛步氏等がそれである。固より共に日本畫を描く團體てある。

彫刻家の團體　次に彫刻家の團體てあるが、これは今日のところまだ勢力のある纏まつたものはない。知名の士を集めたものでは、木彫の栴檀社、それに五星會、彫塑方面の蠻土拉社などであらうか。それに先ち日本彫刻會は、木彫家の一派を糾合したもので、米原雲海、山崎朝雲、三木宗策、松尾朝春、加藤景雲、石本曉海、山本瑞雲、森鳳聲、太田南海、關野聖雲等の諸氏が會員で、每年展

覽會を開いてゐたが、大正七年に解散して了つた。一方その頃から、山本瑞雲、長谷川榮作、後藤良、關野聖雲、富岡芳堂、牧俊高、三木宗策等十一氏が、梅檀社なるものを設け、大正六年以來展覽會を開いてゐる。他に丁度その頃に、前田照雲、三國花影、石戸谷剛、鹿內芳州、宮野花香の五氏で五星會といふのを創めたが、これは現狀不明である。尙ほ蠻土拉社といふのは、朝倉文夫、小倉右一郎、北村西望、內藤伸、石川確治の五氏で、大正七年四月に團結したもので、小品の塑像又は木彫を展觀するのが目的である。知名の諸氏が極めて氣持のよい會を開くのである。但し今年は未だ開會しない。

東臺彫型會　一般に、彫刻は洋畫に比して未だ團結するだけの機運に向つてゐないのかも知れない。さうして勢力のある團體はないのであるが、しかし丁度水蒸氣が結んで雲を成すやうに、ぽつぽつ勢力の結合が行はれてゐるやうだから、幾つかの團體の生ずることも、遠い將來ではあるまい。その先聲とも見るべきは東台彫塑會の誕生である。此の會は、會員相互の技術の練磨と親睦を圖り、且つ後進の扶掖誘導を目的とし、年一回の展覽會を開くといふ主意で、昨年の十一月に創立された。會員は、石川確治、小倉右一郎、吉田三郎、內藤伸、藤川勇造、朝倉文夫の六氏を評議員となし吉田久繼、新田藤太郎、大國貞藏、片岡角太郎、矢野誠一、枡澤清、幸崎伊次郎、齋藤素巖、笹野惠

三、島村治文、日名子實三、關野聖雲の十八名を以て成り、外に川崎繁夫、陽咸二、中野桂樹、相川善一郎、木內克等五氏を會友としてゐる。今年に入つて新歸朝者武田𥡴氏が會員に加はつた。見渡したところ、先づこれを以て彫刻家の團體らしい團體としなくてはなるまい。今年その第一回展覽會を開く筈であつたが、故あつて中止した。

四、洋畫界の元老

黑田清輝氏　誰が何と言つても、現代洋畫界の第一人者は黑田清輝氏である。それは子爵樣なるが故でもなく、貴族院議員たるが故でもなく、また勅任官待遇の帝國美術院會員たるが故でもなく、國民美術協會の會頭たるが故でもなく、洋畫家唯一の帝室技藝員たるが故でもない、實際に於いて、手腕に於いて、經歷に於いて、實に此の人を現代の首班と推さなくて他に推すべき人がない。黑田清輝氏の畫壇に於ける、その名を知られること久しい。明治二十六年に歐羅巴から歸つて白馬會の基を起してから、約三十年、人は一日も氏を忘れなかつた。黑田の洋畫か洋畫の黑田か。我等は長く氏の功績を沒してはならない。

黑田氏の略歷　先づ氏の人と爲りから語らう。洋畫家の黑田氏としては先生である、其處等

の先生達と同じ先生である。老も若きも、氏を呼ぶに先生を以てすれど、一度、麹町區平河町六丁目

筦苑斜陽　黒田清輝

十四番地の御邸の玄關から内に入れば、立派な御前樣である。それも五十幾歳の昨年までは、まだ從五位のお部屋樣であつたが、今は父君清綱翁の亡き跡をついで推しも推されもせぬ子爵閣下、剰へ此の三月から貴族院議員に選ばれて、特權階級の御一人と納まり給うた。何しろ御系統を

茶休　　黒田清輝

手繰つて見ると、薹が蔓、薩摩國の御產とあつて、祖父清兼翁は維新の際王事に盡瘁された人、爲めに華族に列せられた譯である。父君清綱翁は世に聞えた歌人てある。以て清輝先生の生ひ立ちを想像される。慶應二年に鹿兒島の高見馬場といふところに生れたが、維新後父祖に伴はれて東京に出で、大西郷や大久保や、薩摩隼人が天下を握りつゝあつた頃に成長したのだから、その順境に在つたことは申すまでもない。さればこそ明治十七年といふ、まだ美術の美の字も口にする者のなかつた頃に、繪畫の研究生として海外に留學するの機會もあつたのだ。

佛蘭西時代の氏 黑田氏の幼時については我輩何事も知らない。多分、後世からは、幼にして穎悟、殊に丹精に親しみ、嬉戯にも彩筆を弄したと傳せられるであらう通り、涙で鼠を描いたことがあるかも知れない。何しろ明治十七年の洋行であるから、歲十九歲、今だつてこんな歲で洋行する畫家は先づあるまい。巴里に滯在中は、ラファエル・コランの門に學んだ。コラン先生はつい二三年前に死んだ人で、黑田氏を始め多くの我が洋畫大家の卵時代に溫めて吳れた恩人てある。穩和な、フックラとした味のある繪を描いてゐるから、定めし人間も穩厚な、親切な君子人てあつたらう。兎に角黑田氏は、藝術家らしい純な心持を以て、此の良教師の下に、孜々として筆を運んだ。何しろ十年間の滯在て、青春の一時代をパリジアンの中で育つたのだから、先生の洋畫はすつかり手に入つたもの、

殊に素質の優れてゐるところへ非常な勉强をしたのだから、その進境大に見るものがあつた。

歸朝當初の氏　果せる哉、明治二十六年に、久米桂一郎氏と連れ立つて歸朝するや、我が洋畫界は時期を劃する程に大なる影響を氏からは受けたのである。「黑田歸る！。」此の囁きには當時の洋畫に志す人々が、一齊に耳を欹てたものである。麒麟兒淸輝氏が歸つた、これから何を仕出かすだらうか？――氏は長くじつとしては居なかつた。歸ると匆々戰闘準備を整へて、翌年の十月には、當時の洋畫壇の中心勢力であつた明治美術會を脫會して、久米氏と共に自分達の研究所を赤坂の葵橋に設けた。洋畫研究所なるものこれであつて、後の白馬會は實にこれに濫觴してゐる。この邊の事情については別項にも述べてあるから詳說しないが、兎に角黑田氏に取つては、これは意義のあることだと共に、時代に取つても無意義ではなかつた。言はゞ、從來の日本式洋畫――川上冬崖の南畫的洋畫や、五姓田芳柳の浮世繪的洋畫や、若くは小山正太郎の石版刷的洋畫を脫して、眞の西洋畫的洋畫を、佛蘭西仕込みのチャキチャキのハイカラが、奮然として建設に著手したのである。一種の革新運動である、黎明運動である。されば青年黑田氏の意義込や大なるものがある、若き血の燃える人々は競つて氏の門下に馳せ參じたものである。

裸體畫の提唱　黑田氏の革新的氣分は、自分の研究所を設けるだけに滿足し得なかつた。明

くる二十八年の春、京都に第四回內國勸業博覽會が開催せられるや、氏は「朝粧圖」なる、驚くべき作品を發表した。これは實に我國に於いての、最も優れた婦人の裸體畫であつた。赤裸々の婦人が、鏡に向つて髮を梳つてゐる姿態がまざまざと描いてある。識者も、俗衆も、愕然として眼を見張つた。それもその筈、身に寸布をも纏はぬ裸體の女の畫！そんなものは昔の春畫にだつてあり得ない。男の裸體は角力場で平氣で見てゐるものの、女の裸はお湯屋の羽目から覗き見でもしない限り、見ることの出來ないといふ儒教でひねくらかされた傳習的道德に支配された島國日本の人間達は、びつくりして目を剝いた。或る者は好奇心に驅られた彌次氣質から、或る者は裃いかめしい舊道德を楯にして、黑田氏を攻擊した。所が困つたのは博覽會の當局者である。何しろ作者は名門の出で、しかも薩摩の藷蔓を引いてゐる。滅多なことは言はれない。玆に於いて、藝術家、非藝術家の間に裸體畫問題なるものが惹起した。今に解決せずして、三十年間每年の樣に繰返されてゐる。

美術學校教授

しかし、此の大問題を提出して置きながら、黑田氏自身は平氣であつた。寧ろ得意の鼻を蠢めかして居たが、翌年の春、東京美術學校に洋畫科が設けられるや、今度は久米氏と共に入つてその敎授となつた。此れまでの氏の活動振り、世間に對する態度、實に痛快を極めたものである。歸朝する匆々、言はゞ靑二歲が、權門の背景があつたにもせよ、一擧して研究所を起す、再

擧して裸體畫を出品する、三擧して美術學校洋畫科最初の敎授となる、誠に目覺ましいものである。翻つて當時の美術界を見るに、明治十年代は日本畫を壓して洋畫の頭を擡げた頃で、雅邦や玉章や寛畝さへ洋畫に走らうとしたのであるに、二十年代の初めは寧ろその反動として、國粹主義、日本畫主義の世であつた。鑑畫會が起る、日本美術協會の前身が生れる、日本畫が得意な時代であつたが、その中で洋畫研究の必要を慫慂し、美術學校内にその一科を設けしめたのも、黑田氏等の暗中飛躍の結果であること云ふまでもない。

モデル問題 それから氏は敎授となるや、先づ活きたモデルを使ふことをやつた。しかもこれまた女の裸を前に立たせて置いて、生徒達をしてこれを描寫させるのであつた。これは幸に一校の内の出來事であつたから、別に問題は惹起さなかつたものゝ、西洋の畫法を知らない當時の人達に取つては、驚愕と顰蹙の外なかつたのも無理はない。尤も裸體のモデルを使用することは、既に明治十年に行はれたのであるから、氏のお手柄とする譯には行かない、また裸體畫問題も、實は明治二十四年にその端を發してゐること、前に述べた通りではある。

白馬會創設 白馬會の組織されたのも此の年であつて、その秋十月には、日本繪畫協會と合して第一回繪畫展覧會を開催したが、氏は此の時「小督」といふ畫を出品した。これが又世論を賑は

したものである。それは大膽なる裸體の描寫などではなくて、洋畫美なるもの丶如何を、具體的に俗衆に示したからである。申すまでもなく、「小督」は平家物語で人の知る史談である。これまでこの題で描かれたものは、柴折戸の中に琴彈く若い女があつて、外にたゞずむ仲國、それに馬、名月の夜の氣分といふやうなことでなくてはならなかつた。恐らく今の人でも、黑田氏の作を見ないものは、「小督」の題から聯想して同じ構圖を頭に浮べるであらう。然るに、黑田氏の描いたものは、ローマンスそのものではなかつた。嵯峨野の奥に、里人と僧とが、焚火を圍んでありし昔の小督の物語をしてゐる、極めて寫生的の畫であつた。物語の題材を捉へて、全然別途の圖を造る、しかもそれがフランスの最近のベーサンジ・アンチームなどゝ共通するに於いてをや。世論をこゝに集中せしめたのも無理はない。

裸體畫問題起る　此の展覽會は翌年も開かれたが、此の度は冬十二月に、白馬會のみで獨立して上野公園で開かれたのである。その時の出品者は三十七名、西洋畫に彫刻及び彫版を合せて合計三百點に達し、なかなかの盛會であつたが、中にてまた觀衆の視線の焦點となつたのは、黑田氏の「智感情」と題するものであつた。「朝粧」といひ「小督」といひ、更に「智感情」といふ、如何なる作品を出すかと思つてゐると、婦人の裸體畫であつた。しかも日本の女をモデルとして描いた裸體畫であつた

ので、又しても毀譽褒貶の評が到る處に湧き立つた。殊に例の道學先生、自稱教育家達の間に、風紀問題が囂々として起り、裸體畫問題の火の手は益々盛になつた。が、それに依つて却つて西洋畫のプロパカンダが行はれて、却つて將來の進歩發展を促すの機會を與へたのは面白いことである。

―氏の占めた地步― 兎に角、斯うした行きがかりから、明治三十年前後には既に黑田氏の確乎たる地盤が築かれてしまつた。殊に此等の白馬會が一種の權威を有するにつれて、それが中堅たる黑田氏の權威も出來て、文展の創設せられる頃には、洋畫界に此に楯つく程の人は一人もない樣になつた。これは勿論、氏の畫家としての最も優れた技倆に依ることであつて、あの柔かいデリケートな、リファインされた、一本の草葉の末にまでも、戰きあふれてゐる敏感な、美しい情緒と、それを表現する巧妙な、練達な筆致とは他人の容易に模し得ないところである。それと同時に、氏は人物がしつかりしてゐる、如何にも大きい、そして聰明である。堂々たる貴族的な風采、悠暢迫らざる大人的な態度、衆を抱擁し、雜を綜合する政治家的な手腕、――それに加へて閥族的の後援が有形無形に加はつて、西洋畫界にも、日本畫界にも、氏に匹敵するだけの人物は見出し難いのである。

―文展開設後の氏― 文展開會後の黑田氏の作品も、毎回常に群を拔いて傑出してゐる。先づ第一回に出品した「白芙蓉」がある。高雅な、清楚な、氏一流の趣致の豐かさを以て高評を博したが、第二

回の「テーリー氏肖像」と「樹かげ」とも他を壓してゐた。殊に「樹かげ」は、半裸體の女のポーズの甚だ面白い、肉にふつくりした、線のなだらかな、樹かげに無心に居睡つてゐる女の心をうまく現はした作品であつた。他の一點「春の名殘」も、左して大作とは云へないが、たんぽゝの花野を、纖細な神經を働かせて描いてあり、氏獨特の境地を寫してゐる。更に第三回には、「寺尾博士肖像」の外、「鐵砲百合」の傑作があつた。これこそ、百合花といふ對像と、自分の神經とがぴつたり結びついてゐるものであった。新聞雜誌で筆を揃へて褒めちぎつた程あつて、氏の數多い傑作中、わきて特筆すべきものであつた。第四回の「荒苑斜陽」、第五回の「百日紅」も他人の企及し難い名作で、第五回には他に「夏草」、「高橋博士肖像」もあつた。——それから最近に至るまで、每回氏の作品を文展より引きつゞいて帝展にまで見ざることなく、見れば必らずあの楚々たるデリケートな高雅な情趣に動かされないことはない。然らば氏の最も得意とする方面は何かと云へば、自然も人間も共に巧みであつて、廢苑の一隅からでも、氏は自然と美を最も適切に取り來ることが出來ると共に、如何なる人の肖像を描いても、極めて美しく、且つ十分の理解を以て描き上げるのである。されば氏の筆にした肖像畫は可なりに多く、氏の近親者、卽ち父清綱翁、祖父清兼翁、桂公等にすぐれた肖像を見るのである。氏や名實相伴つて、現代畫壇の第一人者と稱ぶことに、誰れか異存を挾まう。

中村不折氏　黑田淸輝氏を擧げれば同時に中村不折氏も、これが好對照として必然擧げ來らなくてはならぬ。氏は貴族の出身でない、又政策的手腕の人でもない、その上に、學校關係から官僚的色彩を有しもしなければ、多くの乾兒を造らない、且つ表面に立つて働いても來なかつたから、世間といふ外部の事情から見ると、黑田氏だけの生彩は固よりない。現在の地位としても、此の意味からすれば黑田氏には匹敵されぬかも知れないが、人間として、藝術的生活に沒頭せる人として見る時、誰れか氏を以て黑田氏に劣るものとなし得よう。殊にあの、行くとして可ならざるなき多能をば滿身の努力を以て西洋畫に、日本畫に、また書道に披瀝してゐるのを見て、氏の藝術の範圍の、黑田氏よりも遙に廣く、且つ深さを思はずに居られない。

不折氏の特色　黑田氏が確然としてそゝり立つ富嶽とすれば、氏は實に洋々として湛ふる大瀛の水である。湛へては居るが、中には魚介海藻、樣々なものを包藏してゐる。而して常に動いて止まない、一方は高くてじつとして居れば、他方は廣くて深い、黑田氏は西洋畫の一路を常に進んで他を顧みない、その畫風も五十年一日の如く、殆ど何等の變化を見ない、中村氏も、畫風には左したる變遷はないものの、今日まで努力主義でやり上げて來た、精力の傾けられる限りを傾けて、孜々として倦まない、そしてやらうと思つたことは何處までもやる、可なり頑固ではあるが、斯うして日本畫も

一流を開いた、書道にも別趣を出すことが出來た。これは到底黑田氏の能ふことではない。吾々は先づ、中村不折氏の、あの不折の號が表象してゐる不撓不屈の精力主義と、それが行くとして可ならざるなきを見ねばならぬ。

中村氏の略歷——氏はもと名を錄太郎と言つたが、今は不折に改めた。慶應二年七月、京橋區八丁堀に生れたから、また江戶兒と稱することが出來るが、鄕里は信濃國で、高遠藩であつた。故に五歲の時、伴はれて家に歸つたが、十二歲にして再び上京した。そして天性繪畫を好むところより、南畫家松岡環翠の門人の眞壁雲鄕といふ人について學んだ。然るにそれも長くは續かずして、數年の後、父に伴はれて又々鄕里に歸らねばならなくなつた。しかも、奮鬪その物であつた氏は、境遇の變化に負けはしなかつた。その家は極めて貧乏で、しかも山間に在つたに拘はらず、漢學を自修したのて、その頃には一日の大部分を、それこそ寢食も忘れて家業の傍勉强したといふ。斯くして明治十七年には、高遠小學校の助敎に任ぜられたが、その間、長野に出でゝ師範學校の敎師の河野次郎といふ人から鉛筆畫と水彩畫とを學んだ。明治十九年には飯田の小學校に聘せられて二年ばかりそこで敎鞭を執つた。その時の生徒の中に、故菱田春草氏のあつたことは、一奇とせねばならぬ。明治二十一年、小山・淺井氏等の十一會に入學の目論て上京し、小山氏の塾に在つて、門生と言ふではなしに止まつ

た。

不折氏の洋行　氏の洋畫家生活はこれより始まる。最初は不完全な手本について、鉛筆や、手製の油繪具でこつこつやつて、二十四年頃からやつと油繪らしいものがかけるやうになり、二十六年には、東照宮を寫生して明治美術會の展覽會に出品した。丁度黑田氏が歸朝して活動しかけた年である。その翌二十七年には、「小日本新聞」に入つて、日本で始めての新聞挿繪かきになつた。する中に日清戰爭が始まつたので、筆を携へてそれに從軍し、二十八年の八月に歸朝した。それから後は、一所懸命で洋畫をかき出し、例の日本一の定評ある手堅いデッサンの基礎を此の間に造つたのだ。斯くて三十四年の六月には佛國に留學し、最初はラファエル・コランの門に入つたが、半年の後にはアカデミー・ジュリアンに移つて、ジャンポール・ローランスの敎へを受けた。三十七年にはコンクールに受賞し、その翌年の三月に歸朝した。

傑作建國剏業　間もなく、明治四十年の東京勸業博覽會が開かれた。その時に滿天下を驚かしたのは、氏の製作「建國剏業」であつた。此の作の陳列された爲めに、他の諸家の作は、丁度太陽出でた曉の星の如く、姿をひそめて了つたやうに思はれた。それほどまでに、此の傑作は偉大であつた。レコード破りであつた。それは裸體の數人の男、それに一人の女が交つて、高い山巒から、遙か

補衲　中村不折

の下を覗いてゐる。——それ等は皆日本人をモデルにしたもので、明かに我等の祖先が國を剏める神話をば、現實の人體の確かさと氣魄とをもつて描いたものであつた。このデッサンの確實さと、氣魄の横溢、及びその基調をなす神話的氣分とが、調子の高い傑作となつてゐたのである。恐らく、斯の種の繪畫の中では、空前と共に絶後と稱してもよい出來榮えであつた。審査員は異議なしにこれに一等賞を授け、氏は立派に畫壇の地位を確保し、これより第一流の大家と仰がれたのである。

文展の出品　文展が開けたのは、此の同じ年であつた。無論、氏はその審査員に加へられた。それ以來、文展へ出した作品は、第一回に「白頭翁」、「彫刻家」、第二回に「妙義山」、第四回に「半諾迦尊者」、第五回に「跋陀羅尊者」、第六回に「道」、「巨人の跡」、「迦諾迦伐蹉」、第七回に「神農」、「老孔二聖之會見」、第八回に「卞和璞を抱いて泣く」、「處女」、第九回に「長養」、「補衲」、第十回に「たそがれ」、第十一回に「巣父汚流に飲まず」、「維摩居士」、第十二回に「智の閃き」、「異品の萠芽」、帝展に「天の岩戸」、「孟母斷機」を出してゐる。その他太平洋畫會等にその出品を見るのである。

氏の洋畫の特色　氏の洋畫はクラシシズムの立場に立つてゐる。最も重きを置くところは健實正確なるデッサンに在つて、人體を見て、これを狂はせずに描寫するところに中心點を置く。しかし氏のこの所謂デッサンは、一般の人からは偏したもの、癖のあるものと見られてゐる。又此のクラシシ

ズムは、歴史的人物を對像とする。それも十六羅漢や仙人的の人物が多い。それ等を理想化せずして現實化し、實在のモデルを羅漢仙人に扮せしめてゐるのかの觀がある。そして何處となく硬い、剛健ではあるが人間味に乏しい。そこに氏の性格の表現あるのだらう。その使用する色も、苦澁の感のある脂色で、あかるい氣のきいたものといふことは出來ない。が、氏はこれを意識しつゝ、是認しつゝ、氏の道を辿つて行くところは自信あるものだ。

日本畫と書と　氏の日本畫と書とは、洋畫と共に既に堂に入つたものである。日本畫の方は雪舟式の破墨を最も得意とし、一般に北畫風を描いてゐる。又書は所謂六朝風であつて、硬骨の文字を巧みとする。氏は此の書風を研究する爲めに、支那の碑碣法帖、金石文を無數に蒐集し、今では此の種の所藏家としては随一と認められて居る。それだけに、氏の此の方面の蘊蓄はなかなか深いものであつて、氏の蓄財の大分もこゝに傾けられてゐるとの噂である。氏は此の外には何等の趣味も有せざる如く、日夕畫か書かを描く外、來客あれば盛に得意の氣焔を吐いてゐる位のものである。

岡田氏と和田氏　帝國美術院の會員として、黑田清輝、中村不折の二氏については、岡田三郎助氏と和田英作氏とがある。この二氏は、長い間黑田清輝氏と主義を同じく態度を等しくして、最も情意の通じ合つた、親分乾兒の如き關係をつゞけて來た。そして黑田、岡田、和田と並べて白馬會派――美

術學校派の三田と稱せられた。それ程に此の三氏の鼎足的因縁――と言つても、黑田氏は先輩で、且つ頭拔けて大きい足ではあるが。――兎に角、切つても切れない中である。今もさうである。且つ岡田和田の二氏は、實に伯叔關係と言つてもよい位に、始終轡を並べてゐる。但し此の二氏の性格は必ずしも同一ではなく、寧ろ可なりて背反してゐるが、出身や利害關係から、何となく岡田と言へば和田、和田と言へば岡田といふやうになつて來た。故にこゝにも二人を比較して語る方が、一人一人離すよりも面白いのである。

岡田三郎助氏　岡田氏は明治二年一月、佐賀市の生れであつて、初めは大野幸彥、堀江正章、黑田淸輝、久米桂一郎氏等について學び、靑年の頃から有望なる洋畫家として見られたが、明治三十年には、佛國に留學して黑田氏と同じ師なるラフアエル・コランの門に學んだ。歸朝の後は直ちに東京美術學校の教授に任じ、文展の開けるに及んで、第一回以來審査員となつた、氏の令夫人は、小說家として一時大に鳴らした岡田八千代女史で、氏とは年齡が二十も違つてゐる爲めに、氏の艶福を羨む者もある。又氏は美術學校に教へる傍、本鄉洋畫研究所にも行つて、時々教授の任に當つて居れば、その澁谷女子部及び女子美術學校の方も受け持つてゐるので、直接間接のお弟子が頗る多く、殊に婦人にして門下生たる者が多い。有馬さとえ氏の如きさうである。

西洋畫界の元老

萩　　岡田三郎助

岡田氏の作品　氏の文展へ出した作品は、第一回に「大澤博士肖像」、第二回に「小池博士肖像」、「傾むく日」、「萩」、第三回に「五葉蔦」、「大隈伯爵夫人肖像」、第四回に「ひなた」、「くもり」、第五回に「浴場にて」、第六回に「偶成」、第七回に「凝視」、「女の顔」、第八回に「たそかれ時」、第九回に「黒き帯」「川邊」、「五十島の雪」、第十回に「水浴の前」、「よね桃の林」、第十一回に「初夏」、「花野」、第十二回に「忍路」「北國の雪」、帝展に「ネムの花」等があつた。而して大體に於ける氏の傾向は、柔かい、スキートな風景と美人とを得意とし、その描ける若い女は常にうつとりと夢みる心地であり、理解に滿ちた情緒の味を思ふ儘に表現されて居る。また野花その他の風物も、しんなりと氏の情味を受けて、優しくおだやかに描かれてゐる。しかし、黒田氏ほどにデリケートでなく、もつと大味であるが上品さを失はず、柔かさをたつぷり出したところは氏の獨壇場である。これは氏の人格にもよく見るので、氏に會つて話すと、何とも云へぬなつかしい快さを感ぜずには居られない。實に氏は人格の人、理解の人にして、極めてうぶな、藝術家らしいナイヴィテーを持つて居る。

和田英作氏　氏は明治七年十二月、鹿兒島縣肝屬郡垂水村に生れ、岡田氏と殆ど同じやうに、大野幸彦、上杉熊松、原田直次郎、黒田清輝、久米桂一郎の諸氏について學んだ外、久保田米僊から、日本畫をも修めた。また東京美術學校の西洋畫撰科に入り三十年にこれを卒業して、その年、

西洋畫界の元老

燈下圖　　和田英作

直ちに岡田氏と共に洋行の途に上つた。尤もそれに先立つて明治二十八年の第四回内國勸業博覽會に出品して受賞し、以來續々展覽會に賞を得てゐる、洋行中は同じくラファエル・コランの門にあり、三十三年に歸朝して東京美術學校の教授となつた。又文展には第一回以來洋畫部の審査員となり、大正二年には國民美術協會の創立に際して大に盡力した。斯くて昨年、帝國美術院の會員となつたことまで、岡田氏と全く同じである。

和田氏の作品

和田氏の作品は、帝展に於いて第二回に「おうな」、第三回に「角田市區改正局長肖像」、「原法學博士肖像」、第四回に「肖像」、「まとものあかり」、「薔薇」、第五回に「草花」、「小金井博士肖像」「曇り日」、第六回に「石黒男爵肖像」、「H夫人肖像」、第八回に「黄昏」、「赤い燐寸」、第九回に「佐用姫」、第十回に「あけちかし」、第十一回には出品せなかつたが第十二回に「壁畫落慶之圖」を出し、ついで大正八年帝國美術院會員となるや、「讀了りたる物語」といふのを出した。以上に記したところでも知られる如く、和田氏の最も多く作り、且つ最も得意と見られるのは人物畫、それも肖像畫である。これは一つには、需要の關係からでもあらうが、氏に斯うした方面の傾向があることと否まれない。角田氏、原博士等の像は殊に評判のよかつたものである。同時に風俗畫とも見るべき「おうな」、「まとものあかり」、物語畫とも稱すべき「佐用姫」なども特色の見る

べきものがある。たゞ静物畫に至つてはほんの小品に止まり、氏の力作として見るべきではなからう。

和田氏と壁畫 若しそれ壁畫に至つては、或はこれ氏の本領ではあるまいかとさへ思はれる。その出來榮えのよしあし、藝術的價値の高下については暫く措き、これまで比較的多く作れることゝ、その作風の如何にも當世向きで、先づ壁畫家として認めねばならぬといふことである。例へば帝國劇場を裝飾しある壁畫、交詢社のホールを飾れる壁畫等は慥に氏の作であると思ふが、よしや獨創的のものでないとしても、柔かい鮮麗な色調で、斯うしたところを飾るに適した畫面を構成してゐる。最近の「壁畫落成之圖」の如き、無論傑作でも何でもないが、大膽にあれだけの試みをしたところが面白い。法隆寺の壁畫の落成したのを、聖徳太子が高僧群臣に取り卷かれて見て居られる圖である。これは壁畫ではないかも知れない。又構圖や描法のすぐれたものでないとも言へるだらう。けれども、これだけの仕事をする人が、今日本には他にない。裝飾的特色といふことだ、從來の日本の繪畫の著しい一つであつて、且つ我等の洋畫にも國民性を表現することを認めねばならぬとしたら、そしてそれが今後は斯うした公衆的建築の壁畫などに具現せらるべきであるとしたら、注意すべきではあるまいか。——が、しかし我等はされぱとて、實は和田氏の壁畫には滿足すべきではない。もつと藝術的な本當の壁畫を欲しいけれど、こゝには氏をば壁畫家として推して置かざるを得ない。

五、帝展の審査員

審査員の人々

大正八年から開設せられるやうになつた帝國美術院の展覽會は、實質に於いて舊文部省美術展覽會の繼續であるから、その審査員の如きも、舊審査員中の黑田、岡田、和田、中村の四氏が帝國美術院の會員にまつり上げられ、和田三造氏が自發的に辭任した外は、舊審査員の殘部卽ち藤島武二、中川八郞、滿谷國四郞、南薰造の四氏に、新しく中澤弘光、長原孝太郞、金山平三、石川寅治、太田喜二郞の五氏が加はつて、陣容を整へたといふに過ぎない。されば現任審査員中には嘗て第四回以來四度に亘つて委員であつた中澤氏が歸り新參となり、第五回、又は第八回以來引きつづき藤島氏があつたり、第一回以來、中二回を缺ぐ滿谷氏があつたりして、古顏揃ひの中に新顏も交つてゐるといふ有樣である。今こゝには主任の藤島氏から、手當り次第に語つて行かう。

藤島武二氏

藤島氏は審査委員中で洋畫部の主任であるが、年輩からも經歷からも、たしかに帝展の一リーダーである。帝國美術院會員に祀り上げても無論よい。慶應三年の九月生れであるから、立派な中老だ。だが、御本人も世間も氏を以て會員に祀り込むのは餘りに早過ぎると思ふだらう。それは貫目が足りない爲めではなくて、餘りに若々しいからである、もつと靑年のリーダーとし

て働いて貰はねばならぬからである。實に氏はまだ若い。年に似合はず若い。人間も作品も若々しいところがある。氏は黑田淸輝氏と同じ鹿兒島の人で、薩摩隼人の血を受けてゐる。幼名を猶熊といひ、夙く父に死に別れたので、母の手に育つたが、元來藝術的な家系を引いてゐると見えて、氏の長兄も畫がうまかつたし、祖先にも名手があつたとのことである。明治十四五年の頃には、平山東岳といふ人について四條派を學び、十七年に上京して川端玉章の門に入り、二十三年までそこで研究をつゞけたといふから、最初は日本畫家として可なりな根柢を築き上げた人である。しかし、最初から氏の志すところは洋畫であつて日本畫ではなかつた。そこで、更に去つて中丸精十郞氏に西洋畫を學ぶことになつた。それから松岡壽氏に學び、轉じて山本芳翠の門に入つた。その頃の同窓には湯淺一郞、白瀧幾之助、北蓮藏等の諸氏があつたが中にも當時から氏は一頭地を拔いてゐたといふ。ところがこれも長く研究を積むわけに行かなかつたので、二十六年から三重縣の津の中學敎師になつた。二十九年、東京美術學校に初めて洋畫科が設けられるや、黑田淸輝氏の推薦で助敎授となつた。これが氏の今日ある緖であつた。故に氏と黑田氏との關係は久しいと共に、岡田、和田諸氏が黑田氏の直系であるとは異り、稍外様の觀もある。美術學校にあること十年、三十八年に文部省から佛、伊兩國に留學を命ぜられ、初めパリでグランド・ショーメルに入り、のち國立美術學校へ入つた。コルモンについて油

畫を學び、のち英、白、和、獨、瑞等の諸國を歴遊し、四十一年イタリーに轉じてカロリユス・デユランに就て指導を受けた。歸朝したのは四十三年で、直に美術學校の教授に任ぜられた。氏は美術學校の外、川端畫學校の洋畫部にも教鞭を執つてゐる。氏の作品は比較的少い。文展では第五回に「幸ある朝」、第六回に「公園の一隅」、第七回に「うつゝ」(三等賞)、を見た位なもので、成績もよい方ではなかつたが、推されて第八回から審査委員となつた。第九回には「空」、第十回には「靜」、第十二回には「草の香」、帝展の第一回には「カンピドリオのあたり」等を出品した。そしてそれ等のいづれもが、力作、傑作といふほどに見られるものは少いのである。それにも拘はらず、氏は今尚ほリーダーらしい地位を保つてゐるのは人物がしつかりしてゐることゝ、作品に根柢があつて、且つ常に氏の個性に迫つてゐることが、おのづから世人に何かの期待をつないでゐるからであらう。あのあかるくて華やかな、しかも率直な色調は、たしかに氏のみに見ることが出來るところである。

滿谷國四郎氏

氏は太平洋畫會出身の大家として、中村不折氏等と共に、現代洋畫壇に重きをなしてゐる一人である。氏は明治七年十一月、岡山縣の總社町に生れ、早く小山正太郎氏の不同舍に學び、三十三年には歐米に留學し、三年の後歸朝したが、四十四年に再び渡歐して、大正三年に歸つて來た。その展覽會に於ける成績は、明治四十年に東京博覽會に於いて一等賞を得、文展へは第一

空　　　藤島武二

回より第三回まで審査委員であつたが洋行した爲めに一時中絶し、第八回より再び審査委員となつて現にその任にある作家は、第一回に「購夢」、第二回「車夫の家族」、第三回に「かぐや姫」、「綠蔭」、「伊豆の山」、第四回に「二階」、「いはや」、「雨前の山中湖」、第五回に「港の雨」、「飯島博士の肖像」、「白い色」、第八回に「岩山」、「砂丘の裏」、「浴後」、第九回に「魚市場」、「島」、「行水」、第十回に「初夏の山」、「素燒」、「浴の後」、第十一回に「四月」、「長崎の人」、第十二回に「江

車夫の家族　　滿谷國四郎

畔漁商」、「源泉」帝展に「榕樹の下」を出してゐる。その第五回までの作は、所謂太平洋畫會風のやに色の繪であつて、巧は巧なれども、左したる特色を發揮したものではなかつたが、最近の洋行より歸つて、第八回以來

發表した作は、從來のものと餘程畫風を異にして、裝飾的の且つ溫柔の味と稚工とに富んだ面白いものになつてゐた。實に氏は此の方面に新境を開いたので、今のところ、その傾向を同じうする人は、他に求められない。殊に何となし素朴な中に、手際のよい裝飾氣分のあるのは、氏の獨壇場とも言ふべきである。氏は太平洋畫會には創立以來參劃して、大に盡力し、現にその會員となつてゐる。氏は先年夫人を亡くし、今に獨身を守つてゐるが、ちよい〱浮名を立てぬでもない。最近、東京の西郊の新居を營んだ。

中川八郎氏 も、系統から云へば中村、滿谷氏と共に太平洋畫會に屬する。明治十年十二月、愛媛縣喜多郡に生れた。はじめ小山氏の不同舍に學びて、三十二年と三十六年との兩度に亘つて前後五年の間歐米に遊學した。四十年には、東京勸業博覽會に出品して二等賞を得たが、文展では第一回に「夏の光」、第二回に「北國の冬」、第三回に「瀨戶內海」を出し、各三等賞を得た。ついで第四回に「巖壁」を出して二等賞を得るに及び、第五回以後は洋畫部の審查員となり、第五回には「高原の花」、「造船場」、「ポプラ」、第六回には「夏の朝」、「磯打つ波」、第七回には「夕立前」、「夕凪」、「穩かな朝」、第八回には「最上川」、「杏花の村」、「日本アルプス」、第九回には「高山の夏、三題」、第十回には「上高地の夏」、「青島の夕」、「春」、第十一回には「大同江畔」、「阿波の鳴門」、第十二回には「勘察加の曠野」

「曠野菜色」、帝展には「牧場の初秋」「初秋の夕」等を出してゐる。そしてそれ等は、題名を見ても直ちに想像される如く、皆風景畫である。人物を描いたことは殆どなくして、各地の風景を巧に描出してゐる。一體、西洋畫家——ばかりでなく、日本畫家でもだが——には、人物と風景とを併せ巧にする人が多いと共に、或る一方を特に得意とする人がある。中にも中川八郎氏や吉田博氏、山本森之助氏の如きは、殆どすべてが風景畫である。それ等の中で、比較的自然の眞相に觸れ、ヴイヴイッドな筆で表現してゐるのは中川氏である。溪崖を激して下る水や、雲表に聳える山や、巉巖を嚙む瀧や、さう言つたものを活寫したすぐれた作がある。また高原植物の亂れ咲いたのや、千古に殘つた雪やを寫したものにも見るべき作がある。時に單調に流れぬでもないが、まづ〳〵クラシックな風景畫の大家と推さねばなるまい。

中澤弘光氏　は、寧ろ白馬會派に屬する人である。氏は明治七年八月、東京芝に生れて、大野幸彥、堀江正章、黑田淸輝等の諸氏について學び、三十二年に東京美術學校の洋畫選科を出でた。四十年、東京博覽會に出品して一等賞を得、文展には第一回に「夏」、第二回に「雄鹿半島の一角」を出して、共に三等賞を得た。そして第三回に「おもひで」を出し二等賞を得たるにより、第四回より第七回まで西洋畫部の審査委員となり、第四回に「溫泉」、第五回に「奈良の晩春」、「煖爐の前」、第六回に

「岸の丘」、「乳の祈願」、「鼓」、第七回に「水に近く」、「海苔とる娘」、第八回「女瀧」、「灯」、「ながれ」、第九回に「三つの思ひ」、「ゆく春」、「夏の人」、第十回に「春日の神子」、「青き光」、第十一回に「朝鮮の歌妓」、「歸途」、第十二回に「かきつばた」、「桃さく丘」、帝展に再び審査員となりて「ひやけ」「光明」を出した。而して今氏の作品を通覽するに、少くとも三つのグループにわけて考へられる。一つは風景畫にして、一つは現實畫、他は理想畫ともいふべきものである。その中、風景畫には「雄鹿半島の一角」、「奈良の晩春」、「ゆく春」の如き、一種の趣ある作がある。殊に「雄鹿半島」の如きは、氏をして名をなさしめた作だけあつて、頗る見るべき出來であつた。あの巖々たる海角を寫して、よく自然の活相に觸れてゐた。また現實的の人物畫には、「海苔とる娘」、「朝鮮の歌妓」、「春日の神子」等があつてどつちかと言へば、氏の主觀的興味の加はつた、現實に更に美化を加へたやうなものに面白いものがある。それと、理想畫との繋がりとも見るべき「思ひ出」の如きも一種の情趣があるが、理想畫若くは宗教畫の「乳の祈願」、「かきつばた」等に至つては、卑俗の感を伴ひ、失敗に近いものであるやうに思はれる。

南薫造氏

は、青年作家ではあるが、和田三造氏について世に知られた、ちやき／＼の一人である。氏は明治十六年七月、廣島縣内海町に生れた人て、父はお醫者さんであるといふ。中學

六月の日　　南薫造

校を卒業すると、直に東京に來つて美術學校に入り明治四十年に卒業し、直に英國に渡つて二年間、そこに居り、ついで佛國に轉じ、パリに一年間滯在して、その間イタリーへも旅行し、十分美術の研究に沒頭した。明治四十三年にはアメリカを經て歸朝し、その年文展の第四回に「坐せる女」を出品して三等賞を得た。その洋行歸りの新しみのある畫風を以て、大に世の注意を惹いたが、更に第五回に「瓦焼」を出し第六回に「六月の日」を出し、第九回に「葡萄畑」を出して、皆二等賞を得るに及び、破天荒の新進人物として、世は一齊に眼を見張つたものである。そこで大正五年の第十回以後、洋畫部審査員となり、第十回に「五境」、第十一に「城」、第十二回に「雪の中の小村」、「樂器を持てる二人の男」、帝展に「冬」「夏」等

を出品して、益々斯界に重きをなしてゐる。それ等の中で、氏の最も油の乘つた作は「死燒」と「六月の日」とであらう。「死燒」は、可なりに複雜した景致を一局の中に收めて情趣のある、調和のある、好箇の詩境を示したものである。「六月の日」は田園に立つ農夫が、勞働のつかれを忘るべく今しも一つの德利を取り上げて、水を傾け呑んでゐる圖である。前者は楚々たる敍事詩風にして、後者はミレーに見るなつかしさを有してゐる。氏の特色は、明徹した觀察眼ではつきりとデリケートに、あるが儘の世界を受け入れて寫さうとするにある。しかし時にまた「五境」の如き、理想的の人物畫を試みんとしてゐるが、それは未だ完成したものとは言はれまい。

長原孝太郎氏

長原氏の藝術も亦、氏の個性から出でたユニークなものである。氏は年輩からして決して若くはない。中村、黑田氏等の同輩で、元治元年二月、美濃國に生れた人である。號を止水といひ、南畫のやうな水墨の日本畫をも巧みにし、或る人は却つて氏の本領たる洋畫よりもその方を好むほどである。本姓は竹中、早く父を亡ひ、明治十八九年の頃小山正太郎氏の不同舍に入り、のち原田直次郎氏に友人としてその指導を受け、三十一年、黑田清輝氏の推薦に依つて東京美術學校の助教授に任ぜられたのは、太平洋系の人にして、且つ未だ名もなかつた氏としては異例と言はねばならなかつた。その後、美術學校の方に教授となり、昨年から帝展の審査員にもなつたが、かねて識

量を以て世人に認められてゐた氏としては、寧ろ長い間の隱忍であつた。白馬會展覽會等へ時々出品したこともあるが、文展へは第二回に「平和」、第三回に「入道雲」、第四回に「風伯」(以上皆褒狀)、第五回に「草花」、第六回に「藤棚」、第七回に「殘雪」(褒狀)、第八回に「殘雪」(三等賞)、第九回に「晩春」(二等賞)、第十回に「初夏」、「晴嵐」を出したが、この圖に推薦となり、第十一回に「月」、「新晴」を出し、第十二回に「李花」、「山村」、帝展に「山村」を出した。その「晩春」は、氏の最近の傾向を最もよく示すもので、概言すれば多分の日本畫、殊にその裝飾的分子を取り入れたもので、二曲の屏風一双に晩春の花を鮮麗に寫してあつた。實に氏の行く道は、個性を基調としたる裝飾的方面にして、西洋ではホイスラー等の一面にあるのみで、氏と同じ仕事をやらうとする人は、西洋にも日本にも餘り例がない。併し、此の一二年の、スケッチ風の小品は、氏の本領を示すものではあるまい。

石川寅治氏　石川氏は早くから知られた人である。氏は明治八年四月、高知市に生れ、二十四年に小山氏の不同舍に入り、三十四年、中村不折、吉田博、滿谷國四郎等の諸氏と共に太平洋畫會を起した。三十八年より二年間、故大下藤次郎氏等と歐米に遊び、四十年には洋行土産の畫を東京勸業博覽會に出品して三等賞を得た。文展へは第一回に「秋雨」、「女」、第二回に「菊」(三等賞)、第三回に「桃の節句」(褒狀)、第五回に「雨の日」、「靜物」、第六回に「鞆の津」、「窓のそば」、第七回に「港

午後の凪　石川寅治

の午後」(二等賞)、第八回に「最上川」「西日さす濱邊」、第九回に「深潭」、「野うるし咲く頃」、第十回に「水郷黄昏」、第十一回に「驟雨の徴」を出して推薦となり、第十二回には「雨後」「午後の凪」を出品した。而して昨年の改任に於いて帝展審査員となり、その出品畫には「雨後」、「深碧の流」があつた。氏の作品中、最も俗間に知られたのは鮮麗濃密な色で描かれた婦人像と花とであるが、風景に於いても時として清新の香ひの高きものを出すことがある。氏はまた東京女子高等師範學校の教鞭を執つてゐるので、婦人界に最もよく知られる一人である。

太田喜二郎氏　氏は明治十六年十二月京都市に生れた人である。初め東京に出でゝ白

馬會の溜池研究所で學んだが、のち東京美術學校の洋畫科に入り、四十一年に卒業して直ちに白耳義に留學し、ウイットマンについて研究し、大正二年に歸つて來た。その作品は、白馬會等では前から見ることが出來たが、文展へは歸朝後第八回に始めて「歸り路」を出し、その翌年「薪」を出して、各試等賞を得たので、一躍して大名を博し、第十回には「山家」、「桑のみ」、「夏の朝」を出して、推薦せられるに至つた。第十一回には「四月の野」、「田植」を、第十二回には「鞍馬道」「麥秋」を、帝展には「夏の晝」「藪」を出してゐる。而して帝展に於いて審査委員に任ぜられたのである。氏は堅實な色調を以て誇張されざる自然を描寫するのを特色とし、人物畫よりも風景畫の方の人である。出世作「歸り路」、「薪」等は傑作と稱してよかつた。氏は現に京都郊外に居住して專らロ－カルカラ－の表出につとめてゐる。恐らく氏は南薰造、中村彝等の諸氏と共に、尙ほ將來を期待すべき若々しい作家であらうと思ふ。

金山平三氏　我々が金山氏について知りそめたのは、太田氏よりも更に新しい。それもその筈、氏は明治四十二年、卽ち太田氏の翌年に東京美術學校を卒業すると、一寸の間同校の助手となつてゐたが、直に去つてフランスに遊び、大正五年まで歐米を經廻つた人であるから、我々に取つては新人中の新人と言はなくてはならない。されば文展出品の如きも、第十回に「夏の內海」、「巴里の街」、第

十一回に「氷すべり」、「造船所」を出して、共に特選となり、殊に「氷すべり」はその首席として世に知られたものである。第十二回には「諏訪湖の富士」「さびれたる寛城子」を出して推薦せられ、帝展には審査委員として「雲」「花」を公にした。中にて、我々の記憶に最も深いのは「氷すべり」と「造船所」であらう。「氷すべり」は、冷たい尖つた白い雪の感じと、それを滑り行く人間のいのちとが、ぴつたりはまり合つた一場の靜かなシインが面白く、「造船所」はメンツェルの「鐵工場」の一部を思はせる、現代的空氣を含んだものであつた。氏も亦、將來を囑望すべき一人である。氏の細君は、日本始めての女理學士牧田女史であることも話柄の一つである。

六、審査員級の諸家

和田三造氏

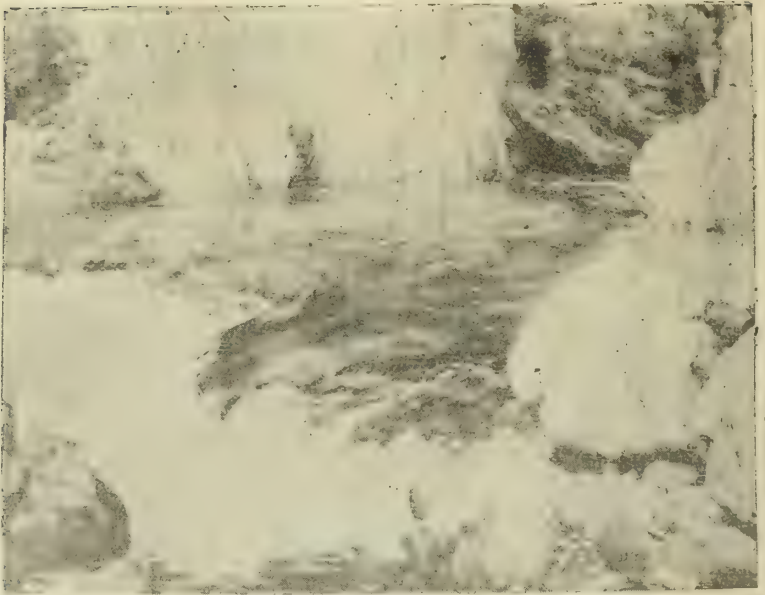
次には嘗て文展審査委員であつた人達に觸れて置く。先づ和田三造氏がある氏は明治十五年、福岡縣に生れた人である。初め白馬會の溜池研究所に學び、のち東京美術學校の西洋畫選科に入つて、明治三十七に卒業した。文展に於いては、彫刻の朝倉氏と共に、レコード破りとして、その初期の花形と呼ばれた人である。卽ち第一回の「南風」と、第二回の「煒燻」と、共に氏の若若しき意氣を示して二等賞の高席を占めた。ついで四十三年には文部省留學生として三年間フランス

煒燻　　和田三造

に行き、歸途印度に滯在して大正四年三月歸朝したが、後再び印度に渡つた。その爲めにその後は暫く文展と遠ざかつたのであるが、第十回文展から洋畫部の審査委員となり、第十一回には久し振りに「バーの午後」を出して世の注目を惹いた。大正七年にはまた南蠻繪更紗の研究に、「海の幸」「山の幸」を製作して、工藝的美術の新工夫として識者を感心せしめた。然るに感ずるところあつて大正七年文展の審査委員を辭し、昨今全くその畫を世に出さない。——何と言つても、氏の「南風」と「煒燻」とは稍後の南氏の「六月の日」や、「春さき」や、小杉氏の「豆の秋」やと共に、否それ以上に好評を博したものである。尤もそれには俗眼に投じ易かつたといふ理由もあるが、今しも南風を受けて、海に漕ぎ出でた漁夫達の、あの力と氣とに滿ちた、生の躍動その物のやうな體格、また鐵

を鍛へる人々の火に映じた同じ氣分の畫は、共に我國には從來、中村不折氏の「建國剏業」の外に餘り例を見ない男性的のものであつた。その氏が、今や織物美術の方面にかくれて、その作を示さないのは、來る年毎の物足りなさの一つである。因に氏は黑田清輝氏と諒解があるさうなから、又帝展へ歸るてあらう。

鹿子木孟一郎氏　鹿子木氏は中村氏などゝ共に、太平洋系中の先進である。號を不倒といふが繪畫には本名を署してゐる。明治七年岡山縣に生れた人で、小山正太郎氏の不同舍に學び、明治三十四年に渡歐し、パリでアカデミー・ジユリアンに入り、ジヤン・ポール・ローランスについて學んだ。一旦歸朝したが、三十九年に再び渡歐し、大正四年十二月には三度目の洋行をして七年の三月に歸つて來た。そんな關係から文展へは第二回から第七回まで審査員になつてゐたのち、任に入らなかつた。長い間京都關西美術院長となつて居り、また京都高等工藝學校、名古屋高等工業學校の敎鞭を執つたので、子弟を薫陶する方面へ特に貢獻が深かつた。文展には、第二回に「ローランス畫伯の肖像」、「漁夫の家」、「ノルマンデーの海岸」、第三回に「新夫人」、「淺間山中」、「河原氏の肖像」、第四回に「林泉」、「紀州勝浦」、第五回に「インスピレーション」、「舞子の濱」、第六回に「肖像」、「鴨東の妓」、「若王子瀧」、第七回に「加茂の競馬」、第八回に「逍遙」、「水の流れ」、第九回に「書齋に於ける平瀬介翁」、「札

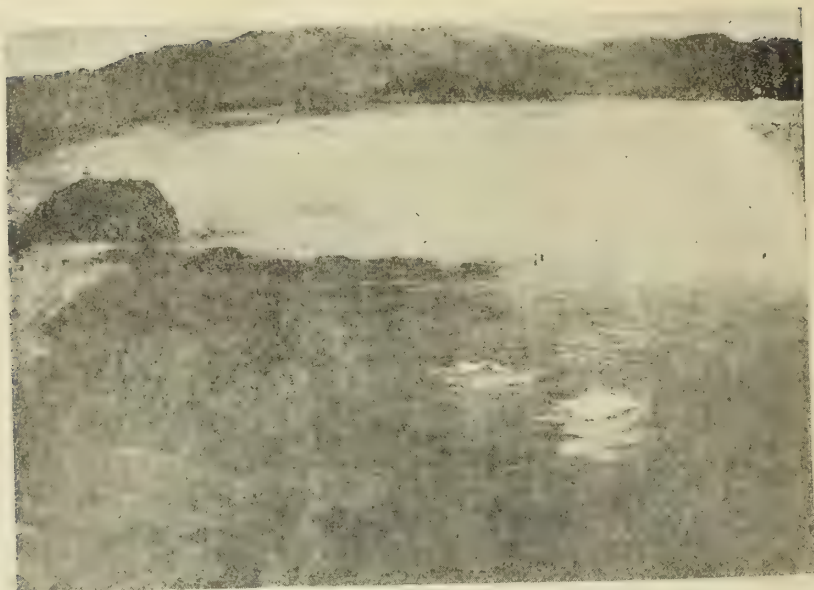
花寶女　　鹿子木孟郎

溪流　吉田博

幌郊外」、等を出品してゐる。最近又々外遊の途に上つて今は日本に居ない。

吉田博氏　氏は明治九年久留米市に生れた人で、はじめ小山正太郎氏の不同舍に入り、のち三十二年より三年間歐米に遊び、三十四年に、中村不折、滿谷國四郎、石川寅治等の諸氏と共に太平洋畫會を創設し、我が洋畫壇の開發に功があつた。ついで明治三十七年より三ヶ年間再び歐米諸國を巡遊して歸つた。文展では、第一回に「ピラミッドの月夜」を出して三等賞を得第二回に「雨後の夕」を出し、これは二等賞となつた。第三回には「雲表」で、これまた三等賞を得たのである。そこで第四回より

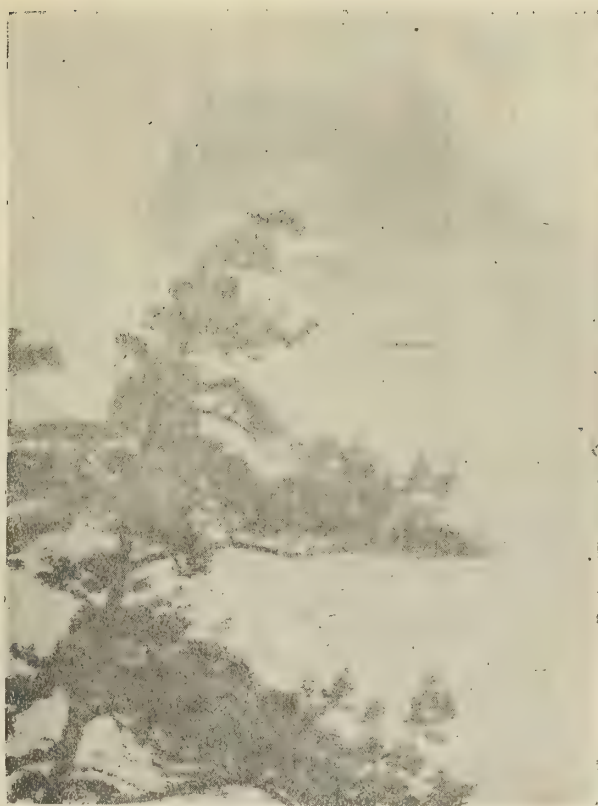
審査員に任ぜられ、第七回に至つた。その間の出品は、第四回に「劍ヶ峯より」、「雲界」、「溪流」、第五回に「朝」「芥屋大門」、第六回に「奔湍」、「飛騨の深山」、「寢覺の床」、第七回に「酒田港」、「漁村の西日」、「初秋の朝」、第八回た「春」、「ばら」、「牛車」、第九回に「穗高山」、「奔流」、「初秋」、第十回に「一澗」、「山頂の花崗岩」、「天龍川」、第十一回に「崖底」、「保津河」、第十二回に「澗聲」、「劍山」帝展に「草吹く風」、「雨後」等を見るのである。氏は實に風景畫を以て終始する人で、それも高山又は谿谷の描寫を最も得意としてゐること、題目を見ても知り得るところであるが、餘りに同じやうな景物を繰返すのと、色彩と調子とが單純一律に傾き易いとの爲めに、漸く一部の人に飽かれ出した感がある。

「山本森之助氏」 氏は系統をいふと甚だ複雜した人である。明治十年四月、長崎の新橋町といふところに生れ、初め大阪に出でゝ、山内愚僊といふ人に洋畫を學び、のち東京に出で、淺井忠、山本芳翠等の諸氏に業を受けたが、明治二十七年から東京美術學校の洋畫選科に入つて、三十二年に卒業した。故に淺井氏一派のやうなところもあれば、學校派とも目せられる。三十四年に沖繩縣に遊びお土産として三十七年の白馬會展覽會へ「暮れ行く島」といふ畫を出して賞を受け、明治四十年の東京勸業博覽會へも出品して「初夏」に一等賞を得たのである。文展へは第一回に「森の奥」、第二回に「曲浦」を出して各三等賞を得、第三回に「濁らぬ水」に二等賞を得たので、第四回より第七回まで洋畫部

曲浦　山本森之助

の審査員に擧げられた。また明治四十五年には中澤弘光、三宅克巳等の六氏と光風會を起して年年開會してゐる。最近の第十一回文展には「信濃の山」、「滿洲の一部」を、第十二回には「波」を、帝展には「凍れる湖畔」「港の朝」を出品してゐる。氏も亦、風景畫の專門と言つてよいが、色調や手法は吉田氏とは稍異つて、一種の楚々たる味を出さうとしてゐる。しかし氏の畫も亦、若い人達には餘り迎へられなくなつた。たゞ、コローなどに似た特別の味はすて難い。

久米桂一郎氏

久米氏は現在に於いては餘り描かず、また發表もしないが、その畫壇の功勞は黑田氏と共に頗る著しいものがあつた氏は慶應二年八月、佐賀市に生れた人て、初め

藤雅三について學び、明治十九年佛國に留學して、ラファエル・コランの門に入り、二十六年、黒田清輝氏と共に歸朝するや、翌年赤坂葵橋に洋畫研究所を起し、二十九年、更に黒田氏及び安藤忠太郎氏と白馬會を組織した。また東京美術學校に入りて西洋畫科教授となり、西洋考古學及び解剖學を講ずること二十年一日の如く、旁ら商科大學にも教授の職にある。文展では第一回より第三回まで、第五回より第七回まで洋畫部の審査員に任じたのである。その作品は、明治二十八年の京都內國勸業博覽會及び佛國巴里博

島と松　　山本森之助

覽會に出品して受賞したのが主なもので、文展に作品を出したことはない。むしろ現代洋畫界元老の一人として、明治の美術界の發展に努めた效に敬意を拂はねばならぬ。

松岡壽氏　この外、嘗て文展の審査員として名を列ねたことのある故老として、松岡壽氏を擧げねばならぬ。氏は文久二年岡山に生れて、東京に出で、明治元年川上冬崖について洋畫を學び、のちフオンタネージに學んだ。十三年イタリーに留學し、ローマ美術學校繪畫科を卒業し、更に佛國に渡り、九年ののち歸朝した。そして小山、淺井、五姓田、山本等と共に明治美術會を組織し、大に我が洋畫の開發指導につとめたのである。のちまた東京高等工業學校の教授となつたが、文展の開設せられるに及んでその審査員となり、第七回までその任にあつた。但し文展へは殆ど出品したことなく、近作と稱すべきものは少いが、靜物及び肖像畫にはすぐれたものを見るのである。以上で、帝展の現在審査員及び嘗て文展の審査員であつた人についての一覽を終つたから、これより現に帝展の中堅人物とも目すべき人々を、推薦、特選より始めて語つて行かう。

七、帝展推薦の諸家

推薦の人々　文展では、規定の上には一、二、三等賞及び褒狀が、審査の上で與へられる

ことになつてゐた。併し正一位稻荷様でもあるまいが、一等賞は尊重の意味から何人にも與へられず、結局有名無實に終つたのである。しかも、文展だとて十年もつゞのく中には、成績の優秀とか、美術界の功勞とかの爲めに、その出品に對して今更二等賞でもあるまいといふやうな場合が出來て來た。されぱとて、最初から無賞の虛名としてあつた一等賞も擬せられず、こゝに第十回から思ひついたのは推薦といふことゝあつた。その最初に推薦となつた西洋畫家としては、第十回の太田喜二郞、長原孝太郞の二氏で、次回には石川寅治氏と三宅克巳氏とをこれに擬し、第十二回には石橋和訓氏を開會前に、また開會後審査の結果として白瀧幾之助、金山平三の二氏を推薦した。それから昨年の帝展第一回に際しては、一括して五名の多きを推薦したが、その氏名は中村彝、片田德郞、田邊至、牧野虎雄、大久保作次郞の諸氏であつた。斯くてこれまで推薦となつた人は十二氏であるが、その中、太田、長原、石川、金山の四氏は昨年の審査委員であつて、別項に語つたから、こゝには年代順に、三宅氏以下に觸れて置かう。

三宅克巳氏　三宅氏は今更青年等に交つて推薦せられる年輩でもない。氏は明治七年一月德島縣撫養町に生れた人で、初め松平民治、上杉熊松等について洋畫を學ひ、二十二年の大野幸彥に學び、二十五年頃よりは更に原田直次郞についたといふ。斯くて三十年より三十二年まで歐米に留學

し、三十四年、パリ大博覽會の頃再び渡歐し、四十二年、三度歐洲に渡つて四十四年歸朝し、大正六

テームス河畔ウヰンゾル　　三宅克己

年には支那に遊んだが、此の春第四度目の渡歐をして既に彼地に在る。氏は水彩畫が專門であつて、我邦の水彩畫の發展は、實に氏に負ふところが多い。文展へは第一回以來每回出品し、第二回「初冬」、第三回「湯ケ島」は共に三等賞となり第十九回の「冬の小川」も二等賞となり、第十回の「夏景色」「夏の山」を經て、第十一回に「夏」を出して推薦となつた。氏の閲歷と賞格よりすれば、當然審査員となるべきであるが、

未だその事がないのは何故てあらうか。氏は又大正元年、中澤弘光、山本森之助氏等と光風會を起してゐる。尙第十二回の文展には「諏訪の森」「落合村」、帝展には「牧牛」「水鄕」等を出した。

石橋和訓氏　氏は最初日本畫をやつて、ついて英國に行つて長い間同地に在つたから、最近推薦されるまで、多くの人は氏について知らなかつた。氏は明治九年、島根縣飯石郡須佐村の山中で生れた。はじめ、瀧和亭に師事して南宗風の花鳥を專らとしてゐたが、三十六年、飄然として英國に遊び、その四十年にロイヤル・アカデミーの研究所を卒業し、大正七年一月久しぶりで歸國したが、此の四月再び英國へ去つてしまつた。氏はアカデミーに出品して幾同か入選したので、日本よりも英國に名を博してゐる。尤も文展へも屢々出品し、第二回の「美人讀書」は共に三等賞を得た。第四回に「肖像」、第五回に「ドクトル植原氏肖像」、第六回に「織手消閑」「彫刻家」、第十回に「肖像」、第十二回に「肖像某氏の家族」「肖像松方侯」、を出して此の時推薦となり、帝展には「肖像植原悅二郎氏子供」、「肖像山田昌邦氏夫婦」を出した。これ等でも知られる如く、氏は肖像畫家である。しかも肖像畫家としては世界有數の一人とも稱してよく、一種の日本畫で鍛へた勁健の筆觸を以て、快い自在な情趣を出すところ、なか〳〵手に入つたものである。されば內外人にして、氏の手でその像を描かれた人は極めて多い。氏はまた日本畫をもよくし、時に健抜なる寫生の類などをも

のする。尙ほ氏の夫人は英人にして、英國に家を構へてゐる。

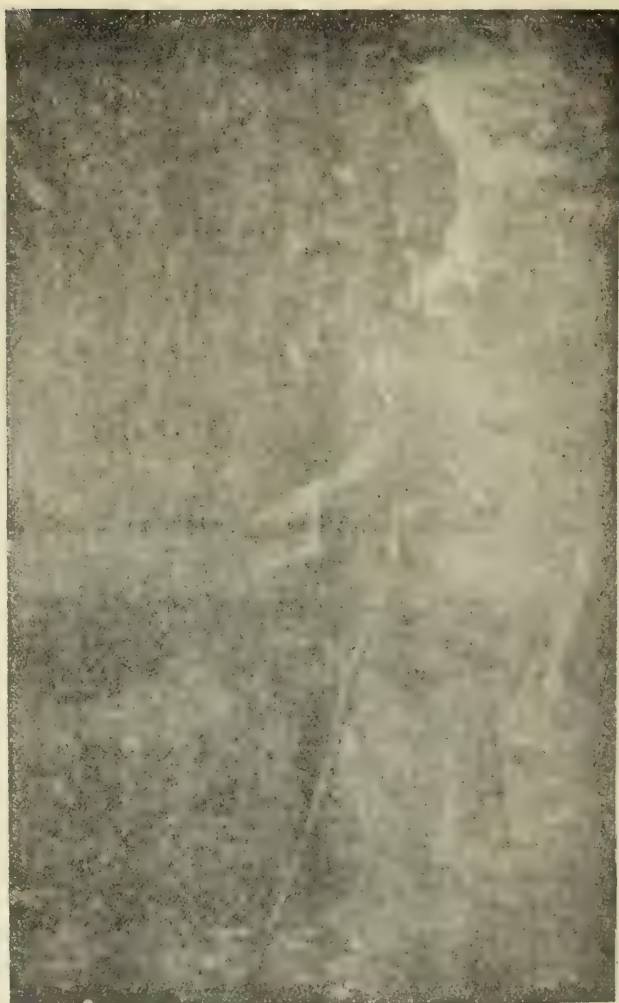
白瀧幾之助氏　白瀧氏も古顏に屬する一人である。氏は明治六年三月、但馬國の生野町に生れた。初め山本芳翠氏に學びつづいて黑田淸輝氏につき、のち東京美術學校に入つて三十一年に卒業したそれから米、英、佛に數年間留學し、パリではラファエル・コランについて業を得た。文展へは第五回に「裁縫」を出して褒狀を得、第六回に「肖像」、第七回に「羽衣」、第八回に「野村氏の像」を出したが、これは二等賞の首席になつた。第九回には「某氏の像」「收穫」「撫子」を出品し、大正七年に推薦せられた。第十二回には「某氏の像」、帝展には「ハリス氏の像」を出してゐる。斯くて氏も亦肖像を最も得意とすることを知られるが、同時にスケッチ風の輕い風景畫をもよくする。フランス風のあかるい軟い氣持のよい畫である。氏はまた昨年の三月、支那に遊んだ。

中村彝氏　中村彝氏は文展へ早くから出品して、早熟の一人ではあるが、しかし矢張り新人に屬してゐる。氏は明治二十一年七月、水戶市に生れた人である。はじめ中村不折、滿谷國四郎氏等に太平洋畫會で學んだが、四十二年に同會に於いて奬勵賞を得た。文展では第三回に「巖」を出して褒狀を得、第四回に「海邊の村」と、第五回に「女」、第八回に「少女」を出して共に三等賞を得、第九回に「肖像」で二等賞を、第十回に「田中館博士の肖像」で特選の首席を占めた。斯くて帝展に

於いて推薦せられたが、その時は出品しなかつた。氏は實に自らの心象を描く最もすぐれた、觀照に徹した一人である。多くの風物を取り合せたり、外光を研究したり、或る物の詩美をたゝへたりする態度を取らず、たゞ一點を見つめて、それを如實に、内部より描き表はさうとする態度の人である。何處までも忠實な眞劍なおそろしいほど物をつきつめて行かうとするところに獨自の境地を開いてゐる。故に、頭だけ、半身像といつた樣な肖像に最も見るべきものがある。惜しいことに氏は病身である。年々の展覽會出品さへもろくに出來ないのは殘念である。

一片多德郎氏　昨年の帝展に、日本畫とも西洋畫ともつかぬ、しかも極めてすばらしい大きいものを出品して、觀衆をあつと言はせたのは片多德郎氏であつた。氏もまだ若い。明治二十二年六月の生れで、大分縣の出身であるが、四十五年に東京美術學校の西洋畫科を卒業してゐる。文展へは第三回の時に「夜の自畫像」を出し、第四回に「黃菊白菊」(褒狀)を、第五回に「或る人の母」(褒狀)、第六回に「肖像」、「さんかん」、第八回に「夏山急雨」(褒狀)、第九回に「伐木の圖」(褒狀)、第十回に「婦女沐浴の圖」、第十一回に「妓女舞踊圖」を出して、特選となり、第十二回にも「花下竹人」で特選を得、遂に昨年の帝展第一回に推薦された。又片多氏は院展へも何回か出品してゐる。氏が去年帝展へ出した「霹靂」と題する作品は、すばらしい大きなもので、石井柏亭氏が「六曲屏風一双といふところを

その儘カンヷスで行つたものである」と評したほどに、何う見ても洋畫でなくて、寧ろ日本畫を油繪

花下竹人　片多徳郎

で行つたといふ外はない。雷神と電神とを描いたもので人體描寫は寫生で行つてゐるけれど、取扱ひ方は理想畫とか裝飾畫とかいふべきものであつた。且つこれは宗達、光琳及び抱一にある傑作「風神雷神」から脱化したものであるこ

と言ふまでもない。畫の觀者に與へる感興は、必ずしも快よいものではなかつた。大きい、だだつ廣い畫面を、可なりに纏めたのと、勇壯な二神を描いたのとは取るべきとしても、徒らにこけ脅かしの爲めに描いたと思はれ易い、何うしても吾々にぴつたり來る作ではない。たゞ、その努力と、此の種の作品が他に餘りないのと、片多氏年來の成績とで推薦されたのであらうが、惡口を言ふ人は、氏が從來、文展と院展との兩股がけをやつてゐたのが大なる理由だとさへ評した。氏も院展出品は、此の年もこんな場當り的なものではなくて、「上高地風景」その他六點であつた。たゞ此の人の長所で同時に短所なのは、餘りに技巧的なことである。あまり技巧が目について、ブリキ細工のやうな鋭くて冷ない感じがするとは、見る人のよく言ふところである。が、或る程度まで深い觀察をした、優れた作をちよいちよい見ることもある。

田邊至氏　田邊至氏は、明治十九年十二月生れて、これは江戸ッ兒である。四十三年には東京美術學校の洋畫科を卒業すると、同校の助手となつた。第一回以來文展の出品者として知られてゐるが、中途、例の二科會の運動に參與して、その鑑査員にもなつたが、故あつてその翌年脫會した。作品には、第一回の文展に「無音」、第二回に「牧牛」、第三回に「夏の夕」、第四回に「窓邊の肖像」第五回に「肖像」、第六回に「甲良ほし」(褒狀)、第七回に「曇り日」(褒狀)、第九回に「雲の蔭」(三等賞)、

樹かげ　　田邊至

第十回に「樹蔭」、第十二回に「七面鳥を飼ふ人」を出し、これは特選になつたが、帝展には「まどゐ」「向日葵」を出品して、審査の結果推薦せられた。柏亭氏は次の如く評してゐる。

『「まどゐ」も、サロン畫に屬するが、押出しはさう惡くない。物の描寫にも堅實さがある。昨年出た鳥に餌をやる女の足と地面との關係は、不安定であると共に、その突張つた姿勢が硬かつたが、今度のにはさういふ破綻は見えない。これならば本場のサロンへ出しても決して恥しいことはあるまい。』

その「まどゐ」は一人の若い女がミシンの

前に腰を下して、何か白い布を縫つてゐる。その背後に姉らしい女が赤ん坊を抱いて腰かけ、それに並んで手前に五つ六つの女の兒がエプロン姿でちよこなんとこれも腰掛けてゐる。その姿勢は自然で先づ難がない。同時に平凡な、何等の奇拔さ清新さもないものである。一體に此の人の繪には、徹底した物の見方が餘程稀薄である。さう言へば大抵の日本の西洋畫は皆さうではあるが、アカデミックなこれ等の繪畫には殊にその感が深い。

牧野虎雄氏

牧野氏は片多氏より一つ年下で、明治二十三年十二月、新潟縣高田市に生れた。大正二年に東京美術學校の洋畫科を出ると、更に研究科に入つた。文展出品は比較的後で、第三回に「漁村」、「朝の磯」、第八回に「滿潮」、「潮浴み」、第九回に「紅葉の下湯」（三等賞）、第十回に「溪流に水浴」（特選）、第十一回に「山間の初夏」、第十二回に「麥扱く農婦等」（特選）、帝展に「著船場」、「庭」を出しその時審査の結果推薦せられたのである。吾々の見た中では、第十二回の「麥扱く農婦等」が一番面白かつた樣に思ふ。昨年の作では「庭」が面白い。同じく柏亭氏の評を借りると、

「牧野虎雄氏はなかなかの技巧家であるが、「庭」は何處から何處迄、あまりにのべつにアクサンづけられて、うるさいものになつてゐる。其處に餘裕といふものがないから、黑人がゝつた觀者でも悅樂を感じ得ない。構圖は面白いし、前方少女の傍に立つて黃金葵その他の花草など、中世ゴブラ

牛小屋　　牧野虎雄

ン織に見るやうに、旨く單化されて居る、大きな調子といふことに注意が向けられたり、氏の畫は多分餘裕を生ずるに至るだらう。題材上「著船場」の方には、煩瑣の感が少い。雲の特性を寫されてゐる。全體を包む古色も面白いが、其處に故意的にされたもののあることを否めない。もつと自然な氣持を以て、素直に描寫しつつ、自ら此の古色が滲み出たのだと、尙ほありがたい譯である。」

此の人に限つたことでなく、元來、美術學校出身者は技巧は實にうまいものであつて、何を描かせても見るに足るものがあれど、それに伴ふ觀照力、自然に通る力といふやうな

三月の日　　大久保作次郎

ものは、何だか足りない様な氣がしてならぬ。

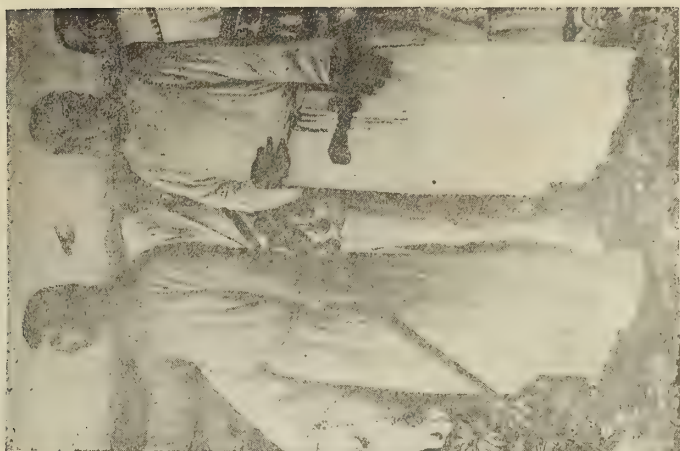
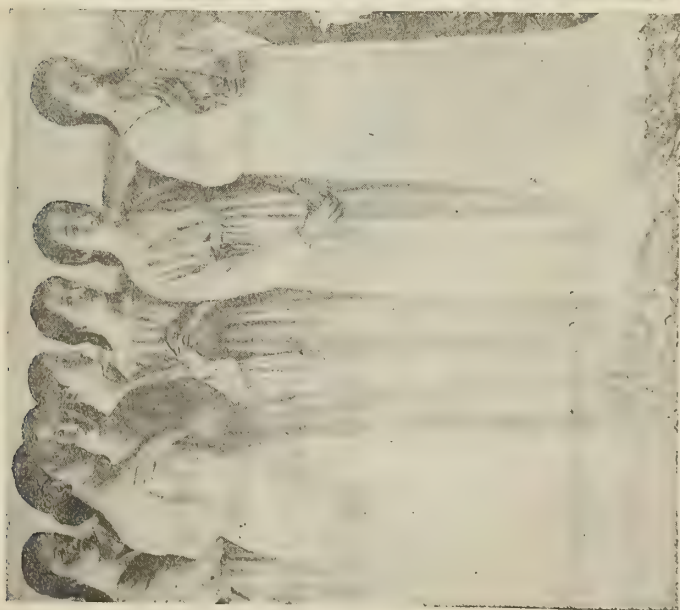
大久保作次郎氏　大久保作次郎氏も、明治二十三年の生れで、これは大阪市出身だ。學校を卒業したのは比較的おくれて、大正四年である。しかし文展では第五回から出品して、その年に「少女」、第九回に「干もの」、第十回に「庭の木影」、第十一回に「三月の日」を出したが皆好評であつた。十、十一の兩度は特選になつてゐる。それから十二回

の「とげ」の特選を經て、帝展では「豫後」と「平和」とて推薦された。「平和」といふのは、田園牧歌的のものを題材としてゐるにかゝはらず、そこに畫かれた、農夫等にはあまり土臭い感じがしないとの評もあつた。一つはこれはモデルの關係で百姓をモデルに使はなかつたからであらう。しかしそんな非難を離れて見ると、決して惡い作ではない。殊に「豫後」の方は、病氣上りの女が巧に描き出されてあつた。印象派の畫家でもやりさうな、外光の中に置いた、ほつそりと力なく立つ女の、いかにもよく氣分をつかんでゐる。その後ろに從ふ白衣の看護婦は、これと對照すべく肥滿して、血色もよく物靜かな景致の中に女の二人が、あるが儘に表現されてゐる、よい作である。しかし、私の眼には、嘗て見た、公園のベンチに腰掛けた子守娘の、あどけない、率直な、藝術味の勝つた作の方が、より忘れられない。

八、特選級の諸家

安宅安五郎氏　推薦の人々はこれで終つて、今度は特選の古いところから見ると、安宅安五郎氏がある。此の人は、今年あたりは推薦にてもなりさうな古顏て、生れたのは明治十六年、新潟の人てある。四十三年に美術學校の洋畫科を出て、文展へは第四回に「花壇」、「靴屋」、第五回に「川陰棚

七　　　嬢　　　　安宅安五郎

稽古　　熊岡美彦

第六回に「花園にて」（褒狀）、第七回に「藤の蔭」、第九回に「肖像」第十回に「七媛」、帝展に「白蓮樹」を出し、これは特選となつてゐる。我々の知る限りでは、これだけの經歴であるが、その技巧は實に手に入つたものである。殊に今年の白木蓮を描いたものは大分新しかつて、草土社かぶれのしたものであれど

樹をよく見て、且つ清新な技巧で描いてゐるのがうれしい。しかし何となく暗くて生氣がないと評したものもある。

熊岡美彦氏

次に熊岡美彦氏は明治二十二年の茨城縣生れの人、大正二年に美術學校を出でて、一方太平洋畫會にも關係してゐる。文展へは第七回に「花屋の店にて」、「かつらした」、第八回に「靜物」、「カーネーション」、「椅子によれる少女」、第九回に「母と子の肖像」(褒狀)、第十回に「裸體」、第十二回に「編物する二女」、帝展に「朝鮮服を着たる女」、「茱萸とる女」等を出品してゐる。そして帝展では、「朝鮮服」の方が特選になつた。此の人は、華やかな色で、豊麗な少女を描いて最も得意である。まだ大成された人ではないが、努力してゐるから、今後此の方面で特色のある畫家となるであらう。

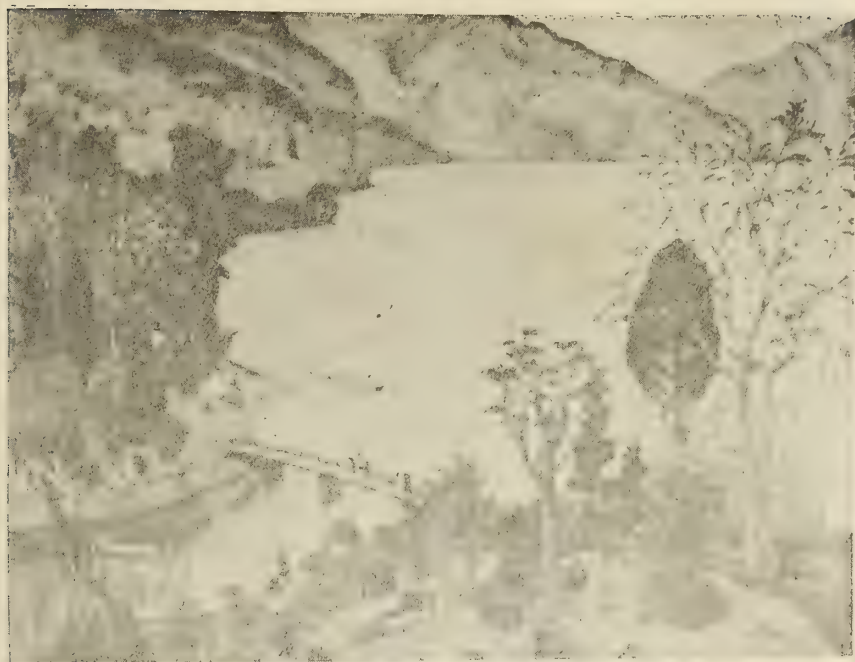
小寺健吉氏

小寺健吉氏は、明治二十年、岐阜縣大垣町の生れで、四十四年に美術學校を卒業してゐる。文展へは、第七回に「秋近く」、第八回に「淺草の夏の眞ひる」(褒狀)、第九回に「水のほとり」(褒狀)、第十回に「水鄕の初夏」、第十一回に「瓦燒」、帝展に「四月の村」を出してゐる。右の次第で、成績は左までよいといふのではないが、仲間の中では押しも押されとせぬ顏である。殊に風景畫にすぐれて、纖細に描きあげて行くものが得意である。此の人の細君は、小說家の小寺菊子女史で

山國の收穫　大野隆德

あることを御披露申して置く。

大野隆德氏　大野隆德氏は、小寺氏と同じやうな風景を描くので知られてゐるが、しかし此の人はもつと技巧的で、同時にもつと色々なものを描くことが出來る。明治十九年、千葉縣の出身、美術學校は四十四年に卒業したが、中學時代に堀口正章について洋畫を學び、のち東京に來て菊坂研究所に入つたりして、早くから知られてゐた。されば文展には第三回に「日本橋」、第六回に「落葉を拾ふ兒等」（褒狀）、第七回に「池畔夕凉」、第八回に「花壇のほとり」、「散步」、第九回に「麥はたき」（三等賞）、第十回に「高原に働く人」（特選）第十一回に「山國の收穫」、第十二回に「靜かなる流と夕映えの山」、帝展に「凪ぎたる海」（特選）を出

湖上の初夏　柚木久太

してゐる。此の通りすぐれた成績である上に、一時二科會に在つた時には、その鑑査員に推されてゐたほどであるから、この人も今年あたり推薦されるかも知れない。ただ、大野氏の繪は、こしらへ物であるといふことが定評である。これも性格なら止むを得まいが、大野氏は見たその儘で表現するだけでは氣がすまないこれを捏ち廻し、ぬりたくつて、不自然な張りつけたやうなものにしなくては止まぬのである。これさへなかつたら、氏の技巧と見方とを以てすれば、もつとよいものが出來る筈である。

柚木久太氏　柚木氏は明治十

八年に岡山縣玉島町に生れたので、嚴父は南畫を描いて知られる人である。はじめ太平洋畫會研究所に學び、のち佛國に留學してアカデミー・ジュリアンに學んだ。文展へは第五回に「鞆津の朝」、第九回に「トンドの橋」、「入江」を出し、「入江」が三等賞になつた。ついで第十回に「讀書の圖」に特選となり、第十一回には「赤城の秋錦」を出した。第十二回は「湖上の初夏」で、帝展第一回が「水郷の夕」、これも特選になつた。氏は常におとなしい落ちつきのある色で描いてゐる。また柚木氏は、西洋から澤山の名畫の複製品を持ち歸つてゐるので、仲間に重寶がられてゐる。

齋藤與里氏

齋藤氏は、柚木氏と同じやうな經歷の人である。本名は與里治と言つて、柚木氏と同年の、明治十八年九月に埼玉縣で生れた。三十八年から京都へ行つて、淺井忠氏につき、三十九年には鹿子木孟郎氏と共にフランスに渡り、ジャン・ポール・ローランスのマガデミー・ジュリアンに學んだ。それから伊、西、瑞、白、和、英等の諸國を歷遊して、四十二年の九月に歸朝したのである。それからお土產作品を太平洋畫會の展覽會と琅玕洞(らうかんどう)とにて展觀(てんくわん)した。ついで大正元年には高村光太郎、岸田劉生、木村莊八、眞田久吉、小林德三郎、萬鐵五郎等の諸氏とフューザン會を起し、大正五年には、又萬、眞田その他の人々と日本美術家協會を起した。文展へは第九回に「朝」、第十回に「收穫」を出して、後者は特選となつた。又十二回には「春」、帝展には「一日」を出した。氏の特色は、

ナイーヴな筆で寫實的な描法を、いくらか裝飾化して個性的に表現するところにある。まだ完成されてはゐないが、他人の持たない何物かがある。

清水良雄氏

氏は、牧野、大野、小寺等の諸氏と共に、美術學校派の人であるから、何となくアカデミシャンらしい色調の穩健にして落ちつきのあるものを持つてゐる。そして野育ちと違つた一種の上品さがある。それと同時に氏の個性が可なりにデリケートで、或る柔さを有するので、人物や、そのバックの植物などを描くと、しん

二人の肖像　清水良雄

なり優しい調子を出してゐる。氏は明治二十四年八月に東京本郷に生れ、大正五年に東京美術學校洋畫科を卒業し、更に研究科に入つた。同輩中では一番若い人であらうが、文展では第七回に「調べの糸」、第八回に「いちじく」、第九回に「無花果の秋」、第十回に「ひがん花」、「ひとり」、第十一回に「ゑごの花」、「西片町の家」を出し、これは特選になつた。ついで第十二回に「二人の肖像」、帝展に「七月の庭」、「梨花」を出して、「二人の肖像」と「梨花」とが特選に入つてゐる。斯く最近はすばらしい成績を見るのである。眞面目な、落ちついた氏の態度は、よろこばしい一つである。氏はまた少年雜誌の口繪や挿畫を描いて知られ、鈴木三重吉氏の主宰する「赤い鳥」は、氏が一人でいろんなものを描いて、才人の多方面さを示してゐる。

高間惣七氏　氏もまた青年作家である。明治二十二年東京市に生れ、大正五年東京美術學校西洋畫選科を卒業した。文展へは第七回に「午前の日」、第八回に「養鷄場」（褒狀）、第九回に「まこものもと」（褒狀）、第十一回に「浮雲」、第十二回に「夏草」、帝展に「幽林の春」、「初秋」を出し、「夏草」と「幽林の春」とが引き續き特選に入つた。その他、國民美術協會に出した「冬枯」、「みなかみの初夏」の如きも、忘れ難い作であつた。氏は清水氏のデリカシーに對して、强みのある太い筆觸（タッチ）で、ぐんぐんと思ひきつて描寫するところに特色がある。しかも一物をも苟くもせず、十分に觀照の對像とし

幽林の春　高間惣七

て眞實に迫らうとしてゐる。セザンヌ等の氣持に近い、リアリスチツクな態度がよい。

多々羅義雄氏

多々羅氏は、閲歴についてよく知らないが、矢張り若いグループの一人であつて、はじめ太平洋畫會研究所に學び、文展では第七回に「南の海」

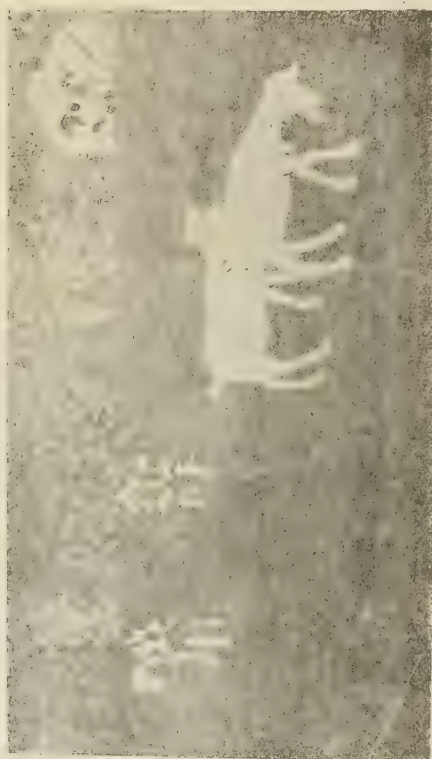
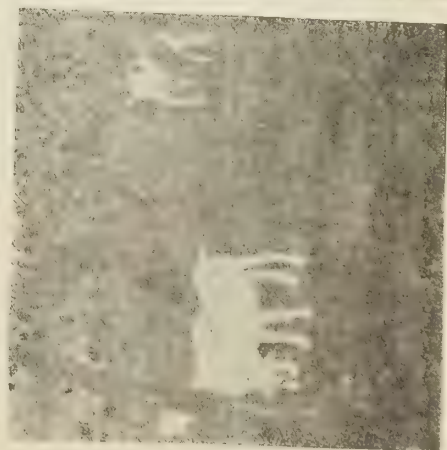
第八回に「伊豆の海邊」、「夕陽の村」、第九回に「海岸の山」（褒狀）、第十回に「房州の海」、第十二回に「上總の海」を出してこれが特選になつてゐる。帝展にも「南總夏山」を出した。氏の畫は稍平凡な趣はあるが、或る程度まで自然を見てゐるので、取り立ててこれといふこともない代りに缺點が少い。主として風景の描寫をやつて居り、その他の畫は餘り見受けない。

一平岡權八郎氏一

氏は、デレッタントといふ譯ではないが、「花月（くわげつ）」の若旦那で、清元がうまく清元紫郎さんでは通人間に知られてゐると思へば、何だか一寸變つた氣がする。勿論江戸兒である、明治十六年三月の生れとあるから、まだお若い。はじめは鈴木華村、竹內栖鳳などから日本畫を習つてゐたが、三十九年頃から白馬會の研究所へ入つてぼつぼつ洋畫をやり出した。文展では第五回に「ジャボン」、「コック場の一隅」、第四回に「コック場」を出し、これは三等賞になつた。第六回に「お酌」、第十回に「Giiyama-San」、第十一回に「大隅氏の肖像」を出して、これは特選、帝展では「刺繡（ししう）」を出した。以てその器用さを知るべきである。

一辻永氏一

羊の畫家と云へば辻氏、辻氏と云へば羊の畫家と、今日では既に通り者となつてしまつてゐる。兎に角、自分で山羊を澤山飼つて、一時は山羊乳を販賣してゐた程であるから、何と云つても羊の親分に違ひない。けれども經歷を見ると矢張り畫家である。明治十七年に廣島市に

秋（裝飾畫）　辻永

生れ、白馬會研究所に入つたが、更に東京美術學校の西洋畫科に入り、三十九年に卒業した。文展へは第二回に「秋」、第三回に「牧場の山羊」、第四回に「飼はれたる山羊」（褒狀）、第六回に「無果花畠」（三等賞）、第七回に「滿洲」、第八回に「初秋」（三等賞）、第九回に「落葉」（三等賞）、第十回に「葡萄の實る頃」（特選）、第十一回に「九月の午後」、「丘上より」、第十二回に「裝飾畫秋」、帝展に「剪毛後の或る日」を

出してゐる。殆ど毎回缺がさず出品して、しかも良成績を見てゐるのを見れば、彫刻に於ける馬の池田勇八氏が推薦されてゐる今日、氏も亦推薦に入るのが當然ではあるまいか。氏は今年になつて外遊の途に上つた。

九、文展以來の名家

【橋本邦助氏】以上で先づ新進の、帝展中堅といふところを終つたから。今度は逆に行つて嘗て文展で好成績を得て、今は餘り活躍しない人達に觸れて置かう。無論、順序はない、文展のカタログを操りひろげて、古いところから成績で拾つて行く。第一回から第三回まで三等賞をつづけた人に橋本邦助氏と高村眞夫氏と跡見泰氏とがある。三氏とも、一時はなかなか世間にもてはやされたものである。橋本氏は明治十七年一月、栃木縣栃木町に生れた人で、三十六年に東京美術學校の洋畫選科を卒業し、四十四年に佛國パリに留學した。文展へは、第一回の「ともしび」、第二回の「水のほとり」、第三回の「華園」と引續き日本趣味の勝つた、情趣のある畫を出して三等賞を得た。然るに第四回に「水鳥」、「白い雲」、第五回に「凝視」等を出したが、自分でも思はしくないと思つたか、第七回から日本畫部の方へ出品するやうになつた。第七回の「落葉掻き」、「夕月」、第十一回の「菊花の秋」の如き

である。けれどもそれも何だか榮えないで、今は氣力のぬけたやうな生活をしてゐる。才人の末路を語るやうなあはれさである。

高村眞夫氏　は、橋本氏ほどに影が薄れない。しかしまた昔日の觀を止めないのも事實である。氏は明治九年八月新潟市の生れであつて、二十四歳の時上京して小山正太郎氏の不同舍に入り約三年間そこに在つた。青木繁、小杉未醒、坂本繁二郎、荻原守衞等の諸氏も同じ頃にここに在つたといふ。四十年の東京博覧會に「黄檗の僧」を出して三等賞を得、この時、日本に於けるクラシック風の作家として認められた。それから四十五年まで博文館の出版部に在つて裝禎を擔任し、更に大正三年から歐洲に遊んで、その大戰の勃發した後、歸つて來た。文展へは第一回に「畫室の沈默」、「新秋」、第二回に「夏の樣」、第三回に「停車場の夜」と引續き三等賞に入つた。第四回には「道成寺」、第五回には「春日野」、「休憩」を出したが、それより次第に製作から離れて行つた。但し「美術巡禮記」その他の著書もあり、雜誌などに今日もちよいちよい意見を發表してゐる。

跡見泰氏　跡見氏は橋本氏や高村氏に比すると若い方の人である。明治十七年五月、東京市神田區猿樂町に生れ、はじめ黒田淸輝氏について畫を學び、三十六年に東京美術學校の西洋畫選科を卒業した。明治四十五年には、中澤、山本、三宅の諸氏と光風會を組織して、その主なるメンバ

ーとなつてゐる。文展では第一回に「夕岬」、第二回に「晩煙」、第三回に「砥石切」を出して、共に三等賞を得、第四回に「霧のたゝずまひ」、第六回に「野跡行く人」、第七回に「あみほし場」、「夏の午後」、第八回に「瓜畑」、「村へ行く道」、「半島の漁村」、第九回に『眞似まなび』等を出したが、最近は光風會にその作を見る外、殆ど公開しない。黑田氏風の自然描寫をやつてゐるが、稍色調が古いので、若い人に顧みられない。

傑れた洋畫家

尙ほ文展の初回以來時につれて世評に上つて來た人々に、岡吉枝、九里四郎、小林萬吾、眞山孝治、河合新藏、永地秀太、柳敬助、矢崎千代二、寺松國太郎、相田直彥、青山熊治、赤松麟作、寺澤孝太郎、佐藤哲三郎、太田三郎、五味淸吉、森脇忠、加藤靜兒、池田永治、龜高文子、山脇信德、安田稔、小糸源太郞、香田勝太、三上知治等の諸氏がある。これ等の中には、文展の諸期に於いて良い成績を得たといふに止まり、その後は全く鳴かず蜚ばずである人もあれば、牛の歩みのやうに、昔ながらの位置を占めて、得々とやつてゐる人もあり、また最近に至つてぽつぽつ頭を擡げた人もあれば、ほんの一時、槿花の榮をほしいまゝにしたやうな人もあつて一概には言へないが、大體の紹介だけをして置かう。

河合新藏、小林萬吾氏

河合氏は慶應二年に大阪に生れた人で、はじめ小山正太郎氏について學び

明治三十三年から四年間歐米に留學し、のち京都に轉任し、今は再び東京に住する。文展へは第一回より第四回まで續けて出品し、第三回には「眞夏の山毛欅」を出し褒賞を得、また第六回より第八回まで出品し、第七回に「ポプラーと夏蜜柑」は三等賞を得た。丸山晩霞、大下藤次郎氏等と日本水彩畫研究會を起したが、小林萬吾氏は明治三年香川縣に生れて、原田直次郎、安藤忠太郎、黑田淸輝氏等に學び三十一年に東京美術學校を卒業し、四十四年に文部省留學生として外遊し、大正三年に歸朝した。文展へは第一回に「物思ひ」を出し三等賞を得、第二回に「蔭のひかり」、「狐花」、第三回に「渡舟」で三等賞、第八回に「冬のセーヌ」「フレンツェ市ポンテ・アラ・グラツエ」、第九回に「礒菜摘」、これも三等賞になつた。第十回に漁夫と其妻、第十一回に「赤布を纏へる女」、第十二回に「甕を戴ける女」、帝展に「夏木立」を出して、氏は現に努力しつつある一人である。

矢崎千代治、寺松國太郎氏　此の兩氏も最近まで活動してゐる。矢崎氏は明治五年橫須賀の生れて初め大野幸彥の門に學び、のち東京美術學校に入り、三十五年に卒業するや、間もなく歐米に遊び、四十三年に歸朝した。その文展出品には、第三回に「夕凉」(褒狀)、第四回に「奈良」(三等賞)、第六回に「機織」、第七回に「草刈」(三等賞)、第九回に「藪入」、「樹蔭」、第十回に「礒」、第十一回に「熔鑛鑪」を出した。寺松氏は號を擔雖といひ、明治八年六月、岡山縣萬壽村に生れ、小山氏の不同舍に入り、又

淺井忠氏にも師事した。支展へは第三回に「大原女」、第四回に「かげの人」（褒狀）、第五回に「銅瓶」、「髮」、第六回に「朝市」、第七回に「櫛」（三等賞）、第八回に「若き女」を出してゐる。またその作の「髮」は、フランスのサロンに入選して、一時評判に上つたものである。

柳敬助、九里四郎氏　柳氏は明治十四年、千葉縣に生れて、もと山田と言つた。はじめ堀江正章氏につきのち東京美術學校に入學した。三十六年中途退學し、暫く白馬會研究所にあつたが、ついで米國に留學した。そこでは五年居て、更に歐洲に赴き、四十二年の秋に歸つた。文展には第四回に「未明」（褒狀）、第五回に「病婦」、第七回に「椅子に凭りて」を出し、中途で二科會の創立に參劃したが故あつて退き、第十回の文展に「佐久間大將立像」、第十一回に「野田大塊翁肖像」を出品した。九里氏は明治十九年に東京に生れ、初め和田英作氏につき、のち東京美術學校の西洋畫科を卒業した。四十四年佛國に渡り、英・伊及び印度を歷遊して大正元年に歸朝した。それから數年間大阪に居たが、それから東京・小田原に移り、現に再び歐洲に遊んでゐる。作品は文展第一回に「霧の椿冬野」、第二回に「藏」（三等賞）、第四回に「老人」（三等賞）等を出し、二科會の創立と共に鑑査員に加はつたがそれは脫會し、ただ第二回に「[illegible]」、「奈良」等四點、第四回に「夏山」、「老人習作」、「奈良の秋」等六點、第五回に「[illegible]」、「碧溪」、第六回に「海女」、「椿」等四點を出品した。又今年のサロンに出品して入選したとの

ことである。

青山熊治、眞山孝治氏

青山氏は一時大に囑望せられた人であるが、長いこと海外に去つて歸つて來ない。氏は明治十九年兵庫縣の生野に生れ、山本芳翠、黑田清輝その他の諸氏に學び、四十年の東京博覽會に受賞し、文展へは第四回に「九十九里」を出して三等賞を得、その次に又「金佛」に二等賞を得たが、間もなく佛蘭西へ行つて歸つて來ない。眞山氏は、明治十七年岩手縣の出身で、白馬會研究所に學び、長原孝太郎、山本森之助氏に負ふところが多い。文展では第二回に「殘暉」、第三回に「燒け山」、「深山の夕」、第四回に「湖畔」(三等賞)、第五回に「秋晴」、第六回に「楡」、第七回に「初秋」を出したが、その後は沈默を守つてゐる。

赤松麟作、安田稔氏

赤松氏は明治十一年岡山縣津山町に生れ、三十二年に東京美術學校を卒業し第五回內國勸業博覽會に褒狀を得たが、のち大阪朝日新聞に入り、文展へは第二回に「迷兒」、第三回に「夕飯」、第五回に「午後三時」(褒狀)、第七回に「おきな」(褒狀)、第八回に「添乳」、第九回に「萩」を出してゐる。安田氏は明治十四年新潟縣長岡市に生れ、初め不同舍に入つたが、ついで東京美術學校を三十年に卒業、のち獨逸に留學して、更に英佛を經て在歐七年の後、歸朝した。文展では第八回に「お茶どき」(褒狀)、第九回に「樹蔭のまどゐ」、第十回に「肖像」、第十一回に「盛夏」、第十二回に「肖

像」、帝展に「靜物」を出して、現に努力しつゝある。

寺澤孝太郎、太田三郎氏

寺澤氏は明治十八年、秋田縣に生れ、はじめ太平洋畫會研究所に學び文展へは第二回に「歸り道」、第三回に「かぼちや」(賞狀)、第四回に「囚はれし兒兎」、第八回に「灰の降る村」、第九回に「酒の香」を出したが、近頃は餘り振はないやうである。太田氏は明治十七年の愛知縣の出身で、寺澤氏とは反對に白馬會研究所に入つて黑田氏の指導を受け、文展では第四回に「ビヤホールの女」、第七回に「カフエーの女」(三等賞)、第十一回に「卓に凭りて」を出してゐるが、題名でも知られる通り、浮世繪式の世界的少女を得意とし、爲めに日本の浮世繪に關する研究に造詣が深い。又、挿繪畫家として一時大に名をなしたが、今は此の方面からも離れたらしい。

加藤靜兒、五味淸吉氏

加藤氏は明治二十年愛知縣に生れ、四十三年東京美術學校を卒業したが、文展へはそれに先ち第一回に「青丹(あをに)よし」、第二回に「春の光」、第三回に「山かげ」(褒狀)、第四回に「君が代蘭」、「渚」、第六回に「屋後」(褒狀)、第七回に「網を干せる朝」、第八回に「篠島より小磯を」、第九回に「花ばたけ」、第十一回に「外濱」、第十二回に「囚はれたる木々」等を出してゐる。長らく名古屋に住んで居たが、今では東京へ來てゐる。五味氏は、もとの姓を小原といふ、明治十九年森岡市に生れた。大正二年東京美術學校を卒業したが、文展へは第四回に「煙」、第五回に「秋のおとづれ」、第六回

に「たけに草」、第七回に「ハチスとシヲン」(三等賞)、第八回に「新天新地」、第九回に「秋草」、第十回に「木槿の花」、第十二回に「姫をかしよもぎ」等を出品して、植物寫生の一人として知られてゐる。

池田永治、山脇信徳氏

池田氏は號を牛歩といひ、明治二十二年の京都の生れである。殆んど師につくといふやうなこともやらずに、獨力でやつて來て、油繪、水彩、俳畫風の日本畫等をかねよくしてゐる。文展へは第四回に「牧場」を出して褒狀を得、第七回の「冷香」、第八回の「春光」、「イソップ」、第九回の「近郊から」、これもまた褒狀であつた。帝展には「沼畔初秋」といふのを出してゐる。

山脇氏は明治十九年高知市に生れ、四十三年東京美術學校を卒業し、文展へは第一回に「町の橋」、第三回に「停車場の朝」(褒狀)、第八回に「午後の海」(褒狀)、「入海」、第九回に「叡山の雪」、第十一回に「疎林」を出し、また院展の第四回に「湖畔の冬」、第五回に「モノクローム」三點、外八點を出陳して、大に世の注目を惹き、その第六回にも「伊豆風景」等四點を出して、院展の有力な一人となつてゐる。

小糸源太郎、三上知治氏

小糸氏は明治二十年東京市に生れ、四十四年東京美術學校金工科を卒業すると、更に西洋畫科に學んだ。文展へは第四回に「魚河岸」、等五回に「屋根の都」、第八回に「曇り日」(褒狀)、第九回に「雨のあと」、第十四回に「秋」、「春」、第十一回に「さつゝき」、第十二回に「三圍(みめぐり)」を出したが、此の時感ずるところありと稱して、自作を切裂いたので問題が持ち上つた。それ以來氏は

斷然洋畫の筆を廢すると稱してゐる。尙ほ、氏は上野山下の小料理店「揚出し」の子息である。三上氏は明治十九年東京に生れ、小山氏の不同舍に學び、のち太平洋畫會研究所に入つた。文展では第一回に「少女」、「杉並木」、第二回に「松籟」、「時雨るゝ日」、第三回に「三輪」(褒狀)、第五回に「初夏」(褒狀)、第八回に「窓際」、第九回に「坐せる女」、第十回に「二女」を、帝展には「豚」を出品してゐる。

香田勝太、龜高文子氏 香田氏は明治十八年に鳥取縣に生れた人で、四十三年に東京美術學校の洋畫科を卒業し、文展へは第四回に「廚さき」、「秋草」、第六回に「鳳仙花」(褒狀)、第七回に「池之端」、第八回に、「亂菊」、第十回に「枯野」、第十一回に「寒菊」、第十二回に「靜物」、「ひなと親鷄」等を出品してゐる。龜高ふみ子氏は明治二十年橫濱市に生れ、女子美術學校を卒業してから太平洋畫會研究所に入り、滿谷氏について學んだが、故洋畫家宮崎與平氏と結婚し、その歿後大正三年に再婚した。文展へは第三回に「しろかすり」(褒狀)、第五回に「讀書」、第七回に「離れ行く心」、第九回に「樂譜」、第十回に「食後」、第十二回に「ダニエルの話」を出品してゐる。

永地秀太郎氏其の他 永地秀太氏は、可なりの老人である。明治六年山口縣生れ、松岡壽氏につきのち明治美術會の研究所で學んだ。今は陸軍士官學校の敎官をしてゐる。文展へは第一回に「靜物」、第二回に「逍遙」、第三回に「靜物」(褒狀)、第四回に「つれ〴〵」、第六回に「休みのひま」、第七回に「し

花鳥圖　川村清雄

ぼり」(三等賞)、第九回に「父の部屋、第十回に「畫室にて」、第十二回に「肌」等を出してゐる。その外、文展の第一回に「女繪師」第二回に「漁夫の娘」を出して、共に三等賞を得、第三回の「海女」に褒狀も得た岡吉枝氏、第三回に「爐のほとり」、第四回に「靜けきゆふべ」に共に褒狀を得た和田直彦氏、第六回の「化粧」に三等を得た佐藤哲三郎氏等の諸氏も文展の中心として、過去に働き、または現に働きつゝある。尙ほ最近の人としては、第十一回に「小鳥屋」で特選となつた川合政治郎、第十回に「夕ぐれ」で特選となつた朝鮮人の金觀鎬、第十二回に「滿潮」で特選となつた新井完氏、第十二回に「種子蒔き」に特選となつた巖埼精起氏、第十回に「犢」に特選となつた關口隆嗣氏、同じく第十回で「御殿富士」に特選せられた黑田新氏等があり、何れも新人として大に將來を囑目せられつゝある。

先づ帝展の中心をなす人物としてはこんなものであらう。

十、美術院派の洋畫家

美術院の洋畫

日本美術院は、その設立の動機及び現在の内容は、日本畫を中心としてゐること、事實である。院展と云へば誰しも、洋畫を聯想せずして、觀山、大觀の率ゐる所謂日本畫を聯想するだらう程に、院展卽ち日本畫である。何つちかと言へば洋畫に行くべき人迄も、その日本畫の方へ行つてゐる。川端龍子氏のやうに、最初から洋畫から仕上げて、日本畫に移つた人もあれば、近くは近藤浩一路氏も美術學校の洋畫科出身でもつて、今は院友として日本畫を出品してゐる。中村岳陵氏あたりの畫も餘程洋畫臭い、眞道黎明氏あゝ言つた青年作家には益々その色彩が濃厚になつて來る。小川芋錢氏も、今では純然たる日本畫となつた、森田恒友氏は、まだ洋畫に立つて籠つてゐるが、その日本畫のお手に入つたものなることは定評あるところで、此の人も何時洋畫へ轉ずるか知れたものでない。——尤も、最近の日本畫壇が、益々洋畫の方へ、といふよりも新しい方向へ傾いて行くことは爭はれない事實で、帝展すらさう言つた徵候があるのだから、もと〳〵、朦朧派以來、否橋本雅邦や狩野芳崖以來、否末期の狩野派以來、新傾向を追はうとしてゐる美術院の人々が、日本畫か洋畫か解らないものを描く、隨つてそこに守舊的色彩のあつた舊文展と相容れなかつた大きい意義もあるの

だが、さうした美術院では洋畫その物までも所謂日本畫に沒入するやうに見えるのは、一方ではこの日本畫が洋畫傾向に對して寛容力を有することを示すと共に、西洋畫その物の鮮明な影の薄いことをも意味する。固より、こゝでは院規に西洋畫と日本畫との區別を設けずして、一律に「繪畫」として取り扱つてゐるから、たゞ材料が日本的であるか西洋的であるかに依つて、見る人が勝手に西洋畫と日本畫とを別つだけだから、その間に區分を設ける必要はないと言へばそれまでゞあるが、しかも事實、院展の陳列に際しては、日本畫室と洋畫室とは別々に置かれてある。隨つて、こゝの日本畫とは別な洋畫をも認めない譯には行かぬ。

洋畫と院展　それだけではない。院展の洋畫なるものは、年々重さを加へて行く、日本畫の方には動もすると、院展風なる一種のカラーを形成して、固定し滯澁して行かうとし、僅に新人の新努力を加へるだけとも見られるのに、西洋畫の方は年毎に新しい同人が幾人か加はつて行く、そして比較的眞面目な態度を以て、見るに足る作品を發表する。のみならず、同人外の出品者も二科會と相選ばない程度の優良分子に富んでゐる。蔭は薄いと言つても、まだ〳〵内容は兎に角、數量に於いて日本畫に及ばぬ西洋畫が、數だけでもこゝに日本畫の數倍を並べてゐるのは、大に意を強くせねばなるまい。さういふ次第だから、こゝの洋畫界には、黒田清輝氏乃至岡田、和田、藤島氏級の大家は

ゐないとしても、また觀山、大觀兩將に匹敵すべき人物はまだ出來ないとしても、未醒氏あり鼎氏あり、恒友氏あり、白羊氏あり、その他儕々の多士があるのだから、決して輕視する譯には行かないのだ。

小杉未醒氏

中にも小杉未醒氏は、行く〳〵は西洋畫壇に於ける大觀氏になるだらうと評判されるだけに、よい意味にも惡い意味にも、なか〳〵の人物である。描く者は何だか弱々しさうな、至つて色調の弱い、力の足りない、心もとなささうなものであるが、人間は決してさうではない。腹もあれば頭もある、おまけに力もある。江見水蔭一派の文士畫家力士では大關格で、名うての力自慢と來て居るのに、球を飛ばすこともポプラ倶部都の御大將である。ポプラ倶樂部といふのは、御存じの人も多からう、東京の北部田端にあつて、あの界隈に散在する美術家連の遊び場所である。事實は太平洋畫會一派の人々が據る所で、彫刻家の藤井浩祐氏、帝展審査員の滿谷國四郎氏あたりもよくやつて來て、色々な策源地かの如く世間から取り沙汰される場所であるが、その中心人物ともいふべきものは、實に此の未醒氏である。今こそ、あるかないかさへ分らなくなつたが、「武俠世界」といふ雜誌は、最も世に知られた運動雜誌であつた。その表紙には何時でも精悍な壯夫が、勇々しくも描かれてあつた、そしてその筆者は小杉未醒氏にきまつてゐたものだが、しかもその精悍無□の壯夫こそ、

未醒氏がそれ自身をモデルとして描いたと言つてもよかつた。一度、未醒民に會つたことのある人は皆印象して居るだらう。餘り肥つては居ないが、全身に力の漲つてゐるやうな、丈の高い、りつきとした未醒氏に接すると、何となく斯う、男らしい或る感じに打たれる。此の男があゝいふ畫を描くかと思はれる程に、男らしい男である。が、未醒氏は同時に決してバーバラスな人間ではない、矢張り垢抜けのした、リファインされた、そして人なつかしいデリケートさを持つた人である。これがつまり、未醒氏をして藝術家たらしめる大切な要素なのだ。

未醒氏の生活

未醒氏の家は田端にある。他の多くの畫家連が、――近頃でも洋畫家でも、堂々たる邸宅を構へ込むのを得意の如くしてゐるのに、未醒氏は十年一日の如く、田端の片ほとりに、見榮えのしない一家を構へてゐる。近い中に何處かに偉大な新邸を建築するとの噂もあるが、未だ計劃にはかゝつて居ない樣である。未醒氏の此の簡素な畫室へは、樣々の人が入り込む。畫家や彫刻家は固より、文士が來る、雜誌記者が來る、中公の瀧田樗蔭氏の如きは日本畫の平福百穗氏と、未醒君とが仲よし中の仲よしとあつて、よく顏を見せる。黑頭巾で知られた横山健堂氏もよく來てゐる。尤もこれは力士としての交際かも知らぬが。――未醒氏はこれ等の人を相手に、あのりつきとした清秀な眉目を擧げて、談論風發、愉快に、てきぱきと物語る。聽く人に快い爽かさを與へる樣に亂れない

理路を辿つて話し出す。それだけに未醒氏の聰明さを感じさせるのだ。所が聰明であるだけに、氏に關しては色々な噂が立ちもする。或は氏を以て美術院の黑手組の隊長だとする人もある。美術院の動力としては、今は觀山氏でも大觀氏でもなくて、未醒氏だといふ人もある位に、氏が隱れた黑い手を絕えず動かしてゐるやうに見られてゐる。事實、氏の方寸から湧いた色々なことが、美術院に具體化して現はれる。院がちよい〳〵動搖するのも此の人があるからだと噂されるのも强ち虛ではあるまい。併し未醒氏はそれ程の腹黑い人ではなくて、寧ろ率直な人として見て置きたい。

未醒氏の略傳

未醒氏は、名をなした人としては先づ若い方である。明治十四年九月の生れといふから今年やつと四十歲、早熟の方であつたから、二十歲にならぬ中から世間に知られてゐた。本名は國太郞と呼んで、栃木縣日光町の人で、お父さんは神主である。最初は五百城文哉といふ人に洋畫を學んでゐたが、十八九歲の頃に東京に出でゝ小山正太郞氏の不同舍に入つたのだ。つまり中村不折、滿谷國四郞などいふ人達より一時代後の不同舍生である。それから國木田獨步と知り合ひとなつて、日露戰爭の時に從軍したりなどしてゐる。未醒氏の出世作は、明治四十年の東京博覽會に出した「降魔」であつて、これは優賞を得た。その後も太平洋畫會などに續々出品して、何時も評判がよかつたものである。しかし、氏をして大名をなさしめ一躍大家の班に入らせたのは文展が開設されてか

らのことである。その第四回に「杣」を出し、これは三等賞になつた。つゞで第五回には「水郷」、第六回には「豆の秋」と、二年に亘つて二等賞を得たので、こゝに青年未醒の名が天下に知られたのである。しかしその後は文展と縁を切つて、大正二年には歐羅巴へ去つて了つた。歸つて來ると、態度を一變して反文展派の一人となり、丁度再興の機運に會してゐた日本美術院の同人に收つた譯である。又二科會にも參加して、それからは毎年兩方へ出品してゐたが、大正六年に至つて二科會を脫し、今では專ら美術院の洋畫を牛耳つてゐる。院展へ出品した主な作では、第二回の「黃初平」、第四回の壁畫「山幸彥」等がある。

未醒氏の代表作　此の中で、小杉氏の代表作として「豆の秋」を語らう。第六回文展の西洋畫では、氏の此の作を筆頭に、南薰造氏の「六月の日」が次席で二等賞は二人あつた。そして二つとも評判になつたが、「豆の秋」は、豆畑の中に、近く一人の作男が鉢卷をして地上に踞して居り、その背後に少し離れて、短い着物の下から腰卷を長く見せた少女が、手拭を冠つてゐる。そこには黍の數莖が亂れ立ち、鋤を手にした他の一人の男も、遙の彼方に横を見せてゐる。遠い背後には、荷を積んだ車を牽く馬と、馬子と、薄らあかりを白く見せた入江の一端とを描いてあつて、それから空に接する森樹立が薄らと寫される。何となくのんびりとした、如何にも豆を取り入れる頃の、土の香の鼻を打つや

うな、極めて野趣の深い、よい繪畫であつた。そして、この畫でも知られる通り、未醒氏の睨ふところは、裝飾畫である。寫實その物ではなくて、寫實の裝飾化である。構圖も色彩も、すべてそこから割り出されてゐるブヷイド・シヤヷアンヌあたりをやらうとしてゐるらしいが、勿論シヤヷアンヌだけの感覺的魅力、殊に上品さが全く缺けてゐる。それが斯う言つた野趣たつぷりの物には成功するが、近頃やるやうな「山幸彥」と言つた懷古的の作品になると、みづ〳〵しさが足りないで、單なる裝飾的描畫となつて、潤ほひも味ひもないものとなる。つまりローマンスのない筆で、ローマンスを描かうとするところに矛盾と失敗とがある。元來が女性的な纖細な感じの人でないのだから、此の「豆の秋」と言つた樣な方向へ、ぐん〳〵掘つて行つたら面白からうと思ふ。一般に近頃の作は餘り評判がよくないやうなのは、斯うした脫線から來るのかも知れない。尙ほ近來は、日本畫もちよい〳〵描いて。この方はなか〳〵堂に入つたものと評もあるが、それにしても、氏としては固より餘技に過ぎなからう。寧ろ院派洋畫の頭目として、生彩のある處を見せて貰ひたい。

倉田白羊氏

未醒氏が大正三年の當初に、美術院の同人に加盟した翌年、倉田白羊、長谷川昇の兩氏が入つて來た。筆者は此の二氏について餘り詳しく知らないから、ほんの僅に語つて置く。倉田氏は未醒氏と同じ明治十四年の十二月に生れた人て、故鄕は埼玉縣の浦和町である。そして此の

人は、系統から言ふと最初は太平洋畫會の分派たる淺井忠氏につき、のち更に黑田清輝氏の白馬會に入り、東京美術學校の西洋畫科に學んで、三十四年に卒業した。それ故、傳統から見ると何だか鵺的な感じがするが、人物はさうではない。現に太平洋畫會の會員であるところに依れば、案外、節を持してゐる人かも知れぬ。以前にあつた「方寸」といふ美術雜誌の編輯をやつてゐたので、氏の經營的才能もあることが知れるであらう。文展では第一回に「つゆ晴れ」、第二回に「牡牛」、第四回に「小倉山の微雨」、第六回に「川のふち」といふのを出してゐる、しかし一回も優賞を得て居ないので。殆ど世間の目を惹かなかつた、我輩も亦、失禮ながら記憶に殘つてゐない。美術院の人になつてからは、第二回に「葡萄を採る男」といふのを出した。これは一寸面白いものであつた。比較的粗ではあるが、個性のはつきりした色で描いてあつた。第三回では「蝦蟇仙人」、第四回では「草花」、「へちまの家」、「老漁夫」などを出してゐる。何れにしても、白羊氏はまだ、見ばえのするやうな、仕事をしては居ないから、よくも惡くも言ひ樣がない。美術院へ來たのは、小杉氏と私交が深いところより、引つ張り込まれたものであらう。

長谷川昇氏

長谷川昇氏は、未醒、白羊の二氏よりもずつと若い。明治四十三年に東京美術學校の洋畫科を卒業すると、間もなく歐羅巴に遊學して、大正四年に歸朝してゐる。それ故それま

ての色彩については、餘り色々な濁りに染んでゐないやうである。但し、文展では可なり古い方で、第二回に「蝶々」といふのを出し、第四回に「白粉の女」を出した。これは褒狀になつてゐる。第五回には「裡體」を出した。外國から歸ると、直ちに美術院の同人となつて、その第二回に「オペラの踊子」、

亡兒の辟　長谷川昇

「オランジュ持てる女」といふのを出品した。流石に外國で描いたゞけに、生新な色彩に一寸人目を惹きつけた。此の年の展覽會作品としてはよい方であつた。第三回には「島の水汲み」「舞妓」を出し、第四回には「河畔」と「七夕に髪を洗ふ」とを出したが、「七夕」の方は官憲の干渉の爲めに一般の觀覽を許されなかつた。人體の描寫はなか／＼手に入つたもので、殊に軟かい、しかも鮮かみのあるふつくりとした色彩は、吾々に共鳴する。又靜物

中にも花を描いたものにちよい〳〵すぐれたものがある。去年の展覽會には、「金魚」と「毛皮に横れる裸女」とを描いたが、齋藤與里氏は斯う評してゐる。

『何れも大作で、中々の力作だ。出品者側にも此の位の繪が七八板ある樣だと好いが、何れも小品物で物足りない。長谷川氏の繪は去年の相撲取りにしても、未だ不徹底なところが目立つ。今年の二點にしても可也大味で、こせつかない處に、朗かな點が見出せるが、もう一層拘泥がとれると好くなる樣に想像するのだ。處が裸體の觀察などには、一向執着がないやうでゐて、いやに丸る味などを氣にして居る處がある。其處に不徹底を感じるのだ。又一方には昨年の「牡丹」や、一昨年(?)の「肖像」の樣な趣味を持つてゐる。何處かに徹底した時、君の本當の藝術が出來るのだと、自分はさう思つてゐる。』

これは大體に於いて適評だと思ふ。長谷川氏の畫には大へん純な、よい物を持つてゐると同時に、何處かまた徹底のしないところがある。たゞ。それが割合に自然を忠實に見つめた花などになると、比較的吾々に共鳴が多いやうである。たしかに、もつと努力すればよくなるにちがひない。

森田恒友氏

それから、大正五年には森田恒友氏が、その翌年には山本鼎氏が同人に加はつた。森田氏は小杉氏より一つ年下の、明治十五年生れ、倉田氏と同じ埼玉縣の出身、大里郡玉井村と

初夏の川筋　森田恒友

いふ所の人である。これも小山正太郎、中村不折、黒田清輝の三氏について、後に東京美術學校の西洋畫科に入つて三十九年に卒業したのであるから、樣々の色が混合してゐる。それから倉田氏と同樣に「方寸」の編輯にもたづはつたことがあるし、大阪の「帝國新報」といふのにも關係してゐた。文展へは第一回に「湖畔」を出品したゞけで、餘り出品興味を誘はれなかつたらしいが、小品に優れた畫家としては、夙に知る人が多かつた。大正三・四年の頃歐洲に漫遊し、歸つた翌五年には二科會の會員となつて、その第三回に「松原」「城址」の二つの景色を出品して、これは評判がよかつた。また同じ年の第三回院展へは、「天草の一村」「見下したる港町」を出

し、これて推薦されて同人になり、大正六年には二科會を退いたので、今は專ら院の人である。第四回の院展には「對岸の村人」「溪流」の二つを出した。

森田氏の特色　上の題目で知られる通り、森田氏は純然たる風景畫家である。此の人の人物畫のすぐれたものは殆ど見たことはないが、風景畫に至つては天下一品の妙味がある。しかも氏の描く範圍は略々きまつてゐる。何でもよくするといふのではない、森か村か廢址のやうな、寂寥たる、又は落々たる一場の自然を捉へ來つて、これを僞はらずに表現するのである。たゞ、それには氏獨得の情趣が、實に豐かに盛られてゐる。そこに氏の畫の人を魅する力があるのだ。何でもない景の中に、丁度ワーズワースの詩のやうな、なつかしい、心をそゝる魂の力がひそんでゐる。此の意味で氏はたしかに自然詩人である。ワーズワースやツルゲネーフや獨歩やに見ることの出來る詩が、氏の畫の中から見られるのだ。そして君の態度は何處までも自然に對し謙遜で、我れを忘れて自然の聲を聞きながら、それを筆に移してゐる。そこに氏の立場がある。しかし、自重する意味でなしに、なかなかに畫が描けないらしい。才氣の煥發と言つた方ではないだけに、會心の作をさう澤山得ることはむつかしい。去年の院展に出した「初夏の川」の如きも、他に計劃した作が失敗に終つたので、間に合せに出したものだといふが、實にあつけのないもので、これを以て氏を彼れ是れ評すことは出來ない繪で

あつた。

山本鼎氏

山本鼎氏も、一面に森田氏のやうな自然詩人の面影を供へてゐるが、性格に於いて全然異り、森田氏が何處までも情趣の人であるに對して、山本氏はすぐれた理知の人である。森田氏はあこがれながら描く人であるに、山本氏は考へながら企てる人である。その性格は明かに繪畫の上にも現はれてゐる。山本氏の描いた自然は、同じやうに自然を感じてあつても、同時に讀んである。材料に巧みな取捨を行ひ、表現に滑かな潤ほひのある色調を用ひてゐるが、時として内容をつかんでゐない場合がある。器用ではある、纏まつては居る、また藝術的の或る物もないではないけれども、敏感ではない、同時に物象に徹底してゐない。山本氏はよく「自然に忠實であれ」といふやうなことを口にする。けれども、山本氏の「忠實」の意味は、自然の表面的描寫であつて、核心の靈性、ソールその物をつかんで表現する意味とは異ると解釋される場合が多い。山本氏は物の像をよく見る、しかしそれは像であつて、像が語る内面ではない。そこに觀る人をして物足りなさを感ぜしめる。これは必ずしも風景畫のみではない。靜物でも、人物でもさうである。山本氏が此の境地からもう一層つき進んだなら、面白いものが出來るであらう。ところが山本氏は、大正六年歸朝の當時、十七點の努力の作を院展に並べて見せて、大に吾々の期待をそぐつたが、その後は一向見榮えのある作品を見

ブルプ・マリチ山の風景　足立源一郎

せてくれない。あのお土産作品の中には、「サーニャ」「廢れたるダアチャ」「自畫像」などがあつて、何れも眞面目な自然觀照の作品として、今も忘れ難いものであつたが、近頃は繪畫にあくびを感ずるといふ樣なことを言つて、ろくく筆も執らないらしい。

山本氏の事業　斯うして氏は今や、デレツタントのやうな態度――よい意味で新しい何物かをつかむために模索するやうな態度で、色々な方面へ腕を伸ばしてゐる。先づ歸朝の翌年六月には、戸張孤雁、永瀨義郎等の諸氏と共に創作版畫協會なるものを起して、新木版の研究及び發表をはじめた。元來、山本氏は愛知縣岡崎市の出身であつて、小杉氏より一つ年下の

明治十五年九月生れ、可なり苦學をして來て、早くから合田清氏について西洋木版を研究し、それに依つて生活しながらこつ〳〵と西洋畫の勉強をなし、明治三十九年には東京美術學校の西洋畫選科を卒業したといふ感心すべき模範的人物である。さうして數年間フランスに留學して居たが、歐洲大戰の際を、ロシヤを經て歸朝した、歸朝同時に美術院の同人となつた。さういふ經歷であるから、氏と版畫とは密切な關係があつたが、今は西洋風木版の第一人者と目される程になつてゐる。今年の第三回同協會展覽會には「ブルトンヌ」その他の面白いものを出してゐた。――それから又、氏は非常に文筆に巧であつて、嘗ては「方寸」の編輯にも從つてゐたが、歸朝匆々諸雜誌に樣々な文章を發表し、素朴で清新な感しがあるといふのでよころばれてゐたが、昨年あたりから小說の樣なものを書き出して、中央公論に發表した「コロ」の如きは最も好評を博した。兎に角、筆にかけても既に素人藝を離れてゐる。のみならず、近頃は他の二つの意義ある仕事を始めた。一つは兒童の自由畫奬勵といふこと、他は農民美術の鼓吹といふことであつて、共に山本氏が中心になつて着々と步をすゝめてゐる。兒童自由畫については、從來此の種の聲が起るべくして起らなかつたもので、杓子定規的な小學校教育に依つて、自由な人間の藝術心が殺されるのを慨いて氏が片上伸氏と手を携へて講演もしたり、或は長原孝太郎、石井柏亭氏等と相應じて、展覽會をしたりして、現に此の春は、兒童の作品を皇后陛下の台覽に供し、

御前で說明をしたりなどしてゐる。又農民美術は、ロシヤのそれからヒントを得たもので、信州の某

母の像　安田龍門

地で講習會を開き、その製作品を東京の三越吳服店で展覽に供したりなどしてゐる。勿論此の方も必要な仕事として、且つ斯うした美術上の自由運動の中から生れる或る物を豫期することが出來るのである。けれども同時に、これに依つて山本氏が最近益々繪畫製作より遠ざかりつゝあることをも證せられる。今後の氏の行き方は頗る興味がある。兎に角斯う言つた人は、

まだ日本の美術界に多く見ない。彫刻家で同じく美術院の同人たる戸張孤雁氏が、木版もやれば洋畫もやる、文章もうまいといふ、山本氏に似通つたところがあるけれども、戸張氏は宿痾になやまされてゐるので山本氏だけの活動をなし、具體的の業蹟を擧げて行くことが出來ないのは惜しいことである。美術院の洋畫部に、昨年同人となつた足立源一郎氏がある。足立氏は、小柄な、敏捷さうな、同時に軟かい女性的な感じを持つ頗る氣持のよい人である。

十一、二科會の人々

石井柏亭氏 去つて二科會の方を見ると、こゝの會員では先づ石井柏亭氏を擧げなくてはならぬ。石井氏あつての二科會、二科會あつての石井氏とは世の定評である。二科會成立には企劃した人は、今の會員の多くと、他に走つた數氏とがあつて、此の仕事その物が石井氏の方寸から出たとはされないが、しかも當初よりの中心人物は石井氏である。これには固より、石井氏の美術界に於ける地位からの關係もあらう。石井氏は、二科會に止まらずして藤島氏などゝ一緒に文展の方へ走つて居たならば、今は押しも押されもせぬ帝展の審査員である。それだけの貫目(?)を有つてゐる氏であると同時に、經營の才にかけては先づ畫界第一の人であらう。日本畫家には隨分經營家らしい人物

道灌山　石井柏亭

がないでもないが、實はそれ等は策略家に止まつて、ビズネスマンらしい働きは到底出來ない。洋畫家でも黑田淸輝氏は經略家である。けれども自ら手を下して實務に執掌すべく、餘りに貴族的である。山本鼎氏なども、隨分理性の働く方ではあるが、まだ藝術的である。藝術本能が興味となつて發動する方に働く。一體、そこが藝術家の藝術家たるところで、空想、或は想像力の豐富なところから、それにかられて色々な仕事を計劃する、或は興味をもつのが通例で、バイロンや岩野泡鳴や、島崎藤村や、さういふ人の行動のあとを見ても知れるやうに、畫家の多くも亦空想的計劃屋ではある。けれども、彼等は何處までもビ

ズネスマンではない。これを實行に移す手段と方法とを知らない。又實行の勞苦と煩瑣とには堪へ得ないのである、ところが石井氏はそこへ行くと違つてゐる。氏の仕事は何事でもビズネスマンライクである。繪畫その物さへも、仕事として片づけて行くのだから面白い。石井氏が半折の日本畫を描いてゐるのを見てゐると、實に君の面目がよく分る。言ふ迄もなく、多くの傳統的な日本畫は、廣い畫室の中に頑張つて、やつて來る多くのお客を相手に世間話をしながら、さつさと畫を描いて行く、否塗りたくつて行く。しかし、洋畫家にはさういふ藝當の出來る人は先づ少い。大抵の人が、他人の入ることを禁じた室内で、こつ〳〵とやつてゐるが、石井氏はさうではない。氏でも努力すべき西洋風（ペーンチング）を仕上げる時には、一人になつて居るだらうが、輕い日本畫などは、左の手にお茶を呑みながら、入り來るお客に頭を下げながら、「近頃はお變りありませんか」とか何とか、お世辭を振り蒔きながら、右の手ではせつせと筆を運んでゐる。見てゐる中にそれが花になつたり、山になつたりする。實に器用なものである。繪畫を事務的に描き得る西洋畫家は先づ石井氏位であらう。恐らく、席畫に油畫をやつてくれと頼まれても、やり兼ねない藝當だけは心得てゐる。

柏亭氏の人物

これだけ語れば石井氏は大抵解るであらう。電車の中で、肥り肉（ふとりじし）の、がつしりした大きな男が、黑の山高を冠つて脊廣服を着てゐるのを見て、何處の銀行の重役かと思つて顏を

見ると石井氏であつたりなどするとがよくある。さうした態度で氏は今日まで洋畫界になくてならぬ人物となつて來た。例へば二科會の運動を起すといふ場合に、さて誰々を集めて會議をするか、何ういふプログラムでやるかとなると、固よりさういふことを御存じない畫家連中のこと、誰一人心得てゐる者はない。たゞ石井氏のみありて、その間の機微に通じてゐる。のみならず、氏は極めて如才のない人だから、大抵のところに敵を作らない。畫家の仲間は勿論、如何なる方面にも心安だての人がある。それ故石井氏が肝入りになつて仕事をやると極めて進行が早い。殊に畫家の間には妙な狹い感情が働く爲めに、個人々々の間の好き嫌ひが多いものだ。あの男は太平洋側だから、一緒になれないとか、あいつは俺の畫を惡く言つたから、仲間としてはいけぬとかいふ樣なことをよく考へるものだ。そこへ行くと蟠りのない事務家(?)たる石井氏は、それ等の呼吸をよく呑み込んで、呉越を同舟にさせもすれば、犬の上に猿を乘つけもする。が、時に失敗を演じて、一網に打盡しようとした二科會の中から、呑舟の魚を幾尾も逃がすやうなことをするが、しかしそれは事務家才能の不敏な爲めでなくて、石井氏の身の不德とでも申さうか。

柏亭氏の仕事　兎に角、石井氏は二科會になくてならぬ中心人物である。嘗て黑田淸輝氏一味で國民美術協會を組織するに當つても、太平洋側から入つてこれに參劃し、記者側の坂井犀水氏と

共に最も努力したのも石井氏であつた。田口氏が「中央美術」を創刊するや、洋畫部を一人で引き受けて、一時は石井氏の雜誌のやうにさへも見えた。行くとして可ならざる氏は、行くとして重寶がられるからである。が、氏はたゞそれだけの男であつて、天下を乘つ取る大伴の黒主では決してない。さうあるべく餘りに人がよい、惡くいへば薄つぺら、よく言へば才人である。そして洋畫家としての氏を見る時、君も亦現代出色の一人であること固よりである。君は名を滿吉といひ、山本氏と同年の明治十五年の三月に、東京下谷仲徒士町に生れたのであるかち、立派な江戸つ兒である。しかも一代の江戸つ兒ではない。祖父さんは、文晁門下に有名な鈴木鵞湖といふ畫家であつて、お父さんも石井鼎湖といつて畫をよくされた。つまり三代江戸つ兒の生え拔きといふところ、しかも皆能畫家であつたといふ名譽ある血統だ。されば柏亭氏も幼時から日本畫をお父さんに學んでゐた。けれども一家の不幸に會して學校を續けるわけに行かず、明治二十八年から三十七年まで、お父さんの關係で印刷局に出仕して、彫刻と圖案のことに從事してゐた。尤も、その間に、三十年にお父さんがなくなられた翌年、淺井忠氏について洋畫を學ぶことになつた。のち更に中村不折氏からも教を受けたが、何しろ幼時からやつただけあつて、日本畫に非常に興味をもつたので、明治三十四年には結城素明、平福百穂等の諸君のやつて居た無聲會に入會したりなどして、その方面で既に重く見られてゐた。眼病にかゝつた

ので印刷局を辭して後は、中央新聞社に入つてカットを描いたりなどする傍、東京美術學校の西洋畫選科に入學したが、これは一年ばかりで退き、ついで大阪に移り、こゝも一年半居て歸京した。歸京後は內外印刷會社に入り、また雜誌「サンデー」に關係し、ついで美術雜誌「方寸」を起した。此の雜誌は實に、石井氏が明治四十年の五月に、森田恒友、山本鼎、小杉未醒、坂本繁二郎、平福百穗、織田一磨の諸氏を語らつて創刊したものである。それから明治四十三年には、外國漫遊の途に上り、エヂプト、トルコを經てヨーロッパの諸國を經廻り、大正元年十月に歸朝した。大正二年に國民美術協會が設立せられるや、これまたその實務上の奔走に預つて最も努力したが、一方で同じ年に丸山晚霞、中澤弘光、南薰造、白瀧幾之助の諸氏と、日本水彩畫會を起し、その翌三年には、有島生馬、山下新太郎、藤島武二の諸氏を糾合して二科會を設立した。これ卽ち柏亭氏の略歷であると同時に、以て氏が如何に美術の事業にたづさはり來つたかを示すものである。そして、無論柏亭氏本來の立場は繪畫殊に西洋畫であるが、また日本畫に巧みであること前に語る如くで、且つ甚だ文筆にすぐれてゐる。概して洋畫家には、文筆に達者な人が多く、山本鼎氏然り、鍋井克之氏然り、有島生馬、山下新太郎、その他數へ上げればいくらもあるが、中にも筆まめの第一は柏亭氏である。著書には「歐洲美術遍路」か二著、「我が水彩」、「名畫のロマンス」の如きがあり、「美術辭典」著者中にも名を並べてゐる。

柏亭氏の作品

然らばその西洋畫なるものは何うかといふに、柏亭氏が初めてその作品を發表したのは十七歳の明治三十一年、明治美術會の展覽會に於いてであつた。それからずん／＼名を知られたが、文展では第一回に「姉妹」、「千曲川」を出し、第二回に「火の跡」、第三回に「熊野河口」、「紀の海」、第五回に「サンミシエル橋畔」、「ローマの遺跡」、第三回に「獨逸の女」、「オランダの子供」、第七回に「滯船」、「並藏」、「N氏とその一家」を出した。その中、第三、第五、第六の三回に褒狀を、第七回に二等賞を得た。中にも二等の優賞を得た「滯船」は石井氏の傑作とも稱すべきものであつた。此の時は他に南薫造氏の「春さき」、石川寅治氏の「港の午後」が二等賞に擬せられて、皆世人の注目に價したが、中にも「滯船」は最もよく面目を語つてゐる、すぐれた作であつた。何の意もなく、何の巧もない平明にして淡如たる作風、――それが石井氏の特色であつて、從つて常識的で平凡で、天才的の肌合ひの足りないのが、何となく物足りなさを感じさせはするが、そのよい作になると、淡い情趣がはつきりと捉へてあつて、明るい快い、或る種の輕妙さを持つてゐる。此の「滯船」の如きはその適例と稱してよからう。二科會に出品したものでは、第一回の「早春」「猪苗代湖」、第二回の「木棚によるメノコ」、「緋倉」、第三回の「鰤網の支度」、「松樹下」、第四回の「道灌山」等がある。又大正七年の三月には日本橋倶樂部に於いて津田青楓氏と合同して日本畫の作品を約七十點展觀したがその主なものは輕

い、スケッチ風の風景と、花木のやうなものが多かつた。前にも言ふ様に、柏亭氏の繪畫の最も著しい特色は平明淡快といふことであらう。此の人は、思想的の深酷な頭腦の所有者でもなければ、ぐんぐんと或る一方へ掘り進んで行くやうな創作家でもない、さればとて抒情的に思ひをやるセンチメンタリストでもない、要するに平明である、淡くして快よい一種の筆致を有つてゐるといふに過ぎない。けれどもこの技巧のうまい、そつのない、よく物の表面を見てゐる點て、今の洋畫界にも珍らしい器用な人と言へよう。尚ほ彫刻家の石井鶴三氏は氏の令弟である。

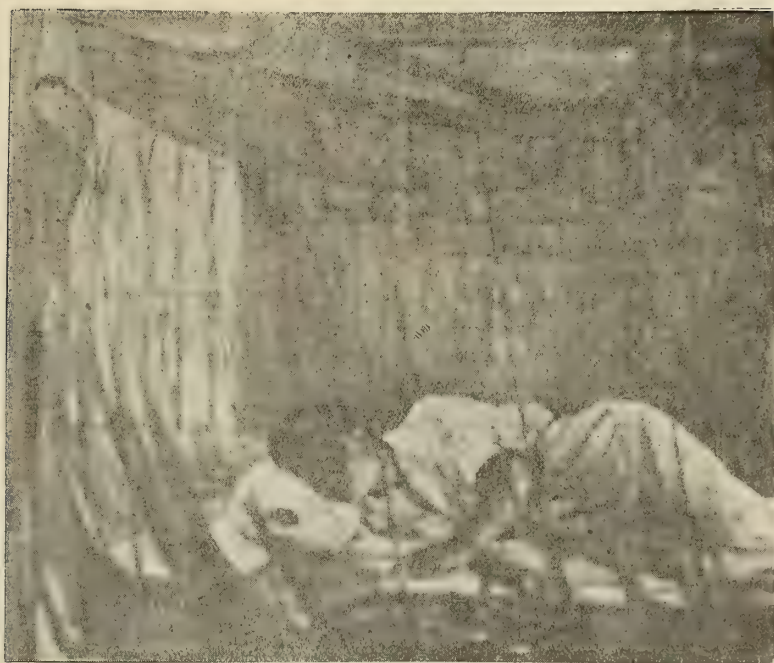
二科會の人々

二科會は嘗ても述べた様に、最初は可なり大勢の、有力な人々の集りであつたが、一人去り二人去り、今では最初の鑑査委員十五名、及びその後の委員四名の中、僅に十名を止めるに過ぎない。そして牛耳つてゐる石井氏の外に、津田、山下、有島、齋藤、坂本、湯淺、安井、正宗、熊谷の九氏は、共に知名の人々で言はゞ現代洋畫壇の中堅の、少くとも半分を領してゐると見てよい。殊に院展の洋畫は附品の感があり、帝展は稍古典化しようとしてゐる際には、新興洋畫の爲め重要である。

山下新太郎氏

山下氏は江戸ッ兒である。根岸の有名な經師屋さんの息子であつて、生れたのは明治十四年。三十七年に東京美術學校の西洋畫選科を卒業し、翌年パリに留學し、初めラファエ

田舍にて　山下新太郎

ル・コランに就いたが、のちコルモンに移り、更に美術學校に入り、二年間留學してから、スペイン、イタリー等に遊び、一九〇八年のサロンへ「窓際」といふのを出品し、その翌年も「讀書の後」、「讀書」の二點を出し四十三年五月に歸朝した。その年文展の第四回に「讀書の後」外二點を出して三等賞を得、第五回に「窓際」を出して同じく三等賞、第六回には「マンドリーヌ」を

蚊帳　有島生馬

出した。大正三年、二科會の運動に參加して鑑査委員に選ばれ、第一回展覽會に「カフエー・コンセール」、第二回に「端午」、第三回に「田舍にて」、第四回に「橙」、第五回に「コンヴアレッサンス」、第六回に「蜜柑」、「瀧」、「少女」等を出してゐる。氏の畫風は元來日本趣味のある、柔かくて鮮かな落ちついた色彩と形體とを得意としてゐるが、近來に至つて愈々その傾向を著しくした。小品的なものに面白いものが多い。

有島生馬氏

氏は本名を壬島馬といふが、姓名判斷か何かから、生馬と稱してゐる。正金銀行の重役であつた

人の令息で、その兄に小説家の有島武郎氏、弟に同じく小説家里見弴氏のあることを以て知られてゐる。明治十五年十一月に横濱で生れた。兄さんと同じく外國語學校を卒業したが、間もなく藤島武二氏について洋畫の研究を始めた。それも僅にして、三十八年には繪畫研究の爲め歐洲に留學し、ローマとパリとで美術學校に學んで、四十三年に歸朝した。文展へは第五回に「宿屋の裏庭」、第七回に「藤村氏肖像」を出し、大正三年、二科會の創立に參加し、選ばれて鑑査委員となり、その第一回に「湖畔の道」、第二回に「去年の裸體習作」、「今年の裸體習作」、第三回に「ある詩人の肖像」、「切通坂」、「朝の山」第四回に「金魚」、「釣」、「カナリヤ」、「蚊帳」、第五回に「谷の竹藪」、「花」、「習作」、「夕陽」、「曙光」、「森」の六點、第六回に「露西亞の婦人」、「支那絹の靜物(1)(2)」等を出してゐる。その作風は、寫實的であれども稍甘い色彩のものである。氏はまた文筆をよくして、小説家としても知られ「蝙蝠の如く」、「獸人」、「南歐の日」、「暴君へ」等の著書がある。

坂本繁二郎氏　坂本氏も明治十五年の生れで、久留米市の人である。早くから父を失ひ、十二歳の時にその地の中學校の教師森三美といふ人から洋畫を學んだ。そして明治三十五年に、故青木繁と同伴して上京し、小山正太郎の不同舍に入つた。その頃から將來を期せられてゐたが、文展では第一回に「茂安村の一部」、第四回に「張り物」(褒状)、第五回に「海岸」(三等賞)、第六回に「うすれ日」、

初冬　齋藤豐作

第七回に「魚を持つて來てくれた海女」等を出した。二科會の運動に參加して、第一回に「牛」、第二回にも「牛」、第三回に「母子」、第四回に「髮を洗ふ」、第五回に「苗木畑」、「栴檀樹」、「靜物」、「那古海岸」等を出品した。何しろ、餘り世間的に名を賣らうとする人でないから、展覽會の成績なども餘り氣にしない、力作といふ程のものも出して居ないが、二科では重きをなされてゐる。氏が牛を描くことは偶然か何うかは知らぬが、屢々見るところである。

齋藤豐作氏　齋藤氏も二科の人としては可なりに重んぜられたが、今

や去つてフランスにある。氏は明治十三年に埼玉縣に生れて、明治三十八年に美校の洋畫選科を卒業し、その翌年フランスに遊び、ラファエル・コランに師事して七年間研究した。文展へは第六回に「秋の色」、第七回に「夕映の流」(褒狀)を出し、大正三年より二科の鑑査員として、第一回に「初冬の朝」、「たそがれの頃」、第二回に「春の夕」、「初夏の雨」、「初冬の雨」、「夏の夕」、「水草」、「農家の裏庭」、「雨後の海」、第六回に「殘雪」、「雨後の夕」「雪後の夕」、「朝」等を出した。氏の特色は、鮮麗な色で印象派風に描寫して、しかもそれがボアンチリストの技法などを使つて、一種の裝飾的氣分を表現しようとするところにあり、その點では餘り他に例がない。此の夏、日本の生活に飽いたと言つて、夫人の郷土なるフランスへ去つたが、歸期は定まらないとのことである。

津田青楓氏

氏も明治十三年生れで、京都の人である。お花の先生で有名な西川一草亭氏の弟である。初め圓山派の畫家竹川友廣につき、のち谷口香嶠に移つたが、更に淺井忠の塾に入つて洋畫を學んだ。四十年にパリに遊んでジャン・ポール・ローランスにつき、三年の後に歸朝した。文展では第五回に「五月のインクライン」を出した外、見ないのであつたが、二科の創立に參加して毎年出品してゐた。中にも第四回の「春丘」外數點、第五回の「一隅」、「芭蕉庵の下」等が有名である。しかし昨年から二科に出品を見ない代りに、昨年は柏亭氏と二人で、日本畫の個人展覽會などをやつてゐる。

一體、青楓氏の畫は、出發が日本畫であつた故か、京都趣味の爲めか、頗る邦畫的のものであつて、それが近年益々著しくなつて行きつゝある。殊に近頃は南畫をやり出して、一種獨特の風格を出してゐる。故夏目漱石も、氏に畫を學び、その影響を受けてゐる。又津田氏の裝幀は、世に定評あるものである。夫人とし子も、女子美術の出身で、淺井忠、谷口香嶠に學び、面白い繪畫を描いてゐる。津田氏も文筆がうまく、展覽會評などに才氣を見せてゐる。

正宗得三郎氏

正宗氏は上の人々に比べると稍後輩である。氏は小說家正宗白鳥氏の令弟で、明治十八年岡山縣に生れた。四十年、美校の洋畫撰科を卒業し、大正三年フランスに留學し、五年に歸つて來た。文展へは第三回に「白壁」、第四回に「夕日の反映」を出し、大正四年、フランスより作品を寄せて二科の會員となり、その第二回に「靜物」、「リモージュ」、「森林中の別莊」、「牧場」第三回には歸朝して「室

春丘

の一隅」、「リモージュの田舍」、「シューミューズの女」等三十六點を出陳して畫壇の注目を惹いた。第四回には「犬若の濱」、「曇の海」、「犬若の岩」、「巴里の市街」、「梳る女」等十三點を出し、第五回には「郊外」、「靜

津田春楓

等九點を、第六回には「霧ヶ峯の夕照」、「小道」等十六點を出してゐる。斯く年年多數の作品を公開するだけでも、氏の努力と藝術的天分とに驚かされるのであるが、しかも一歩一歩進境にあるのはよろこばしい。但し、在佛當時には拙い、しかし趣のある、純なものを描いてゐたが、だん／＼熟練するに從つて、畫はうまくなつて行つた代りに、氏だけにあつた生彩が幾分か薄らいで來た感じがないでもない。兎に角、將來の最も期待される一人であらう。

安井曾太郎氏

安井氏は正宗氏よりまた若い。明治二十一年の生れで、京都の木綿問屋の息子さんである。明治三十七年に、淺井忠の門に入り、四十年にパリに遊び、ジュリアンに通ひ、大正

花瓶　安井曾太郎

三年、英國を經て歸朝した。その翌年二科の會員となり、第一回に「孔雀と女」、「黑き髮の女」、「スペインの踊」、「縫物をする若き女」等四十四點を出陳して、正宗氏と共に一躍名をなした。第三囘に「ダリヤ」、「丘の道」、「女」、「芽出し頃」、「林檎」、第四回に「肖像」、「女」、「ダロキシニヤ」、「少女」、第五回に「孟宗藪」、「靜物」、「早春」、「支那服を着たる女」、「梅林」、「林檎と密柑」、「其女」、第六回に「ダリヤ」、「樹蔭」、「春」を出品してゐる。氏の傾向は正宗氏と比較すると好對照をなしてゐる。正宗氏は、後期印象派的の觀照の畫家である。そして對像は常に風景であつて、風景を描けば物になるが、人體

風景　梅原龍三郎

だとさうは行かぬ。これに反し安井氏は、情熱の畫家で、ローマンチックの分子を含んだ自然主義者である。しかも肉感の人でもある。肉的な女を描いて或る程度の成功を見る。が、それも近頃では稍々マン子リズムに墮した樣に評する人もある。若いだけに尙ほ將來を待たねばなるまい。

梅原龍三郎氏 二科の人として、此の外には熊谷守一氏と彫刻の藤川勇造氏があるが、未だ左まで世に聞えてゐない。それよりも、大正七年に會員を脱退はしたけれども、作品を陳ねてゐる梅原龍三郎氏を擧げねばならぬ、氏も明治二十一年に京都の吳服屋の息子として生れた人で、もと良三郎と號したが大正六年から今の名に改めた。十七八歳の頃京都の洋畫研究所に入り、淺井忠に學び、四十一年から大正二年まで

ポン・ロワイヤール　黒田重太郎

パリに留學した。大正三年二科會の創立に參加し、その第一回に「靜物」、第二回に「座裸婦」、第四回に「風景」、「靜物」等を出品してゐる。人體描寫が最も得意で、一種の鮮麗な、感覺的な色彩で、上品に且つ力强く表現することに氏の面目がある。氏も近く再び洋行の途に上つた。

十二、彫刻界の代表人物

彫刻界の現狀　盛になりかけてゐるとは言ひながら、日本の彫刻界はまだ微々たるものであつて、彫刻家の數も、畫家の十分の一にも足りなければ、大家と稱する程の人も甚だ少い。その少い彫刻家を、大體に於いて二つに分けると塑像家と木彫家とにすることが出來る。塑像といふのは、泰西の彫刻法に依つて

作る人達で、木彫家は日本獨得と言つてよい所の、木に彫刻する人達である。塑像を造るには、最初モデルに依つて、或はモデルに依らずして原型を造る。それは油土といふものを塊まりにして、篦でそれを刻み行くのである。さうして出來上つた原型を、更にその上から石膏を流しかける。そして中の油土を拔き取り、その事へ更に別の石膏を流し込んで、最初流しかけて固めた外部の石膏を除き去ると、その内部のものがもと油土で造つた原型と同じ形のものとなつてゐる。出來上つたものが石膏像で、若しその石膏の外型から油土を拔き取つたものに青銅を流し込めばブロンズ像が出來る。銅像は斯うして造られるので、如何に大きい銅像でも、造法の原理としては此れに過ぎない。また大理石像の場

初夏の小路　岸田劉生

女　荻原守衛

合には、造つてゐる原型をもとにして、寸法を測つてこれを大理石にその儘型を寫し取るのである。木彫でも、近頃の青年木彫家は最初油土の原型を造つて置いて、それを木に寫すことをやる。これに對して舊式の木彫家は、いきなり木に向つて鑿でこつ〳〵と削つて彫刻するのである。尤も別に日本在來の原型造法があつて、奈良の大佛などもそれに依つて造られたのであるが、それについては彫刻篇で別に詳しく語ることゝする。そして、今は材料の違ひこそあれ。木彫家と塑像家の別は甚だ少なくなつた。たゞ善光寺の仁王樣を造るといふやうな場合には木彫家を要し、銅像を造るといふ時には塑像家に賴むやうな別はある。そして、銅像を造るには、原型の製作は彫刻家の手に依り、鑄るには鑄物師の手を待つのが普通である。

高村光雲氏　さて、それ等の彫刻家の中で、最も知名な人を擧げると、先づ高村光雲翁がある。翁は嘉永五年二月、江戶淺草に生れ、初め中島光藏といひ、文久三年に佛師高村東雲の徒弟となつたが、明治七年に師の姉の高村つゑ子の女婿となり、高村幸吉と稱した。明治十二年、師の歿後は獨立して一家をなし、十九年龍池會の觀古美術會に作品を出して銅賞を得、また此の年東京彫工會を起しその常務委員となり、二十二年、東京美術學校の雇となり、ついで敎授となつた。二十三年、帝室技藝員を命ぜられ、二十四年には、只今馬場先の廣場に立つてゐる楠公像の木型の主任となり、つ

いて二十五年には「西郷隆盛銅像」の木型主任となり、それから内外の博覧會、展覧會の鑑査員となつたこと度々て、コロンブス世界博覧會その他に出品して金銀牌を受けたことも數回に及んでゐる。文展が開設されるに及んでは、第一回以來彫刻部の審査員となつた。そして大正八年に帝國美術院會員に任命された。翁は實に現代彫刻界の元老にして、子息には彫刻家にして詩人なる高村光太郎及び高村豐周氏があり、門下には米原雲海、山崎朝雲、平櫛田中、本山白雲、内藤伸、石本曉海、加藤景雲、山本瑞雲、藤田照雲、今戸精司等の諸氏があり、以て木彫界の殆ど全部を氏の一派で壟斷してゐるが、しかし、必ずしも氏を中心として一團結をなしてゐるのでなく、思ひ〳〵の方面へ發展してゐる。以下少しくそれ等の人々に觸れて見る。

米原雲海氏　米原雲海氏は、明治二年八月、島根縣の安來町に生れた。少時より高村光雲翁について學び、東京彫工會、日本美術協會、内國勸業博覧會、及び外國の諸博覧會等に出品して優賞を得ること十數回の多きに及んでゐる。文展では第四回以來彫刻部の審査委員となり且つ第一回に「神來」を、第二回に「寒山子」を出して共に三等賞を得、第三回には「宇宙」を出して褒狀を得てゐる。その後も引き續いて第四回に「仙丹」、「和氏の璧」「竹取翁」「第五回に「天樂」「觀音」「專念」第六回に「虛心」第七回に「沙金」「吉祥寺觀牡丹」第八回に「旅人」、第九回に「曠野」、「松風」、第十回に

瓢箪鯰　米原雲海

「瓢箪鯰」を出してゐる。此の題名でも知れるやうに、氏の作風は理想派、若くは寓意派に屬し、好んで支那畫題、殊に禪宗畫題か、然らずんば抽象的の題目を　んで、一種の韻致ある人物を表現するのを特意とする。たゞ、稍その思想が奇逸に偏り、技巧も固執の氣味があるので、新しい氣分が乏しい。近時善光寺奉獻の大仁王像を造つてゐる。石本曉海、戸田海笛、太田南海等の諸氏は、雲海氏の門下生である。

山崎朝雲氏 は、明治元年二月、福岡市櫛田前町に生れ、光雲翁の門に入つて木彫の法を修めた。此の人も内外の博覽會等に出品して賞を受けたこと數十回に及んでゐる。文展へは第二回に

產　屋　山崎朝雲

「大葉子」を出して三等賞を得、第四回から彫刻部の審査員に任じ、第四回に「達磨」、「東奥の乙女」、第五回に「林和靖」、「滄溟」、「雲龍」、第六回に「山そだち」、「竹生島」、「供養の父」、第七回に「觀音」、「雨悠々」、「產屋」、第八回に「嬥歌」、第九回に「みなかみ」「獲物」「藥研」、第十回に「響泉」、第十一回に「狹丹頰相乙女」「弗多羅」、第十二回に「彗星」、帝展に「上矢の鏑」等を出品してゐる。此の人は必ずしも寫意的の傾向に止まるものではなく、時として寫實味の勝つた作もあるが、しかも最も得意とする所は寫意的、抽象的の傾向のあるものである。松尾朝春、佐藤朝山の兩氏は此の門下から出てゝゐる。

平櫛田中氏　平櫛田中氏は、帝展から離れて美術院へ走り、今では同院彫刻部の元老となつてゐる。名を倬太郎といひ、明治五年四月、岡山縣に生れた人である。はじめ中谷省古といふ人について、後に高村翁の門に學び、各博覽會に出品して多くの賞を得てゐる。文展へは第一回に「姉ごゝろ」、第五回に「維摩」(三等賞)

を、第七回に「堅指」「落葉」を出したが、文展では樣々の關係から餘り好運の方ではなかつた。然るに大正三年、院展の第一回に「横笛堂」「樹に倚りて」、「禾山笑」、「月明」の四點を出して、爲に同人に推されたのである。その第二回には「沙上」「陰影」、第三回には「兒」「淵」「遠き思ひ」、第四回には「森の晝」、第五回には「觀音」、第六回には「烏有先生」「一休行乞」等を出してゐる。此の年輩の彫刻家としては、比較的新しい方に向はうとしてゐる人である。けれども、事實舊人の埒を出でない。

一内藤伸氏一

内藤伸氏は上の諸氏に比して一時代おくれた青年作家である。且つ木彫家としても、如上の保守的傾向の人々とは異つて、美術學校出の新進である。しかも新人としての木彫家は、今のところ氏を措いて代表すべき人を見ない。長く日本美術院の同人であつたが、今は故あつて何れの展覽會にも出品せない。恐らく、近き將來に帝展の審査員として、一躍その名を成すことであらう。氏は嘗て雨郷と號したこともあり、明治十五年十月、島根縣飯石郡吉田町に生れ、幼時より養はれて松江市の商家に在つたが、天性頗る彫刻を好むところより、笈を負ひて東京に出で、高村光雲翁の門に入つて夙に才能を認められた。明治三十七年、東京美術學校彫刻撰科を卒業した。文展へは第二回に「安住と迷想」、第四回に「湯あがり」（褒狀）、第六回に「藤原時代の女兒」、第七回に「牛刀」（褒狀）等を出したが、大正三年、美術院に入りて同人となり、その第二回に「山上」、「壺」、第三回に「若

葉の頃」、第四回に「浴の乙女」「獅子」等を出品した。然るに故あつて大正七年美術院を脱退し、今は僅に藩士拉社中の一人として、時々小品を公にすることあるに過ぎない。氏の作風の最も特色とするところは、塑像の原型を造つて、これを木彫に移すことと、彫刻の表面に、柳葉狀の一種の鑿目を示して、一種のタッチを表はすことゝ、またその作品に色彩を用ひることゝで、共に氏を以てこれが代表と認められるものである。その趣味は、想念の形體化にして、最初はローマンチックなものに興味を有したが、近頃は力量の象徴化といふやうな方面に力を

浴の乙女　　內藤伸

入れてゐる。氏の用ふる單純にして穩寂なる色調は、一段氏の彫刻に精彩を添へるものである。未だ完成せざる大家として、氏の將來を祝福して置く。

本山白雲氏

光雲翁門下の他の彫刻家は、先づ本山白雲氏がある。氏は名を辰吉といひ、明治四年九月、高知縣宿毛町に生れた。早く高村光雲翁について彫塑を學び「後藤伯銅像」、「品川子銅像」、「西郷元帥銅像」、「川村海軍大將銅像」、「永山將軍銅像」、「川路大警視銅像」等を造つた。實に氏は銅像製作家として、大熊氏廣氏と共に、明治の彫刻史上特異の位地を占めてゐる。他に木彫等も若干あれど、先づ銅像作家として語るべきである。次に加藤景雲氏は、島根縣能義郡荒島村の出身にして、明治八年の生れ、光雲翁について木彫を學び、各博覽會等に出品して賞を得てゐる。文展にては第九回に「西の空」、第十回に「高樓の月」を出してゐる。他に今戸精司氏とて、明治十四年大分縣生れの、青年彫刻家があつた。初め山田思齋に學び、ついで光雲翁について、明治三十五年東京美術學校彫刻選科を卒業し、尙ほ爲すところあらんとしたが、大正八年十一月、三十九で病歿した。

山本瑞雲氏その他

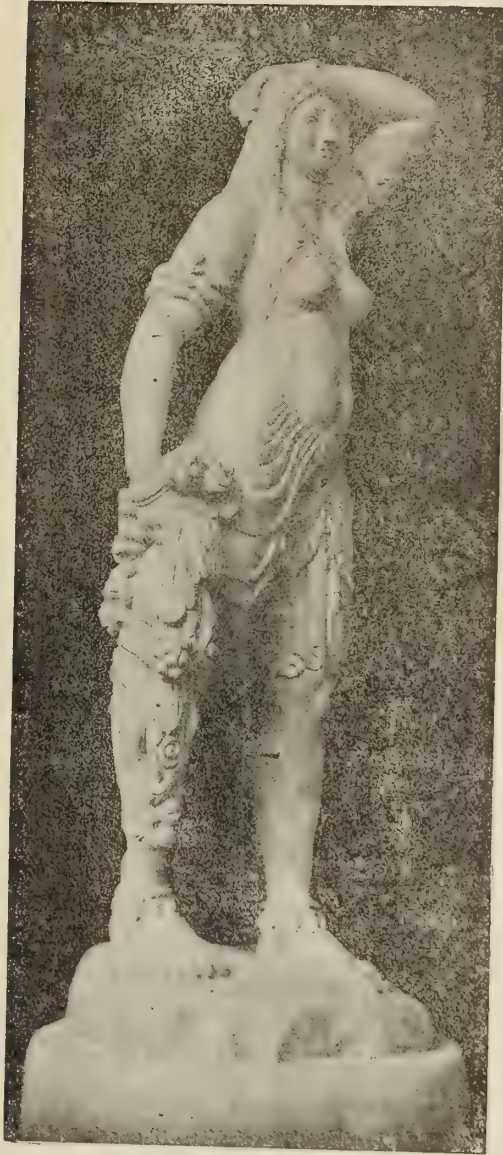
それから、梅檀社を率ゐる山本瑞雲氏、一時五星會を設けた前田照雲氏も光雲門下の出てある。瑞雲氏は實に高村翁の高弟であつて、かねてその名を知られてゐたが、文展へは殆ど出品せず、僅に第九回に「大孔雀明王」を出したに過ぎない。三木宗策氏は氏の門下出身である。

大正六年、後藤良、長谷川榮作、關野聖雲、富岡芳堂、三木宗策の諸氏と共に栴檀社を起し、爾來年年展覧會を催してゐる。此の中、後藤良氏は和歌山縣の人にして、明治三十五年東京美術學校の木彫科を卒業し、文展へは第九回に「朝霞開宿霧」を出した。その兄後藤省吾氏も光岳と號し、明治二十八年同校を卒業し、馬の彫刻を得意としてゐる。長谷川榮作氏は明治二十三年一月東京淺草に生れた人で、十六歳の時から吉田芳明氏の門にあつて、彫刻を學び、文展へは第八回に「夢」、第九回に「春よ永劫なれ」（三等堂）、第十回に「S氏の像、」第十一回に「引接」を出して、これは特選首席になつた。第十二回には「地上に在る誇」（特選）帝展には「幸よ人類の上にあれ」を出した。內藤氏等と共に最も將來を矚望されてゐる。關野聖雲氏は、名を金太郎といひ、神奈川縣の人にして、明治十四年東京美術學校木彫選科を卒業し、文展へは第九回に「達磨」、第十回に「日向」、第十一回に「靜觀」、第十二回に「嬌艶」、帝展に「水のほとり」を出した。富岡芳堂氏は明治二十三年十二月東京に生れ、吉田芳明氏について木彫を學び、長谷川榮作氏と相伴つて來てゐる。文展では第八回に「鼎、」第十一回に「清き流れ」、帝展に「聖き悦び」を出してゐる。三木宗策氏は、山本瑞雲氏について木彫をび、第十回文展に「ながれ」、第十一回に「美くしき星の一つに」、第十二回に「若き日のなやみ」を出品してゐる。尚ほ長谷川氏等の師なる吉田芳明氏は、名を芳造といひ、明治八年東京に生れた人である。はじめ島村俊

明について木彫及び象牙彫を學び、各博覽會等に出品して數十回の優賞を得てゐる。文展へは第三回に「かなしみ」、第四回に「天籟」、第六回に「拈華微笑」、第八回に「あらより」(褒狀)第九回に「樵夫」、を出してゐる。尚、前田照雲氏は名を勝也といひ明治十二年秋田縣に生れた人にして、高村光雲翁について木彫を學び、文展へは第八回に「目黑の春」を出してゐる。大正六年、氏と共に五星會を組織した三國花影氏は名は又藏、明治三十二年青森縣の生れで、前田氏の門に學び、第十回文展に木彫「明かたの海」を出した。

河畔の女　吉田白嶺

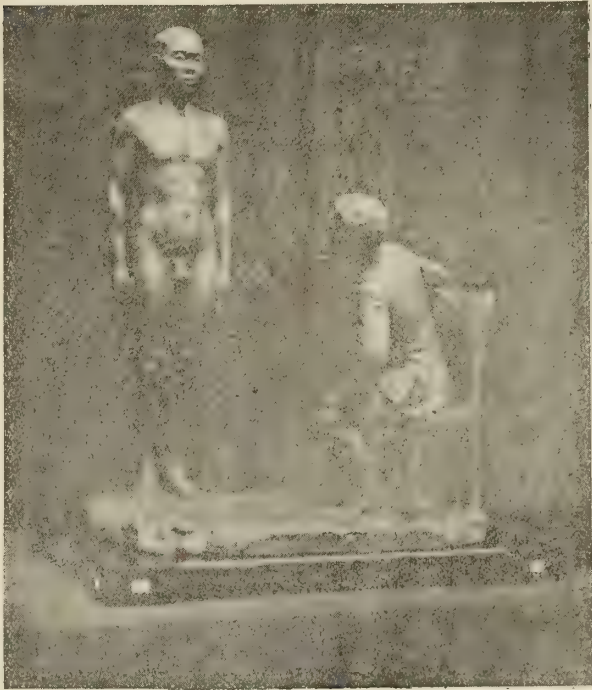
其他の木彫家　その他の木彫家としては、吉田白嶺、佐藤朝山、川上邦世の三回を擧げなくてはならぬ。吉田氏は、明治四年十二月、東京本所松坂町に生れた人で、この人は殆ど獨習で木彫の技を修めた人である文展へは第三回に「念」、第七回に「寂靜」(褒狀)を出したが大正三年、再興日本

美術院第一回展覽會に、「樂女」、「海女」を出して同人に推され、その第二回に「漁夫」「髭」、第三回に「鏡」、「供燈」、「女」、第四回に「失題」、第五回に「後園」、「河畔の女」、第六回に「教化」を出してゐる。また佐藤朝山氏は、名を清次といひ、明治二十年福島縣の生れにして、山崎朝雲氏について木彫を學び、再興美術院第一回展覽會に「野人」、「呪咀」、「シャクンタラ姫」を出して同人に推され、第二

愛染　佐藤朝山

に「シャクンタラ姫」、「アグニ」、「タシャムダ王」を出し、第五回に「愛染」、第六回に「上宮太子」、「釋迦に幻はれし魔王の女」を出した。氏も亦彫刻界では新人の一人と目されてゐる。川上氏は號を澹堂といひ、明治十九年六月東京芝に生れた。明治初代の洋畫家川上冬崖の孫である。十二歲の時より、竹中光重について木彫を學び、三十五年、東京美術學校彫刻撰科に入り、三十九年卒業した。文展へは第一回に「破邪」、第同に「靜かなる狂ひ」、第八回に「シャベル」、第九回に「戀」（褒狀）を出し、また大正元年、フューザン會に入りて「立てる人」他二點を出品し、第三回院展へも、「春風駘蕩」第四回に「こだま」、第五回に「成吉思汗」、第六回に「日本武尊」を出品した。先づ我が邦現在の木彫界はこんなものであらう。

新海竹太郎　そこで次には彫塑家であるが、これは帝國美術院會員として、木彫の高村光雲氏と並んで彫塑を代表する新海竹太郎氏がある。故に此の人より始めなくてはならぬ。尤も、彫塑界には二つの暗流があつて、何だか不穩な徵候が見え、漸次に此の新海氏一派に對して別派を樹てんとする人々がないではないが、先づ、木彫に於ける光雲翁に匹敵すべき元老は此の人の外にない。氏は年齡に於いて光雲翁よりずつと若く、明治元年二月の生れである。故鄉は山形市である。明治の始めにドイツに留學して彫塑の術を學び、第一回以來文展彫塑部の審查員となり、また大正元年には帝

室技藝員に任命されたが、更に大正八年、帝國美術院の會員となつた。氏の文展へ出した作品には、

甲種合格　新海竹太郎

第一回に「あゆみ」「露營」、第二回に「ふたり」、「旅行」、「羅漢」、第三回に「原人」、第四回に「默」、「斥候」、「きんの棒」、第五回に「鐵鎚」、「一休和尚」、「一致」、第六回に「戰捷記念日」「左丘明」、「婇女の熟睡」、第七回に「價千金」、「嗚呼老矣」、「滿足」、第八回に「全力」、「勤勉」、第九回に「釋迦八相」、「新兵」、「長袖善舞」、第十回に「甲種合格」、「龍樹」、第十一回に「圓滿」、第十二回に「金平化物退治」「輕呂」、帝展に「犍陟」等の作品を出して、皆相當に努力の跡が見える。そして、新海氏の特色ともいふべきはローマンチックな、陶醉的詩美の傾向よりも、寫實に立脚せる、飽くまでも堅實なる作品である。それは氏が、斯る特色の著しい

ドイツで學んだといふと、嘗て氏が軍人生活をしたことによるであらう。從つて時に、「羅漢」、「左丘明」「一休和尚」といふやうな、理想的の、しかし實在せる人物を捉へて寫すに當つても、硬い寫實の立場にある。此の意味で氏は新時代の若々しい氣分の人ではなくて、クラシシズムに立つ人である。そしてその軍人生活をしてゐた理由からか。軍人を題材としたものが可なりに多い。たゞそのクラシシズムは根柢はあるけれども融通はきかないといふ、何となく角のとれない感じの伴ふのが、吾吾には物足らない。氏はまた「北白川宮騎馬銅像」「南部伯騎馬銅像」、「團十郎銅像」「大山公銅像」等をも作つてゐる。美術院の新人、中原悌二郎氏の如きは氏の門下から出てゐる。また新海竹藏氏も氏について學び、第九回の文展に「母子」、第十一回に「日向に立つ土工」を出してゐる。小野田寅之助氏も新海氏の門に出て、第十二回文展に「虐げられし人」を出品してゐる。

北村四海氏

次には帝展審査員の主席として北村四海氏がある。氏は本名を直次郎といひ、明治四年二月長崎市に生れた。年輩及び閲歴から云へば新海氏と互角であつて、一方が堅實なるドイツ派のブロンズ彫刻に據れば、此方は艶美なるフランス派の大理石彫刻を專らとしてゐるかに見える。實に氏は、我が國に於ける大理石彫刻の權威とせられてゐる。はじめ父について學び、更に明治三十三年フランスへ留學し、三十五年に歸朝した。それより太平洋會員となり、四十一年よりその研究所

水の精　　北村四海

で彫刻を教へたが、のち辭し、また近くその會員をも脱して了つた。受賞したのは、明治三十一年に東京彫工會で二等賞を得たのを初めとして、その翌年日本美術協會にても二等賞を得た。文展では、第二回に「春、秋」(三等賞)、第三回に「手古奈」、第四回に「花の精」、第五回に「女郎花」、(褒状)、「蔭」、第六回に「救を求め居る女」、第七回に「空想に耽り居る女」(褒状)第八回に「水の精」(三等賞)、第九回に「イヴ」(三等賞)、「橘姫」、を出し、第十回より彫刻部の審査委員となり、此の間に「M翁」、「水のほとり」、「すみれ」、第十一回に「春」、「井氷鹿の娘」、第十二回に「愛」、「濡衣」、帝展に「凡てを委ねる」、「いづみ」を出してゐる。此れ等の題名にても知ら**れる通り、氏は實に徹底したローマンチシストであ**

る。石によつて、夢の如き、あでやかなる、滑かなる愛の音樂、青春の音樂をかなでんとするものである。その作は或は甘いものであるかも知れない、强さとか、獨創とかいふものでは、多分の缺點を見出し得るかも知れない。しかし、肉體の音樂を奏する人としては正にユニックと言はなくてはならぬ。氏にはまた嗣子に北村正信氏があり、伯爵小笠原長幹氏もその門に學んでゐる。正信氏は、本名を友吉といひ、明治二十二年に新潟縣に生れ、彫刻を四海氏に學び、また洋畫を太平洋畫會に學んだが、のちその養子となつた。文展へは第五回に「炭臺の男」、第六回に「赤毛布」、「鐵工」、「老婆」、第七回に「女勞働者」、第八回に「絕望」、第九回に「髮」(三等賞)、「花の精」、第十回に「希望」、第十一回に「若い女」、「闇の力」、第十二回に「ひか

花の精　北村正信

り」、（特選）、帝展に「花のしづく」、「恐怖」を出した。又小笠原伯は、文展へ第八回に「もゝのはな」、第九回に「月朧」、「目覺めたるサイキ」、第十回に「無題」、第十一回に「妙さん」、第十二回に「姫百合」を出してゐる。アマチュアとしては巧みなものとの評がある。伯の夫人貞子も、滿谷國四郎氏について洋畫を學んでゐる。また伯の妹尙侯爵夫人も洋畫を學んでゐるといふ。

朝倉文夫氏

北村氏に對立して、否、新海氏と三者鼎立して居るのは朝倉文夫氏である。氏は新海氏や北村氏に比すると十幾つも年下であるが、そのやつた仕事と經歷と、人格と、今後の期待とに於いては、兄たりとも弟たり難いものである。即ち文展の成績を比較するに

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	帝	
	二	三	二	三	三	二	二		委	委	委	委	朝倉文夫氏
	三	出	出	褒	出	褒	三	三	委	委	委	委	北村四海氏

と、到底、比較することの出來ない程の差である。一つは北村氏が學校出でない關係等から不遇であつたからでもあらうが、朝倉氏は二十歲前後の白面の一書生を以て、第二回文展に「闇し」を出品して、いきなり二等賞を得た。此の年此の成績を得たのは實に氏ひとり、世間は駭心驚目して氏を見たのである。然るにその後の數年も引き續いて、出品する毎に二等若くは三等で、彫刻部に於いては三等を得る

ことすら破格で、年々二三人を出でないのに、二等を四回も獲たといふ人は、日本畫部に於いて木島櫻谷、菊池契月、西洋畫部に於いて南薫造氏位なものである。また彫刻部で二等を得た人は、氏の外に北村西望氏に僅々一回あるに過ぎない。故に氏の展覽會に於ける成績は破天荒を極めたものであつた。

氏は前姓を渡邊といひ、明治十六年三月に豐後國豐岡村に生れた。中學校四年の時上京して、彫刻家たる長兄渡邊長男氏の家に寓し、東京美術學校の彫刻選科に入り、傍ら太平洋畫會研究所に通つて、明治四十年に美術學校を卒業した。文展へは、第二回に「闇」(二等賞)、第三回に「山から來た男」(三等賞)、第四回に「墓守」(二等賞)、第五回に「土人の顏」(三等賞)、第六回に「若き日の影」(三等賞)、第七回、第八回に「含羞」、「いづみ」等を出して各々二等賞首席となり、第十回からは彫刻部審査員となつたの、第十回の出品には、「加藤先生の像」、第十一回には「時の流れ」、第十二回には「衝動」、帝展には「スター」、「矜持」等が出で、何れも人心をショックしたものである。また氏の作つた原型に依つて銅像となつたものも甚だ多い。「島津齊彬公銅像」「島津久光公銅像」「島津忠義公銅像」「大隈公壽像」、「北畠治房男壽像」の如きその最も有名なるものである。氏の彫刻の特徴は所謂自然主義の立場に立脚して、物像を忠實に表現するにあるが、しかも氏の趣向よりして、それが流麗溫藉なる藝術的作品として表現せられるところに、氏の特得の境地がある。氏の作品は內容的、力的のものではない

が自然の流動性をつかんでゐること最も著しい、「時の流れ」の題の如き、氏の作品のすべてを象徴するものである。

朝倉氏の門下

朝倉氏には、一面に任俠にして頭領的なところがあるので、社交に長じ衆望を身に集めてゐるが、殊に多くの門下生を養成して、斯界の興隆につとめてゐる。未だ大をなした人はないけれども、將來有望なる青年彫刻が頗る多い。先づ木內克氏は、千葉縣の人にして、明治廿五年の生れ、夙に朝倉氏についてその法を修め、文展第十回に「平吉」、第十一回に「老い」、「動搖」、第十二回に「バンツ」を出してゐる。相川善一郎氏は秋田縣の人にして、　　年の生れ、文展へは第十回に「うらゝか」、第十一回に「若きあゆみ」、第十二回に「曠原を前に」、帝展に「一路」を出して知られる。其の他、第十二回に「沈默」を出した荻島安二氏、「晩春」を出した日名子實三氏等皆氏の門下の人である。氏は明治二十六年大分縣に生れ、大正七年美術學校彫刻科を出でゝゐる。またかねて本鄉研究所に洋畫を學び、今朝倉氏の許にあつて彫刻に從事してゐる。尙帝展に「黎明」を出品した片岡角太郎氏は、氏の門下ではないが、同鄉のよしみを以て相往來して、啓發されつゝある。氏は明治十八年大分縣佐伯町に生れ、大正六年東京美術學校を卒業してゐる。また木內克氏夫人輝子は、もと作田姓にして、明治二十五年の生れ、千葉縣山武郡の人である。朝倉氏について彫刻を學び、第十二回

文展に「不具者」を出した、蓋し彫刻に於いては前後一人の閨秀作家である。大正八年木内氏と結婚した。

北村西望氏

氏は明治十七年、長崎縣高來郡有馬村に生れた。明治四十年、京都工藝學校彫刻科を卒業してのち、更に東京美術學校の塑像科に入り、四十五年に卒業した。三十九年、京都美術協會に出品して受賞し文展では第二回に「奮闘」、第三回に「雄風」(褒狀)、第四回に「寂寥」、第五回に「壯者」(褒狀)、第六回に「領土」、第八回に「いざさらば」、第九回に「怒濤」(二等賞)、覺めたる人」、第十回に「晩鐘」(特選)「石工」「栗」、第十一回は「光にうたれたる惡魔」を出して推薦となつた。第十二回には「來る

怒濤　　北村西望

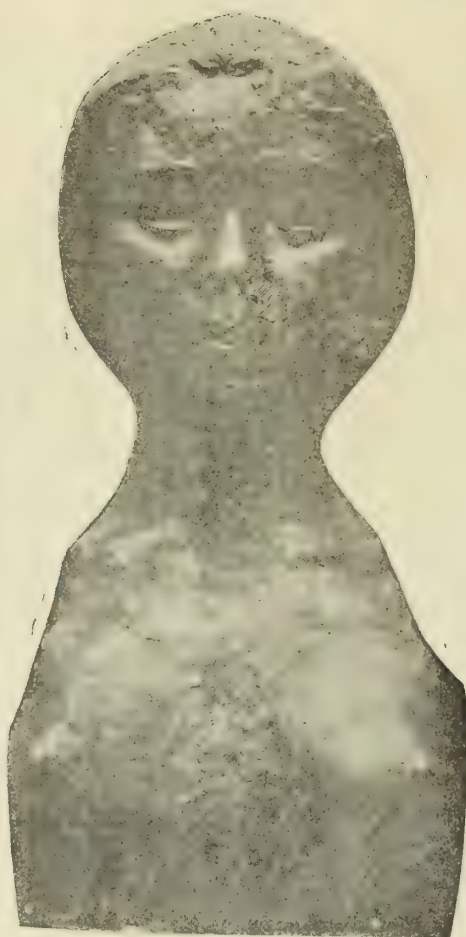
日の夢」「將軍の孫」を出し、帝展には「創造の人」を出してゐる。そして帝展の開設せらるるに及びて、建畠大夢氏と共に審査員に選ばれたのである。氏の作風の特色は、勇壯なるにあつて、筋骨の逞しき大きな人體を多く造つてゐる。

建畠大夢氏 は、名を彌一郎といひ、明治十五年二月に和歌山縣有田郡に生れた。此の人も初め京都工藝學校に學び、のち東京美術學校の彫刻選科に入つた人である。その卒業したのは明治四十四年である。文展へは第二回に「閑靜」（三等賞）、第三回に「ゆく秋」（褒狀）、第四回に「埃」（褒狀）、第五回に「ながれ」（三等賞）、第六回に「ねむり」、（三等賞）、第七回に「おゆのつかれ」、第八回に「のぞき」（三等賞）、第九回に「夜の深み」（三等賞）、第十回に「絶望」（特選）、第十一回に「子供」「激昂の人」を出して推薦となつた。そして第十二回には「山の蔭から」と「あやうき歩み」とを、帝展には「雀の子」、「浴後の姿」を出し、また帝展に於いて審査員に任ぜられた。氏の作風はあどけな

浴後の姿　建畠大夢

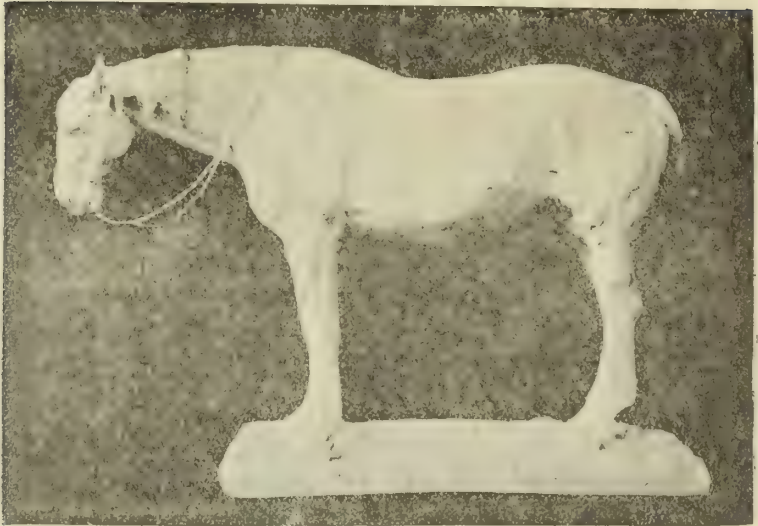
いおつとりしたところにあつて、子供などを作ればもつとも手に入つたものでゐる。氏は現に美術學校の教授である。門下では山根八春氏が知られてゐる。氏は島根縣の人にして、第十回文展に「父審判かれし日」、第十一回に「茨を分けて」、第十二回に「森の聲」、帝展に「蠶みる女」を出してゐる。

堀進二氏

次にこれまで帝展で推薦になつた人は、これまで二人しかない。堀進二氏と池田勇八氏とである。堀氏は明治二十三年、五月、東京赤坂に生れ、初め新海竹太郎氏について學び、のち太平洋畫會研究所に入つて彫刻を修めた人である。

若き女の胸像　堀進二

文展へは第三回に「のび」、第五回に「哀愁」(褒狀)第八回に「光に溶せる女」、第九回に「若き女の胸像」(褒狀)、第十

回に「II老人の肖像」(特選)、第十一回に「肖像」(特選)、第十二回に「老人」(特選)「支柱」、帝展に「寺尾亨氏の肖像」「繫縛せられし神」等を出してゐる。新進の青年作家としては、最も囑目せられる人である。寫實の道を飽くまでつき進めて行つて、深い觀察のある作品を出すところは、洋畫の中村彝氏あたりに比較すべき態度を持してゐる。此の數年來めき〳〵と腕の冴えを見せて來た。しかしそれだけに、何だか氏の行く道が解つてしまつたやうな氣もする。池田氏は堀氏に比して一段早く知られた人である。しかし年齡にはさして違ひがない。明治十九年八月、香川縣綾歌郡に生れた人で、四十年に東京美術學校の彫刻選科を卒業し、四十三年、東京府美術及美術工藝展覽會に出品して授賞した外、諸所の展覽會で屢々受賞し、文展へは第三回に「馬」、第四回に「ぼんやりした馬」(褒狀)、第五回に「うさぎ馬」、(褒狀)第六回に「山羊」、第七回に「神山詣り」、「こゝろいき」(褒狀)、第八回に「秣」(褒狀)、第九回に「みづかい」(褒狀)、第十回に「川べにて」(特選)、第十一回に「目かくし」(特選)、第十二回に「麓そだち」(特選)「微風」、帝展に「昔日の夢」を出してゐる。此の通り、早くからよい成績を得て、引き續き優賞を擬せられ、遂に昨年推薦せられた。殊にその得意とするところは動物で、中にも馬の彫刻は天下一品、年々の文展にも殆ど馬のみを出し來つたから、そのニックネームを馬八君ともいふ。こんな人は珍らしいことで、洋畫界には羊專門の辻永氏がある。しかし藝術家として見

ボンヤリした馬　池田勇八

た場合、堀氏には一等を輸するものと見なくてはなるまい。――實は昨年帝展で彫刻の推薦者を定める時には、色々の問題が湧起して、高村光太郎氏や内藤伸氏をもその候補に入れたが、故あつて遂にそこまでは及ばなかつた。尚ほその前、大正七年に推薦に入つた人て、小倉右一郎氏がある。氏は目下外遊中であるが、歸朝すれば當然審査委員となるであらう。氏は舊姓を定國といひ、明治十四年六月、香川縣大川郡に生れた人で、明治四十年に東京美術學校彫刻科を卒業し、文展へは第二回に「指導」、第三回に「鐵槌」、第四回に「いこへる男」、「二宮尊德翁肖像」、第五回に「まちぶせ」、第六回に「老境」、第七回に「むなぼとけ」、第八回に「不惑」(三等賞)、第九回に「行人」(三等賞)、第十回に「闇路の人々」(特選)、第十一回に「無心」、「いで湯」を

出して推薦せられた。第十二回には「幻影」「天宇受賣命」、帝展には「笑顔」「虎視耽々」を出してゐる。又大正博覽會に「霹靂」を出して銀賞を得た。氏は巧技に或る面白みを有すると共に、一種の飄逸なる氣分を有するので、人をして思はず微笑せしめるやうな輕快な作品が得意である。

其他の人々

次に如上の人々と相伍して行くに足るべき帝展の諸家を語れば、嘗て文展の審査委員であつた人に、白井雨山、新納忠之助、大熊氏廣、長沼守敬の四氏がある。白井氏は名を保次郎といひ、元治元年三月伊豫國宇和町に生れた。早く佛人アニシルベールについて學び、明治二十六年東京美術學校の彫刻科を卒業し、三十四年九月歐洲へ留學し、三十七年三月歸朝した。東京美術學校教授となり、文展では第一回以來彫刻部審査員となつてゐる。作品は明治三十八年に東京彫工會で金賞を得、四十年の東京勸業博覽會で二等賞を得、また文展へは第二回に「箭調べ」、第三回に「瞑想」、第五回に「千仭の壑」、第六回に「便なき身」、第七回に「面」、第八回に「香川景樹翁肖像」「すゞし」等を出したが、その後は餘り作品を發表しない。新納忠之助氏は號を古拙といひ、鹿兒島縣の人にして、明治二十七年に東京美術學校の彫刻科を卒業した。文展では第一回より第三回まで彫刻部の審査員となつてゐたが、製作よりも古物の修補のやうな研究的實技の方面を得意とする人で、餘り作品は發表しない。目下は奈良に在つて唐松提寺の修復工事等に從事してゐる。大熊氏廣氏は、安政三年

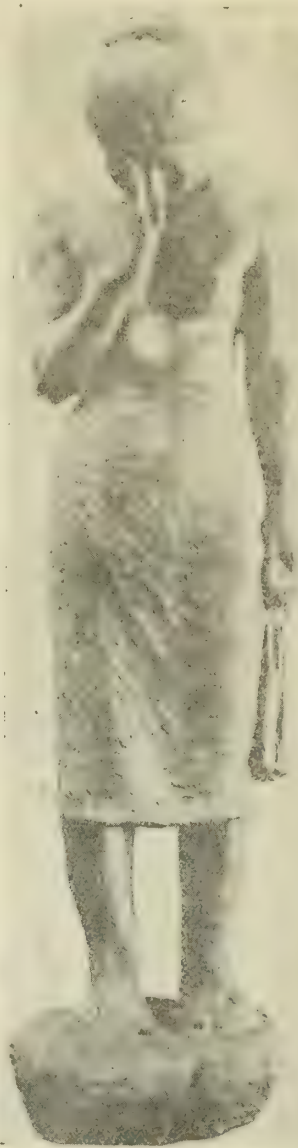
六月武藏國鳩ヶ谷町に生れた。工部省美術學校に入り、伊人ラグーザについて學び、明治十五年に卒業し、のちイタリーに留學してアレグッチ・モンデヴェルデにつき、二十一年十月ローマ美術學校を卒業した。十六年、皇居御造營に際し彫刻の模型を造り、二十七年三月大婚二十五年大典に兩陛下獻上御馬の銀鑄を作り、その翌年の第四回內國勸業博覽會に優等妙技賞を得、の

節調べ　白井西山

ち明治三十三年の、皇太子殿下御慶事に際し、兩陛下寵愛の駿馬二頭の銀鑄を作つた。文展開設後は、第一回より第七回まで彫刻部の審査委員となつた。その他製作の主なるものには、「故兵部大輔大村益次郎銅像」、「故有栖川宮熾仁親王殿下銅像」、「故小松宮彰仁親王殿下銅像」等がある。長沼守敬氏は安政四

年九月岩手縣一之關町に生れた人で、明治十四年、二十五歳の時イタリーに渡り、ヹニス王立美術學校彫刻科に入學して、ルエジ・フェラリー、アントニオ・ダルソットに學び、十八年卒業して、二十年八月歸朝した。新歸朝の青年作家として、その技風我が彫刻界を動かすこと多く、明治二十八年、第四回內國勸業博覽會に出品して三等賞を得、三十三年、佛國パリ萬國博覽會に「老夫」を出して金賞を得た。文展には第一回から第七回まで彫刻部審査委員となつたが、第五回にはイタリー萬國博覽會に委員として渡航したのでその任に就かなかつた。作品にはその外に「長谷川謹介氏肖像」等がある。

美術院の作家　以上の元老の外、美術院同人たる彫塑家に藤井浩祐、戸張孤雁、中原悌二郎、石井鶴三の四氏がある。藤井氏は明治十五年十一月、東京神田錦町に生れた人で、四十年に東京美術學校彫刻科を卒業し、のち太平洋畫會研究所で彫刻を敎へた。文展へは第一回に「狩」を出して以來、第二回「まぼろし」、第三回「秀ちやん」(褒狀)、第四回「洗髮」(褒狀)、第五回「鏡の前」(三等賞)、第六回「潭」(三等賞)、第七回「坑內の女」(三等賞)、第八回「トロを待つ坑夫」(三等賞)第九回「早朝の禮拜」(褒狀)等を出して、嘖々の盛名を馳せた。殊に、たとひその賞格に於いて二等を得ること一回もなく、且つ稍下るの觀はあつたけれど、技倆と名聲とは當代の花形朝倉文夫氏と雁行して、常に雌雄を決し難き觀があつた。しかも文展に對する不平の因するところもあつて、大正五年、日本美術院に走

つてその同人となつた。そして第三回に「白眼」、「若き女の顔」、第四回に「踊る女レリーフ」「鑄像の色づけ」、第五回に「海の女」、「かぢめ運ぶ女」「合せ鏡」、第六回に「化粧」「湯のあと」、「裸一」、「裸二」、「裸三」等を出して、多々ますく\辨ずるの觀を示してゐる。氏の作風は全く寫實の立場にあつて、主としてブロンズに、人體の表現をなすのを得意とする。時に優美の姿態を寫して楚々人を動かす可憐の

早朝の禮拜　藤井浩祐

表情を現はすのは、氏の特色の一つであらう。されば銅像の如き大なる作品は餘り多く造らず、好箇の小品に、最も美しきものが多い。尚ほ氏の父藤井祐敬氏は、博覽會經營者として、彫刻家として世に知られた人であることゝ、氏の若き細君が銀座のパン商木村屋の娘であることゝは、話題として附けて置く。

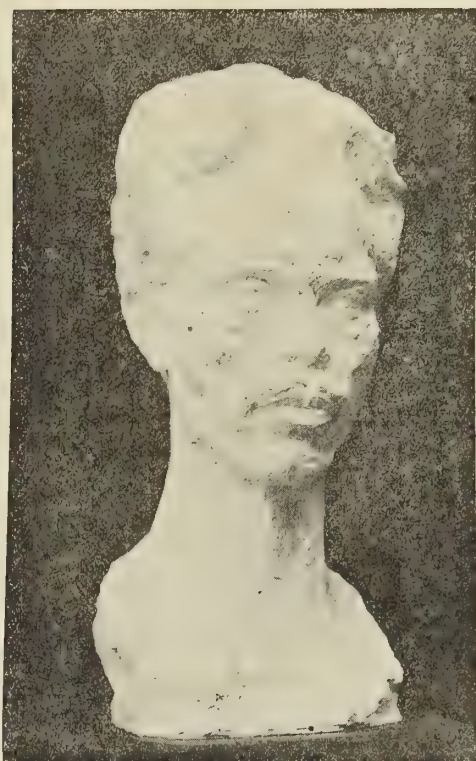
戸張孤雁氏

戸張孤雁氏は、必ずしも彫刻家と限定して了ふことの出來ないほど、多藝多能の人であるが、今や彫刻を以て院の同人とされてゐるからこゝに語る。氏は明治十五年二月の東京生れである。三十四年米國に遊び、ニューヨーク、アート・スクール、ナショナル・アカデミー・メカニック・インスチチュート等にあつて洋畫、彫刻、洋風挿畫等を學び、三十九年に歸朝した。文展へは第四回に彫刻「をなご」、第七回に「力の弛んだ人」、第八回に「犧牲者」（褒狀）、第九回に「をんな」を出したが、大正六年院に迎へられて同人となり、その第三回に「若き男の像」、第四回に「曇」、第五回に「女」「女の顏」、第六回に隱れたるをなど

戸張孤雁

女竹像」等を出品してゐる。氏の作風は矢張り寫實主義に出發したものであるが、一種の印象派風のもので、氏の感興に投じたる、人體その他の一部分を、氏の興趣の儘に表現したものが多い。されば素人には甚だ索然たる味のものであるが、そこに一脈の藝術があつて、捨て難い作である。他に版畫、洋畫、日本畫等にも、彫刻に匹敵すべき作品を見る。惜しいことに、氏は病弱である爲めに十分の努力をなすことが出來ない。未完成のものゝ多いのも、さう言つた理由に基づく。

石井鶴三、中原悌二郎氏　石井鶴三氏は明治二十年六月、東京に生れた人で、氏は洋畫家の柏亭氏の弟であるはじめ。小山正太郎氏の不同舍に入つて洋畫を學び、また加藤景雲氏について木彫を學んだが、のち東京美術學校の彫刻選科に入り、明治四十三年に卒業した。文展へは第五回に彫刻「荒川嶽」を出して褒狀を得たゞけであつたが、その才力は夙に世の認めるところであつたので、大正五年、美術院彫刻部の同人となり、第五回に「首」、「人體習作」、「同」、第六回に「足」を出した。此の人の作風も寫實的、部分的のものであつて、まだ完成しない人なることを思はせる。そして氏はまた洋畫にも巧みであつて、二科會の第三回に「行路病者」、第四回に「競爭」を出してゐる。それから版畫にも興味を有し、創作版畫協會に出品する。本年一月、兜屋に彫刻七十點の作品を並べて見せた。氏はかねて無言奇行の變人を以て知られたが、最近結婚した。中原悌二郎氏は明治二十一年十一月、北海道釧路

港に生れた人である。太平洋畫會研究所に入つて中村不折氏から洋畫を學び、また新海竹太郎氏から彫刻を學んだ。文展へは嘗て第四回に彫刻「老人の頭像」を出したことがあるだけで、餘り世に知られてゐなかつたが、氏の眞摯な、明晰な觀賞の態度は夙に人に認められ、院展の第三回に「肖像」を出して樗牛賞を得、ついで大正七年に院の同人に加へられた。第五回に「肖像」、第六回に「憩ひ」、「若きカフカス人」を出してゐる。氏も寫實の立場に在る新人の一人である。

首　　石井鶴三

石川確治氏

次に文展に於いて同狀以上を得、中堅の人物となつてゐる二三を擧げんに、先づ石川確治氏がある。氏は明治十四年八月、山形縣山邊町に生れた人で、三十八年に東京美術學校彫刻科を卒業し、文展へは第二回に「花の雫」、第三回に「くもり」、第四回に「化粧(褒狀)」、第五回に

「さめたる女」、第六回に「石屋さん」、第七回に「木蓮」(褒狀)、第八回に「髑髏」、「追分」、第九回にはなちる音」(褒狀)、第十回「女」、「梳る女」、第十一回に「追想」、第十二回に「敎華」、「春の夜の夢」等を出品した。また帝展には「榮ある女」「靜なる女」を出してゐる。成績は非常によいといふわけではないが、第四回を除いて他は年々出品し、年々入選したのみならず相當な世評を得てゐる。殊に氏の作品は、未だ完成したものではなく、そこに尙ほ氏の生命の將來を豫期される、若々しさがある。從來の作品は一概に言ふと、技巧は精妙といふよりも稚拙に近く、一種のナイーヴな、何とも言へぬ面白みを持つて居る。これが育つて行けばもつと美くしいすぐれたものになるだらう。氏の夫人は、日本畫家の石川丹麗女史である。女史は故石川光明氏(大正二年に歿した彫刻の大家)の女にして、現に諸種の展覽會に出品してゐる。

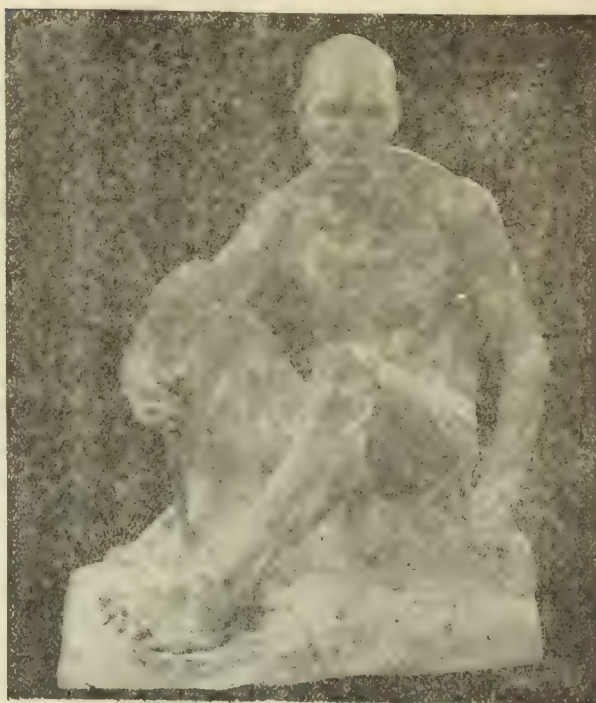
毛利敎武、渡邊長男氏

毛利敎武氏は、今では他の事業に從つてゐるので、餘り出品はしないが、早く名を知られた人である。東京の產にして、明治三十六年東京美術學校木彫選科を卒業し、文展へは第一回に「ゆくへ」(三等賞)、を出して、好評を博し、ついで第二回に「靜寂」、第三回に「孤兒」を出したが、その後、故あつて出品を中止した。目下、硝子コップの製造を經營してゐるといふ。渡邊長男氏も、早くより彫刻家として名がある。氏は明治七年四月、大分縣竹田町に生れ、はじめ山田鬼

齋に學び、三十二年東京美術學校彫刻科を卒業した。東京彫工會その他で屢々受賞したが、文展へは餘り出さず、僅に第八回に「同盟罷工」（褒狀）、第十回に「同姓」、「膽」を出したに過ぎない。しかし氏の最も得意とする方面は銅像製作にあつて、「廣瀨中佐及杉野兵曹長銅像」、「井伊大老銅像」、「井上侯銅像」、印度バロダ王依囑の「大佛像」等の作がある。川崎繁夫、高橋祐像等の門下生が、既に世に知られてゐる。又朝倉文夫氏は、氏の實弟である。

その他の諸家

國方林三氏も、將來を囑目すべき人である。氏は天海と號し、明治十六年二月香川縣に生れた人で、太平洋畫會研究所彫塑部に學び、文展へは第二回に「暮れ行く空」、第三回に「焦心」（褒狀）、第五回に「もだえ」（褒狀）、第六回に「憩」、第七回に「女の半身像」、第八回に「種まく女」、「暗」、第九回に「わななき」（褒狀）、「夏」「衣がへ」、第十回に「綢」「春の夢」、「陰」、第十一回に「幻惑を打拂ふ女」、「驚異」、第十二回「窮した女」、帝展に「放浪」を出品して、大に努力してゐる。將來大成すべき一人として注目せられてゐる。新田藤太郎氏は、明治二十一年三月、香川縣に生れた人で、三十九年に香川縣立工藝學校彫金科を卒業し、文展へは第三回に「煙波」（褒狀）、第四回に「沈思」、第五回に「をんな」（褒狀）、「考」、第六回に「悵恨」、第九回に「若草」、第十一回に「淵」を出品してゐる。尙ほ、未だ文展等にて世間的に名を知られないけれども、今後大に注目すべき人々として、

藤川勇造、武田槃の二氏がある。藤川氏は明治十六年十月香川縣高松市に生れた人て、明治四十一年東京美術學校彫刻科を卒業し、のち農商務省實業練習生として佛國に渡り、大正八年に歸朝し、同年二科の會員に推された。在佛中はロダンに直接師事し、大に啓發せられるところがあつたといふ。武田槃氏も本年一月歸朝した新進てある。氏は小説家武田仰天子氏の息子て、明治十六年東京に生れた。初め竹中光重について木彫を學び、のち東京美術學校に入り、明治四十年木彫科を卒業したが、間もなくイタリーに渡り、のちイギリスに轉じて建築裝飾を學んだ人てある。次に、もつと前に語るべきてあつたが、

老坑夫　　吉田三郎

言ひ落したからこゝに加へて置くのは齋藤素巖氏である。氏は名を知雄といひ、明治二十二年十月、

麹町區平河町に生れ、四十五年東京美術學校西洋畫科を卒業し、大正二年英國に留學し、彫刻を學んで大正四年末に歸朝した。文展の十一回に「秋」、十二回に「敗殘」（特選）を出し、帝展の第一回に「朝敵」を出した。殊に「敗殘」は薄肉彫（レリーフ）の大作にして、大に世の注目を惹いた。

第六編　現代作家の生活と繪畫鑑賞

一、現代繪畫に通ずる捷徑

現代の繪畫に通ずる一番の近道は、勿論出來る丈けそれに接するにある。何でも多く見て、多く味ふことだ。その爲めには、近頃始終行はれてる展覽會に精出して出かけるのが最も手輕で、且つ最も便利だ。

その展覽會に就ては、前にも述べたが、第一は文部省が主となつてやる帝國美術院の展覽會である。これは、國家の仕事である丈けに網羅的で、展覽會中第一番大きくもあるし、世間の評判も高い。現在では、栖鳳、玉堂、靫音、春擧、景年、楓湖等の元老大家が日本畫部の顧問格、會員になつて納まり、翠雲、關雪、素明、清方、翠嶂、映丘、桂月、曼舟等の新進大家が審査員となつて東西の出品を集め、その精華を採るのだから、各流各派のものが萬遍なく見られる。殊に、東京に居て、京都の現代作家の力作を見るのには、最も格好の展覽會なのである。また美術學校出身の多數もこの會に出すと見てよい。

ただ、文展以來の情實で、日本美術院の作家がやはり獨立してゐるため、帝展にはこの一派の作品が見られない。大觀、觀山、靫彦、古徑、靑邨、武山、龍子、草風、御風その他所謂美術院同人、院友の人々がこの派なので、ここには現代日本畫の最新派が集ると見てよい。玉村方久斗だの、近藤浩一路だのいふ新らしい作家が一擧にして名を成すのは、この會の一つの特色である。但し、京都からは溪仙、大阪からは恒富等の同人が中心となつて出品する以外、大した人氣ある作品も出ないやうで、先づ〳〵東京の新派本位だ。

京都の新派を、代表するのは、國畫創作協會である。麥僊、紫峰、華岳、竹橋、晩花及び波光の六人が會員で、各々力作を發表する外、若い同志の出品を迎へて、これを鑑別入選せしめて居る。右の六人は帝展へも、院展へも出品しない事にきめて團結を固くし、專ら新味ある日本畫の制作に努力してるので、年々勢ひを增大して居る。東京の靑年作家は多く帝展、院展に出品するが、京都の新らしい少壯作家は、むしろこの會に出品するものが多くなりつゝある。

院展、國展の新らしいのに對して、舊派の方を代表する團體は、日本美術協會だ。下條桂谷とか、小室翠雲、荒木十畝、松林桂月、池上秀畝、田中頼璋、高取稚成、畑仙齡、津端道彥、八木岡春山等の面々一味徒黨を率ゐてこの會に據り、專ら保守的な作風を示してゐる。尤も、近年この風に慊らな

いて、多少とも新意を發揚するに力めてゐるものもあるし、或は帝展に屬するものもあつたり、必ずしも團結は固くないが、兎に角、舊派日本畫の發祥地として注目すべく、同會所屬の作家は頗る廣汎である。

次ぎに、一般の出品は募らず、同人又は會員の作品のみでやる展覽會として、金鈴社と如水會が世に聞えて居る。金鈴社は、殊に名高く、靈華、素明、清方、百穗、映丘の當代に傑出した作家五人が固く結んだ團體で、各々得意の題材に、日頃の蘊蓄を傾けた制作を發表するから大に實が入つてゐる。この五人中素明、百穗、映丘は美術學校出の俊才であり、新派舊派の中間を行く作家、靈華と清方とは學校出ではないが、學識すぐれ、同じく穩健にして新らしき理解にも富む作家、自然この會には、最も中庸を得た、優作を見る事が多いのである。

如水會の、翠仙、周山、多門、九浦、曲江、蕉琴、泰生、輝方、春陽、林響の十家は、今の東京畫壇に於て天晴れ中堅の人々、から十人ずらりと並んだ丈けでも壯觀だ。この人たちの展覽會に於て、人々はすでに技巧の練熟した比較的新時代の作家がその思想を如何に表現するかといふことをも見極める事が出來るであらう。その意味から、周山、多門、泰生、林響等は殊に注目の焦點となる位地にあり、翠仙は既に幾何か老熟してゐる。兎に角、この一派の人々は、金鈴社よりは一層變化ありさう

に思はれる。

その他の日本畫の展覽會では、日本畫會は十畝、桂月、仙齡、秀畝、賴嶂等相寄り美術協會の別働隊の如く、中にも十畝一味の新らしき努力眼に立つ。池畔倶樂部は、素明、映丘等美術學校教授指導の下に同校日本畫出身の新進作家を網羅し、なか〳〵力作を見せる。晨光會は、またその別働軍の如く、小泉勝爾、星川清雄等中心となつて居る。明治畫會は、小林呉嶠、佐藤紫煙、諸星成章その他舊派中の錚々たる人々を集め、日本南宗畫會は、挂月、浩湖、蘇水その他の主なる南畫家を網羅し、翠雲の率ふる南畫會に對して一日の長たる觀がある。南畫家の展覽會は近頃殊に振はない。獨立繪畫會は、鳥谷幡山等の依る所、美術研精會は、如水會出來て、昔日の面目なきも少壯作家起らうとして居る。國風會は、高取稚成、前田氏實その他で成した倭繪一派の團體で、展覽會は徒らに上品がつたもののゝみ列ぶ。國民美術協會の日本畫部には、本方秀麟、島田墨仙あるのみで頓と振はぬ。

若し夫れ、各大家社中の結社は頗る多く、中にも、川合玉堂の下萠會のごときは、既に獨立して、社中の會といふ事から、一歩進んだ自由なものになつて居る。廣業の殘した天籟畫會が、社中の結束圓滿ならず、九浦、曲江以下の俊材を有しながら割りに振はぬのは惜しいものだ。淸方門下の鄕土會は、新らしいながら眞面目であり、社中の團體中殊に大きな讀畫會は、十畝、秀畝、東畝等の本城、

十畝及びその直接門人が中堅をなしてゐる。小堀鞆音の革丙會は、勿論倭繪の方であるが、この中に安田靫彥のあるのは注目すべきだ。この他、南畫會は、宛も翠雲一派の南畫會たる觀あり、山內多門は、若葉會の新銳を率ゐ、池田輝方は曙會を率ゐ、池上秀畝は、傳神洞畫會を統御するといふ風にそれぞれ驥足を伸ばしてゐるのだ。この他、數へれば、この類の例は更に幾らもある事である。

兎に角、以上でざつと展覽會の概念は得られたわけである。なほ、時々に新團體が出來たり、移動がある事勿論だが、大體以上のやうに想像して各展覽會を見ると、現代繪畫を各方面から觀察し得るわけになる。

二、新派の作家と舊派の作家

現代の作家作品に就ての、鑑別の標準がほぼ分ったとして、それではどの派の何ういふ作家が人々の趣味嗜好に投ずるであらうか。また人々は何を標準に、何を求むべきであらうか。一口にいふと新らしい繪と、舊い繪といふ區別のごときがあるが、これ等は、皆その人々の好みによつて決せられることでなくてはならぬ。

そこで、舊來の畫風に滿足せずして新らしい傾向を有ち、內面的に思索された作品が欲しいといふ

人は、日本美術院や、國畫創作協會などの作家のものがよいことになる。帝國美術院の作家中にも、餘ほど自由な、進んだ考へをもつて制作してる人が多々ある。それもこの人達に向くわけだが、大體は院展國展などを標準にすべきだ。

これに反し、舊型のものでも、技巧にすぐれたり、描線色調等に特色著しく如何にも見答へのあるものがある。所謂守舊派のもので、これを好む人からいふと、全體は調子がよく、もつとも鑑賞に適すると見えるだらう。かういふ意味で優秀な作家は、帝展側の諸作家、殊に文展以來の官展出品者側に多く、また美術協會の面々は皆この方に屬する。そして、この方の作品を好む人から見ると、所謂新らしい繪といふものは、異端邪宗のそれのやうに思へるわけだ。一方、新らしい傾向のものから見ると、古い繪は、前代の遺物か、殘骸ぐらゐにしか思はれぬわけである。美術院、國展の作家と、帝展の大部分及協會の作等の主義主張の上で氷炭相容れぬものあるは、こゝの道理である。

なほ進んでいふと、院展と國展との作家にも大分思想の距たりはあらうし、殊に帝展と協會の作家ではまるつきり相容れぬものが多々あらう。それから、この外の團體を取つて來て比べて見ても、やはり同じわけであるが、突きつめて考へると、藝術は元來個人々々の思想により、個性によつて發現さるゝものなので、同派中にあつても、一人々々その行き方を異にするのは勿論當然の事である。た

だ、大體の色分けを、新らしいとか古いとかにきめられるのが關の山なのだ。そこで大體の標準はそこで置き、院展派でも、大觀御大のごとき最も新らしい人の頭領だと見るべく、觀山は、やや穩健派と見られる。靫彥、古徑、草風、岳陵等の同人連も大觀に續く新らしい作家だが、川端龍子や、速水御舟、玉村方久斗などは殊に急進と目すべき人々だ。國展の方では、麥僊が新派の驍將であるのは勿論、紫峰も華岳も竹橋も同じ傾向だ、ただ內容的にそれぞれちがつてるのは云ふを須ひぬ。また帝展に屬する人でも、初めて特選に入つた廣島晃甫はもとより、審査員中の契月、映丘等强ひて云へば新派の部に數へられぬ事もない。

舊派に屬する人と云つても、帝展の關雪、素明、淸方、翠嶂等の審査員や、栖鳳、春擧、玉堂等の會員など必ずしも古い作風に甘んぜず、むしろ新らしい傾向を追つてゐるし、帝展に直接關係せぬがその系統に屬する百穗、靈華また然りである。如水會の多門、周山、林響、曲江や、特選組の弦月、龍岬等もむしろ新らしい繪を描く人たちだ。ただ、美術協會系には依然古い繪をかく人が大部分を占め、桂谷、鐵園は勿論、翠雲、挂月、秀畝、賴嶂、仙齡、稚成、道彥、紫煙、春山、東畝等滔々皆然りである。中で、十畝は近頃むしろ新らしがらんとし、これに伴れて居るものもないではない。京都の鐵齋、景年や、東京の鞆音、楓湖、北海、敬中、丹陵等は決して新らしき作風の人と云へぬ。そ

してこの一味がなか〱少い數でない。

から數へて見ると、大體の傾向が漸く新派の方に多くならうとして居るのを看取すべく、舊派の方は、どちらかといふと通じて受け身である。大勢は、滔々として新らしい傾向を追はうとしてゐるのが眼につく。ただ、今の新派の人々が果してそのまゝ成功し、舊派の人々そのまゝ凋落するかどうか、これは各自のこれからの發奮努力て決する問題で、鑑賞家は、さう思つて、各々好むところに向つて行けばよいだらう。

三、山水、花鳥、人物の各大家

風景を描かしたら、死んだ廣業は天下獨歩だつた。風景ばかりでなく何でも來いてはあつたが、殊に山水は渠のお得意だつた。同様のことが、今の玉堂に當てはまる、春擧にもあてはまる。玉堂、春擧は、むしろ風景畫がその生命といふべきだらう。これに對して、淸方や、契月、映丘などは人物がよく、十畝、秀畝、武山等は花鳥が最も得意だ。かういふ風に作家によつていろ〱得意のあることは前にも說いた。勿論、一人にして、廣業式に何でも御座れ（但し廣業も花鳥丈けは少し）の人もあるが、大體は得意がきまつてゐる。

それ故に、鑑賞家が自分の欲する作品を依頼しようと思へば、その時々の思ひ附きによつてそれに適した作家を選んでするがよい。當代で、山水畫を賴むとすれば、東京では玉堂、多門、素明、百穂、賴璋並びにその一派の人々を推すべく、京都では春擧、櫻谷、華香、曼舟、關雪、竹橋等可なるべく美術院側では、大觀、靑邨、龍子、古徑、御舟等が得意中の得意であると云へやう。この外、南畫の山水なら、翠雲、拄月、鐵齋、竹邨、介堂始め、多くの同派作家皆これを得意とする。

花鳥であつたら、東京では十畝、秀畝一門を最とし、水上泰生、平田松堂等は專門家といふべく、素明、武山、拄月等も好んでこれを描く。京都では、大家で景年、新進で紫峰の最も熱心なる外、栖鳳、契月、翠嶂、麥僊等も好く花鳥を描く方である。そして宛も專門家のやうになつてるものゝあるのは面白い。

人物の方は、土佐系統のや、浮世繪系統のや、その他種々の行き方のそれがある。土佐系統の人物をかく人に最も有名な作家多く、靫音を筆頭に、映丘、丹陵、稚成、道彥、靫彥、靑邨、方久斗等數へれば各團體に亘つて居るのだ。但し、京都には餘り聞えた人がない。浮世繪の系統では、淸方、輝方、靜方、英朋等や、その一門一流の男女作家多く、深水、秀峰等は若手のちや〳〵だ。京都大阪には、上村松園女史始め閨秀作家多く、成園、更園、その他聞え、契月畑からも出てゐる。院展の美人

畫描きとしては、山村耕花や、恒富等を擧ぐべきだらう。院展の靫山を初め、特色ある人物畫をかく人は尠くないが、これ等は必ずしも浮世繪の系統に入るべきでない。また佛畫をかく人も多く、吉川靈華などもこの類に入らうし、武山や荒井寛方、島田翠仙等の人々は主にこの方の人物を描く。國展の村上華岳や、入江波光にもその傾向が著しい。

要するに、各作家はそれぞれに自分の畑として、大體の傾向を示した流儀があるのである。たまたま時代の進歩に伴れて、河童の子が必ずしも河童でない例を示すものも間々あるのは近頃の著しき現象である。されば、この頃では、玉堂の社中からも、人物や花鳥をのみ描く人現れ、清方の社中からも多くの風景專門家を出したと云ふも不思議に思はれなくなつた。が、それでも、大きな區別けとして、人物畫家、山水畫家、花鳥畫家、等の範圍に各々の人々を當てはめて見るのは決してむだでなし、依頼でもしようとする時は是非それを考へてからする必要がある。

四、現代の書畫屋

今度は、進んで現代の書畫屋の外部內容に就いて、略說して見よう。書畫屋には、新畫を取扱ふ新畫屋と、古畫を取扱ふ古畫屋と兩方ある。併し、この區別は、極めて嚴格なものではなく、大抵は少

しづつ双方を兼ねてゐると云ふ風だ。古畫屋のしつかりしたのは、斷然新畫を取り扱はぬといふが、新畫屋の方では、つひ前代の人なら故人のでも取り扱ふといふやうな事から、ずつと古いものでない限り新舊共に扱つてるのが實際に於て多いわけである。

ところで、純粹な古畫屋には、本書との緣がないわけだが、所謂新畫屋は、皆現代の藝術家並にその作品と交涉してるわけである。今、現にさうした新畫屋が東京に何軒あるだらうか、京都大阪に何軒あるだらうか。勿論この數の詳細は、變動常なき事とて監督官廳の手に於てもはつきり分らぬであらう。併し大體の形勢からいふと、この數年來新畫屋なるものは、實に滅法增殖したのである。ざつと計算しても、東京市中に五六百軒はあらうとの事だ。勿論、その中には、別に店を持つてるわけでもなく、大して職業らしくやつてるわけでもないのが多からうけれど、全然內職としてやつてるものは更に〳〵多くして數へがたいといふから驚く。

これ等の商賣人の中で、眼立つて大きいのはさうない。個人としては、資本金なり、資金運轉の都合なりが、完全に、理想的に行きかねるからもあるだらう。そこで、近頃は、五人十人と主立つた書畫屋が集つて會社組織を企劃し、株式會社として美術品商をやつてるものが增加した。增加したといふよりは、これが最近一二年間に於ける美術界の驚くべき一新記錄なので、今では東京だけでも株式

會社の美術品商が十軒以上はあるのである。その中、近頃人に知られたもの丈け擧げても、日本美術株式會社、帝國美術、東京會、國粹美術、中央美術、石井美術店等の各株式會社があり、これ等はいづれも新畫專門のそれである。また別に、個人としてやつてゐるので、會社のそれにも劣らぬ大袈裟なのも多々あり、まことにこの處美術品、新書畫商全盛の觀があるのである。なほ大阪には、大日本美術株式會社、大阪美術株式會社あり、名古屋にも中京美術株式會社あり、その他全國主要の都市には大抵この類の機關を見ぬはない。

これ等の美術會社又は、大美術商店は、そもそも何をするのかといふに、いづれも皆新畫を中心として商賣をして居るのである。その方法としては、現代の諸大家新進作家にそれぞれ揮毫を依賴し、これをまとめて展覽會を開き、そこで一作々々分賣するのが一つ、商賣人同志互ひに相寄り相集つて所持の品々の交換をするといふのが一つ、その他はいろ〳〵な雜業をするのである。右の第一の方法は、所謂新作展覽會なるもので、諸美術會社、諸美術商店に於て開催されること極めて屢々である。殊に、この數年來は、ひとり專門の書畫屋仲間ばかりでなく、有名なデパアトメントストーアや、大呉服店でも、續々この風を學んで、各店競つて新作展覽會をやる。三越、白木屋、高島屋などはこの中最も顯著に書畫商賣をやつてるものと見られる。

第二の商賣人同志の所持品交換は、交換會と稱され、これまた新畫を中心に、各々利鞘を眼當てに交換をやるのだが、會社や大商店では主にその主催者となり、交換作品の中から相當の歩合を取ることになつてゐる。兎に角、この新作展觀といひ、交換會と云ひ最近の新畫熱をいやが上に煽り立てた原動力であつたことは疑ひを容れない。そしてこれ等のものは、開催されるごとに世の注目を惹き、景氣を引立てたのは、一面今の美術界を賑はしたと共に、他面美術家の生活を可なり墮落せしめたことにもなるのだ。

但し、これ等の商賣の盛衰は、無論財界の景況に伴れるものであつて、財界が好況である時には、新作展覽會でも交換會でも大に繁昌するが、財界萎微すれば忽ちにその勢ひを失ふのは、自然の數である。現に大正七年の夏頃から、八年一杯、九年の早春頃までは經濟社會の活況著しかりしに伴つて書畫屋仲間の景氣も甚だしく昂上し、九年一二月頃の新書畫の相場は全く前代未聞、破天荒と云はれたのである。それが、四月中旬頃より財界不振に陷るや、俄然その影響はこの社會にも及ぼして、新作展覽會で先きを爭はねば求められなかつた作品もだん〳〵足が遠くなり、價格も一ヶ月ばかりのうちにどしどし下向きになつたのは事實である。そして、それよりも甚だしいのは、交換會の景況であり、これは殆んど連日休みなく開催されたものが、不景氣となつてからは次第にその數を減じた。一

頃、交換會全盛の絶頂には、實に一會百數十萬圓の取引をさへ見たもので五十萬前後の取引は幾度びとなく見られ、少きも五六萬圓を超えるといふわけであつた。それが、風向き惡くなつてからは、賣買ともに甚だしく手控へとなり、五萬圓も出來る交換會は最上出來だと呼ばるゝに至つた。

これ等の事どもから推しても、美術會社や、美術商店のすることが、可なり山氣澤山なもので、丁度株式相場をやると似たごとく思ふ人が多いだらう。併し、必ずしもさうでないので、如上の事は、好景氣に伴れて俄かに生れ出た幾多の會社や、俄か成金の商賣がこれを釀したのである。初めから、書畫美術を神聖なものとし、これに對してむやみと投機的思惑などせなかつたものは、一向平氣なのだ。そして、それ等眞に理解ある商賈では、儲かる絶頂にもさう大きな利益はなかつた代り、變動期にあたつても狼狽せずに濟んださうである。

それ故、財界變動以後は、書畫屋一般下落着いた見解をもつものが出て、過急な營利觀念は次第に跡を絶たうとしてゐる由、會社でも商店でも結局堅實なものゝみが殘ることになるであらう。また美術會社は、いたづらに數多くして互ひに勢ひを爭ふことを止め、早晩堅實なトラストが結ばれるだらうと説くものがある。

五、新畫の標準相場（京都）

美術會社や、書畫商の大勢右の如くであるから、新書畫の價格の如きは、始終社會の好不況によつて變動するのを常とする。そして新畫展觀や、交換會の全盛だつた大正七八年の交から九年三月頃までの相場が、先づ絶頂であつたのは、もとよりその次第である。これ等の全盛時代には、書畫屋仲間でも、出來るだけ價格を釣り上げ、世間の人氣を極度に煽り立てようとしたものだが、世間もまた極端にその調子に乘つて行つたのである。

それ故、この時分の新畫相場は、可なり滅茶なものがあつた。中にも、當代隨一の人氣者と云はれる京都の竹内栖鳳のごとき、前代未聞の高價を呼び、どんな片縑寸紙といへども栖鳳の作と云へば、一世の歡迎するところとなり、終に雀一羽が百圓とまで定評されるに至つた。しかし、事實はそれ以上で、小物に雀一羽を描いたものでも、少し出來が面白いこと、配らひがよいとか云ふことになれば、四百圓五百圓もするのは、珍らしからぬ事であつた。また紙本でもやや大きくて、ちよつと書き込みが多ければ、二三千圓以上は優に値ひし、絹本となると尺五でも五六千圓から、尺八物は一萬圓を突破するといふまことにド偉い勢ひであつた。

栖鳳に次いでは、鐵齋、景年等がその覇王である。鐵齋は、自ら當代唯一の文人畫家を以て任じてゐる丈けあつて、必ずしも畫料等のことを論ずる人でないと云ふが、而かもその制作は驚くべき高價で商賣人い手に扱はれ、半折もの丶千圓以上、尺五の二三千圓から尺八の四五千圓ぐらゐは一時むしろ廉價と云はれたくらゐである。景年は、調子の好い花鳥畫の老大家として故師百年以上と稱されこれまた隨喜渇仰者多く、鐵齋に優るとも劣らぬ勢ひであつた。併し、この兩大家のごときは、一種魅力的な潜勢力をその信仰者に有するので、必ずしも價格一定せず、好きなものになると値段などには頓着せず、どし〳〵購求するといふ風である。この點では、鐵齋殊に甚だしく、さすがの栖鳳すら往々蹴落される場合があつたと聞く。素人あがりの鐵齋の筆力また偉なりと云ふべきだ。

以上を京都畫壇の三大家とすれば、これに續くものには、關雪、契月、麥僊等の若手大家、栖鳳と雁行する有力者春擧、聞秀の松園、南畫家の竹邨、介堂等これに次ぐものと云へよう。春擧は、社會的には、むしろ不遇な作家で、閲歴聲望から云へば、決して栖鳳に劣るとばかり云へぬ人だが、その作品の價値には大分の距りがある。これ栖鳳ほどの文學的才能なく、世才また劣れるにも依るだらうが、一つは彼れの門下に多士濟々たるに比べ、春擧門下の甚だ落寞たるものあるからではあるまいか。從つて、絶頂時代に於ても、春擧の作品は、栖鳳のそれの二分の一乃至三分の一ぐらゐの市價しか唱

へられなかつたのである。それに比べて、栖鳳門下でありながら、關雪のごときは聲價湧くが如く、色紙一枚でも百金を下らざるは勿論、尺五は千五百圓、尺八は三千圓を下ることとなかつた。正に春擧の壘を摩し、而かも人氣のあること遙かにより以上であつた。麥僊もまた國畫創作協會に宛然頭領たる關係と、その天才的手腕に依つて一世の聲望をあつめ、これまた關雪の壘に迫り正に春擧を突破するの勢ひであつた。彼の同志たる紫峰も、麥僊に次ぐの人氣あつて、一時は尺八二三千圓ぐらゐにまで評價されるを至當とした。菊池契月が岳父芳文以來の名望も、京都畫壇の一光彩として微動だもしないのみか、文展帝展等に一作出づる每に渴仰者を增加して行つたこと驚くの外はない。それ故絕頂期には半折ものでも七八百圓に及び、尺八の三千圓ぐらゐに行つたのは敢て珍らしくなかつた。

閨秀第一の譽を擔ふ松園女史の作品の尊重さるゝは世の人情、それがまた極度に達して、女史の制作は、麥僊、紫峰の秀作の價格にも比しつべく、確かに日本の職業婦人中收入の多きこと第一であつたと言へよう。纎手まことに驚歎に値ひするではないか。

竹邨と介堂とは、共に南畫大家たる事に於て當代京都畫壇の兩巨頭、鐵齋にあらずんば、この兩人を指標としたのは勿論である。竹邨殊に文展その他の出品の傑出によつて世の讚仰を得、健筆縱橫せるものにても、紙本の二三百圓、尺五の七八百圓を下ることとなかつた。介堂も、これと匹敵して大差な

かつた。

その他、翠嶂が數次の公表出品によつて第二の棲鳳とまで推され、（勿論女婿たる關係はあるが）その技巧の卓越せるさまは、京都畫壇の一刺戟でなければならない。從つて、渠の作品は、やはり麥僊、松園に下らず、尺八二三千圓で飛ぶやうに賣れたものである。これに對し、春擧門下の曼舟が、帝展第一回の審査員となつて以來夥しく人氣を呼んだのも一興と云はねばならぬ。曼舟の公開制作が兎角振はなかつたとは云へ、一躍して、その地位を贏ち得、師春擧の評價から往々突出したのは異とすべきだ。

都路華香と木島櫻谷とは、京都畫壇に隱然動かしがたい勢力をもつてゐる。前者は、故の楳嶺門下として、棲鳳と兄弟弟子たる關係あり、棲鳳も常に特別な友情を盡してゐる。既に文展でも優遇され、帝展には推薦されてゐるが、畫の價格は割合に安かつた。それでも最近ずつと高くなつて、尺五千圓以上尺八二千圓ぐらゐに上つたので。櫻谷の方は、文展に於ても、契月と共に京都畫壇の選手とも云はるべき人であつた。殊に、一時審査員に任ぜられたこともあり、その地位高く、力倆また優れてゐるのだが、近ごろ兎角沈滯して昔日の意氣ないやうに見えるのは惜しいことだ。併し、まだ／＼前途の望みなき人ではない。こんなわけでその市價は、華香よりも一二割方損なところにあるらしい。

日本美術院の京都の同人としては、富田溪仙ただ一人あるのみなので、渠はその方の畑に持て囃さ

れる。鐵齋などに刺戟されてるところもあるらしく、文人畫風な、奔逸な畫を描くところに溪仙の面白味あり、好きなものは、半折にでも百金以上を投ずるといふわけ、介堂や竹邨に餘り劣らぬ人氣と市價とを保つてゐるやうだ。しかし、幾らか受ける範圍は狹いであらう。ついでに、大阪の院同人たる北野恒富は、美人畫描きだけに溪仙とあべこべの側に同情者がある。この人も、往年「日照雨」をかいた頃が最もよかつたので、その惰力で人氣あり、尺五の四五百圓まては扱はれてゐたやうである。

以上の人々を主なるものとし、京都に於ては市價の高い畫家は、甚だ多く一々列擧するに堪へない。ひとり專門のそればかりでなく、本願寺の大谷句佛上人の畫讃物また栖鳳の繪に俳句を題せるものなどの高く賣れることは驚くべきほどだ。近ごろは、相國寺の和尙獨山禪師の作品が、また馬鹿に歡迎され、殆んど專門畫家をして後へに瞠若たらしむるものがあつた。實際、技倆もうまいからではあるが、それにしても、尺五の綠本にかいたぐらゐなものが、素人であつて尙且つ三四百圓もすると聞いては驚かざるを得ない。そんなわけで、專門家は勿論、素人にしても地位が高いか、技倆が少しすぐれてゐるかすれば、夥しく高い價を以て市場に賣買されるのが、京都畫壇多年の實狀であつた。

ところが、有爲轉變で、大正九年四月頃より不景氣風が吹き荒むにつけて、第一にぐらつき出したのは、京都畫壇の作品の市價だ。今が今まで、栖鳳のものなど落款一つに、鳥一羽居れば、千圓も値

ひしたといふ法外な馬鹿値も、成金の夢醒めるにつけて、ちと阿呆らしいと氣附いたのであらう。さすがの物數寄連も考へるところあつたと見え、栖鳳以下無暗に高かつたこれまでの繪の値段がずんずん下落した。これは、他面經濟界の不況に伴れて、やむを得ざる結果ではあるのだらうが、しかしその影響の痛切なことと京都の畫家ぐらゐ甚だしきはなからうといふ事だ。從つて、すべて世情が安定するに伴れ、京都の繪の相場も定まるだらうが、黑人側の觀測では、栖鳳のやうに突飛の値のものは、高い頂上の四分の一か五分の一に下り、麥僊、關雪等實力と人氣とあるものが割りに輕くて半減か、三分の一以内の下落、平均三分の一ぐらゐになるのは免れぬ運命だらうといふ事である。

六、東京の繪の市價

京都に比べると、東京の作家の繪は餘ほど廉い。これは、必ずしも東西畫家の技倆の相違ではなくして、むしろ兩者の商賣氣の懸隔あることを語るものであらう。卽ち、京都の作家は、東京の作家に比して著しく金儲けがうまく、自分の作品を釣上げることが上手だから、自然市場に出ての値に可なりの段階がつくわけなのだ。おなじ東都の中でも、人によつて商賣上手と下手とがある、それによつてまたへだたりのあるわけである。

そこへ行くと、東京の作家は、概して人爲的に自分の市場に於ける位置をこしらへやうとはしない。最近、京都側の影響と、商賣人の術策に乘つて、多少商賣じみた詭計をめぐらしたもの〻幾らかあるやうだが、それとて京都邊に於けるほど甚だしくはない。で、自然の間に東京で第一の市價を持してゐるのは誰かといふと、先づ大觀と觀山とであらう。この兩人は、日本美術院の頭領として、永い間新日本畫の開拓に努力し、文展にも幾多の功獻をなしたこと世人の熟知するところだ。大觀は、殊に美術院中の天才と謳はれ、その識見、その理解に於て、明治大正の日本畫界でも一頭地を拔いてゐること多く言ふを俟たない。技倆に於ても、まことに一世の大家たるに愧ぢないものがある。この人の畫が、尺五千圓以上、尺八二三千圓ぐらゐに上つたとて敢て驚くにもあたるまい。物價騰貴の絶頂期でも、その力作が右の二倍とまでは行かなかつたのが、むしろ不思議なくらゐである。觀山の方は、技巧の人だ。大觀が頭の人なら、これは腕の人だ。腕の人だけに、制作品のまとまりのよいこと、調子のよいことは、大觀に優るとも劣らない。眞に大作家たるの面目が躍つてるので、この人の作品も大に高い。ものによつて、大觀と同じのもあり、いくらか廉いのもあるか知れないが、通じていふと近年まで觀山の方がたしかに高價だつたのである。尺五千五百圓尺八三千圓ぐらゐは、通り相場だつたと云へよう。但し、大觀や觀山になると、その繪の形の大小よりも質によつて判定することが多い

のである。

大觀、觀山に對照して面白いのは、廣業、玉堂の二大家である。一は、院展、他は文展に各々提携して東都畫壇の精鋭を率ゐて、旗鼓堂々相見えたこと幾春秋、既にこの中の廣業が他界して、その一を缺く事になつたのは返すがへすも殘念なことである。あとに殘つた玉堂は、今や帝國美術院會員、帝室技藝員に兼ぬるに東京美術學校の日本畫主任教授たる重要な地位にあり、東京の帝展作家を代表すべき立場にあるのだ。性質が溫厚篤實、苟くも行動を輕忽にせぬので、廣業や、大觀のやうな進取的氣魄は乏しいが、觀山並みに堅實な保守的手腕を發揮することは偉い。で、この人の作品は、あまりぱツと榮えもせぬ代りに萬人向きがし、尺五六七百圓以上、尺八千五百圓ぐらゐに評價されるのは勿論のことである。紙本のものでも、墨色の味ひなどよく出たものは、四五百金に値ひするのが間々あらう。廣業沒後、帝展系の東京に於ける作家中では何と云つても玉堂が隨一人だ。

帝展系の作家として、近時著しく聲價を高め、勢ひを增して來たのは金鈴社の五人である。素明、清方、映丘の三人は、現に帝展審査員であり、百穗、靈華の二人はその推薦であるが、必ずしもその資格によつて位置の定まれるわけではない。靈華のごときは、初め同會の同人となつた頃は、世人の知るもの少く、殆んど市價等を有せぬ程だつたが、忽ちにしてその卓越せる技能と、高邁な識見との

認めらるゝに及んで、今では宛然五同人中の筆頭たる觀がある。從つて、その作品の市價も高く、一時は尺五の普通物五六百圓から、尺八は千二三百圓を下らぬ勢ひで、審査員や、元老格の作家を顏色なからしめた。百穗もまた天才的な人である。渠が、文展に「七面鳥」や、「朝つゆ」を出して居た頃までは、百穗を說くもの殆ど稀れであつたが、渠の平常を熟知してゐるものは、その以前からその前途を見て居たものである。果せる哉、近時の聲望は眞に隆々、金鈴社中でも第一の德望家といふべきだ。市價の如きも、半折にして三四百圓は珍らしからず、尺五の上物なら七八百圓からそれ以上で、正に靈華の壘を摩し、五同人中最も高き地位を占めてゐる。

素明は、夙くから聲價のあつた人、中頃一時人氣を墜して振はぬやうであつたが、金鈴社成立以後馬力をかけて奮勵し、正に返り咲きの盛觀を示してゐる。その爲め市價も他同人に劣つてゐたのを恢復し、尺五四五百圓、尺八千圓以上に漕ぎつけて、優に均衡を保ち得たのである。淸方は、もともと浮世繪の出で、美人畫を主とする丈けに、必ずしも一般向きではないが、その斷えざる努力と、熱心な修養とによつて、技巧に思想に著しく發達の跡を見せ、その畫品は却つて他派のものを凌駕してゐる。從つて、市價等も素明を凌ぎ、映丘に優るものあり、絕えず不安なき進展を示してゐるのは偉といふべしだ。映丘は五同人中の最年少者、新大和繪の驍將として、文展の出世繪「室ぎみ」が大に利いたも

のだ。「室ぎみ」以來渠の名が揚つて來たところに、金鈴社が成り立つたので、爾來他の四家と共に第一流の地歩を占むるに至つたのである。一時市價もすぐれて高かつたが、最近は他の諸家の鰻上りによつてほぼ均衡を得、尺五普通物四五百圓、尺八上物千三四百圓までは達したのである。

金鈴社の五同人に優るとも劣らぬ勢ひあるは、美術院の中堅作家たる靫彦、古徑、龍子、青邨等四五の人々だ。靫彦は、病身で多く描かないが、描いたものは、いづれも皆渾然とした、血あり肉ある作品である。殊に博大な識見と、深遠な情緒との融合によつてその作品の位を高くしてゐるのは敬服する。尺五七八百圓、尺八二千百圓ぐらゐはやすいところで、すぐれた上出來のものになると、尺八一幅でも四五千圓に上ることあり、御大大觀すら確かに三舍を避けるものがある。古徑も、描かざる畫家として通つて居り、院展出品の力作以外、あまり世に公表せる作品がない。たま〳〵出るものあれば、眞に血涙を注いだものばかりなので、識者は深く渠の態度に敬意を拂つてゐる。從つて、稀に市場へても渠の作品が出ると、寸縑尺紙も爭つて之れを求めるといふ風だから、尺五一幅千圓以上の例は勿論普通である。龍子が名を成したのは比較的新らしいことで、渠はもと洋畫家であつた丈、日本畫の手法を體得して、これを表現するに纖細な感情を以てするや一躍特異の地歩を畫壇に獲得したのである。それ故、鑑賞家の中には、まだ渠の藝術を理解せぬものもあらうが、新人の間には大に持

て囃される。市價としては、あまり定かてないが、尺五程度のもの四五百圓、尺八千圓ぐらゐ迄は動かぬところであつた。靑邨は、これ等院同人と相並んで、古徑、龍子よりはむしろ先輩なのだが、近ごろ餘り振はず、院展にても花形たる地位を奪はれつゝある形だ。渠に比べると、極く新進ではあるが、速水御舟あたりが花形でもあり、市場に作品が出ても高く賣れるのは、何うやら時代の推移とも見られる。靑邨ならば、尺八ものでも、七八百圓は可なり上出來でなくてはならぬのに、御舟の近作でよいものとなると尺八千五百圓ぐらゐは惜まぬ人が多い。新人の力はまことに驚くべしだ。

以上の人々と稍々相伍する市價を保つものに、小室翠雲を始め、池上秀畝、荒木十畝、小堀鞆音、木村武山、松林桂月、山内多門、田中賴璋の面々がある。これ等は、一口にいふと何れも日本畫壇の古武者で、耆宿とも云はるべき人たちだ。中にも、翠雲は文展以來の審査員で帝展では日本畫の主任に當つてゐる。現代南畫壇にあつて第一人者と稱さる丈け、これに隨喜渇仰するものなかなか多い。ただ健筆自在にして、筆を落せば一瀉千里を奔る概あり、數多く制作するので、必ずしも貴重品扱ひはされぬ。そこがまた、南畫家としての渠の誇りでもあらう。しかし、斯うまで多作しながら尺五て四五百圓、尺八て千圓近くまでに漕ぎつけた渠の畫の價値はむしろ驚歎すべきてあるまいか。秀畝も、健筆縱橫、多く書くことに於て翠雲に優るとも劣らない。翠雲が南畫山水を描いて斯界の

雄たるに對し、これは輕妙瀟洒な花鳥畫に氣を吐いてゐる。輕妙なその持ち味に同感者多いと見え、絕頂期には尺五四五百圓、尺八千圓近くて飛ぶやうに賣れたものだ。十畝は、秀畝と同じく寛畝門に出でてその跡を襲へる人、謂はゞ秀畝の師筋に當つて居る。夙く文展審査員になつたり、社會的に活動した事多く、女子高等師範に敎鞭を執つた事もある。一時、畫風の沈滯したかに見えた事あるが、大正八年帝展改造に際し、審査員の選に漏れたのを概し、奮然起つて以來却つて名聲を擧げた。で、一時は同門の秀畝に市價も劣つてゐたのが、忽ち勢ひを挽回し、最近はその堅實な作風を愛重するもの多く、ややもすれば秀畝の上に出でんとして居る。力めたりと謂ふべしだ。

小堀鞆音は、現に帝國美術院會員、帝室技藝員、美術學校敎授などの榮職を悉く具へてゐる斯界の元老、倭繪界の覇者である。近時は、後進の映丘や、門下の靫彥が著しく出世したので、やや時代に遲れた觀もあるが、有職故實に精通し、筆法の亂れぬところはさすがだ。市價としては、よい頃でも尺五五六百圓、尺八千圓のちよつと上くらゐで、映丘、靫彥等に及ばなかつたも是非なき次第と云ふべきである。その代り、この人の市價などは先づ大して動かぬにちがひない。

武山もまた、日本美術院の先輩である。その點では、大觀、觀山に次ぎ、靫彥、古徑等の及ばざるところ、從つて院內外の信望も厚い。人物が同院中珍らしく圓滿着實な人なので、畫風にも若干平板

なところが見えるが決して凡手ではない。併し、奇を好む人から見ると、感じが淺いか、市價としては、新らしい繪を奔逸に描く人たちに及ばず、尺五五六百圓、尺八千圓ぐらゐに行つたのが先づ上乘らしい。院側の先進作家としては、社會からあまり優遇された人とは云はれない。

挂月は、翠雲と共に今の關東南畫壇を脊負つて立つ人だ、山岡米華、小坂芝田等相次いで早世した今の南畫界には、この兩者が互ひに覇を爭ふわけである。そして翠雲は、筆技の大に勝つてるのと、その地位が常に一歩先んじてるので、第一とされるが、挂月には該博な知識があり、文字がある。この點で、渠は常に南畫家の最も必要とする詩文を草し、侃々諤々の論議を上下するところに、渠の風牟の躍如たるを示して居る。從つて、世の南畫愛好者は自然二派に別れて、翠雲をかつぐか、挂月を囃すかしてゐると云ふ風だが、翠雲殊に信者多きか、作品の市價は優位を占め、挂月は尺五四五百圓尺八千圓を絶頂として普通はその二三割方下位に居る。

玉堂門下の多門は、今では、立流に獨り立ちして、堂々と威風を示す作家である。帝展にも推薦され、如水會では宛として頭領格を持してゐるが、近く審査員にもならうと云ふので世間の期待大きく、尺五三四百圓、尺八五六百圓ならば飛んで行く。殊に、師風を承けて、或るものには出藍の譽れありとされてゐる。

賴璋は、秀畝、挂月等と相並んで美術協會系の大立物だ。そして、文展から帝展にかけて、兎も角も推薦にまで漕ぎつけ、しきりにその聲價をあげたのは、孤軍奮鬪の渠としては偉大なもの、殊に山水を描かして器用な事は東都畫壇にも一寸對比を見ない。近頃、多く廣島の別墅に閉居してゐるが、やはり東京に籍あるものとされてゐる。市價は秀畝、十畝に並ぶとも云はれるが、先づ一二割方は低いと見るが普通であらう。

老大家としては、帝國美術院會員たる松本楓湖老の如きがあるが、これは多年の功勞と經歷とによつて重要視された丈けで、繪の價値は藝術的にも物質的にもあまり高くない。それでも念入りの尺五て歷史的に有名な人物を描いたものなど三百圓以上にはなる。文展や何かに出品したものはもつと高い。協會系の高島北海は、中年から畫家になつた人だが、多年文展審查員でもあつた關係から、作家として頗る大を成した觀がある。尺五二三百圓、尺八四五百圓までは市價を保つて居た。佐久間鐵園は、北海に似て、北海よりは步が惡く、市價も三割以上低いやうだ。

ここて、特筆すべき大家に下條桂谷がある。もと官吏で、貴族院議員に勅選された人、繪畫の方にも明るく、協會系の權威者である。北宗の名手で、筆力の雄健なこと現代比なしと稱され、雪舟以來の大家だと激稱する心醉者もある。それ故、專門家でないに拘はらず、半折すら二三百金を値ひし、

尺五七八百圓から尺八ものは無論千圓以上だ。現時の老大家中に於ても、この人の右に出づるはあるまい。

以上に次いで市場に人氣のあるのは、飛田周山、池田輝方、野田九浦、島田墨仙、水上泰生等の如水會連や、矢澤弦月、蔦谷龍岬等の帝展系新進、長野草風、中村岳陵、山村耕花、玉村方久斗等の院展系新進、津端道彥、高取稚成等の協會系作家等を主なるものとし、隱れたる作家にもぽつ〳〵よい人が見える。この邊のところは、必ずしも評價一定しないが、大抵尺五百圓前後から、尺八四五百圓が止まりで、その間にそれぞれの距たりがあると見れば大過なからう。ところで、この邊までは新舊の別なく、總じて二流所と見られ、これ等の人々から一歩落ちると、所謂三流畫家になる。三流畫家にも、いろいろあらうが、概してそこまで行くと、市場の待遇も餘ほど違ひ、尺五で五十圓以上、尺八で百圓以上もするのは可なりよいものでなければならない。

ざッと、こんな風なのが、この間までの好景氣時代の大勢である。變調來の聲に經濟界一般が打擊を蒙り、新畫の下落となつてからは、各作家の作品の價値も大分滅茶々々になつて來た。大體から見ると、東京の方は影響が薄いやうであるが、それでも三四割方の下落は當然あつたらしく、これが本當に落着きを見るまでには、まだ一二割の差はあらうとの見込み、結局最高値の頃よりは半額または

それ以下にめり込みさうである。ただ、大觀、觀山とか、玉堂とかいつた眞の大作家や、修養努力を惜まないで精進する作家の市價は、どんな場合にでもさう大差あるまいと觀測される。一面から見ると、濫りに制作をしないで、自重に自重してゐる人の作品は、あまり人々の手に渡らぬから、そこに骨董的價値を有つ事になるわけだ。

六、作家と書畫の關係

世の中が順境で、所謂好景氣と云はれる時代には、兎角一面によくない事が行はれ勝ちのものだ。作家と書畫屋との關係が、ひどく密接になつて、そこに變な情實が出來たりするのも、こんな時で、つまり商人が極度に作家を利用しようとする結果である。

その關係は、いろいろあつて勿論一概には云はれぬが、中にも甚だしいのは、書畫屋中の一二のもの、または數名組み合つて、誰でも目標とした作家の市價を上げたり下げたりする事である。これは、世間で謂ふ釣り上げ策とか、引下げ策とかいふもので、一度この釣り上げに乘ると、その作家の作品は必ず相當に高くなる。中には、作家自身もびつくりする程急速に値のあづかるのもあるさうだ。これ等は、商賣人が、右の作家をかつぎ上げる秘訣で、かうして一方に恩を施して置けば、他方に自分

が多く描いて貰つたり、その他の便宜を計つて貰つたり出來るわけである。これは、畫家の釣り上げ策として隨分一頃流行つたものであるが、商賣人が自分の都合で無理勝手にするのなら致し方ないとして、作家自身この策を行はんとするのは誤りである。而かも、事實は、作家自身が好んで書畫屋と結託し、強ひて自分の作品の市價を高くしようとしたものも大分ある。これ等の徒輩は、もとより藝術といふものを正當に解釋して居らぬのだらうし、卑俗云ふに足らないが、それにしても、好景氣につれていろいろな事が容易く出來ると、かうした誘惑も自然に多くなる道理だ。こんな方面から考へると、不景氣來で、新畫の落ちたのなどは、むしろ作家のために幸福だかも知れない。

書畫屋といふものは、この外にもいろいろな手段を弄する。展覽會に新作をあつめて、儲かりさうな人のを特にかつぎ上げる位はまだしも、中には、御馳走政略をもつて作家を釣つたり、或は家普請を受け負つて作家の歡心を買つたり、甚だしいのになると、婦人を餌とし、色慾を滿足さして商賣の爲めにするやうな輩さへあり、情實の纏綿なかなか容易でないのがある。金鈴社とか、如水會とか、京都の自由畫壇とかいふ結社の出來るのも、その一つの理由は、これ等いろいろの書畫屋の誘惑に陷らないためでもあらう。

書畫屋の中で、殊に作家に惡影響を與へるのは、その人の藝術などは更に認めず、何でも彼でも多

く描かせて數で儲けようとする手合である。この手合になると、實に巧妙な手段で、一纏めに百枚千枚、甚だしきは一萬枚もの製作を無理强ひに押しつける。勿論、數物のことゝて、出來榮えなどは構つて居る時でない、何でもよいからその作家の名によつて似たやうな圖柄をどしどし造らへ上げさせるのだ。その繪が、よからう道理はないけれども、兎に角僞物ではないと云ふので、それを附け目に、譯のわからぬ地方の鑑賞者數寄者に押しつけるのである。うつかり、この手に乘つたが最後、作家はこれまで社會的に築きあげて來た地位名譽も何のその、忽ちにして、粗製濫造家といふことになり、名聲地に墜ちてしまふ。

名前を擧げるも氣の毒だが、東京では尾竹竹坡、國觀兄弟のごときがこの例で沈淪してしまつた。始め、竹坡は文展の花形作家で屢々二等賞三等賞等の榮位を占め、國觀また得意の武者繪によつて兄に劣らぬ名聲を文展等に謳はれたものである。その後、時勢の進展は、必ずしもこの兄弟をして名聲を持續させなかつたのであるが、併し、さまで惡名を着るほどではなかつた。むしろ、二人の天才は二度や三度、文展で虐待されたぐらゐでは動かぬのみか、一層伸張するだらうと期待された。ところが、二人はさうした光明ある前途を認めなかつたらしく、忽ちにして焦り出した結果は、妙な書畫屋に引つかかつて、竹坡が何千枚かの繪を引受けると、國觀も負けずに製作をやると云ふ風、殊に竹坡

は忽ちにして一萬枚ばかりの畫債を償却し、なほあとをつづけて濫作してゐると云ふ噂、それが話ほどでなくても事實澤山出て來るのだから堪らない、今では、竹坡の繪など心ある人が氣持よくは見ぬ風になつてしまつた。これが動機て、今の尾竹兄弟は、昔日の俤を止めぬやうになつた。

これは、偶々一例に過ぎないが、現在の書畫屋なるものが、(勿論全部ではないが)いろ〳〵の手段で作家と懇親になり、それから次第に苛辣な方法を取ることは明かな事實だ。これが影響を受けるのは、ひとり作家ばかりでなく、鑑賞家もまた同樣だと見なければならない。現に、今述べた如き一萬畫會のやうなものに入つて名前がよいから好いとか、落款が知名の人だからといふので、得意になつたらそれこそ間違ひ、事實は何等精神の加味されてゐない、模造品、印刷物式の繪畫をつかまされてそれに渇仰してるわけになる。こんな失敗のないやうにするには、先づ以て作品本位に見る事だ、藝術を藝術として理解することに力める事だ。そこまで行かなければ、眞の鑑賞家とは云はれぬのである。

七、新畫の揮毫

書畫屋といふものが、或る場合には賴みになつても、或る場合には、全然賴にならぬものなるは云ふを俟たない。そこで、眞に藝術を愛好し、新畫を購求せんとするものは、出來る限り、自分自身で

これを揮毫して貰ふやうにするのが安全第一だ。

　と云つても、素人には、專門の畫家に始終接近したり、いろいろな事を賴んだりする機會もなく、あつても兎角臆劫なものであらう。それ故、誰れにでもといふわけには行くまいが、その人の趣味で、南畫が好きなら南畫家、土佐が好きなら土佐系の作家、花鳥が好きなら花鳥畫家といふ風に類を求めて行くやうにするとよい。

　かうすれば、各々好き々々による事で、南畫好きのものなら素人でも、多少は南畫の趣味のわかるものであらう、或はその方の作家の一人ぐらゐ知つてゐよう。それ等を便りにして好いた人に向つて行くのが捷徑である。例をとつて云へば、翠雲とか、桂月とかがその方の巨匠として、南畫好きのものなら、直接兩氏の中のどちらなり、またはその知友なりに紹介して貰へば、それから先きは、趣味の話や、藝術の論などでどうにも交はり得ようと云ふものである。土佐繪の畠の人の場合、花鳥の方の場合、山水の方の場合、また各々おなじわけであらう。要は、こちらの要求により、希望によつて、それぞれの作家に眼星をつける事である。

　さて、その作家を知つたとなると、揮毫の依賴は、案外容易だ。もと〳〵先方は、描く事が職業なの故、こちらの依賴方が自然で、無理さへない事なら、他の書畫屋に描くよりは一層の熱心と、同情

をしたりすると、つひ先方の機嫌に障つて、折角出來るものも出來なくなる樣な虞れなしと云へぬ。この點も考慮すべきだ。

そこで、何ういふ風にしたら、最もよろしいかといふに、必ず先方の意嚮に逆はぬやうすべきである。人によつていろ〳〵違はうが、揮毫料のことも、畫題のことも、材料のことも、先づ一應は先方の意嚮をきくなり、大體樣子によつて察してすべきてある。こんな事は、何を賴むにしても、もとより當然の事てかれこれ云ふのも異なものだが、由來藝術家といふものは、極めて感情的な人間が多い、殊に、現代のやうに世相が複雜して來ると銳敏な官能を有し、感覺の極めて微細なものが多いので、兎もするとその氣持に障り、思はぬ失敗を出來すことが間々あるから、その意味で特にこれを詳說したわけだ。

ところて、揮毫料の一件だが、これも先方次第、またこちらとの感情次第で一樣には云ひない。けれども、大體から云ふと、先きに述べた市價が標準になるので、黑人の書畫屋はみな市價によつて、揮毫料の標準を立てて居るから、素人ても先づこれに從ふやうするがよからう。だが、これは時々に異ふのではつきりした事はよく分らぬ。これを知るには、黑人仲間にたづねるか、または商賣人の家

の正札なり、カタログや、賣品雜誌によつて樣子を知つておくがよい。

さて、市價の一斑がわかつたら、普通は知友の間柄として、その價格の半額以上、七八割までぐらゐの範圍で揮毫料を包んで行くべきだ。たとへば、素明の尺八が上物で時價一千圓するとしたら、その知友なり、知人なりは各々の考へによつて五百圓から七八百圓ぐらゐの揮毫料を包むのが、ほゞ今の禮儀と云ひよう。だが、この場合に注意せねばならぬ事は、決して出來のわるいものを標準にしてはならない事である。

同じ素明の作品にしても、出來の好いのと惡いのとでは、そこに可なりの差違がある。前記千圓の尺八が上物なら、普通以下の出來、卽ちわるい出來だと精々五六百圓ぐらゐしかせぬであらう。この場合に、渠の知友で揮毫を依賴せんとするものが、最低の價格を標準にして、その半分なり七八割なりを提供すればよからうと考へるは蟲が宜過ぎて、却つて非禮ともなり、失敗ともなるであらう。何となれば、作家は、決して蕪雜なものや、出來のわるいものを知友の間に頒たうとは思はぬ筈だからだ。普通の書畫屋の依賴なら兎に角、多少具眼の士と思ふ知人の依賴には、力めてよい繪を描かうとするのが、作家として自然の考へであらう、それに對し、こちらから「如何なものでも宜いので……」といふやうな浮薄な賴み方をするのは、まことに無禮な話、また作家を愚にした話と云はねばならぬ。

それ故、出來得る限りは、時價千圓のものなら千圓包んで行つて、(金持ならばもつと餘計でもよからう)「何うか精々御氣分に叶つたものを願ひたい」と出るのが當然である。わづかな違ひでも、作家は輕んぜられて低い揮毫料を貰ふのと、重んぜられて相當若しくは相當以上の揮毫料を貰ふのとでは、感じがまるでちがふ。感じがよければ、自然豫想よりも以上のものが出來るのが、普通である。卽ち、結局に於ては、精々感じをよくして置く方がよいので、直接揮毫の依賴でもしようとする程の鑑賞氣分あるものなら、その知友の作家に對して、この位の敬意は拂ふのが至當である。

畫題の選定にしてもさうだ。これは各々の考へて、同じ南畫でも山水がよいとか、花鳥がよいとか、冬の景、春の景、また何や彼やと種々の註文ある事てあらうが、成る可くならば製作者の氣持になつて、作家の考へに一切を委ねるがよからう。冠婚葬祭の場合、その他特殊な緣邊の場合には、それに應じて圖題の選定も槪略限定されるが、これとて大凡「お祝ひ用」とか、「正月向き」とかいふ大體の指定にとどめておく方がよささうだ。なまじひに正月掛けだから松に鶴を願ふとか、節句掛けだから鐘馗を賴むとかいふ限定を與へるのは、作家に對してそれ丈け自由を拘束するわけになり、眞の鑑賞家の取るべき道でない。

また、も一步考へると、今の世には、昔の人のやうに、お祝ひの圖だから芽出度いものをとか、正

月だから正月らしいものをとかいふ限定はあまりせぬがよからうと思ふ。祝ひの時だからとて、必ずしも蓬萊山水がよいわけでもなければ、正月だからとて松に鶴や、梅花の圖などのみがよいのではない。これは昔からの慣例で、さうした行事に慣らされたからといふ迄、新時代の現代はもつと解放された、自由の觀念があつてもよいであらう。この事に理解があつたら、なほ更のこと、圖題の選定などは、己の信ずる作者その人に一任する方がよからう。

も一つ、問題なのは、揮毫を依賴して、それの出來あがるまでの時日だ。これがなかなか思ふやうに行かない。賴む方の人情としては、依賴した以上、一日も早く出來る方がよいのは云ふ迄もない、そこで期間も成るべく短かい間にと賴み込むのは普通の事である。併し、作家の方では意の如く行かぬから、成るべく期間を永くして吳れといふ。この間で、双方に距たりがあらうが、これも作者を尊重して出來る限りは時日を與へてやるがよい。そして成るべく時間的にも急がず、焦らなかつたらよいものを見せて貰ふことにするがよい。ただ、作家は、一徹な藝術家氣質で、約束の日は來ても、興が向かなければ筆を執らぬとか、ひどいのは、他に急ぎのものを賴まれたので前約を後廻しにするとかいふ事も間々ある。これ等も、新畫揮毫を依賴する場合には、當然相當に入れておかなければならぬのである。

八、今後の新畫鑑賞

現代の繪畫のことを說く以上は、ただ目前のことばかりでなく、これから後の畫壇の推移や、鑑賞家の嗜好の方向等にも一言するのが至當であらう。そのために、何よりも先きに考ふべき事は、住宅と掛物との關係である。

いろ〳〵の說があるけれど、建築の上では、日本の住宅がすつかり洋風になつたり、今日の様式が全然一變したりすることは一寸考へられない。ただ、どうも今のままで不便なことは何人も痛切に感じてゐるところで、旣に衣食の上に、洋風が可なり採り入れられてある以上、住宅の上にも幾分の洋風建築が加味されることは自然の道理であらう。そこで、大體に於ては、ここに和洋折衷の家屋が續續出來ることになるだらうと思ふ。例へば、母家は和風でも、書齋丈けは獨立した洋風だとか、應接間は洋式だとか云ふ類である。

兎に角、住宅の上に大分革新が加へられる。變化が見えて來る。斯うなると、日本畫の如きも、單に從來の床の間專門のものばかりではいけなくならう。もつと新時代の住宅の様式に適つたものが生れ來べきだらう。勿論、これには、お誂へ向きの洋畫といふものがあるからよいといふか知れぬが、

洋畫は洋畫、日本畫は日本畫で、その趣味その特色には互ひに全然一致しがたきものがある。將來多くの年月を經たら何うか知らと思ふが、まだ當分は一致しない。そこで、日本畫は日本畫として、相當に現代の新らしい住宅の各室に當てはまるやうな制作を試みねばならぬ。

幸ひにして、日本畫壇にも、この大勢に順應すべき傾向はぽつ〳〵見えて來てるやうである。卽ち、從來の尺五とか尺八とか、乃至二尺幅とか云つたやうな床懸專門の規則づめな圖畫によるものは漸くその特長を失つて、これから先きは、先づ樣式の上に自由な形が用ゐられやうとしてゐる。或るものは横長なもの、或るものは竪細のもの、いろ〳〵な形式が、もつとも自由に試みられてゐる。この結果は、自然內容にまでいろいろな變化を及ぼし、昔のやうに、お祝ひものゝ「蓬萊山水」とか、「天保九如」とか云つた式の舊套的なやり方は追ひ〳〵廢棄されやうとして居る。新時代の鑑賞家は、よくこれ等の點に注意して、成るべく今の時代の精神を代表し、新興の藝術をあらはすものを取ることにしなくてはならない。

そこへ行くと、古畫には、いろいろよいものがあるが、如何しても、古畫は、昔の人の氣持て、昔の住宅や、生活氣分に合して依つたものだといふ感を免れない。これが現代の生活、新時代の人の氣分とは、ぴつたりしない一つの理由であらう。勿論、吾々にはいつでも懷古的氣分があり、祖先の生

活、先人の思想が共鳴する半面はあるのだから、その上で古書畫に愛着することもないではないが、どうしてもそれ丈けでは物足りない。何か知ら、新らしく燃え立つ現代の精神に適合したものが欲しいのだ。故人の物でも、その時代々々によつて、或は豪宕な時期にあたつては、桃山の永德、山樂あたりがよいとか、纖細優美な時代にあたつては、春信、吳春あたりがよいとか、いろ〳〵な趣味に相應するものもあらうが、概して現代の生活を知つてこれに同化し得るのは、現代の作家ほど好適なものはない。この點からも、新畫は、どうしても古畫にまさる實際的價値を有するわけだ。併し、古畫は、それが今日容易に再び手にし得ぬこと、前代の絕好紀念たる事、先人の思想の深大さを計るバロメータアたる事等によつて多くの骨董的價値を有し、また個々の住宅に一種の錆びを添へること故、その絕對的價値を十分認めぬわけにも行かないのである。

次ぎに、現代の繪畫を出來る丈け新住宅に適應せしめ、その實質をよりよく見せるためには、これを表裝する者の注意にも俟たなければならない。表裝次第で、よいものでも惡く見え、わるいものでもよく見える例はよくある、鑑賞家はこれにも十分注意すべきである。

九、現代作家の趣味、性格

なくて七癖――普通の人にさへいろ〳〵の習癖がある。況して藝術家と云はれ、作家と云はれる程の人々にいろいろさまざまな癖があり、道樂のあるのは云ふを俟たない。現代作家の生活振りは、ここに於て甚だ多岐多樣、到底一通りでは語り盡せぬのである。

大體からいふと、眞面目な人と、不眞面目な人とがある。眞面目な人は、藝術といふ一つの道に、心から底から凝り固まり、眞實一路と云はうか、一本調子の突きつめた生活をするものもあり、かと思ふと、ただ着々と、堅實に平坦に、一生懸命自分の道を切り拓いて行くものもある。不眞面目なものは、何となく自儘勝手な生活をするが、それでゐて一路眞實に藝術の秘點に觸れやうでもない。謂はば、果報者が、恣ままなる藝術の道に遊んでるやうなものである。この外に碌々としてぼんやり暮すもの、齷齪として金儲けに餘念なきもの、まことに種々樣々である。

眞實一路、突きつめた藝術的生活を送る者は、日本畫家には餘り多くない。併し、時代に超越して、眞に自己を省み、內に深く生きんとするもの、かかる種類の人がいつの世にも絕えた事はないやうに、混濁した現代の世界にも、かういふ生き甲斐ある生活をしてる者が少しはある。そこには虛僞もなければ、虛飾もない。ただ、ほんたうに生に對する眞實の努力あるのみなのだ。これを完全に生きてる人、例を擧げて云ひ得ぬがたしかに少しはある筈だ。完全でない迄も、美術院の小林古徑などはやや

それに近い。別に何の虚飾もなく、虚榮もなく、ひたぶるに藝術の完成を期して努力し止まない。一作は、一作ごとに何等か新意あるものを出さうとして、常にそれに專心してるのも頼もしい。渠には道樂はない、あればすべてのものを藝術の生きた資料として、心の糧として受け入れてる丈けである。併し、古徑も人間だから、裏に裏あるか如何か、それは知らない。

金鈴社の百穗も藝術的な男だ。渠は、時折り非常な悧巧もの丶やうに云はれるが、その根は、もつとも多く人生の眞性に發して居り、情も解すれば、義理にも通ずる。それで居て、世の毀譽褒貶に頓着なく、悠々閑居して、その單純生活を樂み、古畫、古文學研究思索に沒頭してゐるところまた風變りだと云ふ事が出來よう。それ丈け繪にも、深みがあり、奥行きが出來てる。百穗には、道樂も少くない、旅行、釣、書道、和歌、殊に、書道と和歌とでは近ごろ越後の良寛和尚に感化されて、その遺墨や遺詠に負ふところが多いやうだ。渠が根岸派の歌人として、萬葉調の熱烈な追隨者であることも、日本畫壇には珍らしい例の一つである。

百穗と並んで、和歌書道を嗜み、萬葉振りをも示すことあるは美術院の靫彦だ。渠は、病身であり、蒲柳の質であるだけに、百穗と比べると調子も傷ましく、細々しい感じはあるが、而かもあの鎌倉右大臣實朝のやうな豪毅な、雄大な氣象の一面をも持つてゐる。靫彦の藝術の眞率にして、一種冒しが

たい氣品を具へてゐるのはこれが爲めだ。渠も近頃は、良寛和尚に私淑して、書の如きは全く良寛のそれを體得したほとである。渠の好むところ、多くは文學的方面のものであり、また劇、音樂にも通じて居るといふ。

古徑、靫彦の外、美術院には、藝術家として、第一義の生活意義に徹してる人が少くないらしい。古くはなつても、大觀は實にその第一人者であらう。近頃めき〳〵名を擧げた龍子が、容易に俗流に媚びず、敢然として藝術の一路を辿り、若き同人の御舟が、浮世を避けて京は洛外の片ほとりに自然生活を樂しんでゐる如き、今の世には涙溢れんばかりの乏しく、心よき生活振りではある。

大正八年帝展の第一回展覽會に「靑衣の女」を出品して特選になつた限り、浮世を物憂がつて行方定めず韜晦した廣島晃甫のごときは、殊にもゆかしき藝術家氣質の發露者だ。渠を罵るものは、狂と云ひ愚と呼ぶが、今の日本畫壇の庸愚にして、術策的なのに愛想をつかした渠から見れば、汗涙乾く間もなき雲水の旅の暮らしの方が遙かに有意義なのかも知れない。

去つて京都に行けば、何と云つても、國畫創作協會の人々が、一番藝術味に徹した考へをもつて健闘してるやうだ。麥僊は、取りわけてよい生活の實行者のやうである。外觀のほどは具さに知るところもないが、行藏一致、よく本も讀めば、泰西の名畫名工にも始終接觸してるらしい。紫峰に至つて

は、渾身藝術家氣質の男、東京へ出て來ても、白木屋のやうな會場では、電車自動車その外往來のもののけたたましい物音に身も心も惱まされ拔くと云つて嘆聲を漏らし、見たい芝居はあつても、帝劇、歌舞伎座のあの人込みではいやだといふ位、京都にあれば、大きな植物園のやうな自分の家の庭にひつそり閑と引込んで、のんびりとした郊外生活に自然の興を行るといふ。面白いのは、華岳で、渠はなかなかの資産家に人となつたのだといふが、鋭い藝術的知能が渠を一介の畫學生として生涯させやうとしてゐるのだ。華岳は、主として佛畫佛像等に心を寄せてゐるが、或は天平延喜の古に溯り、或は泰西各國の宗教美術に注目する等、その熱心なこと熱心なこと、決して附け燒刄ではなささうだ。

突きつめて、一身を藝術の境に打ち込むまでではなくとも、着實に平坦に、徐々として己が道を辿り、次第にその地步を遂げんとするもの、謂はゞ穩健派ともいふべき人々がある。帝展の淸方、素明、映丘、契月、同會員の玉堂、栖鳳、美術院の觀山、靑邨等を初め、この類の人々は甚だ多い。

穩健派だけに、この連中には、概して幾分の秪徊趣味はある。萬葉や、良寬のつきつめたそれはなくとも、古今集か、新古今あたりの淡く樂しい文學情調はあるのだ。この意味からすると、京都の橋本關雪のごときは、必ずしも、穩健派ではないが、悠々として道を樂む氣持に可なりの秪徊味がある。渠は、眞理を愛し、熱情を愛するが、より以上、藝術を愛するやうだ。渠の畫作は勿論、詩文を見て

も、筆蹟を見ても、剛健のうち一種の三昧味を有つてゐるのは、まことに自然である。だが、渠は徐徐として地歩をつくる穩健派ではない。旅行、文學、書道、篆刻、あらゆる風流韻事に心を寄せてるのも亦た宜なるかなである。

清方のごときは、穩健派の雄と云ふべきだ。決して焦慮するところを見せない。さすが可なりの新人である丈けに、時折り感覺的な刺戟に云はれぬ妙味を漂はすこともあるが、概して、靜かに、落ちついた觀照の世界を表現してゐる。それが、到底奧深く、底遠きものとは思はれぬても、着々として築き上げた清方らしい長所であることは爭はれない。素明のは、可なり生ぬるいものであるが、同じく可なりの落ちつきはある。但し、清方が文學趣味や、劇趣味にも主觀的に透徹した同情と理解とをもつてるのに對して、素明の同一趣味は、あまりに客觀的で、あまりに不鮮明である。そこにも二者の藝術觀、人生觀の相違が見られ、道樂の深い淺いも窺はれる。映丘に至ると、その趣味が、鎌倉、藤原時代である丈けに、すべてが典雅らしく、みやびと古びとの限りをつくしてゐる。いづれは弓道とか、調馬とかの趣味が(自分では巧くなくとも)その中心になつてることで、如何にもお上品だが、それ丈け何處までが眞實で、何處までが遊戲なのだか分らない。京都の契月は、まことに自然な、着實な性格の人らしい。それ丈け、遊蕩氣分の充ち溢れた京都作家の間にあつては、浮いた噂などはあ

まりないが、その趣味は、信州の山國から出た人だけあつて、可なりこつてりした、一筋ならぬものがあるらしい。そして、その一樣ならぬ感想の表白が、渠の藝術に、よき光りともなり、暗ともなりて明滅することである。それに比べて、翠嶂は、京都育ちのぼんちらしく、好みの異なところはあるが、やはりしやなしやなして居る。一寸色男氣取りのところが見えて、そこにいろ〳〵な道樂味もあるやう思はれるのだ。栖鳳さんの翠さんとして、而かも祇園あたりの舞子達に噂の的となるのも自然のことである。

玉堂が、穩健派の中心であることは、すべての人が一樣に肯くところであらう。渠は、運めで度くして、青年時代からトントン拍子に日本畫壇の新進となり、花形となり、中堅となり、代表的作家となり、終に今日元勳の地位に上るまで、ただただ努力と修養とによつて固めて來た人である。勿論、そこに相當の才分もなければあゝなれる筈はないが、才氣は四分で努力修養が六分と云つてよい。それ丈け、すべてのことが穩健で、着實で、決して奇矯なところがない。突梯なところがない。趣味にしても、旅行、文學、和歌、俳句、書道、骨董、茶の湯等何でもござれの人らしいが、さりとてそれ等の道樂のために身を投ずるほどの事のないのは勿論、恐らく度を越えた道樂などのある人であるまい。そこに渠の藝術の眞摯にして、冒し難い一面もあるが、同時に平板凡庸に流れやすい一面もある

のだ。今や、廣業亡き東都の畫壇に、玉堂の才一段の生彩を帶びて來ずばなるまい。その爲めならば、多少の浮名を流すも、毀譽褒貶の伴ふも畢竟何かあらんやだ。

栖鳳が、京都畫壇に覇王となつてゐるのも、次第に得たる自然の地位だ。渠や、才分もとより乏しきわけではないが、これに加ふるに聰明慧智な世才を以てしたこと驚くばかりである。その作品が、天下無比と云はれながら、内容は隨分あつけらかんのものであるのも、人を喰つたわけである。併し、そこに渠の世才が縱横に閃めいてゐるので、世人は馬鹿にされてると知りつゝも、何うしても渠の作品に惹きつけられてしまふのだ。栖鳳は、その世才を文學に托し、わけても一種の俳味に托してるのだ。その俳諧味も底を割つて見れば怪しいものだが、兎に角、淡く清く、何ものか捉へがたき境地を捉へたところがある。そこに、渠は人を惹きつけてしまふのだから偉い。同じ、京都の風景を描いても、大觀の趣味は大きく、眞面に出る方だが、栖鳳のそれは小さく、うらから出るといふわけ、栖鳳もまた粹人なるかなである。

美術院の大觀は、何といつても藝術至上主義で一貫してる人である。從つて渠には妥協がない、漸進がない。徹底的の欲求があり、盲目的の進擊があるのみだ。大觀が少しく老いたりと云へども、また術策的に妙な分子ありと雖も、靫彥や、古徑等と共に第一義生活を遂げんとする意圖充ちてゐるの

は壯とすべしだ。けれとも、そこには大分間隙もあるやうである。そのギャップは、大觀自らも如何ともし難いらしく、池の端に宏大な邸宅を營んだり、花柳界のだだら遊びに欝悶を遣つたりする半面に英雄の悲哀の滲み出るものがあるとの事。それに引代へ、圓滿珠の如く、溫和冷靜、宛かも水の如く、林の如く、騷がず、動かざる態度で終始してるのは、同じく院の頭領たる觀山である。この人は、玉堂、栖鳳のごとく平和な一面あると共に、栖鳳の俳趣味に拮抗すべき禪味があるのだ。人によると、生道心のくせに、しきりと禪定の境に入つた如く吹聽して納まつてるものもあるが、觀山のは一向にその氣振りを見せない。日常の生活にしても、外界から見れば一向他奇なく、人との交際ももつとも圓滿である。それにもかゝはらず、渠の作品には、熱烈な意氣がある。時として、「喝ッ」といふ趣きがある。自然の裡に、多分の禪味を帶んだのが、觀山の藝術の特長である。併し、渠もまた苦勞人だ。若い時分は、春草や、大觀と共に世の憂苦と鬪つて來た丈けあつて人生の裏表、色の道、酒の巷、あらゆる事相に透視する眼光はあるので、その生活振りも、實はなか〳〵多岐多樣なのである。

金鈴社の靈華は、畫家として傑れてゐるばかりでなく、學者としても立派なものである。和漢の古文書に眼を曝らし、古畫古彫刻を見るの眼たしかに時流に卓越してゐる。妙なもので、これ丈けの識見があると、さすがに猪突的な事は出來ぬらしく、元來藝術家肌の、何事にも無頓着な人なのだが、

今では穩健な生活に入り、藝術もまた古淡の味ひに徹してゐる。併し、この人、幾多の古文書に觀察してその方面の學問的趣味ある外に、浮世の物事にも精通し、多角多面な理解をあらゆる方面に向けてゐる。

京都の山元春擧、都路華香、木島櫻谷、東京の荒木十畝、山内多門、木村武山、飛田周山なども、やはり溫和な漸進主義の人々として見らるべきだ。そして殊に、大眞面目の人々だ。中に就いて春擧は、なか〳〵の策略家のやうに云はれ、栖鳳とは始終政爭を繰り返してゐるやうにも傳へられるが、その實餘ほど細心な、愼重なところのある人らしい。栖鳳ほどの世才畫才なきが爲めに、渠の製作は多くの場合平板であり、凡庸であることを免かれぬが、人間としてはしつかりした氣性があるらしい。渠は、これといふ深い、動かし難い趣味や、嗜好をもつて居らぬのも損なところで、別莊に遊んだり、獵や、釣に出懸けることがその道樂であるのは少し淋しい。華香は、栖鳳と同門たりし誼みで大分御大の同情を蒙つて居る。併し、この人の性格は、どうも偏狹らしく、大きな寛量はないと見え、兎角に圭角のあるのは損だ。變に禪味でもあるかの如く見せかける渠の畫作はいづれかと云へば、ケレンの感ないでもない。技倆もあり、地位も高き渠のために猛省を希はざるを得ぬ。櫻谷は、元來君子人だ、繪も餘ほどうまい。併し、帝展、文展等から度外されつゝも、泰然として製作を出品し、少しも

恨みる所なきかの如く着々その道を踏んでゐるのは、一寸現代の他の作家に類を見られぬ。

十畝が近頃著しく進歩的になつた結果として、渠が優に玉堂、栖鳳等に次いで認めらるゝやうになつたのは、珍らしいことである。渠は、眞摯な、一本調子な程藝術に熱心な點では、をさ〳〵畫壇の誰にも劣らぬのだが、惜むらくは文學的知解に乏しく、あまりに舊套の教育に拘束されてゐた。近時、著しくその拘束から免れて、新たな生面を切り拓いたのだが、内容的に一新されて居ぬのは物足りない。

院展の武山も、穩健派の人である。元來美術院には異り者が多く、御大の大觀始め、古徑だの靫彥だの、容易に他と妥協しない故に立つて院の事務を統理し、指揮して行くのは容易な事でない。然るに、渠が巧妙にこれを處理して、院の信望を内外に重からしめてゐるのも、その人格に人を惹き附けるものあるからだと云つてもよからう。その代り、渠自身の作品の藝術的價値は、漸次その價を遞減して行くと見られぬ事もない。

多門は、一時兎角の評もあつたが、自らも聲明した如く、一度重い病に罹つて苦んでから全く一種の三昧境に入つてるらしいところがある。あまり、ちよこちよこしない代りに、人の誹謗をしたり、惡評をしたりする事もなく、從つて敵がない。趣味は必ずしも廣からず、深からずだが、あまり濁つ

たものをもつて居らぬらしい。非難としては、色んな事に兎もすると虚榮虚飾のあとが見えるといふのである。周山は、多門と共に如水會の中堅だが、一言に盡すと、一種の仙骨を帶びてゐる。まだ年齢も衰へず、激しい仕事も持つてゐる人だけに、老朽の風は見えぬが、どこか仙骨はある。酒およびこれに伴ふ豪傑風な生活は渠の好むところらしいが、その半面に極めて纖細な、奥ゆかしい趣味があるのだ。この點は、たしかに、渠が「幽居の秋」などを成し得た一つの理由でなければなるまい。

この外、穩健派に屬する作家は多々ある。翠雲、挂月、秀畝、賴璋、鞆音、九浦、泰生、輝方、その他、京都の作家、美術院の作家等にも少からず存するのである。新進でも、弦月、龍岬や、國展の晩花、波光等の意氣はあまりに烈し過ぎるほどである。如水會の諸家、京都自由畫壇の諸家などいづれもこの類の作家として數ふべきだ。

十、種々な生活振り

生活振りの方からも、各作家がいろいろに異つてゐる。翠雲のごときは、確かに一種の豪傑で、小事に拘泥せぬかの如く、朝夕高臥し、豪遊して飽くところを知らない。渠は、上州の生れだが、才氣があつて江戸ッ子の如く、そこに持前の長脇差式氣分もある。東京の本宅は云ふに及ばず、箱根の別

墅でも、眞に行きとゞいたもので、渠の豪快な生活はたしかにそこに現はれてゐる。酒の席や、花柳の巷に入つてゞも、翠雲の名は最も通なものとして知られてゐる。方に大臣宰相の生活振りだが、それをなすに少しも躊躇せず、堂々として天下を濶歩してるのは痛快だ。併し、世間の一部では、渠自身があまりに放膽な生活をするので、それをひどく惡事でもなしてるかの樣に觀測する者もある。かかる誤解は極端だが、多少自ら警むるところあつてもよい筈だ。

翠雲と相似た生活振りをしてるのは、挂月である。挂月は、翠雲ほど派手でもなし、あれほど大びらな生活はせぬが、これもまた酒池肉林に甘醉することを辭するものではない。挂月には意氣があり、熱意がありして、協會問題などには常に有力な斡旋または役廻りをしてゐる。併し、妙に翠雲とはソリが合はない。一方が南畫會を統率して居れば、これは南宗畫會の牛耳を執り、兩々相下らぬのだ。殊に、帝展には二人一緒に審查員となつて正に吳越同舟の感を起させた。この喧嘩、兩方ともに面白くないことで、二人は南畫壇の巨頭相率ゐて進むべきだのに、さう淡白になし得ないのは、何うやら前世の因果らしい。二者のうち、翠雲は技倆遙かにすぐれてゐるが、才學に於ては挂月に一歩を讓るべく、左利きの方も翠は挂に勝てない。併し、翠の社交上手にして、幾多の同好者あることは、到底挂の及ばざるところだ。

秀畝は、翠雲桂月のごとく豪快な遊びをする事もなく、常に多少は自重してゐるらしい。が、その生活振りの派手にして、外觀の壯麗なることをさく兩氏に後れを取らない。併し、渠の遊び振りは、翠雲のやうに豪放でもなく、桂月のやうに皮肉たッぷりでもなく、穩健な、ごく上品な程度のものだと云ふ。酒量は必ずしも少からず、艶聞も多少はある。

賴璋は、翠雲、桂月とは大分違ひ、多くは皆秘密裡にこそこそ遊びをする方である。日常の生活に於ても、桂月は相當に讀書し、秀畝も手習ひなどするが、賴璋はごく無精な方で有名だ。酒量は可なり多く、情事も亦たこッそりの方は若干あるらしい。

東京の畫家で、隨一の酒豪は、目星しい所ではやはり大觀だらう。渠の酒は、興に乘じて自づから滿を引くので、なかく底なしだといふ。觀山もよくやり、時として酒仙の風あるが、美術院の若手にはあまり飮み手がない。道樂としては、山村耕花が、いろく古代趣味に沒頭したり、荒井寛方が印度趣味に深入りしてゐるのなど特筆すべきだらう。渠等の間に割合に讀書傾向の多いのは喜ぶべき現象だ。

團體として、飮み手の揃つてるのは、何と云つても如水會である。酒を飮むこと水の如しだとひやかしたものもある位、多門も飮めば周山もやる、九浦、曲江、泰生、蕉琴、輝方、春陽、林響の各

會員みんなよく飲む。長老翠仙がひとりこれを愼んでゐるが、渠とてもともと酒仙の稱ある人、近時健康上から控へてゐるといふに過ぎない。但し、この會の人々で旺んに讀書修養に力めてゐるのは、多門、周山、林響等三四氏に過ぎず、他は皆製作に日も之れ足らざる有樣なのは惜しいことである。

讀書修養によく力めてゐるのは、金鈴社の五同人だ。この中、靈華、百穗は、可なりの左利きだが、どんな時でも酒に性根を忘れるやうな事なく、よく飲み、よく描き、よく讀んでゐる。その精神的修養を怠らぬのは第一の强味である。淸方は、酒も煙草も更にやらないで、讀書や、觀劇は可なり趣味深き事としてゐるらしい。素明と映丘とは、美術學校があるからだが、而かもこれも修養を懈る人たちではない。金鈴社が、靑年の間に重きをなすのもこの點に一步優れたものあるからだらう。併し、それも消極的だから些と心細いと云はざるを得ない。

玉堂や、輛音などの元老連はあまり飲まぬ。十畝も殆んど盃を口にしない。それ丈けこの人々には、眞面目な分子が多く、あまり浮いた噂も聞かなければ、技倆以外に特殊な人氣の湧いた事も聞かない。

京都の作家で、問題の多いらしいのは、酒豪隨一の關雪であらう。渠はよく飲み、よく論じ、口舌の雄また筆の雄だと稱される。たゞ、女などに餘り拘泥する方ではなからう。浮名の立つのは、翠嶂や、栖鳳門下の若手連に多いやうである。栖鳳その人も粹人だけに、酒などもあざやかに召上る方だ

さうな。その點では、春擧も劣らぬが、やゝぎごちないとか。契月、櫻谷はむしろ不粹に屬し、國展の五人男が麥僊を始めなかなか粹を利かせるのは、異な取り合せだと云はれる。閨秀作家の上村松園や、東京の栗原玉葉などにも兎角の風評はあるが、松園のごとき、一代の才女でもあるし、どこかしつかりした中に女らしき艶なところもある。さすがに、斯の道の閨秀だけの事はある。なほ、總じて、元老階級の人々は、酒色に沈湎したり、粹な道にいろいろの修業を積む人多いやうで、尾竹竹坡兄弟のごときはその雄でもあらうか。數へれば、作家中の粹人もまた少からずである。ところが、若手の人々にあつては、初めから眞面目に、緊張した生活をして行く者か、大家の風を學んで異に濟して行くものか、ほぼ二樣に別れてゐる。新進の有力者と稱され、有望な人と云はれるのは、多く前者に屬する。弦月とか、龍岬とか、白雨とか、秋光とか、方久斗とか云つた連中は多くこれである。早く大家氣取りか何かで、大して修養も心がけずに、生活の安全を希ひ、物質的な安逸でも求めるものは、何うも、諸大家の門から出て正式に教育を踏まないものに多いかと見られる。この人々は、實際、生活の上には自然の便宜も多く得られるので、却つてそれに慢心してゐるやうなところもある。各自に戒むべき事てあるまいか。

現代の繪畫及彫刻　終

大正十年一月十五日印刷
大正十年一月二十日發行

【書畫骨董叢書】第三卷

不許複製

著者　書畫骨董叢書刊行會
東京市神田區錦町一丁目十六番地
發行者　宮下軍平
東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者　小川菊松
東京市神田區宮本町四番地
印刷者　高橋治一
東京市神田區宮本町四番地
印刷所　中正社

發行所　東京市神田區錦町一丁目十六番地　書畫骨董叢書刊行會
振替東京第四九八二四番
電話神田（二四七八番 / 二六一〇番）

本叢書書目及著者

第一卷　日本畫の知識及鑑定法　今泉雄作先生著

第二卷　西洋畫及支那畫　中村不折先生著

第三卷　現代の繪畫及彫刻　本會編輯部著

第四卷　和洋繪畫實習法　川合玉堂・藤島武二兩先生合著

第五卷　書道及書蹟　犬養木堂・黑木欽堂兩先生合著

第六卷　書道實習法（楷行篆隷）　田口米舫先生著

第七卷　書道實習法（草書假名）　黑木欽堂・大口鯛二兩先生合著

第八卷　骨董の知識及鑑定法　今泉雄作先生著

第九卷　茶道茶器及陶磁器　高橋箒庵　今泉雄作兩先生合著

第十卷　工藝美術及室內裝飾　岡田三郎助先生著

第十一卷　和洋建築及彫刻　朝倉文夫先生著

第十二卷　書畫骨董珍談逸話　諸大家先生述　本會編纂